

常磐自動車道遺跡調査報告30

小山B遺跡

2002年

福島県教育委員会
財團法人福島県文化振興事業団
日本道路公団

常磐自動車道遺跡調査報告30

二
小山B遺跡



図1 小山B遺跡と周辺の地形（上が南、三角形を結んだ交点が小山B遺跡）



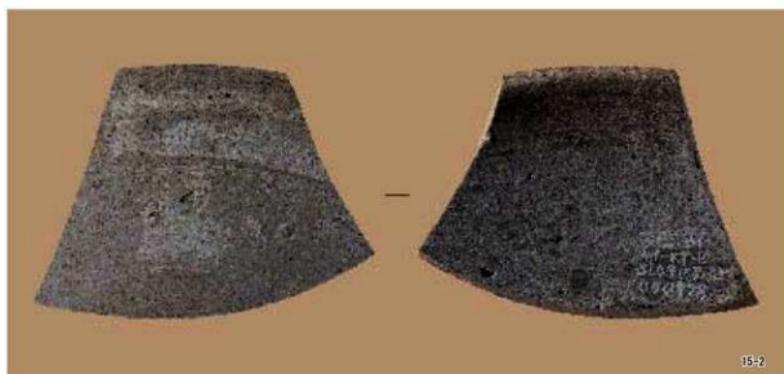
図2 小山B遺跡調査区（南から）



図3 小山B遺跡調査区（北から）



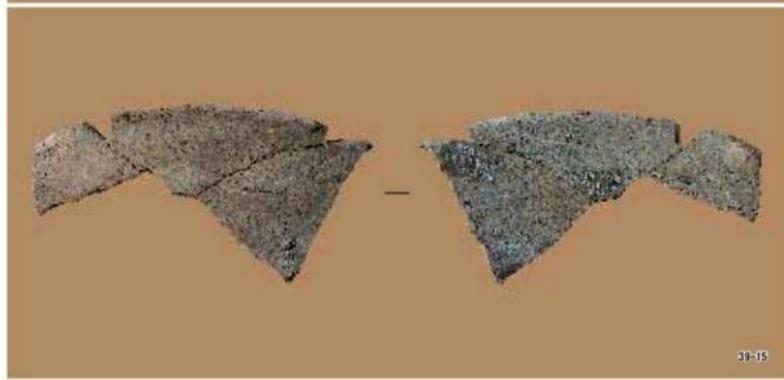
図4 小山B遺跡出土黒書土器



15-2



91-31



39-15

図5 陶器(1)



図絵 6 陶器 (2)

序 文

福島県浜通り地方を縦貫する常磐自動車道は、昭和63年に埼玉県三郷～いわき中央間が、平成11年にはいわき中央～いわき四倉間が開通し、現在は富岡までの区間で工事が進められています。

この常磐自動車道建設用地内には、先人が残した貴重な文化遺産が埋蔵されており、周知の埋蔵文化財包蔵地に加え、数多くの遺跡等を確認しました。

埋蔵文化財は、それぞれの地域の歴史と文化に根ざした歴史的遺産であると同時に、我が国の歴史・文化等の正しい理解と、将来の文化の向上発展の基礎を成すものです。

福島県教育委員会では、常磐自動車道建設予定地内で確認されたこれらの埋蔵文化財の保護・保存について開発関係機関と協議を重ね、平成5年度以降埋蔵文化財包蔵地の範囲や性格を確かめるための試掘調査を行い、その結果をもとに、平成6年度から現状保存が困難な遺跡については記録として保存することとし、発掘調査を実施してきました。

本報告書は、平成12年度に行った楢葉町に所在する小山B遺跡の発掘調査の結果をまとめたものです。

今後、この報告書が県民の皆様の文化財に対する御理解と、文化財保護活動の普及や地域の歴史を解明するための基礎資料として、さらには生涯学習等の資料として広く活用していただければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査から報告書の作成にあたり御協力いただいた日本道路公団、財団法人福島県文化振興事業団をはじめとする関係機関並びに関係各位に対し、感謝の意を表するものであります。

平成14年1月

福島県教育委員会

教育長 高城俊春

あ い さ つ

財団法人福島県文化振興事業団では、福島県教育委員会からの委託により、県内の大规模開発に先立ち、対象地域内にある埋蔵文化財の調査を実施しております。常磐自動車道建設にかかる遺跡の調査については、平成6年度から平成8年度までに、いわき中央からいわき四倉間のうち、いわき市四倉町に所在する10遺跡の調査を実施いたしました。さらに、平成9年度からはいわき市四倉から富岡間にかかる遺跡の発掘調査を実施しており、平成12年度までにいわき市四倉町・広野町・楢葉町・富岡町の30遺跡の発掘調査を実施いたしました。

本報告書は、平成12年度に実施した発掘調査のうち、楢葉町に所在する小山B遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。

小山B遺跡からは平安時代から中世にわたる竪穴住居跡や掘立柱建物跡・柱穴・土坑などからなる集落跡が確認され、遺構が数多く検出されました。出土遺物も土師器や須恵器をはじめとして金属製品や木製品なども数多く出土しました。この調査により、木戸川右岸沖積地における遺跡のあり方がうかがえ、当地域における古代土地利用の貴重な事例が得られました。

今後、この報告書を、郷土の歴史研究の基礎資料として、広く活用していただければ幸いに存じます。

おわりに、この調査にご協力いただきました日本道路公团東北支社いわき工事事務所、福島県担当部局、楢葉町ならびに地元の方々に深く感謝の意を表します。

なお、埋蔵文化財の保護につきまして、今後ともより一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成14年1月

財団法人 福島県文化振興事業団

理事長 佐 藤 栄 佐 久

緒 言

1. 本書は平成12年度に実施した常磐自動車道（いわき市四倉～富岡間）遺跡発掘調査の報告書であります、下記の遺跡を収録している。

福島県埋蔵文化財番号 542-00084；小山B遺跡 植葉町大字上小塙字地藏堂

2. 当遺跡調査事業は、福島県教育委員会が日本道路公団の委託を受けて実施し、調査にかかる費用は日本道路公団が負担した。

3. 福島県教育委員会では、発掘調査を財団法人福島県文化センター（平成13年度財団法人福島県文化振興事業団に名称変更）に委託して実施した。

4. 財団法人福島県文化センターでは、事業第二部遺跡調査課（平成13年度遺跡調査部遺跡調査課に名称変更）の次の職員を配して調査にあたった。

文化財主査	福島 雅儀	文化財主査	本間 宏
文化財主査	高橋 三男	文化財主査	佐藤 美穂
文化財副主査	閔 博人	文化財副主査	菊田 順幸
文化財副主査	鈴木 広子	文化財主事	堀川 雄二
文化財主事	小野 忠大	文化財主事	伊藤 典子
文化財主事	門脇 秀典	文化財主事	轟田 克史

5. 本書の執筆は、担当職員が分担して行い、各文末に文責を明記した。

6. 本書に使用した地図は、国土交通省国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図を複製したものである。（承認番号 平13東複第369号）

7. 本書に掲載した自然科学分析、遺跡全体の写真撮影等については、次の個人および機関の協力を得た。自然科学分析については、付章にその結果と考察を掲載している。（順不同・敬称略）

石質鑑定：真鍋 健一（福島大学教育学部）

樹種同定：株式会社吉田生物研究所

放射性炭素年代測定：株式会社古環境研究所

航空写真：日本特殊撮影株式会社

8. 本書に収録した遺跡の調査記録および出土資料は、福島県教育委員会が保管している。
9. 発掘調査から本報告書を作成するまでに、次の個人・機関から指導・助言・協力をいただいた。
(順不同・敬称略)
- 福島県いわき建設事務所・福島県土木部高速道路整備室・いわき市土木部土木課
猪葉町教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
相沢 央(新潟市)・小林昌二(新潟大学人文学部)
藤澤良祐(瀬戸市埋蔵文化財センター)
10. 本文中の敬称は省略させていただいた。

用 例

1. 本文中および遺物整理に使用した略記号は次のとおりである。

桔葉町…NH 小山B遺跡…KY・B

〔遺構等〕

遺構外堆積土…L 遺構内堆積土…M 壇穴住居跡、竪穴遺構…S I

掘立柱建物跡…S B 柱列跡…S A 土坑…S K

焼土遺構…S G 溝跡…S D 特殊遺構…S X 小穴…P

2. 引用・参考文献は、執筆者の敬称を省略し、参考文献として巻末に収めた。

3. 本書における遺構実測図の用例は、以下のとおりである。

- (1) 方 位 方位の表記がない遺構図・地形図は、すべて図面上位が真北を指す。座標南北線は真北を指す。
- (2) 標 高 断面図および地形図における標高は、東京湾海平面からの海拔高度を示す。
- (3) 縮 尺 縮尺率は掲載する遺構の大きさと性格により便宜決定した。選択した縮尺率については、スケールの脇に表示した。遺構図は原則として、竪穴住居跡・掘立柱建物跡は1/40～1/60、土坑は1/40などとし、カマド跡や小規模な遺構については1/20～1/30を選択している。
- (4) ケ バ 原則として遺構内の傾斜面はMで表示したが、相対的に緩傾斜の部分はTで表示している。また、後世の削平や人為的な削土部分はWの記号で表記した。なお、かく乱を受けている範囲は、「かく乱」と明示して区別している。
- (5) 土 層 遺構外の自然堆積土はローマ数字で表記し、遺構内堆積土は算用数字で表記した。
- (6) ピット 各ピットの深さは平面図の()内の数値または一覧表を付した。単位はcmである。
- (7) 網 点 採図中の主な網点用例については、下記に示した。

焼土および酸化面 ■■■ 柱痕 ■■■

4. 本書における遺物実測図の用例は、以下のとおりである。

- (1) 縮 尺 縮尺率はスケールの脇に表示したが、原則的には土器を1/3、鉄製品等を1/2とした。
- (2) 土 器 断面上師器・陶器は断面を白スキで、須恵器は断面を墨染とした。粘土紐の積み上げ痕は器面では実線、断面図では一点鎖線で表記した。

- (3) 網点　土器における黒色処理の処理面などは下記のような網点で表示した。
- 黒色処理 ■ 付着物範囲 ■ ■ 擦痕 ■ ■ 墨痕 ■ ■ ■
- (4) 計測値　各実測図の下に表記した。土器の計測値は別に表を付した。推定値は（ ）で、遺存値は〈 〉で表示した。
- (5) 遺物の挿図番号については挿図ごととし、文中では適宜省略している。また、掲載遺物の出土位置・層位は、右下に示している。
- 〔例〕 図19の19番の土器…図19-19
- (6) 本書における遺物写真の中で個々に付した番号は、挿図番号と一致している。なお、遺物写真的縮尺は不同である。
- 〔例〕 図19の19番の土器…19-19

5. 文章中の土器などの点数は、すべて破片点数である。

目 次

第1章 遺跡の環境と調査経過

第1節 調査に至る経過	1
第2節 遺跡の位置と自然環境	4
第3節 周辺の遺跡と歴史的環境	4
第4節 調査経過	10
第5節 調査方法	11

第2章 遺構と遺物

第1節 遺構の分布と基本土層	13
第2節 壊穴住居跡	16
1号住居跡 (16) 2号住居跡 (18) 3a号住居跡 (22) 3b号住居跡 (26)	
3c号住居跡 (29) 4号住居跡 (33) 5号住居跡 (35) 7号住居跡 (38)	
8号住居跡 (42) 9号住居跡 (44) 12号住居跡 (48) 14号住居跡 (50)	
15号住居跡 (53) 16号住居跡 (56) 17号住居跡 (58) 18号住居跡 (59)	
19号住居跡 (64) 20号住居跡 (68) 21号住居跡 (71) 22号住居跡 (75)	
23号住居跡 (78) 24号住居跡 (81) 25号住居跡 (82) 29号住居跡 (86)	
32号住居跡 (89) 35号住居跡 (90) 36号住居跡 (92)	
第3節 壊穴遺構	93
10号壊穴遺構 (93) 11号壊穴遺構 (94)	
第4節 掘立柱建物跡	96
1号建物跡 (96) 2号建物跡 (96) 3号建物跡 (99) 8号建物跡 (101)	
9号建物跡 (101)	
第5節 柱列跡	104
2号柱列跡 (104) 3号柱列跡 (104)	
第6節 土坑	105
第7節 溝跡	119
2号溝跡 (119) 3号溝跡 (119) 4号溝跡 (120) 5号溝跡 (120)	
6号溝跡 (129) 7号溝跡 (130)	
第8節 焼土遺構	130
1号焼土遺構 (130) 2号焼土遺構 (130) 3号焼土遺構 (131) 4号焼土遺構 (131)	

第9節 特殊遺構	132
1号特殊遺構 (132) 2号特殊遺構 (133) 3号特殊遺構 (134)	
第10節 その他の柱穴群	136
第11節 遺構外出土遺物	142
第3章 考察	
第1節 遺物について	149
小山B遺跡出土遺物の概観 (149) 小山B遺跡の諸土器群とその様相 (151)	
第2節 遺構について	153
堅穴住居跡 (153) 挖立柱建物跡 (154) 坚穴住居跡の年代 (155)	
第3節 墨書き土器	156
文字の種類と分布の様相 (156) 「報恩寺」の墨書き土器について (161)	
第4節 分析依頼結果について	161
樹種同定結果について (161) 放射性炭素年代測定結果について (161)	
第5節 総括	162
引用・参考文献	163
付章1 福島県楢葉町小山B遺跡出土木製品の樹種調査結果	165
付章2 福島県楢葉町小山B遺跡における放射性炭素年代測定結果	169

挿図・表目次

〔挿図〕

図1 常磐自動車道位置図	1	図15 3 b号住居跡出土遺物	28
図2 小山B遺跡周辺の遺跡	5	図16 3 c号住居跡	29
図3 小山B遺跡周辺地形図	8	図17 3 c号住居跡出土遺物	30
図4 小山B遺跡調査区位置図	12	図18 3号住居跡出土遺物	32
図5 小山B遺跡遺構配置図 (I)	14	図19 4号住居跡・出土遺物	34
図6 小山B遺跡遺構配置図 (II)	15	図20 5号住居跡	36
図7 基本土層図	16	図21 5号住居跡出土遺物	37
図8 1号住居跡・出土遺物	17	図22 7号住居跡	39
図9 2号住居跡	19	図23 7号住居跡出土遺物	41
図10 2号住居跡出土遺物	21	図24 8号住居跡・出土遺物	43
図11 3 a号住居跡	23	図25 9号住居跡	45
図12 3 a号住居跡カマド	24	図26 9号住居跡カマド・下層床面	46
図13 3 a号住居跡出土遺物	25	図27 9号住居跡出土遺物	47
図14 3 b号住居跡	27	図28 12号住居跡	49

図29	12号住居跡出土遺物	50
図30	14号住居跡	51
図31	14号住居跡出土遺物	52
図32	15号住居跡	53
図33	15号住居跡出土遺物	55
図34	16号住居跡	57
図35	16号住居跡出土遺物	58
図36	17号住居跡・出土遺物	59
図37	18号住居跡	60
図38	18号住居跡カマド	62
図39	18号住居跡出土遺物	63
図40	19号住居跡	65
図41	19号住居跡出土遺物	67
図42	20号住居跡	69
図43	20号住居跡カマド・出土遺物	70
図44	21号住居跡	72
図45	21号住居跡出土遺物	74
図46	22号住居跡	75
図47	22号住居跡出土遺物	77
図48	23号住居跡	79
図49	23号住居跡出土遺物	80
図50	24号住居跡	81
図51	25号住居跡	83
図52	25号住居跡出土遺物	85
図53	29号住居跡	86
図54	29号住居跡出土遺物	88
図55	32号住居跡・出土遺物	90
図56	35号住居跡	91
図57	36号住居跡	92
図58	10号竪穴造構	94
図59	11号竪穴造構	95
図60	1号建物跡	97
図61	2号建物跡・出土遺物	98
図62	3号建物跡・出土遺物	100
図63	8号建物跡	102
図64	9号建物跡	103
図65	2・3号柱列跡	105
図66	1・3・7・9・11・12a・12b号 土坑	107
図67	13~15・17・20~22号土坑	109
図68	23~26号土坑	110
図69	27~31号土坑	112
図70	32~36号土坑	113
図71	37~44号土坑	114
図72	45~51号土坑	115
図73	52・55~59号土坑	116
図74	土坑出土遺物	118
図75	2・5a・5b・6号溝跡	121
図76	2・5a・5b号溝跡土層断面図	122
図77	5a号溝跡 桁列検出状況(1)	123
図78	5a号溝跡 桁列検出状況(2)	124
図79	5a号溝跡出土遺物	125
図80	5a号溝跡出土杭	126
図81	5b号溝跡出土遺物	128
図82	6号溝跡出土遺物	130
図83	1~4号焼土造構	131
図84	1号特殊造構	133
図85	1号特殊造構出土遺物	134
図86	2号特殊造構	135
図87	3号特殊造構	135
図88	その他の柱穴群配置図(1)	137
図89	その他の柱穴群配置図(2)	138
図90	その他の柱穴群配置図(3)・F21P1	139
図91	造構外出土遺物(1)	143
図92	造構外出土遺物(2)	144
図93	竪穴住居跡変遷図(1)	154
図94	竪穴住居跡変遷図(2)	155
図95	小山B遺跡出土墨書き土器(1)	158
図96	小山B遺跡出土墨書き土器(2)	159
図97	小山B遺跡出土墨書き土器(3)	160

〔表〕

表1	平成12年度調査遺跡一覧	3
表2	小山B遺跡周辺の遺跡一覧	6
表3	土坑観察表	117
表4	その他の柱穴群一覧表(1)	139
表5	その他の柱穴群一覧表(2)	140
表6	その他の柱穴群一覧表(3)	141
表7	その他の柱穴群一覧表(4)	142
表8	土器観察表(1)	144
表9	土器観察表(2)	145
表10	土器観察表(3)	146
表11	土器観察表(4)	147
表12	土器観察表(5)	148
表13	鉄滓一覧表	148
表14	小山B遺跡出土墨書き土器一覧	157

写真図版目次

1 小山B遺跡調査区	173	42 46～49号土坑	204
2 調査区全景（北から）	174	43 50～52・55号土坑	205
3 基本土層	174	44 56～59号土坑	205
4 1号住居跡	175	45 2号溝跡（東から）	206
5 2号住居跡	176	46 3号溝跡（西から）	206
6 3a号住居跡	177	47 4号溝跡（西から）	206
7 3b・3c号住居跡	178	48 5a・5b号溝跡	207
8 4号住居跡	179	49 5a号溝跡 杭列検出状況（西から）	208
9 5号住居跡	180	50 5b号溝跡 全景（南から）	208
10 7号住居跡	181	51 1～4号焼土遺構	209
11 9号住居跡	182	52 1号特殊遺構（西から）	209
12 12号住居跡	183	53 2号特殊遺構（北から）	210
13 14号住居跡	184	54 3号特殊遺構（東から）	210
14 15号住居跡	185	55 1・2号住居跡出土土器	211
15 16・17号住居跡	186	56 3号住居跡出土土器(1)	212
16 18号住居跡	187	57 3号住居跡出土土器(2)	213
17 19号住居跡	188	58 4・5号住居跡出土土器	214
18 20号住居跡	189	59 7・8号住居跡出土土器	215
19 21号住居跡	190	60 9・12・14号住居跡出土土器	216
20 22号住居跡	191	61 15・16号住居跡出土土器	217
21 23・24号住居跡	192	62 18号住居跡出土土器	218
22 25号住居跡	193	63 19・20号住居跡出土土器	219
23 29号住居跡	194	64 21・22号住居跡出土土器	220
24 32号住居跡	195	65 22号住居跡出土土器	221
25 35号住居跡（南東から）	196	66 23・25号住居跡出土土器	222
26 36号住居跡（南から）	196	67 29号住居跡、12a・23・57号土坑出土 土器	223
27 1号建物跡（北から）	197	68 5号溝跡出土土器	224
28 2号建物跡（南から）	197	69 6号溝跡、1号特殊遺構、柱穴群、 遺構外出土遺物	225
29 3・9号建物跡検出状況（南から）	198	70 墨書き土器(1)	226
30 3号建物跡（南から）	198	71 墨書き土器(2)	227
31 8号建物跡（南から）	199	72 墨書き土器(3)	228
32 9号建物跡（南から）	199	73 墨書き土器(4)	229
33 1・3・9・11号土坑	200	74 鉄製品	230
34 12a・12b～15号土坑	200	75 金属製品・石製品・石器	231
35 17・21・22号土坑	201	76 小山B遺跡遠景	232
36 23～24b号土坑	201	77 説明会風景	232
37 25・27・28・30a・30b号土坑	202		
38 30b～33号土坑	202		
39 34～37号土坑	203		
40 38～41号土坑	203		
41 42～45号土坑	204		

第1章 遺跡の環境と調査経過

第1節 調査に至る経過

平成11年度までの調査経過

常磐自動車道は、埼玉県三郷市を起点として、千葉県・茨城県・福島県浜通り地方を縦貫して宮城県に至る、太平洋沿岸の大動脈として計画された路線である。この計画の内、三郷インターチェンジ（以下 IC と略す）からいわき市のいわき中央 IC までは、昭和63年に供用が開始され、更に、いわき中央 IC からいわき四倉 IC までは平成11年3月に供用を開始している。

これら供用が開始された区間の内、茨城県境からいわき中央 IC までの間に所在する埋蔵文化財に関しては、昭和59・60年にいわき市教育委員会が財団法人いわき市教育文化事業団に委託して4遺跡について発掘調査を実施した。いわき中央 IC ～いわき四倉 IC 間の埋蔵文化財に関しては、平成6年から9年まで好間～平赤井・平窪地区の10遺跡の発掘調査をいわき市教育委員会が財団法人いわき市教育文化事業団に委託して実施し、四倉町大野地区の10遺跡の発掘調査を福島県教育委員会が財団法人福島県文化センターに委託して実施した。

いわき四倉 IC 以北の路線については、平成3年にいわき四倉 IC ～富岡 IC 間が整備計画路線に格上げされ、平成5年には施工命令が下されている。更に、富岡 IC 以北についても、平成8年に相馬 IC までの区間が整備計画路線となり、平成10年に施工命令が下されている。

福島県教育委員会では、いわき四倉 IC 以北の路線内に所在する埋蔵文化財に関して、平成6年度より表面調査を実施し、平成10年度までに宮城県境までの表面調査を終了している。この成果を

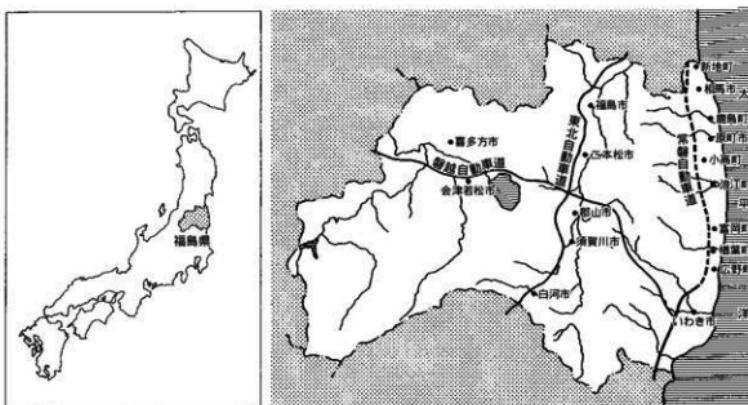


図1 常磐自動車道位置図

受けて、平成7年度よりいわき四倉IC～富岡IC間の試掘調査を実施し、平成9年度からは同区间に所在する遺跡の発掘調査が開始されている。平成9年度はいわき市内の5遺跡と広野町内の1遺跡の発掘調査を実施し、平成10年度はいわき市内の4遺跡、広野町内の3遺跡、橋葉町内の3遺跡、富岡町内の2遺跡の発掘調査を実施した。この平成10年度の調査により、路線内に所在する遺跡の内、いわき市内に所在する遺跡の発掘調査を全て終了した。平成11年度は、広野町内の4遺跡、橋葉町内の5遺跡について実施した。なお、福島県教育委員会では、表面調査・試掘調査・発掘調査を財団法人福島県文化センターに委託してきた。

平成12年度の調査経過

平成12年度常磐自動車道関連の遺跡発掘調査は、調査員34名の体制で開始した。調査対象地は、第12次区間の双葉郡広野町から富岡町までである。

発掘調査に先立ち、4月上旬から富岡町内で新たに発掘調査が予定されている遺跡の条件整備状況の確認を行うとともに、連絡所・駐車場等用地借り上げ、連絡所設置などの準備作業を進めた。また、現町道下を対象とする上田郷VI遺跡では、町道の迂回工事が行われた。

調査は、4月17日から広野町上田郷VI遺跡、橋葉町馬場前遺跡・大谷上ノ原遺跡、富岡町本町西A遺跡・上木町F遺跡、1日遅れて4月18日に橋葉町小塙城跡の6遺跡の発掘調査を開始した。このうち上田郷VI遺跡・小塙城跡は3次調査、馬場前・大谷上ノ原各遺跡はそれぞれ2次調査と継続調査が多いこともあり、順調に展開した。5月19日には狭長な上田郷VI遺跡の調査を終了した。

5月に入り、新たに橋葉町小山B遺跡と富岡町上木町G遺跡の発掘調査を開始した。小山B遺跡は水田に挟まれた場所にあり、水路に留意しながらの調査となった。また上木町G遺跡では一般道路から入り込んだ不便な場所にあるため、調査に先行し、路線内に作業員通勤用通路を確保のち、連絡所設置・駐車場造成などの準備作業を行った。また同遺跡は、深い沢に挟まれており、沢に泥水が流れないようにする沈砂・土留め処置にも留意した。小山B遺跡からは木戸川自然堤防上に立地する平安時代の集落跡、上木町G遺跡からは縄文時代前期の集落跡が検出された。

6月からは、橋葉町鍛冶屋遺跡3次と、富岡町上郡B遺跡の発掘調査を開始した。上郡B遺跡は遺跡内に比高差の大きな段丘崖を挟んで発掘調査区が2分されるため、当初上位面の発掘調査を先行させた。上郡B遺跡上位面からは古墳時代前期の住居跡が検出された。また、4月に調査を開始した橋葉町大谷上ノ原遺跡について、6月14日に、発掘調査の終了した北側部分を引き渡すとともに、新たに工区変更に伴う、南東側1,600m²の追加発掘調査を行うこととなった。大谷上ノ原遺跡は、1次発掘調査に引き続き、旧石器時代の石器群が検出された。

7月には、橋葉町鍛冶屋遺跡と小山B遺跡の部分的な拡張範囲について、関係機関協議の結果追加発掘調査を実施することとなった。鍛冶屋遺跡からは、平安時代・中世の集落跡に加えて、南斜面から縄文時代後期の集落跡が検出された。

8月11日には富岡町本町西A遺跡の発掘調査が終了し、現地引き渡しを行った。本町西A遺跡からは縄文時代前期の集落跡の他、中世の建物跡も検出された。また、富岡町上郡B遺跡は段丘崖よ

り下位面の発掘調査に入った。

9月には、橋葉町小塙城跡・大谷上ノ原遺跡、富岡町上郡B遺跡・上本町G遺跡・上本町F遺跡の発掘調査が相次いで終了し、現地引き渡しを行った。引き続き、橋葉町二枚橋遺跡・上繁岡山根遺跡の発掘調査を開始した。この頃になると、橋葉町馬場前遺跡では、大規模な縄文時代集落跡は知られるところであったが、その上面に平安時代集落跡、さらにその上面に中世村落の遺構がおびただしく検出された。この調査を進めるため総力を挙げて対応した。その結果、町道中島－高田線の南側と、北側の中世村落跡については、調査を終了することができた。

10月には橋葉町銀治屋遺跡・小山B遺跡・二枚橋遺跡の発掘調査が終了し、現地引き渡しを行った。二枚橋遺跡は戦後の農地構造改善事業により大きく削平を受けて、遺構の遺存状態が良くなかったため、発掘調査が予定より早く進行した。また同月初旬に橋葉町大谷山根遺跡と富岡町日南郷遺跡の発掘調査を開始した。

11月には橋葉町大谷山根遺跡・上繁岡山根遺跡の発掘調査が終了し、現地引き渡しを行った。また、富岡町日南郷遺跡は、次年度に予定されていた発掘調査範囲について確認調査を実施した。

12月の初旬には富岡町日南郷遺跡の発掘調査・範囲確認調査が終了、12月20日には橋葉町馬場前遺跡の発掘調査も終了した。馬場前遺跡は、町道中島－高田線より北側4,500m²、文化層2枚分（平安と縄文の文化層）が次年度調査となつたため、シートによる養生を行つた。

表1 平成12年度調査遺跡一覧

遺跡名	所在地	調査面積	時代	報告書名
上田郡VI遺跡	広野町上北追字上田郡	700m ²	縄文	常磐自動車道遺跡調査報告26
小塙城跡	橋葉町上小塙字正明寺他	5,500m ²	縄文・平安・中世・近世	常磐自動車道遺跡調査報告27
銀治屋遺跡	橋葉町上小塙字銀子原他	6,200m ²	縄文・平安・中世	常磐自動車道遺跡調査報告28
馬場前遺跡	橋葉町上小塙字馬場前他	18,740m ²	縄文・奈良・平安・中世	常磐自動車道遺跡調査報告29
小山B遺跡	橋葉町上小塙字地蔵堂	4,560m ²	平安・中世	常磐自動車道遺跡調査報告30
大谷山根遺跡	橋葉町大谷字山根	600m ²	奈良・平安	常磐自動車道遺跡調査報告31
大谷上ノ原遺跡	橋葉町大谷字上ノ原	10,600m ²	旧石器・縄文・平安	常磐自動車道遺跡調査報告31
二枚橋遺跡	橋葉町上繁岡字二枚橋	3,200m ²	縄文・平安	常磐自動車道遺跡調査報告31
上繁岡山根遺跡	橋葉町上繁岡字山根	5,100m ²	縄文・平安・中世・近世	常磐自動車道遺跡調査報告31
上郡B遺跡	富岡町上郡山字上郡	3,140m ²	古墳・平安	常磐自動車道遺跡調査報告32
本町西A遺跡	富岡町本町字本町西	6,800m ²	旧石器・縄文・中世	常磐自動車道遺跡調査報告32
上本町G遺跡	富岡町本町字上本町	14,100m ²	縄文・平安	常磐自動車道遺跡調査報告33
上本町F遺跡	富岡町本町字上本町	7,000m ²	縄文・平安・中世	常磐自動車道遺跡調査報告33
日南郷遺跡 (確認調査)	富岡町上手御字日南郷他	7,600m ² (※2,840m ² 含)	縄文	常磐自動車道遺跡調査報告33

第2節 遺跡の位置と自然環境

小山B遺跡は双葉郡楢葉町に所在している。楢葉町は浜通り地方の南部に位置し、北は富岡町、南は広野町、西は川内村と接している。東には太平洋を望む。

楢葉町の地形は、西部が阿武隈山地に連なる山地、東部が木戸川・井出川によって形成された段丘・沖積平野と、大きく2つに分けられる。西部に広がる山地はおよそ標高が400m～600mで、最高峰は萩塚山（733.3m）である。そこでは、東流する木戸川と井出川によって深いV字谷が開析されており、美しい渓谷を見ることができる。地質を見ると、古第三期漸新世に位置づけられる白水層群を湯長谷層群が不整合に覆う地層からなっている。東部には、阿武隈山地から太平洋に至るまで、木戸川・井出川によって5～6段の平坦な段丘面が形成されている。段丘は凹凸のある泥岩層の基盤を段丘疊・沖積層が不整合に覆っており、その底面はかつての河床または海食台である。両河川の周辺には、規模は大きくはないものの、氾濫原と自然堤防からなる沖積地が形成されている。また、太平洋から西に9kmほどの阿武隈山地東縁に沿って、双葉逆断層と立石逆断層が走っていることが、地質構造上特徴的である。

気候は、東日本型海洋性気候であり、夏は涼しく冬は暖かい。冬でも北西の季節風が育梁山脈、阿武隈高地を渡る間に空っ風となるため、積雪はほとんど見られない。楢葉町の植生は、温帯林である落葉広葉樹林帯と暖帯の常緑広葉樹林帯の移行地帯として、植物学上興味ある種が多数分布する。山地の大部分は人工林か伐採された後に成立する二次林となっている。

今回発掘調査を実施した小山B遺跡は、楢葉町大字上小塙に所在する。本遺跡は木戸川流域に発達した沖積地に立地しており、調査開始前の土地利用は水田であった。

（轟 田）

第3節 周辺の遺跡と歴史的環境

楢葉町は昭和31年に竜田村と木戸村とが合併して誕生した町である。この地域の歴史は古く、旧石器時代にまで遡る。ここでは楢葉町に残された遺跡を年代順に概観する。楢葉町の遺跡は、旧石器時代以降古代に至るまで、双葉逆断層より西側の渓谷域に立地する遺跡と、双葉逆断層の東に広がる段丘面（主に第3段丘面）、並びにその段丘面が木戸川や井出川により浸食されて形成された下位の河岸段丘面、さらに沖積平野部の自然堤防上に立地する遺跡とに分かれる。

旧石器時代の遺跡では波倉の北向遺跡、上繁岡の塩貝遺跡、下繁岡の原林遺跡、北田の天神原遺跡、上小塙の中女平遺跡などが知られている。これらの遺跡ではナイフ形石器や搔器、彫器、尖頭器、石刃などの後期旧石器時代の石器が出土している。これらの遺跡は、通称「双葉段丘」と呼ばれる新生代第3紀鮮新世の多賀層群を基盤とする段丘面上に立地している。立地面はいずれも第3段丘面上である。天神原遺跡は、昭和20年代にいわき市の永山亘氏によって表採された彫器が『福

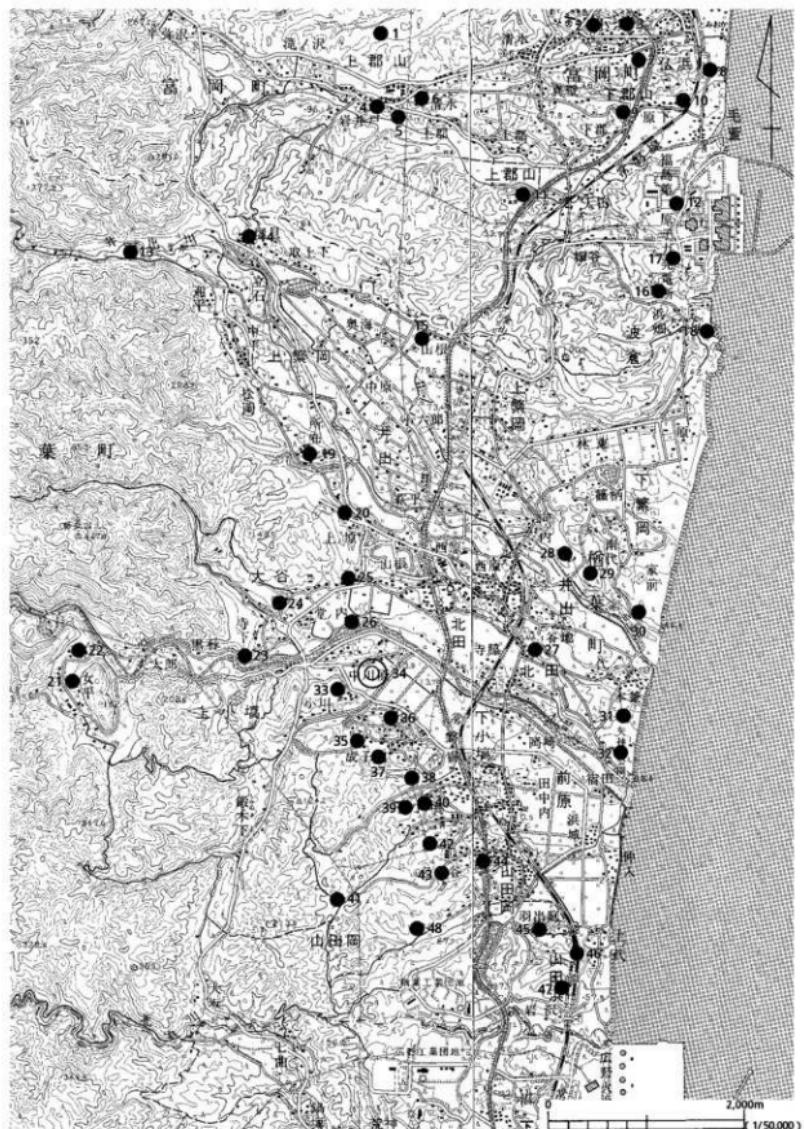


図2 小山B遺跡周辺の遺跡

表2 小山B遺跡周辺の遺跡一覧

遺跡名	所在地	遺跡の概要
1 本町西E遺跡	富岡町本岡字本町西	縄文・奈良・平安時代の散布地
2 上の町A・B遺跡	小浜字中央	縄文時代の散布地
3 大作横穴墓群	小浜字中央	古墳
4 岩井戸東遺跡	上郡山字岩井戸	奈良・平安時代・近世の散布地
5 上郡A・B遺跡	上郡山字上郡・清水	縄文・古墳・奈良・平安時代の散布地
6 清水遺跡	上郡山字清水	奈良・平安時代の散布地
7 西原A・B遺跡	仏浜字西原	縄文・古墳時代の散布地
8 清水尻横穴墓群	仏浜字釜田	古墳
9 真壁城跡A～D地区	下郡山字真壁	古墳・中世の城館跡
10 原下遺跡	下郡山字原下	古墳時代の散布地
11 上郡山館跡	上郡山字太田	中世の城館跡
12 毛塙遺跡	毛塙字前川原	縄文～古墳時代の散布地
13 羽山遺跡	橋葉町井出字羽山	縄文時代の散布地
14 直貝遺跡	上繁岡字直貝	縄文・古墳・平安時代の散布地
15 上繁岡山根遺跡	上繁岡字山根	縄文・奈良・平安時代・近世の散布地
16 北向横穴墓群	波倉字北向	古墳
17 北向遺跡	波倉字北向	旧石器・弥生・古墳・平安時代の散布地
18 羣輪城跡	波倉字原	中世の城館跡
19 所布遺跡	井出字所布	縄文時代の散布地
20 大谷上ノ原	大谷上字ノ原・山根	旧石器・縄文・奈良・平安時代の散布地
21 中倉遺跡	上小塙字中倉	縄文時代の散布地
22 北女平遺跡	上小塙字女平	縄文時代の散布地
23 大谷館跡	大谷字西代	中世の城館跡
24 名合沢館跡	大谷字名合沢	中世の城館跡
25 大谷山根遺跡	大谷字山根・堤下	平安時代・近世の散布地
26 仲田遺跡	大谷字仲田・宮前	奈良・平安時代・近世の散布地
27 下山根横穴墓群	北田字下山根・合張	古墳
28 井出城跡	井出字館ノ沢	中世の城館跡
29 赤粉遺跡	下繁岡字赤粉・井出字館ノ沢	縄文・奈良・平安時代の集落跡
30 植松遺跡	下繁岡字植松	弥生・奈良・平安時代の散布地
31 上ノ代遺跡	北田字上ノ代	縄文時代の散布地
32 天神原遺跡	北田字天神原	旧石器・弥生時代の散布地・墳墓
33 小山城跡	上小塙字小山	中世の城館跡
34 小山B遺跡	上小塙字地蔵堂	平安時代の集落跡
35 木戸八幡神社遺跡	上小塙字宮前・宮平	縄文・奈良・平安時代の散布地
36 馬場前遺跡	上小塙字馬場前・懐内・宮前	縄文・奈良・平安時代の集落跡
37 斎治屋遺跡	上小塙字斎治屋・根子原他	縄文・平安時代・近世の集落跡、製鉄炉
38 小塙城跡	下小塙字正明寺	中世の城館跡
39 上ノ原城跡	下小塙字上ノ原	中世の城館跡
40 下小塙上ノ原遺跡	下小塙字上ノ原	弥生・奈良・平安時代の集落跡
41 上ノ原横穴墓群	下小塙字上ノ原	古墳
42 堂平庵寺跡	山田岡字後沢	中世の社寺跡
43 名古谷横穴墓群	山田岡字名古谷	古墳
44 宮下遺跡	山田岡字宮下	弥生・奈良・平安時代の散布地
45 橋葉城跡	山田岡字館・小館	中世の城館跡
46 陣馬横穴墓群	山田浜字羽出庭	古墳
47 美シ森A・B遺跡	山田岡字美シ森	弥生・奈良・平安時代の散布地
48 新堤入遺跡	山田岡字新堤入	弥生・奈良時代の集落跡

島県史』第6巻に掲載され、福島県内でも最も早い段階に発見された旧石器時代の遺跡として知られている。

縄文時代の遺跡は町内に数多く分布している。北向遺跡からは早期の押型文土器片が出土し、赤粉遺跡からは大木3～6式、浮島・興津式など前期の土器が出土している。女平地区一帯からは前期～晚期まで各期の土器が採集されており、この地区が集落を営むのに適した土地であったことがわかる。

中・後期を代表する遺跡には代遺跡・馬場前遺跡が知られている。馬場前遺跡は大木8～10式期を中心とする土器片、石器類が多量に散布することで古くから知られていた。常磐自動車道の建設とともに平成11年度から発掘調査を行っており、複式炉をともなう住居跡が多数検出されている。代遺跡は馬場前遺跡同様広範囲に遺物が散布しており、かつてブロック塀を付設する工事中に平箱30箱もの土器が出土した。これらの遺物は綱取I・II式期を中心とするもので、一部は『楢葉町史 第二巻』に報告されている。なお、平成13年には、道路工事に先立って楢葉町教育委員会による発掘調査が行われている。

晚期に属するものでは、向ノ内遺跡・山所布B遺跡・仁平藏遺跡などがある。向ノ内遺跡では昭和51年に調査が行われており、大洞C2式期の深鉢がほぼ完形で3個体出土している。山所布B遺跡では、かつての事前調査などで大洞A'式期の土器が多量に出土している。

縄文時代に属する遺跡のあり方の特徴としては、双葉断層より西側の渓谷域に早・前期や後・晚期の遺跡が数多く分布していることがあげられる。また下流域の第3段丘面上には前期～後期の広い面積の遺跡が、それより下位の段丘面上には後～晚期の遺跡が分布している点も特徴としてあげられよう。

弥生時代の遺跡は、土器棺墓や土坑墓が多数検出され、県指定史跡でもある北田の天神原遺跡が学史的に著名であるが、ほかにも遺跡が確認されている。時期的に順を追って遺跡を列挙すると、最も古い段階の資料として、美シ森B遺跡から、磨消縄文を伴う変形工字文土器の時期の住居跡や土坑が複数検出されている。また同じ段階の資料が山所布遺跡や向ノ内遺跡などから出土しているが、点数はわずかである。それ以降になると、天神原式期の遺跡が比較的多い。天神原遺跡がその標式遺跡であり、美シ森B遺跡からも複数の堅穴住居跡や土器棺墓が検出されている。また下小塙上ノ原遺跡からも土器棺墓が複数検出されている。この時期の遺跡は、眺望の良い上部平坦な第3段丘面上に立地している点が特徴であるが、美シ森B遺跡のほかにも集落跡が存在する可能性は高い。たとえば、天神原遺跡の発掘調査された範囲の西側にも弥生土器が散布しており、かつて石包丁や太型蛤刃磨製石斧が表採されたこともあるため、発掘調査区が墓域とすれば、その西側に集落跡が存在することは十分考えられる。時期が下ると天王山式土器やアメリカ式石鎌・土製劔錘車などが表採されている波倉の波鏡院遺跡が確認されているのみである。

古墳時代になると、後期の横穴墓群が各所に残されている。これは双葉郡内に共通した特徴である。第3段丘面の段丘崖面に露われた凝灰岩を掘削して横穴を形成しているため、遺存状態は比

第1章 遺跡の環境と調査経過

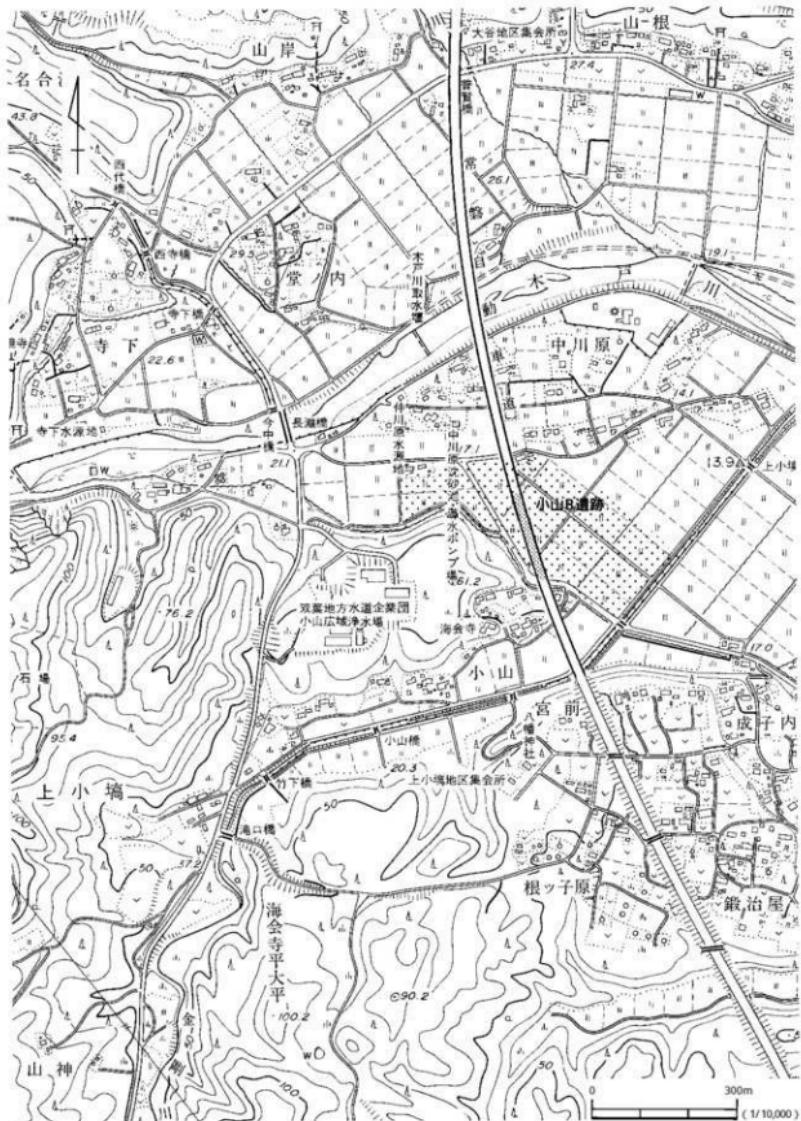


図3 小山B遺跡周辺微地形図

較的良好である。墳丘墓が2カ所しか残されておらず、横穴墓群が多数認められることは、木戸川氾濫原に面した段丘崖や樹枝状の開析谷の崖面が隨所に見られる等、横穴が形成されやすい環境にあったことも要因にあげられよう。発掘調査された例としては、波倉の北向横穴群、北田の合張横穴群、山田岡の名古谷横穴群・松ノ口横穴群などがある。いずれも7世紀代の横穴墓と推定されている。比較的新しい横穴墓としては羽出庭横穴墓群があるが、これは常磐線部分複線化工事の際に壊され、出土した8世紀代の骨蔵器のみが残されていた。立地としては、眼下に耕作地を望むことのできる標高30m～50mの低位丘陵の南斜面に掘り込まれることが共通している。墳丘墓は舟場古墳と稲荷古墳が知られている。舟場古墳は現在残されていないが、地元では、かつて組合式石棺が掘り出されたことでもあったと伝えられている。稲荷古墳は円墳で、常磐線木戸駅の東側に、現在も残されている。

古墳時代の集落跡については、未だ発掘調査されていないが、土師器の散布地は町内にも数多く分布しており、存在する可能性は高い。昭和52年に上小塙地区の圃場整備事業が実施された際に、木戸川右岸に延びる自然堤防の部分を横断する圃場排水溝法面から、7世紀代の土師器が多く出土した。これは、宮田遺跡の範囲に含まれるものと推定されるが、このことは、古墳時代後期の集落跡が、木戸川氾濫原における自然堤防上にも分布していることを示すものであろう。

「国造本紀」によると、古代の櫛葉周辺は道尻岐閉国と呼ばれていたということになる。木戸川の「木戸」は「柵戸」と関連すると言われているが、このことについては『櫛葉町史 第一巻』『第三編 古代の櫛葉』に詳しく述べられている。

奈良・平安時代の櫛葉は、石城郡に属していたと推定されている。この時代の遺跡は数多く存在し、土師器・須恵器の散布地として遺跡範囲が推定されている遺跡の多くには、奈良・平安時代の集落跡が残されているものと推定される。ほとんどが双葉断層東側の第3段丘面上に立地している。町内の遺跡分布調査や、常磐自動車道の建設に伴う遺跡分布調査でも、土師器・須恵器の散布地は数多く確認され、相当広い面積を有している。大まかにその分布を見ると、井出川左岸では、下繁岡の広い台地面、井出川と木戸川との間では、北田の上ノ原から天神原・井出上ノ代にかけての面、木戸川右岸では、山田岡から下小塙を経て上小塙に至るまで並ぶ開析谷に挟まれた台地面に連続と遺跡が続いている。発掘調査された例としては、波倉の北向遺跡や下繁岡の赤粉遺跡、そして常磐自動車道関連では下小塙上ノ原遺跡や上小塙の鍛冶屋遺跡があげられる。

『統日本紀』によると、養老3年に石城国で初めて駅家を10カ所設置した旨の記述が見えるが、これは、常陸国府と多賀城を結ぶ官道が設置されたことを意味しており、櫛葉町内にも駅家の存在が推定され、上記『櫛葉町史 第一巻』にて鈴木啓氏は山田岡の古駅（ふるじゅく）をもって櫛葉駅家の擬定地としている。また、山田浜には、昭和50年頃まで条里型遺構が残されていることが、航空写真により確認されている。

中世になると、千葉氏・岩城氏・相馬氏・櫛葉氏・猪狩氏等に関する系図や文書資料により、源頼朝による平泉征伐から慶長5年の関ヶ原合戦直後の岩城氏改易にいたるまでの歴史をある程度知

ることができる。このことについては、『橋葉町史 第一巻』や『同 第二巻』に資料や記述が掲載されている。遺跡としては、城館跡が各所に認められる。最も規模の大きな城館跡は、木戸の山田岡に所在する橋葉城である。橋葉城という名称は近年橋葉町が付けたもので、中世期には山田城または木戸山田城という名称で呼ばれていた可能性が指摘されている。橋葉城は岩城氏系列の橋葉氏の居城とされているが、戦国期には岩城氏の支配下になり、家臣猪狩氏が勤めたものと推定されている。木戸には橋葉城跡のほか、小塙城跡・上ノ原城跡・小山城跡が残されている。小塙城跡は比較的遺存状態が良く、「橋葉左衛門尉居れり」という記述が『岩城明細記』に記されていたと伝えられる。常磐自動車道建設に伴い西側部分が発掘調査されている。上ノ原城跡は、小塙城跡と谷を挟んで南側に対峙している。小山城跡は上小塙の西北部にあり、居城的な造りの縄張りが認められる。竜田には大谷館跡・名合沢館跡・井出城跡・蓑輪城跡が残されている。天神山城跡は部分的に試掘調査が行われた。土堀と空堀により郭が連なる形式で、遺存状態は非常に良好である。井出城跡は井出川左岸にあり、井出玄蕃頭にまつわる伝説が竜田神社の由緒書に残されている。細長い半島状の台地を深い空堀で区画しており、小塙城跡に似て、遺存状態は良好である。蓑輪城跡は波倉にあり、ほとんど海岸浸食で失われているが、南北朝時代の「八里原の合戦で朝賀城が攻めとられた」という飯野文書等の記述に見る「朝賀城」に擬定される可能性もある。以上の城館跡については、橋葉町史編纂事業にあわせて、縄張り測量調査が行われている。

近世の幕藩体制時代になるとこの地域は磐城平藩の支配を受けることになる。上小塙・前原・井出の3ヶ村は、新発田藩・棚倉藩・多古藩とめぐらしく支配者が変わっている。ほかの8ヶ村はいわゆる天領となり、代官支配を受けることとなる。現在の大字が当時の村であり、それぞれの村に関する文書資料が豊富に残され『橋葉町史 第二巻』に紹介されている。この時代の造構としては陸前浜街道の一里塚が井出に残されており、木戸の宿場には脇本陣の一部が保存されている。

近世初期の文書に鍛冶年貢の記録が認められるとおり、町内には20カ所製鉄遺跡が残されている。遺跡は鉄滓堆積として確認されており、双葉断層より西側の山間部に多いことが特徴的である。製鉄遺跡はほとんど発掘調査されていないが、近世に属するものが多いと推定される。製鉄のはかに、山田浜や井出浜、波倉浜では製塩が行われており、幕末期の上小塙小山では大堀焼系統の窯業が営まれていたことも確認されている。

幕藩体制崩壊後、各村は竜田村と木戸村に統合されて、近代の歴史を歩むことになる。昭和時代前半期には常磐炭坑の坑口が竜田村の清太郎沢に存在したが、石炭産業の斜陽化により、昭和20年代末には廃坑となった。昭和31年に行われた町村合併により橋葉町が誕生し、現在に至っている。

(轟 田)

第4節 調査経過

平成12年5月29日、小山B遺跡の発掘調査を開始した。発掘調査に先立ち、排土置き場の設定、

連絡所設置、駐車場造成などの環境整備作業を行った。周囲の水田で作付けを行っていたため、堆砂除去など水路の管理を特に重点的に行った。

5月末からは重機を用いた表土除去作業を開始した。調査開始当初の調査面積は4,000m²であった。表土除去はまず調査区北側から始め、ついで南側に移っていった。表土除去の進捗にあわせて、6月中旬から作業員を投入して遺構検出作業を開始した。しかし、重機による表土除去が不十分だったため、遺構検出に手間取り、重機による表土除去を再度行う事態を招いてしまった。

雨によって調査区や駐車場が水没することが予想されたため、遺構検出作業と平行して排水溝を設定した。しかし結局、大雨によって数度にわたり調査区が水没してしまった。

6月下旬になって、日本道路公団東北支社いわき工事事務所が設定した路線中心杭を基準として、グリッド基準杭の設定を開始し、併せてベンチマークの移動も行った。遺構検出作業も進み、当初の予想に反して土坑や竖穴住居跡が検出され始めた。試掘で検出されていた大溝もこの段階で検出されたが、予想に反して南側の調査区外に伸びていることが明らかになった。

7月はじめから、大溝も含めた遺構の調査を行った。大溝が南側の調査区外に伸びていたことから、7月中旬になって指示面積が560m²拡大された。それにともない町道の付け替えが必要になり、8月中旬をめどに調査区南側を企業体に引き渡すこととなった。このため8月中旬までは調査区南側の調査を急いだ。

8月中旬以降は調査区北側の発掘調査を主に行なった。8月下旬になって町道の付け替えが終了し、拡張部分の表土除去作業を開始した。表土除去作業に統いて拡張部分の遺構検出作業を行い、9月に入って大溝の全体像が見えてくると、北部の遺構群と南部の大溝に分かれて調査を行なった。9月26日には隣接する馬場前遺跡で現地説明会が開催された。説明会は大盛況で、小山B遺跡も同時に公開したところ、50人あまりの見学者が訪れた。

10月上旬にはおおよその調査が終了し、中旬には器材の撤収・連絡所の解体を行なった。そして10月13日に小山B遺跡におけるすべての作業が終了した。

(轟 田)

第5節 調査方法

小山B遺跡では4,560m²を調査した。

調査にあたっては、本遺跡並びに隣接する各遺跡との位置関係を正確に把握するために国土座標軸（公共座標第K系）を基にグリッドを設定した。遺跡全体に10mの方眼をかけているが、このグリッド杭の起点は調査区北西外の国土座標X = 141,700・Y = 102,200に位置する。グリッドには個別の番号を与えた。原点から東西方向に西から東へA・B………と付したアルファベットと、南北方向に北から南へ11・12………と付した算用数字との組み合わせによって表示し、各々北西隅にあたる杭をF14グリッド・G21グリッドなどと表記している。これらの各グリッドは、遺物の出土位置表示、遺構の大まかな位置表示を行うためのものであり、これとは別に平面図作成のための水系

番号を1m方眼で規定している。水系ラインの方向は、グリッドの分割線の方向と一致しており、その原点はグリッド軸の原点と同じである。ただし、遺構の位置を表示するために、グリッド原点から東（E）に何m、南（S）に何mと表示した。たとえばE56・S45などと表示されていれば、それは原点から東に56m、さらに南に45m行った地点を指している。

調査では、表土除去を重機で行い、遺構・遺物の検出作業を人力によって草削り・唐鋤等を用いて行った。その際の堆土は、不整地運搬車・一輪車を用いて運搬した。各遺構の掘りこみ調査にあたっては、遺構の大きさや重複関係を考慮して、土層観察用の畦を設定し、随時写真撮影や実測、遺構カードの作成を行った。住居跡などは4分割法を基本とした。また、土坑などの小形な遺構については、長軸優先の2分割法を基本としている。溝跡などの長く大きい遺構は、土層観察用の畦を随時設定して調査を行っている。

遺物の取り上げに際しては、基本的に遺構内のものは2分割・4分割した区画・層位ごとに、遺構外のものはグリッド単位・層位ごとに取り上げた。

写真は、調査の進捗にあわせて随時撮影した。フィルムは35mm判のカラーリバーサル・モノクロームを基本的に使用し、必要に応じて6×4.5判を用いた。

発掘調査で得られた記録・遺物写真等の資料は、当事業団の整理基準に準拠して整理を行った。報告書作成終了後、それぞれ台帳を作成し、収蔵施設に保管する予定である。 (著：田)

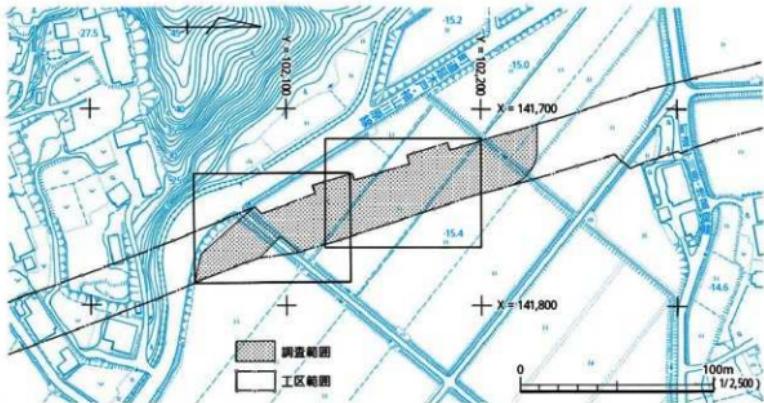


図4 小山B遺跡調査区位置図

第2章 遺構と遺物

第1節 遺構の分布と基本土層

小山B遺跡では、堅穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、溝跡などが検出されている。これらの遺構の分布について、簡単に触れる。本遺構の調査区は道路工事にともなうものであるため、南北に細長い形をしている。遺構の密度から、北部・中部・南部の3つに分けられる。そのうちS20ラインより北の北部は、遺構の密度が非常に低い。表土を除去したところ、表土直下に疊層があり、遺構・遺物ともに存在しないことが明らかになった。そもそも遺構が存在しなかったのか、圃場整備によって削平されているのか、確認はできなかった。S20ラインより南、S90ラインより北の中部は、もっとも遺構密度が高い。本遺跡で検出されている堅穴住居跡27軒の内25軒までがここで検出されている。掘立柱建物跡のすべて、土坑のほとんども中部に集中している。

堅穴住居跡にはいくつかのまとまりが見られ、土坑は住居跡の付近に位置するものが多い。また、住居跡の密度が低いところに多くの柱穴が分布しており、掘立柱建物跡も、住居跡との切り合いが少ない。分布に偏りがあることから、これらの遺構の多くがそれぞれ規制しあっていた可能性がある。掘立柱建物を建てる時に、堅穴住居のないところを選択した可能性も考えられる。溝跡が数条検出されているが、いずれも後世の水路と考えられ、ほかの遺構の分布を規制するものではない。

S90ラインよりも南の南部では、堅穴住居跡や土坑はほとんど検出されていない。ただF22グリッドで堅穴住居跡2軒と土坑1基が検出されているのみである。また、南部では遺構外で出土する遺物がほとんどない。ほかに遺構がないことも手伝って、南部では大溝が目立っている。この溝はD18グリッドから調査区内を横断して125グリッド付近で調査区外に伸びている。堅穴住居跡と重複関係がなく、土師器が良好な状態で出土していることから、古代には開口していたことが明らかになっている。ただし、溝の伸びる方向と住居跡の主軸方位との関連は見いだせなかった。また、出土木製品の自然科学分析により、中世において水路として利用されていたことが判明した。

本遺跡では調査区界と試掘溝を利用して基本土層の観察を行った。基本土層は大きく4層に分けられる。I層は圃場整備後の水田耕作土・床土である。II層は圃場整備以前の耕作土および耕作によってかく乱を受けた古代以降の旧表土である。ここからは多くの遺物が出土している。溝跡などいくつかを除いて、本遺跡の遺構はIII層で検出されている。III層は砂層であり、やや粗いaと細かく粘性の強いbとに細分した。IV層は疊層である。本遺跡は沖積地に立地しており、III層とIV層は木戸川の沖積作用によって形成されたものと考えられる。III層・IV層は基本的に遺物を含んでいない。

基本土層の分布をみると、I層・IV層はいずれの地点にも存在しているが、II層・III層は地点によって欠落している。S20ラインよりも北では、表土を除去した段階ですでにIV層が露頭していた。IV層を重機を用いて掘削したが、数メートル下まで同じような疊層が続き、間層は見られなかった。



図5 小山B遺跡遺構配置図(Ⅰ)

第1節 遺構の分布と基本土層

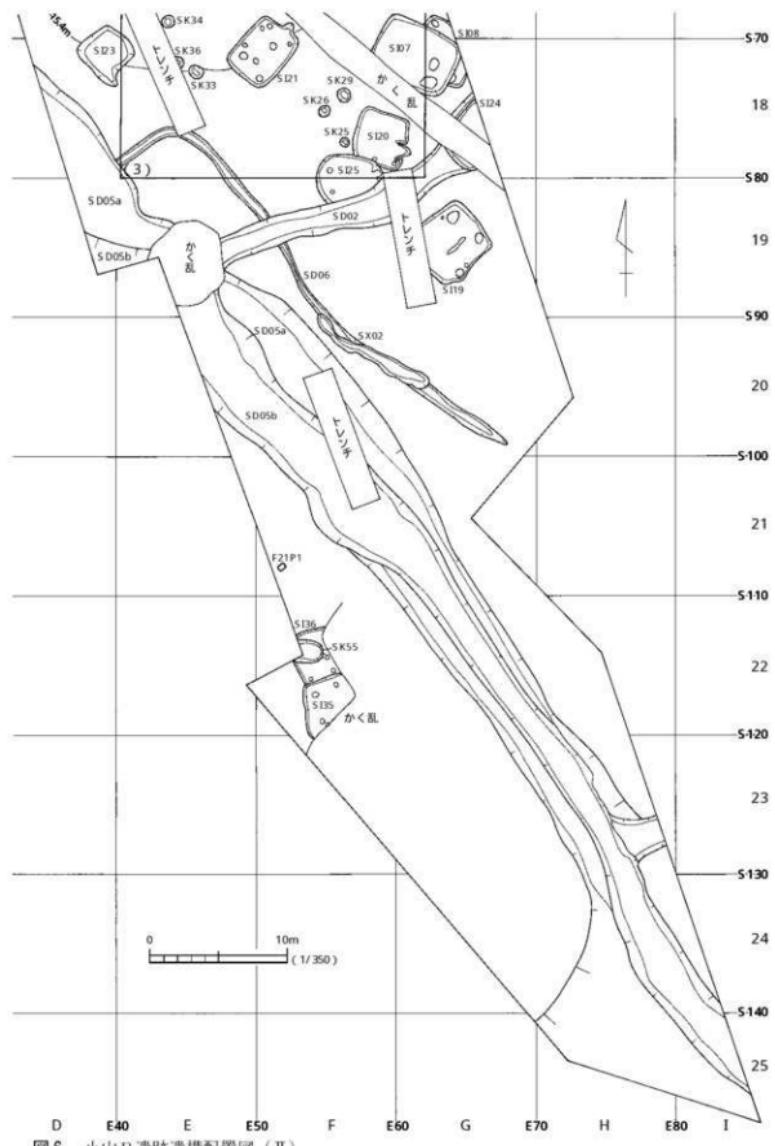


図6 小山B遺跡遺構配置図(II)

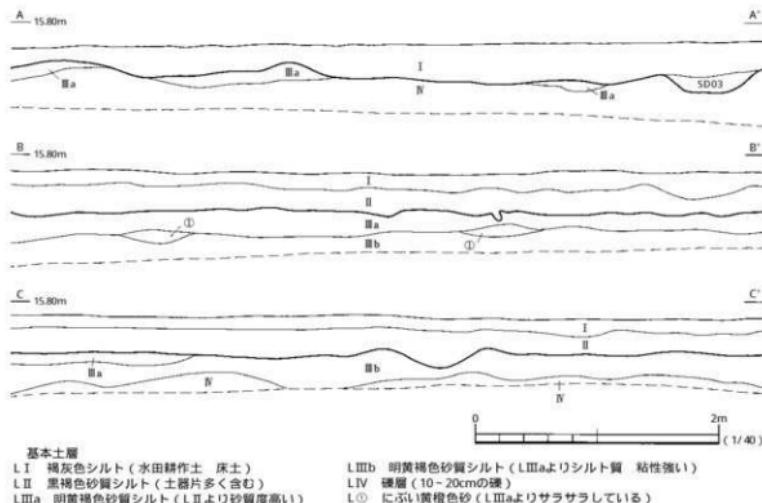


図7 基本土層図

南に目を転じると、S70ラインより南側ではIIIa層の堆積が薄くなっている。また、S90ラインより南では、II層に対応する層は存在するものの、遺物はほとんど含まれていない。(轟 田)

第2節 壓穴住居跡

本遺跡では27軒の堅穴住居跡が検出されている。そのうち25軒はS20ラインからS90ラインまでの間に集中して立地している。残る2軒はF22グリッドに位置する。平面形は隅丸方形で、南東辺にカマドを持つものが多い。

遺構番号は検出した順につけているが、調査の進展によって遺構でないと判断されたものは欠番とした。10号・11号は住居跡であるという確証が得られなかったため、ここでは扱わないこととした。また、調査によって3軒が重複していることが明らかになった3号住居跡は、検出した順に3a号・3b号・3c号と名付けた。そのほか、1号と2号、7号と8号、16号と17号、20号と25号、35号と36号はそれぞれ重複している。

なお記載において、カマドの取り付く辺に直交する軸を主軸として報告している。

1号堅穴住居跡 S101

遺構(図8、写真図版4)

本住居跡は、調査区中央部のE16グリッドに位置し、IIIa層上面で検出された。本住居跡は北西

部で2号住居跡と重複しており、2号住居跡よりも本住居跡のほうが古い。本住居跡からは、カマドや柱穴等の住居内施設は検出されなかった。本遺構の形態と規模は他の住居跡と遜色がなく、床面に踏み締まりが認められるため、住居跡と判断した。本遺跡では南東あるいは北東に作られたカマドが住居の廃絶に伴い破壊されている例がみられる。本住居跡のカマドは後世のかく乱を受けた北東部に設置されていたため、そして破壊されたために検出できなかったと考えている。本住居跡の遺存状態はおおむね良好であるものの、他の遺構と重複している北西部とかく乱を受けている南西部は検出できなかった。

平面形は隅丸長方形をなし、規模は長軸約3.5m、短軸約2.7m、検出面から底面までの深さは19cmを測る。長軸方向は、およそ東西方向に合致している。底面はほぼ平坦であり、周壁は東壁と西壁は緩やかに立ち上がり、北壁・南壁の立ち上がりは急斜度となる。床面積は7.9m²である。

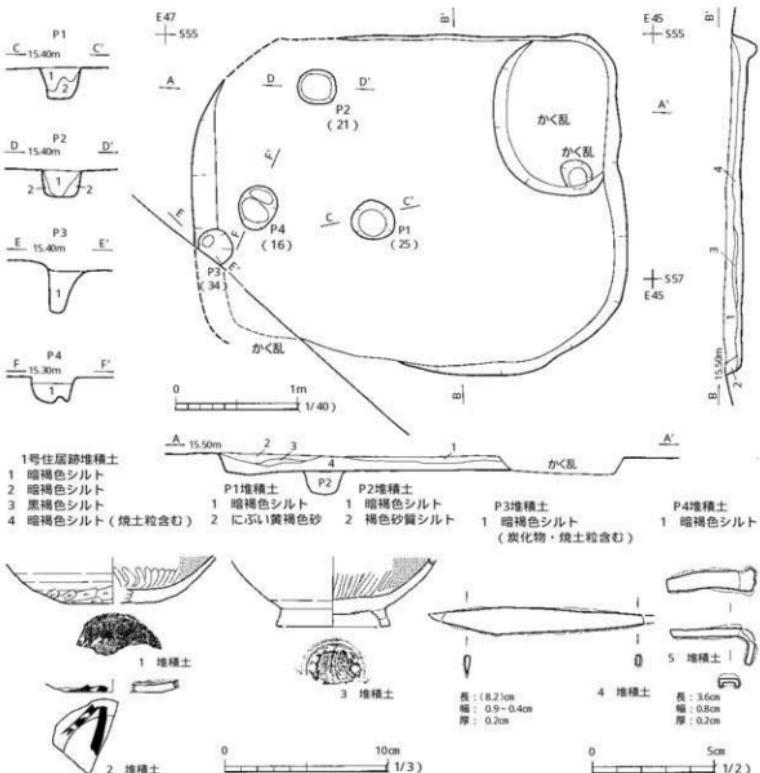


図8 1号住居跡・出土遺物

堆積土は1～4層に分類される。1・2層は暗褐色土である。3層は黒褐色土で、遺構内中央部より西側に堆積している。4層は焼土粒の混じる暗褐色土で、床面を覆って厚く堆積している。床面は砂質土ながらも、強い踏み締まりが認められた。堆積については、かく乱の影響を受けており、3層は人為堆積の可能性もあるが、基本的に1・2・4層は自然堆積と判断している。

本住居跡からは、規模が直径30cm程の4基のピットを検出している。P1にはにぶい黄褐色土、P2には褐色土が流入しているが、4基のピットの堆積土はいずれも良く似た暗褐色土である。P1は円形のピットで住居跡のほぼ中央、P2は長方形で北壁の北東コーナーより、P4は梢円形で西壁の中央よりに位置している。深さはともに20cm程であるが、その位置からは柱穴とは考えられず、用途は不明である。P3は西壁際にあり、深さは34cmとやや深い。その位置から、側板を支えていた柱穴の可能性もあると思われる。

遺 物（図版8、写真図版55・74・75）

本遺構からは土師器417点、須恵器14点、繩文土器5点、鉄製品2点、石製品3点が出土し、そのうち5点を図化した。遺物の多くは住居跡堆積土の4層から出土している。

1・2はロクロ整形による杯で、内面にヘラミガキ・黒色処理が施されている。1は回転糸切りの後、外面体部下端から底部周縁までヘラケズリにより再調整している。2は墨書き土器である。外面体部下半から底部にかけて墨痕がある。破片資料のため字画はほとんど残っていないが、ほかの資料との比較によって「少川」の文字が正位で書かれていると考えられる。3は土師器の高台付杯である。内面にヘラミガキ・黒色処理を施している。底部に回転糸切りの痕跡が残る。底部を切り離した後、外面底部に刻みを入れ、高台を強いナデによって貼り付けている。本資料は熱を受けているらしく、風化している。

4・5は鉄製品である。4は刀子と考えている。全長8.2cmが遺存している。刃長2.2cm、茎長6.0cmと、茎に比べて刀身が非常に短い。使用と研ぎ直しを繰り返すうちに短くなったのであろう。5は不明鉄製品であるが、断面形状がコ字状を呈していることから、なにかをはさんでいたものと考えられる。あるいは刀装具の一部であろうか。

ま と め

本遺構は、北西・南西のコーナー部分が失われているものの、3.5m×2.7mの長方形をなす。住居内施設として、カマドは検出していない。しかし、その形状から、また床面の踏み締まりは相当期間使用された痕跡であると考え、竪穴住居跡と判断した。本住居跡の所属時期は、出土遺物から9世紀後葉と考えている。

(佐 菲)

2号竪穴住居跡 S 102

遺 構（図9、写真図版5）

本住居跡は、調査区中央部のD15・16・E15・16グリッドに位置し、IIIa層上面で検出された。本住居跡は南東部で1号住居跡と重複しており、本住居跡のほうが新しい。また、南西角から南東

角にかけてかく乱を受けているため、完全な形を検出することはできなかった。

平面形は、北東から南西を長軸とする長方形であると推測される。その規模は、遺存する長軸が約5.2m、短軸約5.0m、検出面から底面までの深さは27cmを測る。主軸の方向はおよそE33°Sである。底面はほぼ平坦であり、南壁は検出できなかったものの、周壁はおおむね緩やかに立ち上がっている。また、壁溝を北壁際から西壁際につけて検出している。幅は西壁際で最大35cm、深さは7cmを測る。床面積は22.6m²である。

堆積土は1～4層に分類される。1層は炭化物粒と焼土粒を含む黒褐色の厚い層で、自然堆積である。2層は黒褐色炭化物を含む暗褐色土で、壁際と床面の部分的に認められたことから、人為的堆積と思われる。焼土塊と炭化物塊を含む暗褐色の3層と褐色土の4層は、周囲からの流入土で

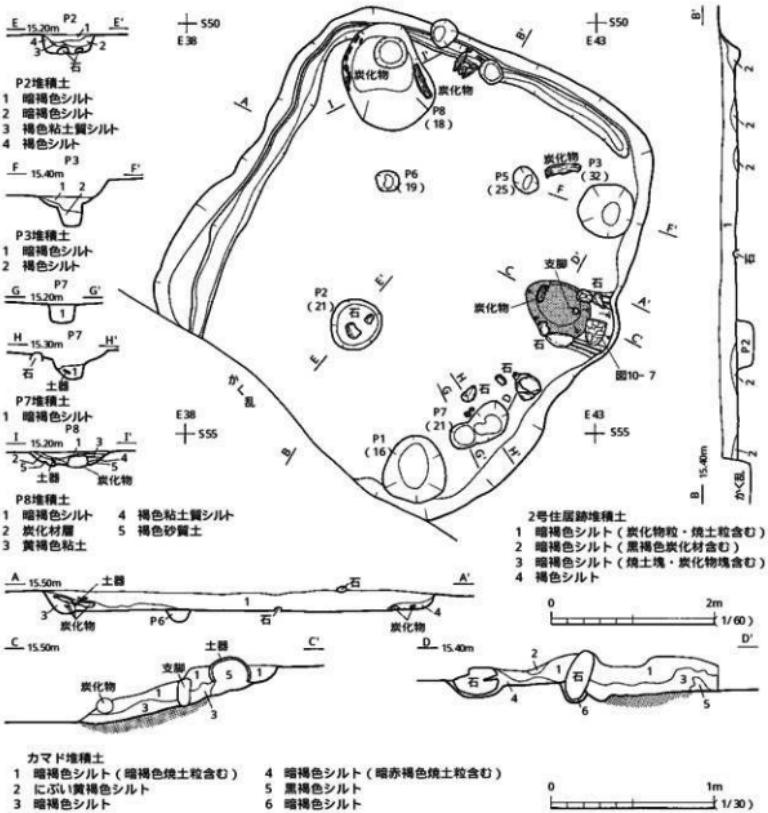


図9 2号住居跡

ある。床面では炭化材が検出されている。

本住居跡の住居内施設としては、カマドと7基のピットを検出している。

カマドは東壁のはば中央に取り付いており、両袖は確認したものの、煙道は検出できなかった。両袖は、住居跡東壁から右袖は約70cm、左袖は約40cm住居内に張り出し、床面からの高さは右袖で約40cmである。両袖間の最大幅は75cm、奥行きの長さは約80cmを測る。右袖の支脚付近は石が残っているのみで、意図的に壊されていた。燃焼部からは焼面が検出されているが、焼土は取り去られていた。焚口幅は50cm、奥行き40cmである。底面は、燃焼部から住居外に向けて緩やかに上がっている、煙道部も緩い傾斜で南東方向に延びていたものと思われる。

カマド堆積土は1～6層に分類される。カマドは壊され、焼土は取り去られたものと考えている。1・3・4層は暗褐色土であり、1・4層は焼土粒を含むものの、住居跡堆積土に類似している。5層は黒褐色土で、燃焼部内に置かれた甕を埋めた際の土であり、人為堆積土である。6層は袖の設置に伴う暗褐色の堆積土である。

床面で検出したピットは7基である。P1は住居跡南東角で検出したピットで、長径約85cmの橢円形であり、深さは16cmを測る。断面形は浅い鍋底状であり、堆積土は黒褐色土の1層である。P2は住居跡中央やや南よりで検出し、径60cm、深さ21cmを測る。堆積土は1～4層に分類され、1・2層は暗褐色土、3・4層は褐色土で、底面からは石が出土しており、人為堆積と思われる。P3は住居跡東壁の北東よりで検出した、径約70cm、深さ21cmのピットで、堆積土は暗褐色土と褐色土の2層である。P5・6は各辺30cm程の隅丸方形のピットで、深さはそれぞれ25cmと19cmを測り、堆積土はともに黒褐色土である。柱穴の可能性も考えられるが、両ピットを結ぶ線が壁と平行にはなっておらず、他に位置的に対応するピットが検出されていない。P7は、住居跡東壁の南よりで検出した、円形と橢円形の結合した平面形のピットで、長軸80cm、短軸40cm、深さは21cmを測る。堆積土は暗褐色土で、土器片を含む。P8は住居跡北西角に位置する橢円形のピットで、長軸130cm、短軸95cmを測る。北壁よりには径40cm程の円形の凹みが認められた。特に北西角付近からは炭化物がまとまって出土しており、底面の中央や東からも炭化物が出土し、堆積土の2層は炭化材が層を成している。暗褐色土の1層と黄褐色粘土の3層、褐色土の4・5層と合わせて人為堆積と考えられる。

遺物 (図10、写真図版55・70)

本遺構からは土師器619点、須恵器11点、石器1点、羽口2点が出土した。ここでは7点を図化している。図10-1・4は床面で検出し、2・6はP1から、3・5はP2から出土した。7はカマドから出土したものである。

図10-1は土師器の高台付杯である。内面にヘラミガキ後黒色処理をしている。回転糸切りで底部を切り離した後、外面底部に刻みを入れ、遺存していないが高台を貼り付けていた。また、本資料は墨書き器である。破片資料であるが、外面体部に横位で「少川」の墨書きがある。非常に力強い筆運びである。2～5は土師器の杯である。3・4は内面にヘラミガキ・黒色処理を施している。

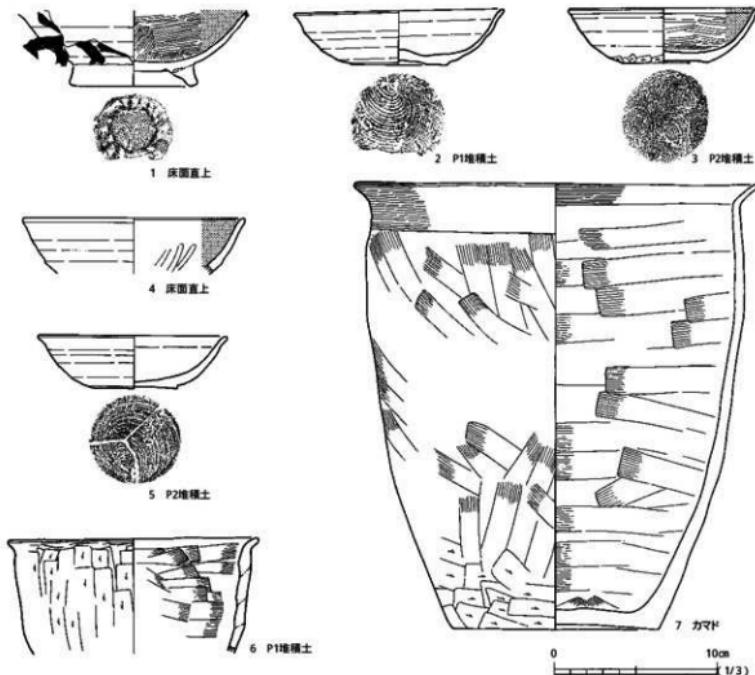


図10 2号住居跡出土遺物

2・5は内面の黒色処理、外面底部の再調整を施していない。2は外面体部、内面にロクロナデ調整を施し、内面にはヌタ状の付着が見られる。3は回転糸切りで切り離した後、外面体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリで再調整を加えており、底部の中央付近に糸切り痕を残している。4は底部が残存していない。5は内面が平滑で、わずかにロクロナデの痕跡が見える。外面体部はロクロナデ調整を施している。

6・7は非ロクロの甕である。6は口縁部から体部上半の甕の破片で、ヘラケズリとヘラナデによる調整が行われている。体部は直線的に立ち上がる器形で、短い口縁部の上端だけが外反している。7はにぶい淡黄色を呈する甕で、カマドに意図的に置かれたと思われる状態で出土したものである。体部は丸みをもつつ立ち上がり、口縁部は「く」の字状に外反している。内面はヘラナデ、外面底部にはヘラケズリにより調整されている。

まとめ

本住居跡は南西角から南東角部の部分が失われているが、周溝を伴う、方形の竪穴住居跡である。カマドは東壁中央にあり、遺存状態は比較的良好ものの、焼土は取り去られ、袖部も一部壊されて

いた。燃焼部奥壁より窓を検出しており、カマド破壊のうちに意図的に置いたものと思われる。煙道は南東方向に延びていたと思われるが、検出することはできなかった。本住居跡の所属時期は、出土遺物から10世紀前葉頃と考えている。

(佐藤)

3 a 号堅穴住居跡 S 103 a

遺構(図11・12、写真図版6)

3 a 号住居跡はE15グリッドに位置する。この地点は調査区内における遺構密集地の北辺にあたる。本遺構は3 b 号住居跡、3 c 号住居跡、42号土坑、52号土坑と重複している。本遺構が42号土坑よりも古いことは検出時の平面形の切り合い関係により明らかであった。52号土坑は本遺構の掘削中に土層断面の観察により検出され、本遺構よりも新しいことが確認された。3 b 号住居跡は本遺構の床面下で検出され、3 c 号住居跡は3 b 号住居跡の床面で検出されたため、いずれも本遺構よりも古い。つまり、本遺構は42号土坑・52号土坑よりも古く、3 b 号住居跡・3 c 号住居跡よりも新しいことが明らかになった。

本遺構は基本土層Ⅲ a 層上面で検出された。住居跡の堆積土とⅢ a 層とが類似していたため、平面形の検出が困難であり、最初に検出されたのはカマドの煙道と煙道より出土した土器とであった。検出面標高は15.3mである。

平面形は東辺の長い隅九台形である。各辺の長さは、おおよそ西辺が5.2m、南辺が4.6m、東辺が5.8m、北辺が5.4mである。各軸の長さは南北軸が6 m、東西軸が5.6mを測る。主軸方位はE 23° Sを指している。周壁は22cmから30cmの高さ、約50°の立ち上がりが残存しているが、崩落しやすい土質であるため、本来の立ち上がりはさらに急斜度であったものと思われる。東壁の南隅にカマドが作りつけられ、1.3mほどの煙道が遺存していた。東壁の中ほどにこぶし大の石が5、6個、壁面に張り付いた状態で検出された。これは後述する3 b 号住居跡のカマドに関連するものと思われる。

本遺構の調査では、軸方向にあわせて十字に土層観察用の畦を設定し、この畦を残して堆積土の掘削を行った。周壁の立ち上がりを確認するため、畦の脇に20cm幅の試掘坑を設定し、先行して掘削した。貼り床、踏みしまりが確認できなかったため、床面の把握が困難であったが、カマドを構築していたと思われる土が散らばる面を床面と認定した。床面はほぼ平坦であったと考える。床面積は26.1m²である。

堆積土は7層に分かれる。いずれもⅢ a 層に類似する褐色を基調とする砂質シルトで、主に炭化物・焼土粒の混ざり具合と、色調の違いに着目して分層した。第4層としたものは細かい帯状砂層の集まりで、流れ込んだように住居跡中央部に向かって傾斜している。第4層の様子や、全体としてレンズ状に堆積していることから、いずれも住居廃絶後に自然に埋没したものと思われる。

本遺構床面では、ピット1基を検出した。P 1は直径23cm、深さ38cmを測るが、柱痕は認められず、本遺構の規模と比べて小さすぎることから、主柱穴ではないと考えた。具体的な性格は不明で

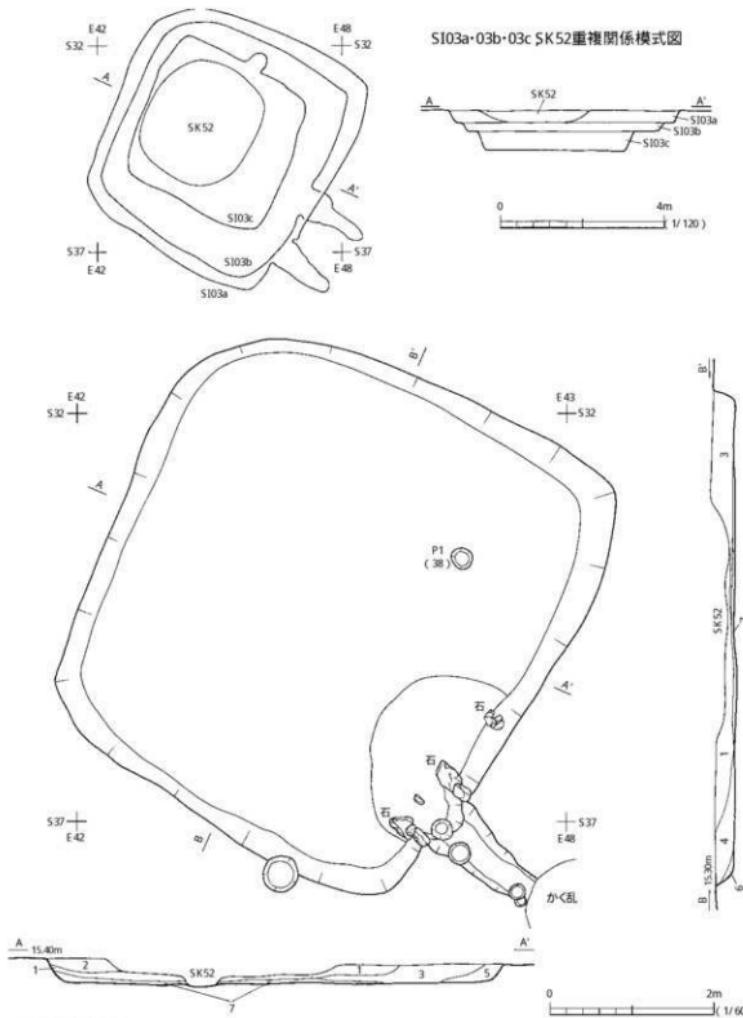


図11 3 a号住居跡

- 1 褐色砂質シルト (2~10mmの炭化物3%含む)
- 2 明黃褐色砂質シルト (2~10mmの炭化物3%含む)
- 3 暗黃褐色砂質シルト (2mm大の炭化物1%, 1~5mm大の粘土粒わずかに含む)
- 4 褐色・にぶい黄褐色・黒褐色砂質シルト (帶状堆積)
- 5 にぶい褐色砂質シルト (5mm大の燒土7%含む)
- 6 にぶい黄褐色砂質シルト (3mm大の炭化粒2%含む)
- 7 にぶい黄褐色砂質シルト (5mm大の炭化物, 10mm大の粘土粒5%含む)

ある。

カマドは、おおよそ長さ2m、幅1mの規模を持ち、煙道の長さは1.3mである。煙道は主軸と平行せず、E40°Sを指している。カマドの天井は崩落している。

このカマドでは、袖石、焚口の天井石、支脚、煙道が検出されている。袖石は花崗岩の川原石を用いている。明確な掘形を検出できなかったものの、石を立ててカマドの袖としていた。その高さはカマド底面より30cm程度である。焚口の天井石は凝灰岩製で、長さ58cm、幅23cm、厚さ8cmの板状に作られている。カマド堆積土中に落ち込んだ状態で検出された。支脚は凝灰岩製で、熱を受けて赤変している。カマド底面付近に倒れた状態で検出された。煙道は崩落した状態で検出された。煙道からは、土師器の甕が2個体つぶれた状態で検出された。いずれも底部を欠いており、組み合わされていた様子が観察できたことから、煙道に埋設されたものと考えられる。復元された胴径が20cm前後であることから、煙道の径も同程度であったであろう。残存する煙道の深さが10cm程度であることから、想定される煙道の高さは検出面よりも少なくとも10cm高かったことになる。甕はい

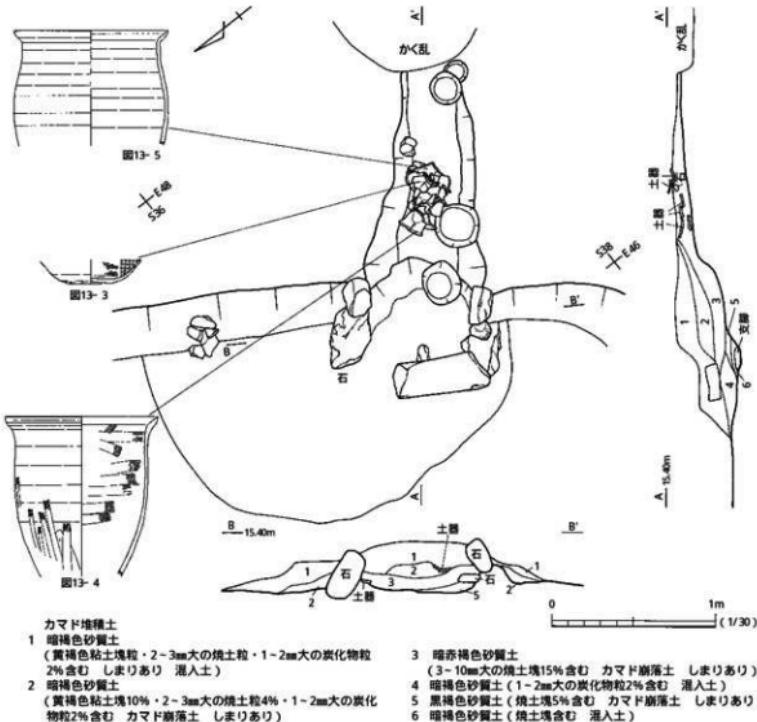


図12 3号住居跡カマド

ずれも径の半分ほどが欠損しており、検出面より上は削平されたものと思われる。また、煙道から土師器の杯が1個体、正位で出土した。この杯は削平を受けていないことから、遺棄されたものではなく、煙道の構築材として埋設されていたものと考えられる。

カマドの堆積土は6層に分けることができた。第1層は流入土と考えられる。第3層は暗赤褐色砂質土で、焼土塊を多量に含んでいる。これはカマド天井および煙道天井の崩落土であろう。第2層、第4層、第5層は焼けてはいないものの、カマドの崩落土と考えている。第6層はカマド廃絶後の堆積土である。この層で支脚が検出された。カマドが崩落する前に堆積した土が第6層のみでごくわずかであることから、このカマドは廃絶後ほとんど間をおかず崩落したものと推測される。カマド内に被熱による赤変した、あるいは硬化した面が検出されなかったため、確実な燃焼面は不明である。

遺物(図13、写真図版56・57)

本遺構で出土した遺物のうち、5点を図示した。1と2はカマドの天井崩落土から出土したもので、3～5は前述したようにカマド煙道の構築材である。

1～3はロクロを使用した土師器の杯である。2は底部が欠損しているが、1と3には高台がついていない。いずれも内面をヘラミガキ・黒色処理を施している。1・3は回転糸切りによって切り離した後、外面体部下端をヘラケズりで再調整している。2は外面体部下端にヘラケズりが見ら

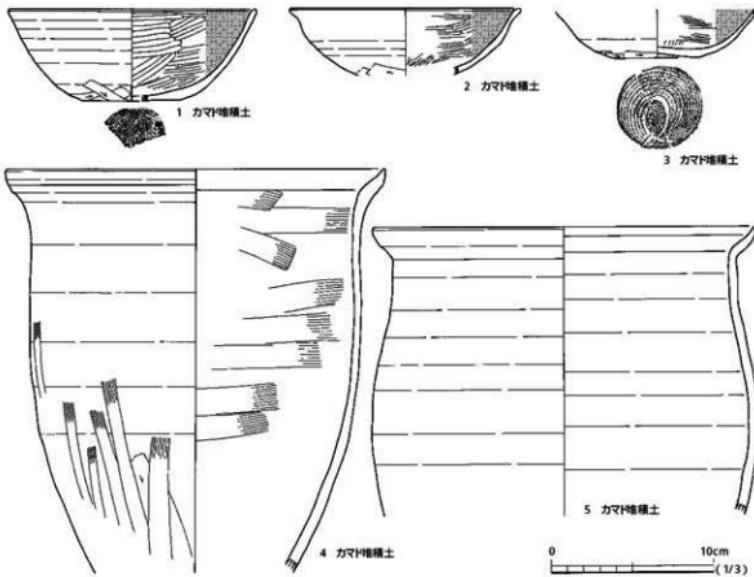


図13 3a号住居跡出土遺物

れる。本資料は外面も黒色を呈しているが、ミガキが見られないことから、すすが付着したものと考えられる。

4と5はロクロを使用した土師器の甕である。煙道の構築材と考えられ、4の胸部下半が5の口縁に入った状態で検出された。いずれの資料も底部を欠いている。4は胎土に砂を多く混ぜている。ロクロナデの後、外面胸部下半をヘラケズリ・ヘラナデで調整している。内面は単位のはっきりしないナデによって平滑にしている。口縁部は特によくナデで仕上げている。5はロクロナデの痕跡をよく残している。胸部上半から口縁にかけてが、特に平滑に仕上げられている。胎土はやや粗く、砂を多く含んでいる。

ま と め

本遺構は、小山B遺跡において最大の規模を持つ住居跡であり、おそらく集落内の有力者が居住していたものであろう。3c号住居跡、3b号住居跡、そして本遺構と、拡張を続けてきた可能性もあるが、調査ではその確証を得ることができなかった。出土した遺物と遺構の重複関係から、本遺構は9世紀後葉に機能していたと考えられる。

(轟 田)

3 b 号竪穴住居跡 S 103b

遺 構 (図14、写真図版7)

本遺構はE15グリッドに位置する。3a号住居跡、3c号住居跡、42号土坑、52号土坑と重複している。本遺構の床面において3c号住居跡を検出したことから、本遺構は3c号住居跡よりも新しい。3a号住居跡、42号土坑、52号土坑は、いずれも本遺構より新しいことが明らかである。

3a号住居跡を完掘した際に、床面に一回り小さな平面形を検出した。3a号の下に本遺構が重複していると考え、3a号住居跡周辺を再精査したところ、東壁に直交する煙道が検出された。煙道の検出面標高は15.2mである。

平面形は隅丸方形を呈する。各辺のおおよその長さは、西辺が4.2m、南辺が4.3m、東辺が4.9m、北辺が4.5mであり、東辺がやや長い。軸の長さは、南北軸が5.4m、東西軸が4.9mである。主軸方向はE30°Sである。周壁は20cm程度残存しており、検出面までの高さは40cmである。その立ち上がりは70°と急斜度である。東辺の中央や南よりにカマドが作りつけられ、1.5mほどの煙道が検出された。

本遺構の調査にあたり、3a号住居跡と共に残して掘削し、隨時堆積状況を確認しつつ行った。本遺構では貼り床、踏みしまりは確認できず、また直下に3c号住居跡が存在したため、床面の把握が困難であった。そのためカマドの堆積土を一部先行して掘削し、カマドの底面の高さをもっておおよその床面と推定した。また、3c号住居跡は本遺構よりも小さかったため、本遺構の縁辺部Ⅲa層が現れるまで掘削し、その高さを床面と推定した。こうして推定した縁辺部の床面の高さとカマドの底面から推定した床面の高さとは、ほぼ同一であった。床面積は23.5m²である。堆積土は単層であり、暗褐色の砂質シルトを基調とし、焼土粒と炭化粒を含んでいた。一度に短期

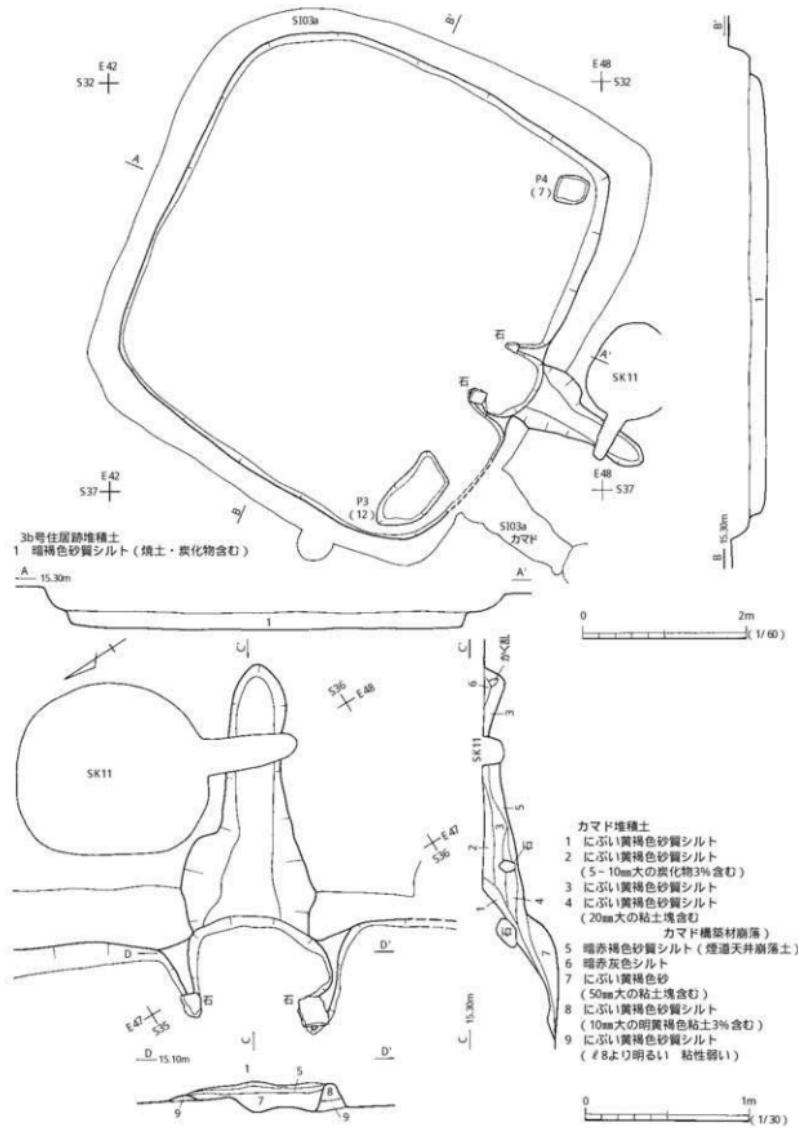
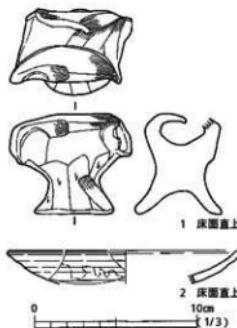


図14 3 b号住居跡



間で埋没した様子を見せ、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

本遺構の床面ではピット 2 基を検出した。P 3 はカマドの南側、本遺構の南東隅で検出された。平面形は長軸 1m、短軸 0.5m の不整形を呈し、断面形は皿状で深さ 12cm である。堆積土は焼土と炭化物を多く含んでおり、人為的に埋め戻されていた。住居廃絶時に開口しており、カマドの構築土を投棄したものと推測される。ピットの位置から貯蔵穴であろうと考えた。P 4 は本遺構の北東隅で検出された。浅い皿状のピットで、性格は不明である。なお、本遺構の柱穴は確認できなかった。

図15 3 b 号住居跡出土遺物 カマドの規模はおよそ長さが 2.1m、幅が 1.1m である。煙道は 1.5m ほどである。カマドの軸は本遺構の主軸方位と同じく E 30° S を指している。煙道のほか、袖の一部と袖石が遺存していた。袖にはぶい黄褐色の砂質シルトに黄色い粘土を混ぜたもので作っており、芯材として花崗岩の袖石を用いていた。カマド本来の姿はすぐではなく、つぶれた状態で検出された。また、袖は 3 a 号竪穴住居跡の床面から下の部分のみ遺存していた。カマドの堆積土は 9 層に分けられる。1 層から 3 層、6 層は 3 a 号建設時に埋め戻されたものである。1 層の上、3 a 号住居跡の掘形の内側にこぶし大の石が置かれていた。これは 3 a 号を建設した人物が、そこに古いカマドが存在していることを知っていて置いたものであろう。4 層、5 層、7 層はカマド構築材と思われる粘土や焼土を多く含んでいることから、カマドの崩落土である。8 層、9 層は遺存していたカマドの袖である。このカマドでは、底面に熱を受けて赤変した、あるいは硬化した部分を検出できなかったため、燃焼面は不明である。

遺物 (図15、写真図版56・57)

本遺構から出土した遺物のうち、図化できたのは 2 点にとどまった。

1 は台付きの耳皿である。手づくりで、非常に粗雑な作りである。胎土は土師器杯と同様に緻密であるが、ミガキ・黒色処理は見られない。

2 は灰釉陶器の皿である。内面はほぼ全面に、外面は体部上半に釉薬がかかっている。内面口縁部に段がつき、口縁端部が幅広くなっている。器壁は薄手で、口縁部の外反も弱い。

まとめ

本遺構は 3 c 号住居跡廃絶後、3 c 号住居跡を埋め戻しながら掘形を拡大し、構築した住居跡である。また、3 a 号住居跡を構築した際に本遺構のカマドの位置に石を置いていた様子が伺えた。これらのことから、3 a 号、3 b 号、3 c 号の各住居跡には非常に密接な関連があったものと考えられる。

本遺構の時期は出土遺物と遺構の重複関係から 9 世紀後葉頃に機能していたと考えられる。

(轟 田)

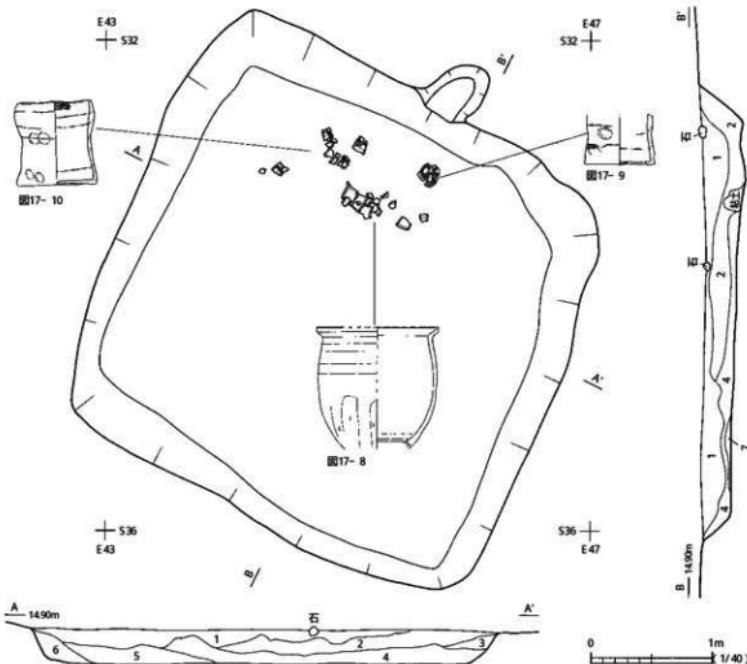
3 c 号竪穴住居跡 S 103 c

遺構(図16、写真図版7)

本遺構はE15グリッドに位置する。3 a号住居跡、3 b号住居跡、42号土坑、52号土坑と重複しており、そのいずれよりも古い。

3 b号住居跡を完掘したところ、床面に一回り小さな平面形を検出した。平面形は隅丸方形で、その規模はおよそ西辺が3.5m、南辺が3.4m、東辺が3.4m、北辺が3.3mを測る。北辺中央に煙道の痕跡と思われる長さ40cmほどの突出部がつく。主軸方位はN30°Eである。

3 c号住居跡では、検出された平面形の軸が3 a・3 bと異なっていたため、新たに土層観察用の畦を設定し、掘削した。堆積土は7層に分けることができた。1層・2層にはカマド構築土の粘



- 3c号住居跡堆積土
- 1 にふい黄褐色砂質シルト
(2~5mmの大炭化物3%, 10~20mmの大粘土塊7%, 10mmの大焼土2%含む)
 - 2 にふい黄褐色砂質シルト
(2~5mmの大炭化物3%, 10~20mmの大粘土塊3%, 10mmの大焼土2%含む
#1より明るい)
 - 3 橙灰色沙 (5mmの大礫3%含む)
 - 4 にふい黄褐色沙
 - 5 にふい黄褐色砂質シルト (15mmの大炭化物1%含む)
 - 6 にふい黄褐色沙
 - 7 にふい黄褐色沙 (#4より明るい)

図16 3 c号住居跡

土・焼土を多く含んでいる。3層～7層はⅢ b層・Ⅳ層に類似する砂・礫を多く含んでいる。3 b号住居を建設する際に掘削した排土で埋め戻したものであろう。

床面に貼り床は見られず、地山を掘削してそのまま床面としている。明確な踏みしまりも確認できなかった。床面積は9.7m²である。周壁は高さ30cm前後が残存しており、検出面までの高さは90cmである。周壁の立ち上がりはおよそ45°である。

本遺構のカマドは、ほとんど遺存していなかった。ただし、北辺に煙道の痕跡と思われる突出部が残り、床面北東側にカマドを構築していた粘土が広がり、さらに凝灰岩製の支脚が出土していることから、本遺構のカマドは粘土を用いて北辺に作りつけられていたものと推定される。

本遺構ではピットを検出できず、主柱穴も確認できなかった。

遺物 (図17, 写真図版56・57)

本遺構から出土した遺物のうち、11点を図化した。いずれも堆積土中からの出土であるが、2・4は床面直上から出土している。また、8～10は、堆積土の床面付近から出土した。

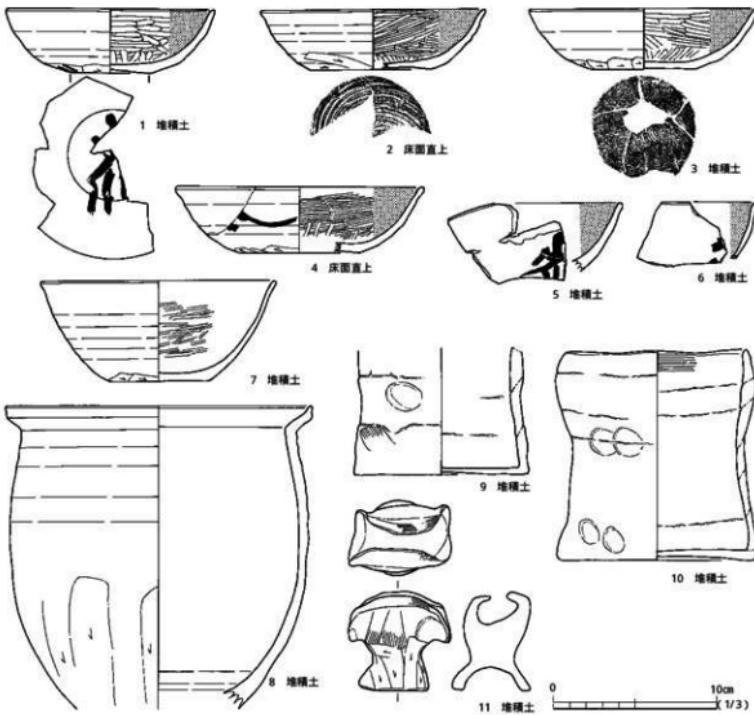


図17 3 c号住居跡出土遺物

1～7は土師器の杯である。いずれも内面にヘラミガキが見られ、1～6は内面黒色処理されている。3・7は2次的に熱を受けており、器壁がもろくなっている。とくに7は、熱のため黒色処理も残っていない。1・4～6は墨書き土器である。1は外面体部下端から底部全面までヘラケズリで再調整しており、切り離しの痕跡が見えない。底部から体部下端にかけて墨書きがある。破片資料ではあるが、残画から「少川」と判断できる。2は底部の糸切り痕を残しており、外面体部下端をヘラケズリで再調整している。3は底部を回転糸切りで切り離した後、体部下端から底部周縁までヘラケズリで再調整している。4は回転糸切りの後、体部下端から底部周縁までヘラケズリで再調整している。外面体部に墨書きがあるが、破片資料のため文字は特定できなかった。5は外面体部に正位で「少川」の墨書きがある。6は外面体部に墨痕があるが、破片資料のため文字の特定はできなかった。7は体部下端から底部までヘラケズリで再調整されており、切り離し技法は不明である。内面の黒色処理は残っていないが、かすかにヘラミガキの痕跡が見られる。

8は土師器の甕でロクロを使用している。口縁部は強く屈曲し、特に丁寧に作られている。外面体部下半にすが付着しており、すが付着する境界線は口縁と平行している。カマドの構築土の近くから出土しており、カマドには埋込まれていたものが、カマドとともに破棄されたものと推測している。9・10は筒形土器である。ともにカマドの構築土の付近から出土している。外面がユピオサエのみで器面調整を行わないのに対し、内面はナデ調整を施し、若干平滑に仕上げている。10の内面にはスタ状の付着が見られる。11は台付き耳皿である。3 b号住居跡出土のもの(図15-1)と酷似している。手づくねで、非常に粗雑な作りである。器面の調整はナデのみであり、ミガキ・黒色処理は見られない。

ま　と　め

本遺構は3 b号、3 a号と続く住居跡の最初の1軒であるが、新しい2軒よりもだいぶ小さく、カマドの位置も異なっている。本遺構が埋め戻された直後に3 b号は作られたと考えられるが、この2軒の間にどのような関係があったのか、判断できなかった。出土遺物から、本遺構は9世紀中葉頃に機能していたと考えられる。

3 a・3 b・3 c号堅穴住居跡出土遺物(図18、写真図版56・57・70・73・74)

3号住居跡から出土した遺物の点数は、土師器1,886点、須恵器13点、陶器1点、繩文土器14点、鉄製品2点、鐵滓30gを数える。ここでは、3号住居跡から出土したもの、a・b・cのいずれに属するのか判断できなかった遺物23点を図化した。1～20はロクロを使用した土師器の杯であり、内面をヘラミガキ、黒色処理で仕上げている。そのうち1・5・6・10～20は墨書き土器である。21は筒形土器、22・23は鉄製品である。

1～4は底部を回転糸切りで切り離した後、外面体部下端をヘラケズリで再調整している。1は外面体部から底部にかけて墨書きが見られる。力強い筆で、「少川」の文字が正位で書かれている。4は2次的に熱を受けており、内面の黒色処理が一部見えなくなっている。

5は外面体部に正位で「財□(華カ)」の墨書きが見られる。6は外面体部下端にヘラケズリが見

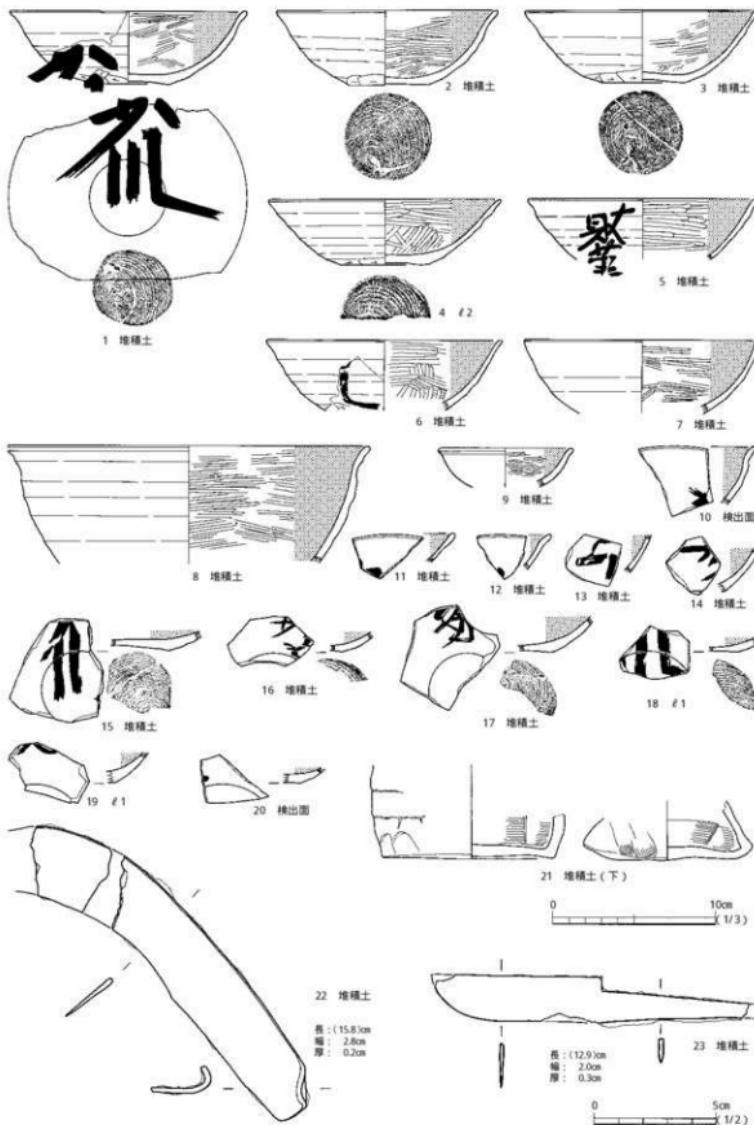


図18 3号住居跡出土遺物

られる。墨書は外面体部にあるが、破片資料であり、文字を特定できなかった。7は2次的に熱を受けており、器壁が赤変し、風化している。10～13、19・20は外面体部に墨痕があるが、文字の判別はできなかった。14は外面体部に墨痕があり、残画から「少川」であろうと思われる。

15～18は回転糸切りの後、外面体部下端をヘラケズリで再調整している。15は外面体部から底部にかけて、「少川」の墨書がある。16は外面体部から底部にかけて墨痕があるが、文字は判読できなかった。17は外面体部に墨書が見られる。破片資料のため文字の確定が困難であるが、「州」かと思われる。18は外面体部から底部にかけて墨痕があり、「少川」であろうと思われる。

21は筒形土器である。外面はユビオサエのみで、内面はナデテ丁寧に仕上げてある。本資料は大きく変形しており、この状態では使用に適さないであろう。

22は鎌である。先端部が欠損しているため、全体の大きさは不明である。基部のかえりが残存しており、柄と刃部との角度は40°程度であったと推定される。基部から7cmほどのところで刃の湾曲が変化しており、これは使用あるいは研ぎ直しにともなう磨滅と考えられる。

23は刀子である。全長は13cm前後、刃長7cmと推定される。茎長は6cmを測る。刃区から2cm程度で刃が大きく屈曲しており、使用あるいは研ぎ直しによる磨滅を見られる。 (轡 田)

4号堅穴住居跡 S 104

遺構 (図19、写真図版8)

本遺構は、F16～17グリッドの、標高15.3m付近のほぼ平坦地に位置する。検出面はⅢa層上部である。5基のピットが重複し、そのうち2基は1号掘立柱建物跡の柱穴である。この柱穴は、住居跡の堆積土を除去したあとの床面から検出したが、住居跡の堆積土と柱穴の堆積土が酷似していくため、新旧関係については確認できなかった。

平面形は隅丸九方形で、規模は東西で3.7m、南北で4.3mを測る。住居跡の主軸方向はE28°Sである。堆積土は3層で、床面直上の3層の上に1層が厚く堆積し、ごく短期間に埋没した可能性が高い。床面はほぼ平坦で、貼床や踏みしまりはない。検出面からの深さは中央部で23cmを測る。床面施設として、床面南西部に小ピットが10基、北辺中央寄りにピットが1基存在する。いずれも本遺構に伴うものと考えるが、用途は不明である。床面積は11.9m²を測る。

カマドは東辺南寄りに位置し、燃焼部、袖の一部が遺存していた。燃焼部中央は本遺構より新しいピットに破壊されており、また袖の手前側は左右に崩落していた。煙道は存在したと考えられるが、上部削平のため住居跡外部にその痕跡は見られなかった。燃焼部は橢円形で、規模は長径75cm、短径50cmを測る。袖の規模は遺存部で右が長さ50cm、幅25cm、高さ10cm、左が長さ55cm、幅30cm、高さ12cmを測る。カマド堆積土内および袖の上部に、被熱により赤変、風化したとみられる石が散在し、これらはカマド構築材として用いられたものと考える。

遺物 (図19、写真図版58)

本遺構からは、土師器片が79点出土したが、そのうち図示できたのは1点のみである。

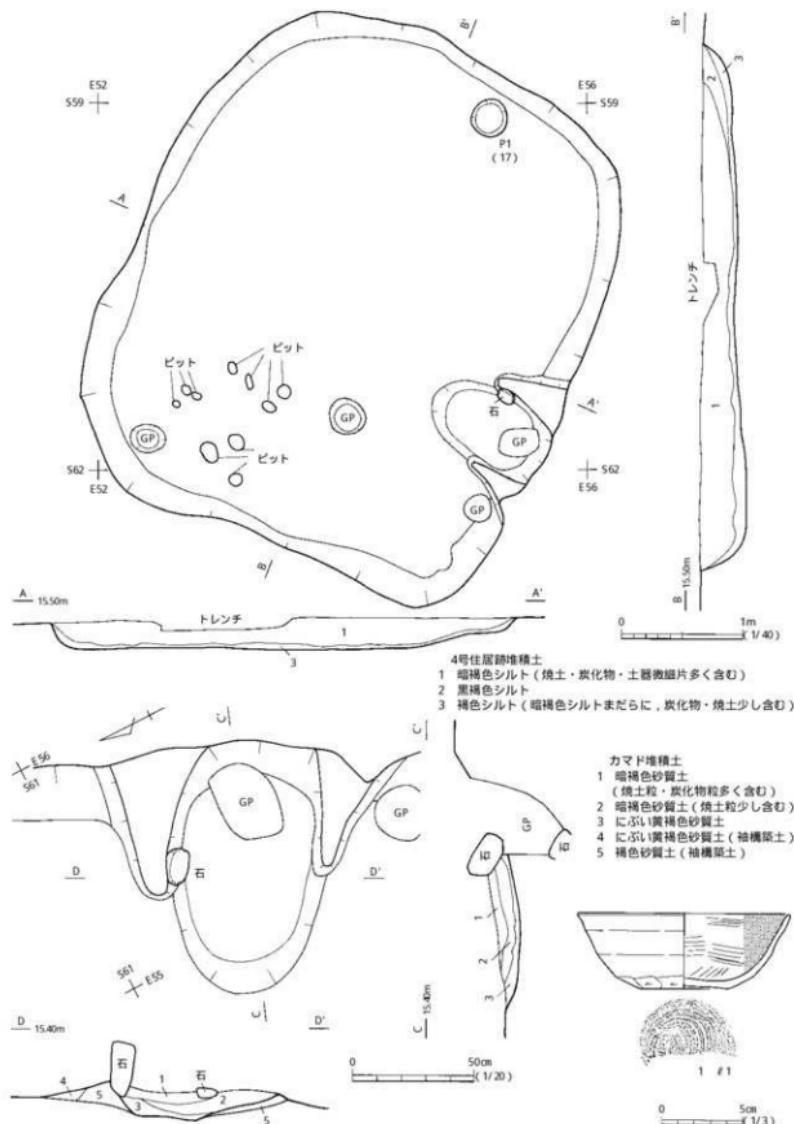


図19 4号住居跡・出土遺物

1は堆積土1層から出土した土師器杯で、ロクロを使用している。底部には回転糸切り痕が見られ、外側は体部下端にヘラケズリが施される。

まとめ

本遺構は隅丸九方形の壺穴住居跡である。時期は出土遺物から9世紀後半頃と考える。(菊田)

5号壺穴住居跡 S 105

遺構(図20、写真図版9)

本住居跡は、調査区北部東側のE15・E16グリッドに位置する壺穴住居跡で、検出面はⅢa層上面である。本住居跡の東には21・22・24a・24b・57号土坑、1・2号焼土遺構、1号特殊遺構が所在し、遺構が集中している地区である。本住居跡は、遺構内の北東部で24a号土坑と、東壁から東に平面形を検出した24b号土坑と重複している。24a号土坑は5号住居跡が廃絶し埋没したのに機能したと判断している。したがって、本住居跡は24b号土坑よりも新しく、24a号土坑よりも古い。遺存状態は大変良好である。

平面形は整った方形をなし、規模は長軸約3.4m、短軸約2.9m、検出面から底面までの深さは35cmを測る。主軸方向はおよそN20°Eである。底面はほぼ平坦で、床面はⅢa層の砂質土を利用しているながら、少し固めに踏み締められた部分が認められた。床面積は6.7m²である。床面周壁の立ち上がりは急であり、北壁は流入土による崩落に伴い階段状に検出している。

堆積土は4層に分類される。1層は暗褐色土、2層は褐色土、3層は暗褐色土で、いずれも焼土と炭化物を含んでいる。4層にはぶい黄褐色土で壁際には堆積しており、流入土である。1~3層がレンズ状の堆積をしていることから、自然堆積である。

本住居跡からは、カマド1基とピット2基を検出している。

カマドは北東コーナーに取り付けられており、本年度の調査では、カマドの位置が同じ壺穴住居は他になかった。燃焼部は本住居跡の北東コーナーをそのまま利用し、右袖は東壁から、左袖は北壁からそれぞれ住居内に張り出すように作られていた。燃焼部は幅約30cm、奥行き約60cmで、焚口から奥壁にかけて焼面が検出された。

カマド堆積土は7層に分類した。1層の暗褐色土と2層の褐色土は自然流入土、焼土塊を多量に含む3層の暗褐色土はカマド崩落土、4層の褐色土は煙道部からの自然流入土である。焼土と炭化物を多く含む黒褐色土の5層と、カマド袖構築土である暗褐色土の7層は、その堆積状況から人為堆積である。煙道は北東方向に延びており、全長は奥壁から約65cm、最大幅は約35cmである。直径20cm程の煙出しピットも検出している。煙出しピットの堆積土である6層は、炭化物と焼土を含む暗褐色土である。

床面で検出したピットは2基である。P1は、直径約38cm、深さ16cm程の円形のピットで、南東コーナーよりの壁際で検出した。P2は北東のコーナーの南壁よりに作られており、直径約30cmの円形で、深さは17cmである。堆積土はともに暗褐色土の1層であり、住居内堆積土に類似している。

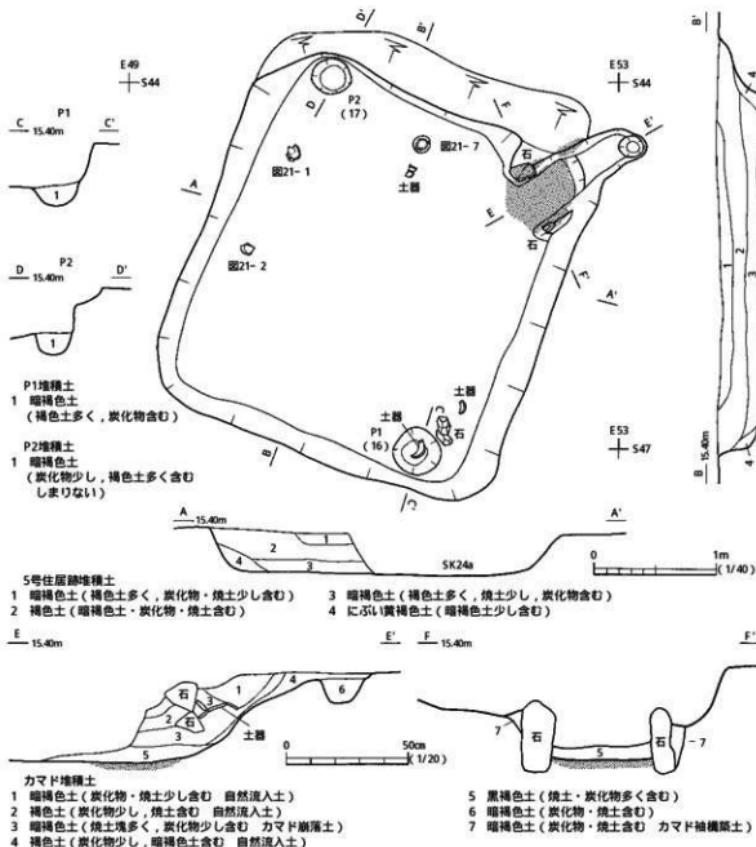


図20 5号住居跡

また、P1・P2の深さはほぼ同じであり、柱痕は認められなかったが、その位置と規模から柱穴の可能性も考えられるであろう。

遺物 (図21, 写真図版58-72)

本住居跡から出土した遺物は、土師器779点、須恵器18点、土製品2点である。これらの遺物は、住居内堆積土の広い範囲に散在する形で出土した。そのうち、9点を図化した。1・2・4・6・7は床面あるいは床面直上から出土している。3・8はカマド崩落土内から出土している。1～5はロクロを使用した土師器杯、6・7は土師器の高台付杯、8は土師器の甕、9は土錘である。1～3・5・7は内面のヘラケズリ・黒色処理が施されていない。

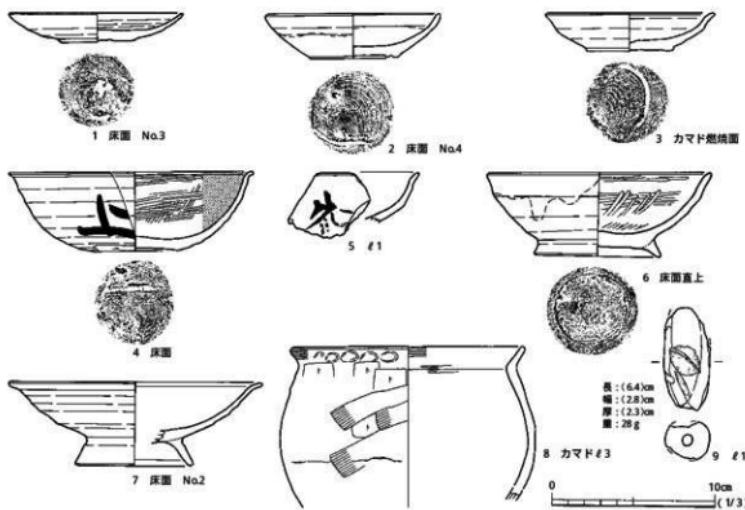


図21 5号住居跡出土遺物

1～3は回転糸切りの後、再調整を施していない。4は回転糸切りの後、外面体部下端をヘラケズリで再調整している。外面体部に正位で「上」の墨書があるが、非常にしまりのない字体である。5は墨書き土器である。破片資料であるが、外面体部に正位で「少川」の墨書きが見られる。6は回転糸切りの後、低い高台を貼り付けている。内面は底部が放射状、体部が横方向のヘラミガキを施し、黒色処理で仕上げている。ただし、2次的に熱を受けており、黒色処理は痕跡を残すのみである。外面にすすぐが付着しているが、2次的に熱を受けた際に付着したものであろう。7は浅い高台付杯である。底部が残存していないため、切り離し技法は不明である。高い高台を後付けしている。高台は約40°と大きく広がり、安定感のある造りになっている。外面体部にはロクロナデの痕跡をよく残している。

8は非ロクロの甕で、口径が14.4cmと小型である。輪積みによって成形し、口縁部をつまみ出している。調整は、外面体部を縦方向のヘラケズリの後、ケズリに近いヘラナデによってやや粗雑に仕上げている。内面は単位がはっきりしないが、ナデで平滑に仕上げている。口縁部は内外面ともヨコナデを施している。外面はすすぐており、カマドでの使用を伺わせる。9は紡錘形の土鍤である。

まとめ

本住居跡は北東コーナーを利用してカマドが構築されている、整った方形の延穴住居跡である。検出できた2基のピットはいずれもコーナーに位置し、規模も大差はない。これらのピットが柱穴だと仮定すると、上屋の構造上、南西コーナーとカマド周辺に何らかの施設が必要となる。カマド

の位置とも合わせて、本遺跡では他に類のない住居跡である。

本住居跡からは土師器や須恵器が広い範囲から出土している。床面付近から出土した遺物は本住居廃絶時に遺棄された可能性を伺わせる。本住居跡の所属時期は、出土遺物から10世紀中葉頃と考えている。

(佐藤)

7号竪穴住居跡 S 107

遺構(図22、写真図版10)

本遺構はE17・18、F17・18グリッドで検出された。8号竪穴住居跡と重複している。平面形の切り合い関係により、本遺構が新しいことが明らかである。本遺構の南西辺はかく乱を受けて破壊されている。東角は調査区外のため、調査できなかった。本遺構はⅢa層上層で検出された。しかし8号住居跡との重複のため平面形がはっきりせず、遺構精査を繰り返すことになった。

本遺構は南西辺から東角までがかく乱を受けて削られており、さらに東角が調査区外であったため、平面形の全容は明らかではない。しかし残る辺と角の方向から平面形を推定すると、北西—南東に長い隅丸方形を呈していたと考えられる。本遺構の規模は北西—南東軸が5.8m、北東—南西軸が4.3mと、かなり細長い形をしている。長い北西—南東軸を主軸とすれば、主軸方位はE24°Sである。南角付近で粘土塊が検出されたことから、カマドはこのあたりに位置していたものと推測できた。

本遺構の調査にあたり、各辺の中心点を結ぶように土層観察用の畦を設定し、畦を残しながら掘削した。堆積土は6層に分けることができた。1層・2層はこぶし大の礫を多く含んでおり、人為的に埋め戻されたものである。本遺構の掘形は礫層であるN層まで届いており、N層の礫と1層・2層の礫とを区別するのが困難であった。一部床面を掘りとばしてしまい、写真撮影の段階で写真写りを考慮して埋め戻した。4層は周壁の崩落土で、8号住居跡の1層に由来するものである。3層・5層・6層は本遺構を構築した際の埋土と考えられる。底面上に流入土が見られないことから、本遺構は廃絶後間もなく埋め戻されたものと考えられる。堆積土内の礫は、付近で掘削していた新しい遺構に由来するか、本遺構構築時に捨てずに残していた礫に由来するのであろう。周壁は20cm前後が遺存していた。その立ち上がりは60°程度で、急斜度である。床面は、N層上面まで掘りこんだ後、礫で凹凸のある床面に3層・5層・6層を敷いて平らにして使用していたのであろう。床面積は、遺存していた部分で20.2m²を測る。

本遺構南角付近で粘土塊を検出した。よく熱を受けていることから、これがカマド軸の構築材の一部であろうと考えた。燃焼面は確認できなかったが、この付近にカマドが構築されていたものと考える。カマドの堆積土は6層に分けられる。4層はカマド構築土の崩落したものである。5層はⅢa層に由来する砂質土で、カマド廃絶の際に流入したものであろう。本遺構中央部南側にしまりの良い粘土が、1m四方に広がって検出された。これはカマドを構築していた粘土だと考えている。本遺構廃絶時にカマドも破壊し、人為的に埋め戻したのであろう。カマドがあったと推測される位

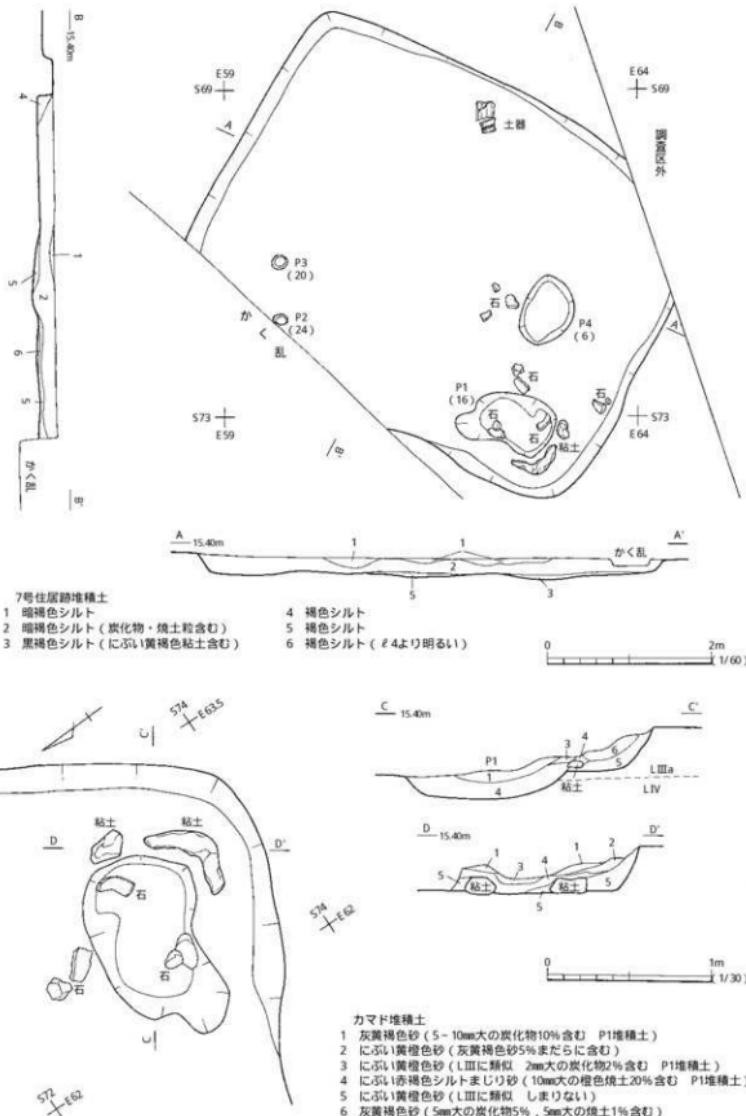


図22 7号住居跡

置からずれているため、構築土は原位置から動かされたものと思われる。本遺構では煙道は検出されなかった。

本遺構の床面では、4基のピットを検出した。P1, P4はカマド堆積土4層が堆積しているため、本遺構廃絶時には開口していたと思われる。

遺 物 (図23, 写真図版59・70・72)

本遺構からは土器921点、須恵器7点、鉄滓409gが出土した。ここではそのうち21点を図化した。いずれも堆積土からの出土である。

1~13, 15はロクロを使用した土器の杯、14・17~21は筒形土器、16はロクロを使用した土器の壺である。1・3・6~14は墨書き土器である。

1・3は回転糸切りで切り離し、再調整を施していない。内面口縁部が磨滅している。1は外面体部および底部の2カ所に墨書きが見られる。いずれも「少川」であり、体部のものは正位で書かれている。3は外面体部に墨書きがあり、正位で「少川」と書かれている。2は回転糸切りのち、外側体部下端をヘラケズリで再調整している。内面はヘラミガキ調整であるが、単位ははっきりしない。4は内外面とも橙色を呈している。内面に黒色処理を施した形跡は見られない。5は回転糸切りで切り離した後、外側体部下端をナデしている。内面は橙色を呈しており、黒色処理は認められない。6は回転糸切りで切り離した後、外側体部下端から底部周縁までヘラケズリで再調整している。外側体部および底部の2カ所に墨書きがある。いずれも「少川」の文字が書かれている。体部のものは正位で書かれている。

7は外側体部に正位で「富」の墨書きがある。8は外側体部に墨痕がある。破片のため、字画がほとんど見えないが、とめと払いの形状から、「少川」であろうと考えられる。9は外側体部に墨痕がある。墨痕が薄いため、文字の判読は困難であるが、かすかに見える字画から判断すると正位で「中内」であろうと考えられる。10・12は外側底部に墨痕があるが、破片資料のため、文字の確定はできなかった。11・13は外側体部に墨痕があり、残画から正位で「少川」と書かれていると考えられる。

14は筒形土器であるが、外面に墨痕がある。破片資料のため、文字は判読できなかった。

15は底部を回転糸切りで切り離し、再調整は施していない。内外面ともにロクロナデの痕跡をよく残している。内面にすが付着しており、灯明皿として用いられていたと考えられる。

16は復原口径11.2cmの非常に小さい甕である。胎土は粗く砂を多く含んでいる。調整はロクロナデのみである。器面が剥離しており、実際に加熱して使用していたと考えられる。17~21は筒形土器である。いずれも内外面に輪積み痕を残している。外面はユビオサエのみ、内面はユビオサエの後ナデて、やや平滑に仕上げている。

ま と め

本遺構は北西一南東に長い平面形を呈する住居跡であり、平面形は21号住居跡に類似する。ただしカマドは粘土で構築されていたと考えられ、石組みと推測される21号住居跡とは異なっている。



図23 7号住居跡出土遺物

カマドは南東角付近に設置されていたが、廃絶時に意図的に破壊されたと見られる。

本遺構は、出土遺物から10世紀前葉頃に機能していたと考えられる。

(轟 田)

8号竪穴住居跡 S I 08

遺構 (図24)

本遺構はG17・18グリッドで検出された。7号住居跡と重複している。平面形の切り合ひ関係と土層断面の観察によって、7号住居跡よりも古いことが明らかである。Ⅲa層上面で検出されたが、7号住居跡との重複により平面形の認識が困難であった。また、本遺構の半分近くが調査区外であった。

検出された平面形は南北の二つの角のみであるが、その角の位置から推測すると北西—南東方向に長い隅丸長方形を呈していたと考えられる。その規模は、長軸が4.6m程度、短軸が3.8m程度と推測される。

堆積土は3層に分けられた。1層・2層は灰褐色の砂質シルトで、焼土や粘土のブロックを含んでいる。3層は橙色の粘土層で、カマドの構築材と考えられる。本遺構は調査区の制約によりカマドを検出できなかったが、カマドが作りつけられていたのであろう。全体として人為的に埋め戻された様相を示している。周壁は30cmであり、その立ち上がりは50°前後である。

本遺構床面ではピットが2基検出されている。いずれも浅いため、柱穴ではないと思われる。堆積土には焼土が含まれており、本遺構の堆積土と共通していることから、本遺構埋没時には開口していたものと考えられる。

遺物 (図版24、写真図版59・72)

本遺構からは土師器片85点が出土している。そのうち5点を図化したが、いずれも堆積土からの出土であり、遺存率も低い。

1・2はロクロを使用した土師器の杯である。1は回転糸切りの後、外面体部下端をヘラケズリで再調整している。内面口縁部は著しく磨滅している。2は外面体部に墨書があり、正位で「中内」と書かれている。3・4はロクロを使用した土師器の甕である。胎土は粗く、砂を多く含んでいる。

5は筒形土器である。輪積み痕をよく残し、外面にはユビオサエの跡が残る。内面はユビオサエの後ナデしており、外面と比較すると平滑に仕上げている。

まとめ

本遺構は7号住居跡に壊されており、また調査区外にその多くの部分が存在するため、ほとんど調査できなかった。平面形は北西—南東方向に長い隅丸長方形を呈していたと推測され、重複する7号住居跡と類似している。出土遺物と遺構の重複関係により、本遺構は9世紀後葉頃に機能していたものと考えられる。

(轟 田)

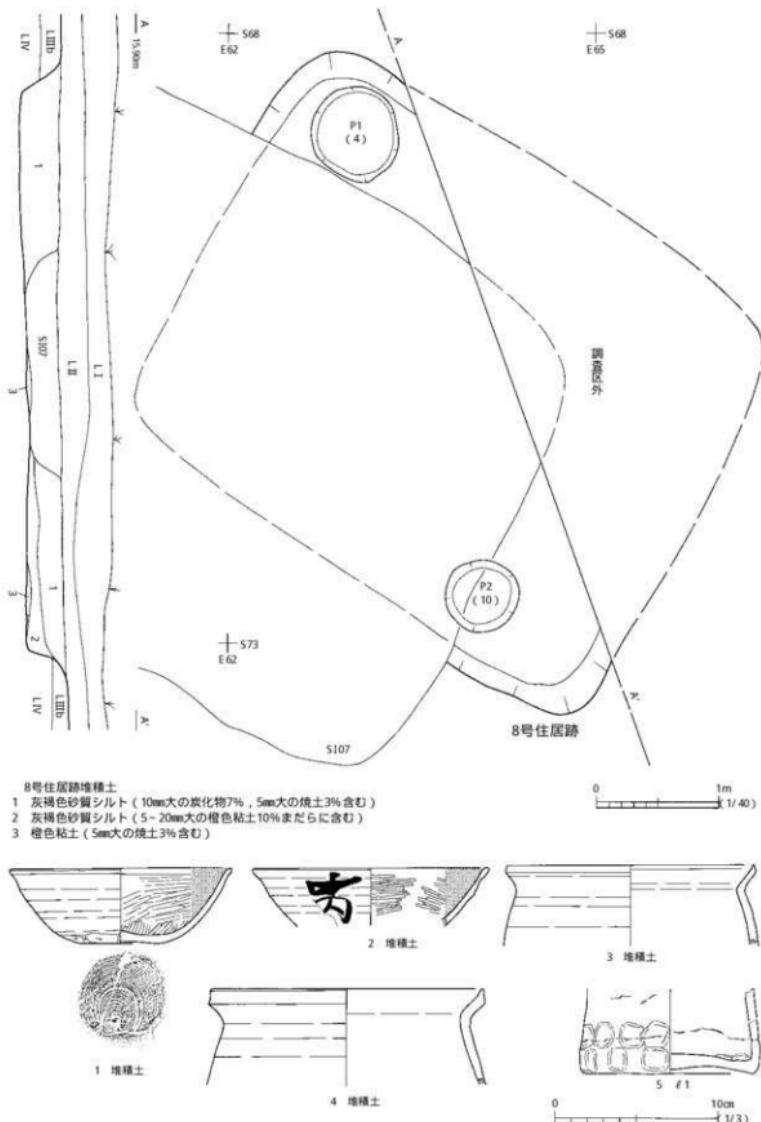


図24 8号住居跡・出土遺物

9号堅穴住居跡 S 109

遺構(図25・26、写真図版11)

本遺構はD13・14、E13グリッドに位置する。4号溝跡と重複しており、平面形の切り合い関係により本遺構の方が古いことが明らかである。

遺構精査中に、Ⅲa層よりもやや暗い土が検出された。圓場整備の際のかく乱で部分的にⅡ層が堆積していたため、本遺構の平面形を確認するのが困難だった。そこでⅡ層を丁寧に剥がしていくところ、隅丸方形の平面形を検出することができた。検出層位はⅢa層上面で、検出面標高は15.4mである。かく乱のため、本遺構の検出面は凹凸が激しかった。隅丸方形の東辺南側に長さ1mほどの煙道が付いている。主軸方位はE 25° Sである。

検出された平面形の規模は、西辺が4.2m、南辺が3.8m、東辺が3.8m、北辺が3.7mを測った。軸の長さは、南北軸が4.6m、東西軸が4.3mである。

後述するように、本遺構には新旧2時期があったものと考えている。ここでは調査した順に記述を進めていきたい。

堆積土を観察するために、軸にあわせて十字に畦を設定し、畦を残して掘削した。貼り床や踏みしまりは全く確認できず、また遺物が床面に散らばっている状況もなかったため、床面の認定が困難であった。そこでカマドの堆積土を一部先行して掘削し、カマドの燃焼面を確認することで床面の高さを推定した。床面積は16.9m²である。

堆積土はこの段階で4層に分けられる。いずれも褐色を基調としているが、3層・4層はⅢa層土を多く含む周壁の崩落土で、1層・2層は流入土であろうと判断される。人為的な埋め戻しの形跡は見られない。周壁は8cmから12cmほどしか残っておらず、上部は圓場整備によって削平されたものと思われる。周壁の立ち上がりは60°前後である。

床面からは5基のピットが検出された。P2・P3は、その位置から本遺構の主柱穴であろうと推測される。P1は貯蔵穴であると考えている。P4・P5は、深さが15cm程度で、柱穴とするには浅すぎると考えた。

カマドは東壁の南よりに作りつけられていた。カマドの規模は長さ1.6m、幅0.7mであり、軸方位はE 23° Sと、本遺構の主軸方位からわずかにずれている。カマドは煙道のほか、袖の一部と燃焼面が遺存していた。煙道は長さが1mほどである。遺存していた煙道の深さは6cm程度で、煙道の上部はかなり削平されている。袖は粘性の強いシルトを用いて構築されていた。カマドの天井や煙道も同じような素材を用いていたと思われるが、崩落後に撤去されたのか、本遺構内には残存していないかった。カマドの堆積土は5層に分けられる。1層・2層は流入土である。3層・5層はカマドの崩落土、4層は袖の構築土である。カマドの底面では燃焼面を確認した。深さ6cmほど、熱を受けて赤変していた。また、凝灰岩製の支脚が底面に立った状態で検出された。

その後、底面を確認するため、さらに15~20cm掘削したところ、カマドの燃焼面よりも中央より

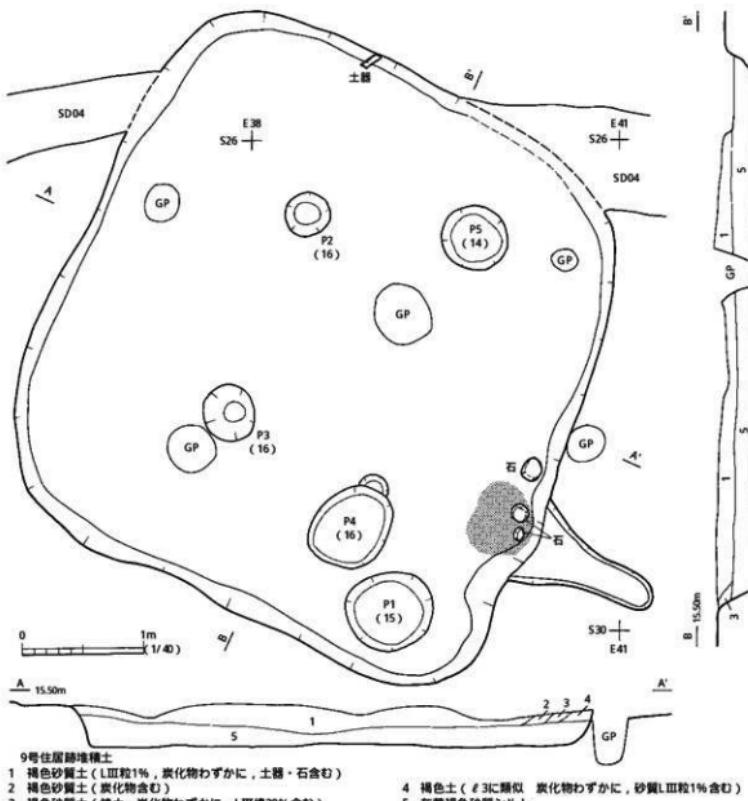


図25 9号住居跡

に別の燃焼面を検出した。このことから、本遺構には2時期あったものと考えられる。仮に、これまで記述してきたものを上層とし、古い段階のものを下層と呼ぶことにする。

下層の平面形は検出できなかったことから、おそらく上層の平面形と同一であろうと思われる。上層で用いた土層観察用の畦を利用し、堆積土の観察を行いつづ掘削した。堆積土は単層で、灰黄褐色の砂質シルトである。上層の堆積土よりも、やや暗い印象を受けた。床面はほぼ平坦で、貼り床などはなくⅢa層をそのまま利用していた。周壁は上層の検出面までの高さでいえば、20cm～30cmを測った。その立ち上がりは50°～65°である。下層堆積土の堆積状況は不明である。

下層の床面ではピット1基、燃焼面1基を検出した。P6は長径1.7m、短径1.3mの不整形を呈している。性格不明のピットであるが、本遺構下層の機能時には、何らかの形で閉口していたもの

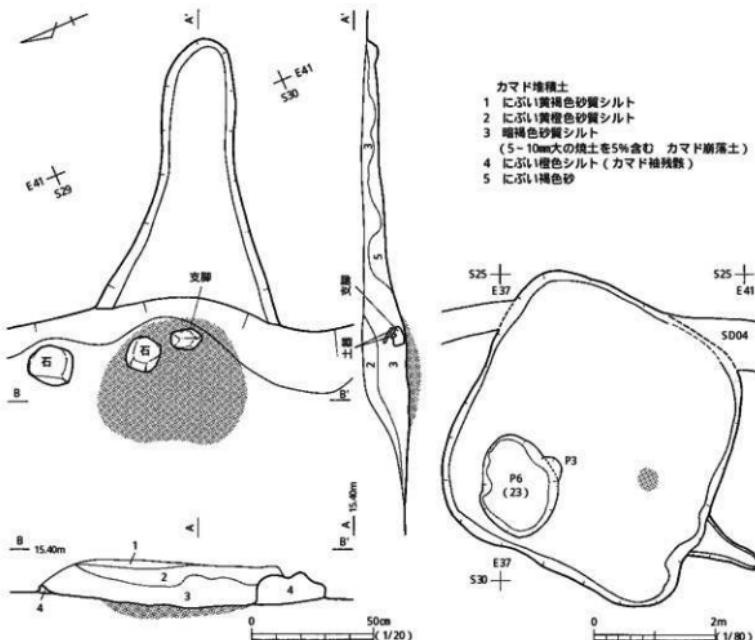


図26 9号住居跡カマド・下層床面

と考えられる。燃焼面は、上層カマドの燃焼面よりも1m遺構中心部よりの位置で検出された。付近からカマド構築材と思われる粘土の塊が出土していることからも、この燃焼面は下層段階のカマドの痕跡と考えられるが、その確証は得られなかった。もしこの燃焼面がカマドにともなうものだとすれば、かなり内側によっていることから、下層段階の平面形が上層のものより一回り小さかった可能性がある。しかし、平面形、土層断面のいずれからも、このことを裏付ける証拠は見いだせなかつた。

遺物 (図27, 写真図版60・72・74・75)

本遺構からは437点の土師器、8点の須恵器、2点の陶器、石製品、鉄製品が出土している。そのうち11点を図化し、報告する。P1やカマドから出土した6・8・9をのぞけば、いずれも堆積土中から出土している。1~4はロクロを使用した土師器の杯、5は土師器の高台付杯である。6は小型の筒形土器である。7は須恵器の瓶類、8はロクロを使用した土師器の甕である。9はカマドの支脚、10は砥石、11は鉄製の刀子である。

1~3は底部切り離し後、外面体部下端から底部全面にかけてヘラケズリで再調整を行っている。そのため、底部の切り離し技法は不明である。4は底部を欠いているため、切り離し技法は不明で

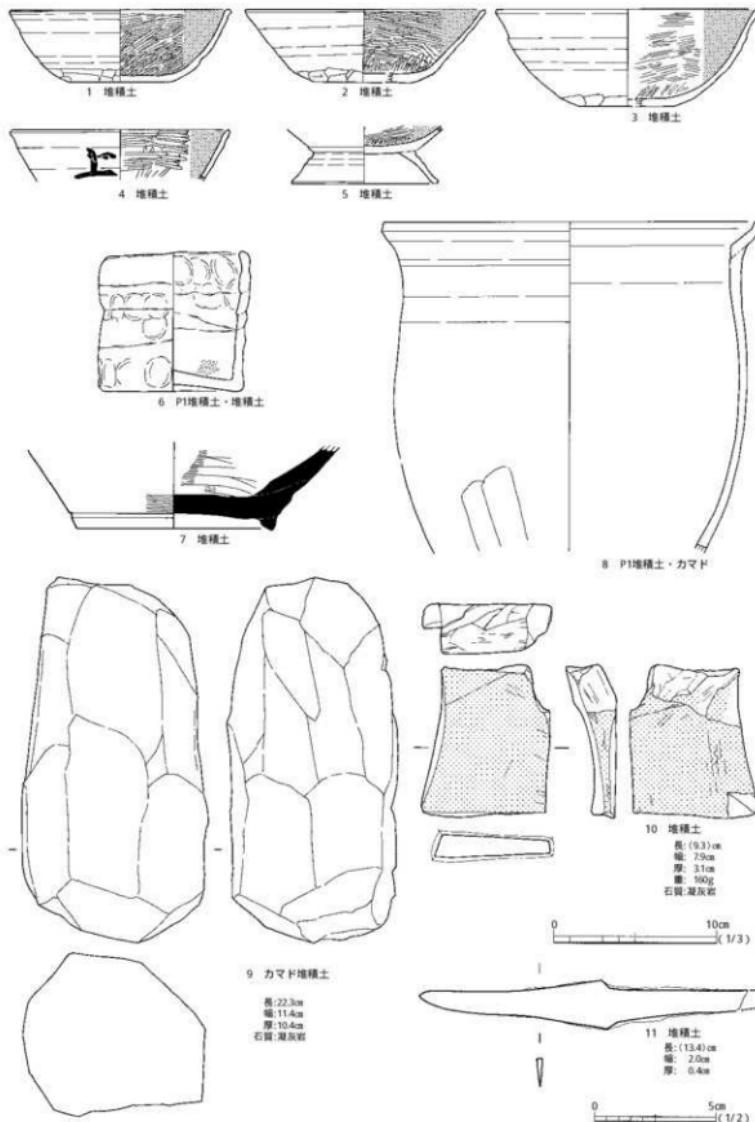


図27 9号住居跡出土遺物

ある。外面体部に正位で「上」の墨書がある。5は回転糸切りで切り離した後、外面底部周縁に刻みをつけ、高台を貼り付けている。高台は高く、華奢な作りである。

6は筒形土器であるが、口径8.2cm、器高8.5cmと、非常に小型である。内外面ともに輪積み痕を残すが、内面はナデられており、より平滑に仕上げられている。内面に黒色の物質が付着している。7は胴部が大きくゆがんでおり、焼き損じであると考えられる。そのため本資料が実用に耐えられたかどうか、疑問がある。8はロクロを使用して成形し、外面胴部下半をヘラケズリで整えている。胎土は粗く、砂を多く含んでいる。外面にすすが付着している。9は支脚である。凝灰岩をけずりだしている。細い方を上にしてカマド内に立った状態で検出された。

10はきめの細かい凝灰岩を用いた砥石で、4面を使用している。中砥である。

11は鉄製の刀子である。全長は13.4cm前後、刃長7.4cm、茎長5.6cmを測る。刀身は刃区から2.5cmのところで大きく屈曲しているが、もともと幅広であったと見られる。刀身の屈曲は使用・研ぎ直しによるものと考えられる。棟も湾曲しているが、これは本来の形状であろう。

ま と め

本遺構では主柱穴と考えられるピットが2基検出された。未検出ではあるが、おそらく4本の柱で上屋を支える構造だったのであろう。入り口施設は検出できなかった。本遺構の時期は上層段階と下層段階とで異なる可能性があるが、おおよそ9世紀後葉頃であろうと考えられる。（著：田）

12号竪穴住居跡 S 112

遺 構（図28、写真図版12）

本遺構は、調査区西部のC14グリッド、標高15.4m付近の平坦面に位置する。検出面はⅢa層上面であるが、11号竪穴遺構と同様上部の削平が著しい。遺構の西部から南部にかけて、37・38・39・47・51号土坑が重複し、いずれも本遺構より新しい。検出当時、本遺構の北東部に直径50cm程度の焼土面が存在し、ここがカマド部分であろうとの判断で発掘を行ったが、焼土の下部に掘込などの人工的加工や堆積土の変化が認められず、本遺構とは直接関係がないことが判明した。

平面形はほぼ正方形であるが、北東角がやや丸みを帯びている。規模は3.5m四方で、本遺跡の中では標準的な大きさである。住居跡の主軸方向はE25°Sである。堆積土は1層のみ認められ、炭化物や焼土を少し含む暗褐色土である。遺構上部の削平が著しいため、堆積状況の判断は出来なかった。

床面はほぼ水平である。床面積は9.4m²を測る。検出面からの深さは中央部で8cmを測る。遺構北東隅にこぶし大の石が塊状に集積している部分があったが、周辺を含めて被熱痕などは認められず、目的・用途は不明である。壁面はほぼ一様の角度で立ち上がるが、南辺に一部屈曲した部分がある。

床面施設として、南東隅にピット1基を検出した。長径70cmの梢円形で、床面からの深さは10cmを測る。堆積土には炭化物や焼土が多く含まれており、すぐ隣のカマドと機能的関わりがあったと

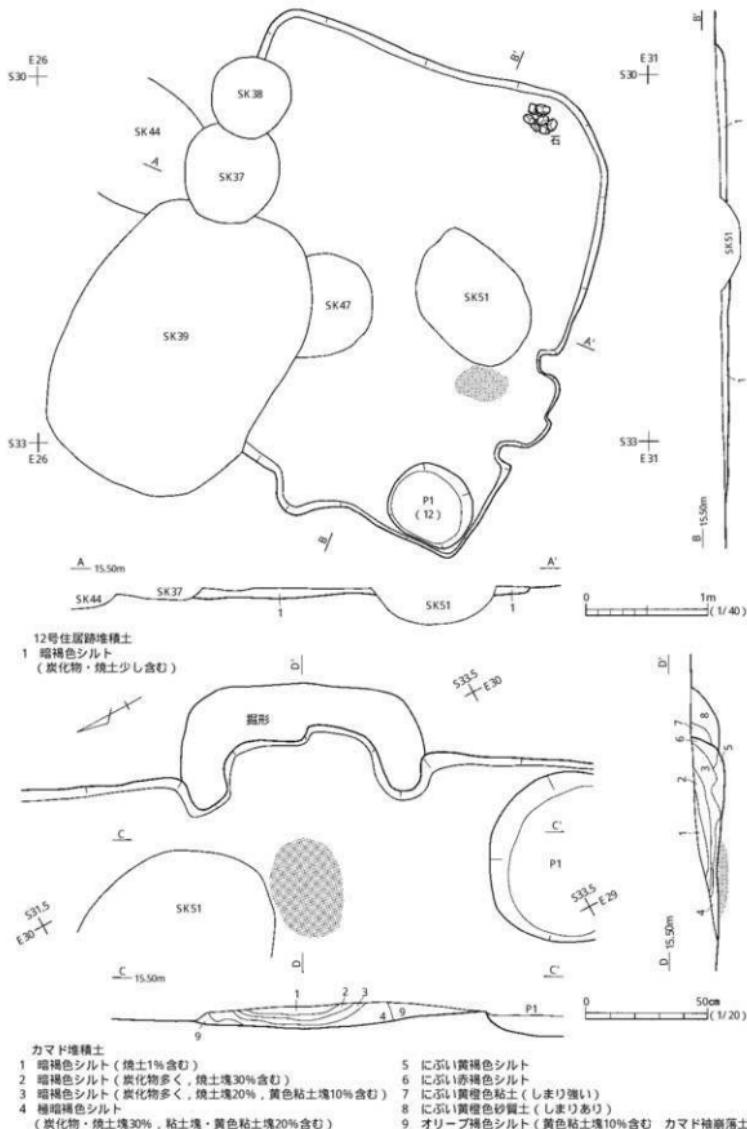


図28 12号住居跡

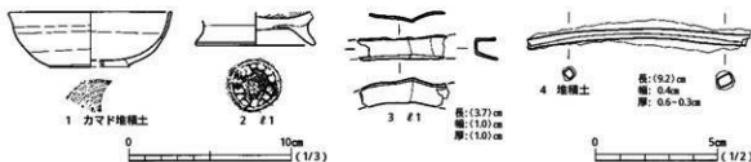


図29 12号住居跡出土遺物

考える。なお、本遺構に柱穴跡は認められなかった。

カマドは東壁南寄りに位置するが、手前側が大きく崩落しており、燃焼面と袖の一部が遺存している。煙道は削平により失われたと考える。燃焼面の平面形は不明だが、酸化面の位置から、規模は奥行70cm以上、焚口幅は50cm以上あったと考える。酸化面の厚さは最大で5cmである。袖部は遺存状態が悪いが、残存する部分で左側が基部からの長さ20cm、幅18cm、床面からの高さ20cm、右側が基部からの長さ15cm、幅16cm、床面からの高さ18cmを測る。袖部および東壁から張り出す部分は、一度大きめに掘った後、黄橙色の粘土でカマドを構築した痕跡が認められる。カマド内堆積土は9層に分かれ、カマド下部および中央部に焼土や炭化物が多く含まれている。また、袖の延長部分には、袖の構築材と思われる崩落土が左右に広がっており、崩落による自然堆積と考える。

遺物 (図29, 写真図版60・75)

本遺構からは、土師器87点、須恵器1点、鉄製品5点、銅製品1点が出土している。そのうち土師器2点と鉄製品・銅製品を図示した。

1はカマド堆積土から出土したロクロを使用した土師器杯である。復原口径10cmの小型の杯で、内面に黒色処理を施していない。底部は回転糸切りによって切り離し、再調整を行っていない。外外面にロクロナデの跡を残している。器壁は非常に薄く、精巧な作りである。2は1層から出土したロクロを使用した土師器の高台付杯である。底部を回転糸切りの後、刻みをつけて高台を貼り付けている。

3は1層から出土した銅製品である。断面がコの字型を呈し、何かの縁取り金具を考える。あるいは刀の装飾に用いる山形金具であろうか。4は住居内堆積土から出土した鉄製品である。断面が方形の棒状製品で、鉄釘と考える。断面の1辺は4mmから6mmである。9.2cmが遺存していた。

まとめ

本遺構は、東辺の南寄りにカマドを持つ住居跡であるが、遺存状態が悪く、また柱穴跡が認められなかったため不明な点が多い。しかし、周辺の他の住居跡と形態が類似することから、本遺構も同様の住居跡であったと考える。時期は、出土遺物から10世紀前葉頃と考える。

(菊田)

14号堅穴住居跡 S 114

遺構 (図30, 写真図版13)

本遺構は、調査区北部のD13グリッド、標高15.4m付近の平坦面に位置する。検出面はⅢa層上

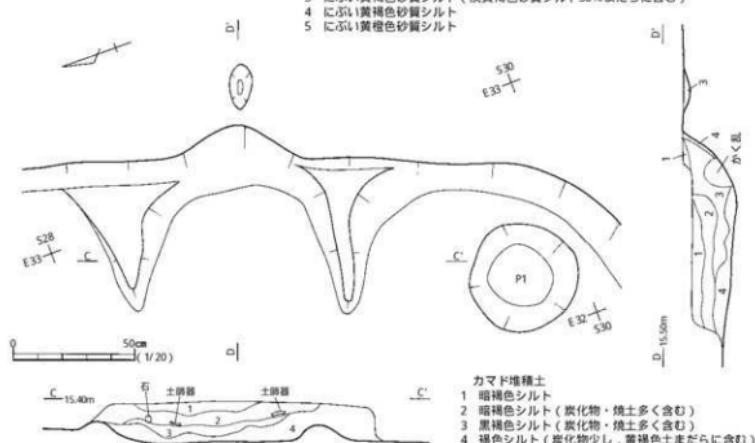
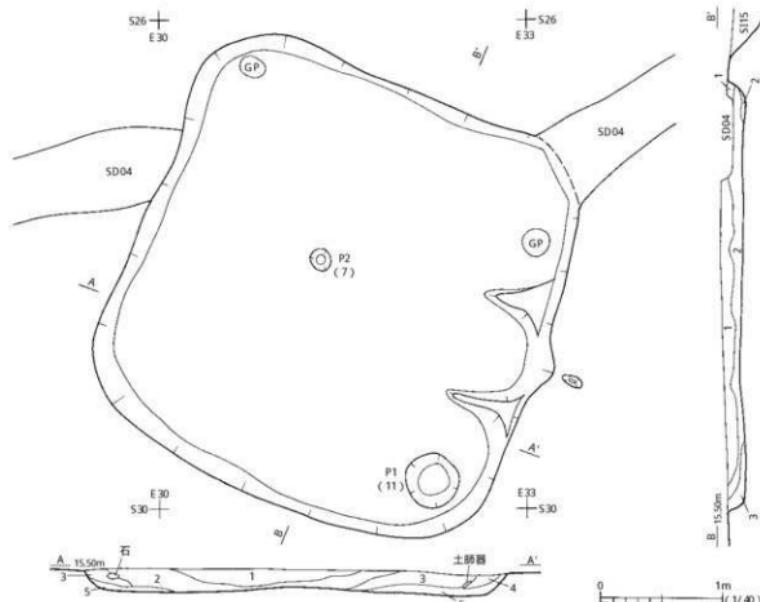


図30 14号住居跡

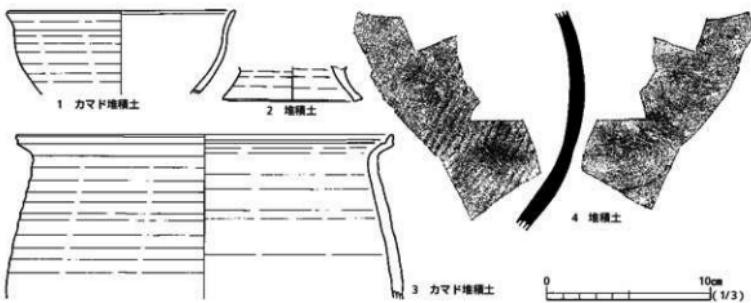


図31 14号住居跡出土遺物

面である。本遺構の北部を東西に4号溝跡が重複し、本遺構より新しい。また、北辺で15号住居跡に隣接する。

平面形は隅丸方形を示し、規模は南北3.7m、東西3.5m、住居跡の主軸方向はE 21° Sである。堆積土は5層に分かれ、レンズ状堆積を示す自然堆積である。床面はほぼ平坦で、検出面からの深さは中央部で15cmを測る。床面の施設としてピット4基を検出したが、うち2基は本遺構より新しいピットである。本遺構のピットには、遺物の出土や柱痕はなく、用途は不明である。周壁はおおむね緩やかに立ち上がる。床面積は9.8m²である。

カマドは東壁の中央部に位置し、袖部および煙道の一部が遺存していた。燃焼面はほぼ円形で、規模は直径70cmを測るが、酸化面はない。袖は崩落が著しいが、残存部で右が高さ7cm、幅20cm、左が高さ6cm、幅18cmを測る。煙道は底面のごく一部が住居外に遺存し、平面形は長梢円形、規模は長径18cm、短径9cmである。カマド内堆積土は2・3層に土器片や焼土、炭化物を多く含み、4層では袖の崩落土が多く混入する。いずれも崩落に伴う自然堆積である。

遺物(図31、写真図版60)

本遺構では、土師器71点、須恵器1点が出土し、そのうち4点を図示した。1・3はカマド堆積土から出土した。2・4は堆積土からの出土である。

1はロクロを使用した土師器杯である。内面は平滑に仕上げてあるが、ヘラミガキ・黒色処理とともにない。2はロクロを使用した土師器の高台付杯の高台部である。3はロクロを使用した土師器甕で、口縁部で外反し、端部で強く屈曲している。4は須恵器甕または瓶の胴部である。内面に同心円状の当て具痕、外面に平行タタキ目が見られる。外面上部に自然釉がかかっている。

まとめ

本遺構は、東辺にカマドを持つ住居跡である。上部がかなり削平されており、機能時はもっと床面が深かったと考える。時期は、出土遺物から10世紀前葉と考える。

(菊田)

15号堅穴住居跡 S 115

遺構 (図32、遺構図版14)

本遺構はD13グリッドに位置する。7号溝跡、3号特殊遺構と重複し、そのいずれよりも古いことが平面形の切り合いでより明らかであった。14号堅穴住居跡と近接しているが、重複関係はないため、新旧関係は不明である。ただし、20cm程度と非常に近接しているため、同時に機能していたとは考えられない。

III a層上面で遺構精査をしたところ、III a層よりも黒っぽい土が広がっていたため、堅穴住居跡

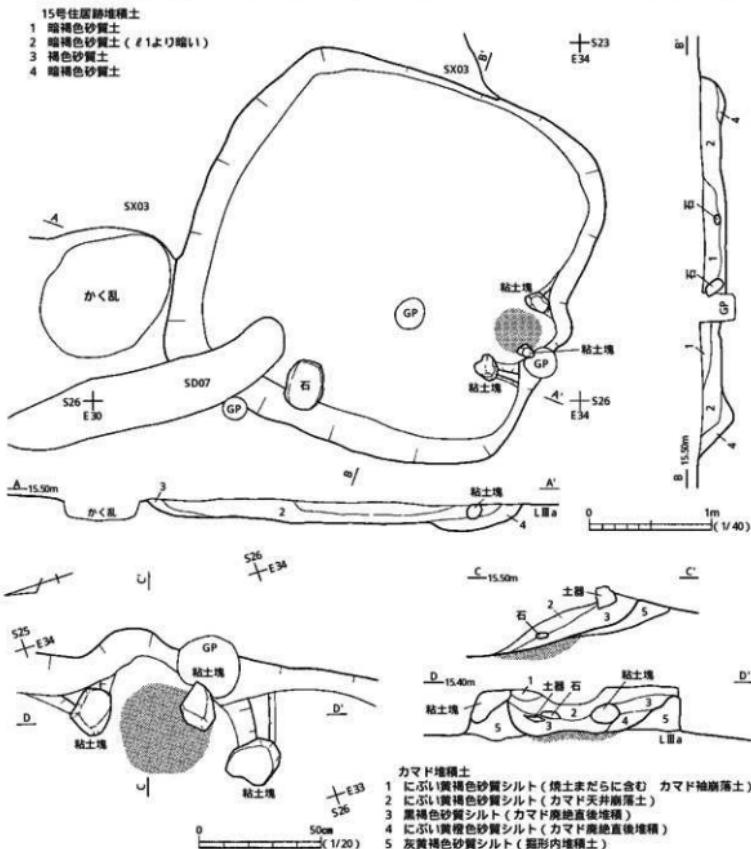


図32 15号住居跡

の存在が予想された。しかし3号特殊遺構が重複していたため、平面形が明らかでなかった。3号特殊遺構完掘後、隅丸方形の平面形を確認した。平面形の規模はおよそ西辺が2.9m、南辺が2.8m、東辺が2.7m、北辺が2.6mである。軸の長さで言えば、南北が3.2m、東西が3.2mである。東辺中央部やや南よりに、10cm程度の突出が見られ、これは煙道の痕跡であろうと考えている。主軸方位はE 20° Sである。

本遺構を掘削するにあたって、軸にあわせて十字に畦を設定し、土層を観察した。平面形ではっきりしなかった14号住居跡との新旧関係を確認するため、南北の畦は共通して設定した。土層観察の結果、本遺構は14号住居跡とは重複関係にないことが確認された。本遺構の堆積土は4つに分層した。1層、2層、4層は暗褐色砂質土を基調としている。堆積状況は不明であるが、人為的に埋め戻されたことを示す証拠は確認できなかった。3層は地山であるⅢa層の崩落したものであろう。本遺構の廃絶後、埋没するまでには間隙があったようである。床面に踏みしまりや貼り床は確認できなかった。床面積は6.7m²である。周壁は20cm程度が残っていたが、本遺構の周辺は圃場整備による削平がひどかったため、本来の高さは不明である。周壁の立ち上がりは30°前後で、非常に緩やかである。本遺構の床面ではピットは検出されなかった。したがって主柱穴の位置などは不明である。

カマドは本遺構東辺中央部やや南よりでつぶれた状態で検出された。遺存していたカマドの規模は長さが50cm、幅が70cmである。木カマドでは、煙道の他、袖、支脚、燃焼面が検出された。煙道は長さが10cm程度しか遺存していないが、これは削平を受けた結果であろう。本来どのくらいの規模があったのかは不明である。

袖は粘土と砂質シルトで構築されていた。粘土は長時間高温にさらされており、赤変していた。支脚は堆積土中で検出された。支脚は凝灰岩製で煙道方向に倒れた様子が観察された。燃焼面は直径37cmの不整円形を呈し、5cmの深さまで熱を受けていた。

カマドの堆積土は4層に分けられた。1層、2層は粘性の強いシルトで、カマドの構築土が崩落したものと見られる。3層、4層はカマド廃絶後、構築土が崩落する前に堆積したと考えられる。カマドが廃絶してから崩落するまでに間隙があったのであろう。本遺構の堆積状況と合わせ、本遺構が人為的に埋め戻されたものではないことを裏付けている。

遺物（図33、写真図版61・72）

本遺構からは土師器130点、須恵器14点が出土している。ここでは11点を図化した。2・9～11はカマドから出土しており、本遺構にともなう可能性が高い。ほかのものは堆積土からの出土である。1～8は土師器の杯、9～11は土師器の甕である。いずれもロクロを用いて製作されている。

1は内面を黒色処理しているものの、ミガキは見られず、ロクロナデの痕跡をそのまま残している。外面体部に正位で「上」の墨書がある。

2～5は底部を切り離した後、外面体部下端から底部全面にかけてヘラケズリで再調整している。そのため、底部の切り離し技法は不明である。4はミガキが見られず、ロクロナデの痕跡をそのま

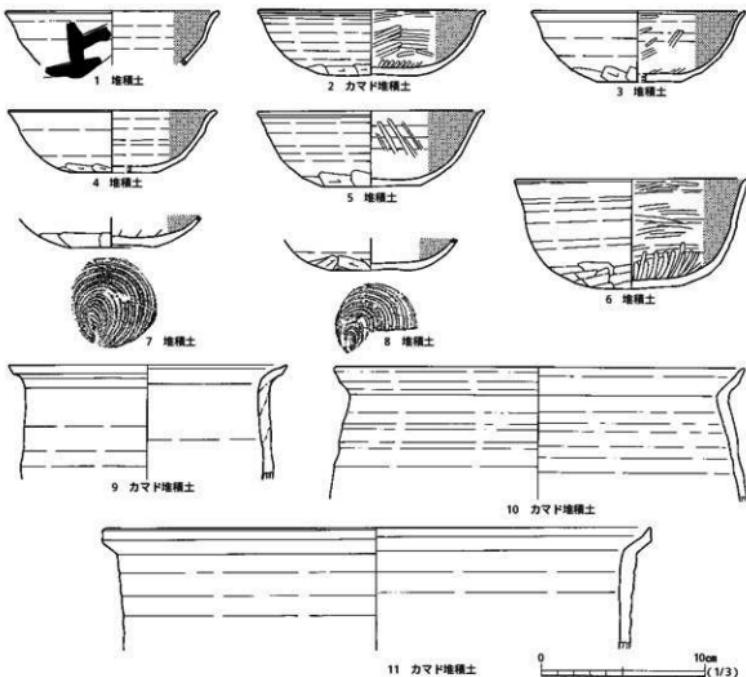


図33 15号住居跡出土遺物

ま残している。6は丸底の碗形を呈している。底部をヘラケズリで再調整しているため、切り離し技法は不明である。切り離した後、底部を押し下げ、さらにヘラケズリによって丸底にしている。外面は部分的に黒色を呈し、光沢を持っている。本資料は器面が剥落した箇所があり、また断面が赤変していることから、2次的に熱を受けたものである。外面は本来黒色処理を施されていたと見られる。内面口縁部は磨減が著しい。7・8は底部のみの資料である。底部を回転糸切りで切り離し、外面体部下端をヘラケズリで再調整している。

9は、復原口径が17.2cmと、小振りの甕である。胎土には砂・小礫を多く含んでいる。口縁部で外反し、端部が内側に屈曲している。内面の調整は、口縁端部から4.5cmくらいのところまで、特に丁寧に仕上げられている。10は復原口径が25.2cmと、中型の甕である。胎土には砂、2mm~4mm大の礫が含まれているが、特に内面は平滑に仕上げられている。内面には炭化物が付着している。11は復原口径33.6cmの大型の甕である。胴部は直立しており、口縁部が外反し、端部で再び直立する。

ま と め

本遺構は隅丸方形の平面形を持つ、やや小振りな住居跡である。廃絶後、自然に埋没したものと考えられる。遺物から、9世紀後葉頃に機能していたと考えられる遺構である。 (櫻 田)

16号堅穴住居跡 S 116

遺 構 (図34、写真図版15)

本遺構は、調査区中央西部のD15グリッド、標高15.2m付近の平坦面に位置する。検出面はⅢa層上面である。南部で17号住居跡と重複し、本遺構が新しい。また、3号掘立柱建物跡P 3と重複しており、本遺構の方が新しいと考えられる。そのほか9基のピットが重複し、いずれも本遺構よりも新しい。遺構西部は、試掘調査におけるトレーナー設定で破壊されている。

平面形は隅丸のやや歪んだ長方形と推定される。規模は長辺が4.2m、短辺が3.6mを測る。主軸方向はN32°Eである。堆積土は4層に分かれる。1・2層は暗褐色土で炭化物・焼土を含んでいる。3・4層は砂質の強い褐色土で、流入土と考えられる。全体として自然堆積と考えるが、比較的短時間に埋没したものであろう。床面施設はなく、床面はほぼ平坦であり、深さは中央部で検出面から27cmを測る。周壁はやや急な角度で立ち上がる。

カマドは北辺の東隅に位置し、燃焼部と袖の一部が遺存していた。燃焼部は床面より僅かに窪んだ卵形を呈し、長辺90cm、短辺50cmを測る。支脚は検出されなかった。袖は左右に遺存し、右がやや短い。規模は右が長さ35cm、幅12cm、高さ10cm、左が長さ55cm、幅23cm、高さ12cmを測る。袖と北壁の境界付近にそれぞれ石が据えられており、カマド構築材の一部として使われたと考える。煙道は検出されなかったが、遺構上部の削平と共に失われたと考える。カマド内堆積土は8層に分かれ、1層は焼土、炭化物を含む暗褐色土である。2層は焼土を多く含む褐色土、3層は赤褐色の焼土、4層は焼土を含む褐色の砂質土である。いずれも自然崩落による堆積と考える。5層は黄褐色土で、袖構築土である。6～8層は掘形内の埋土である。

遺 物 (図35、写真図版61)

本遺構からは土師器226点、須恵器1点が出土している。そのうち11点を図示した。いずれも堆積土からの出土であるが、3・10は床面上から出土している。

1～9はロクロを使用した土師器杯である。そのうち6～9は墨書き器である。10・11はロクロを使用した土師器の甕である。

1～3は回転糸切りで切り離した後、外面体部下端のみをヘラケズリで再調整している。4は底部切り離しの後、外面体部下端から底部全面にかけてヘラケズリで再調整している。底部にはかろうじて回転糸切りの痕跡が認められる。器壁は非常に薄く、精巧な作りである。5は底部を回転糸切りで切り離し、再調整を施していない。内外面ともにロクロナデ調整を施し、黒色処理を施していない。

6・8は外面体部に墨痕があるが、破片資料のため、文字の判読はできなかった。7は外面体部

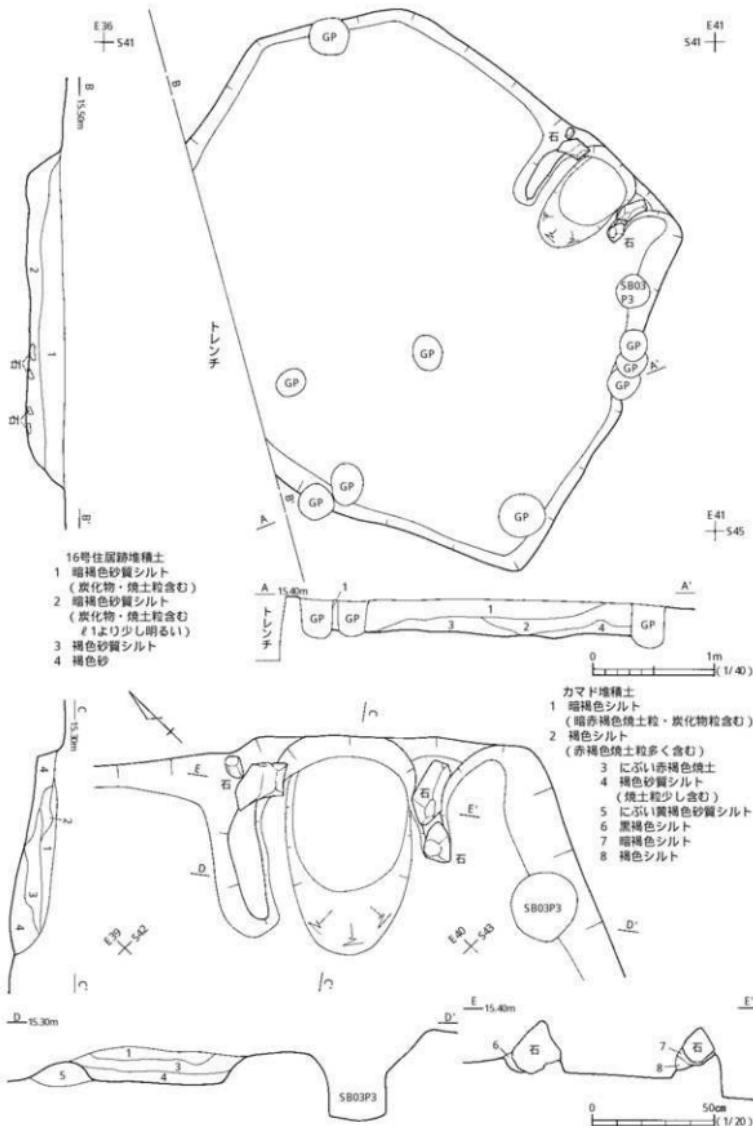


図34 16号住居跡

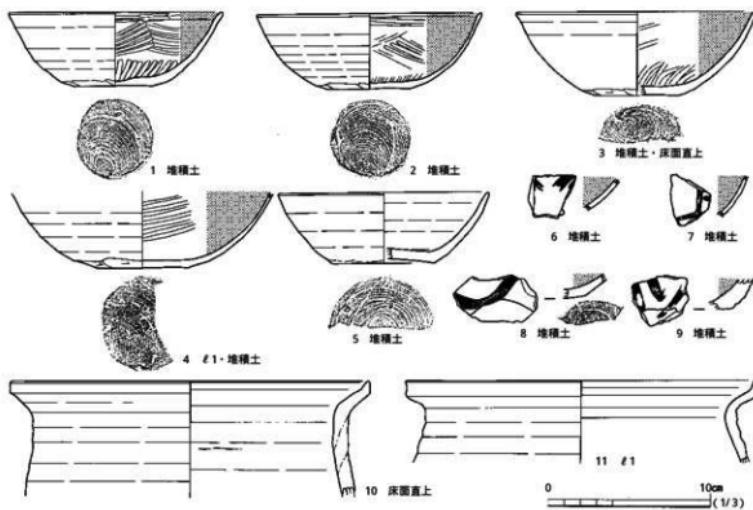


図35 16号住居跡出土遺物

に正位で「上」と書かれている可能性が高い。9は外面体部から底部にかけて墨痕があり、破片資料のため断定はできないが、残画から正位で「少川」と書かれていると思われる。10・11は内外面にロクロナデの痕跡を残している。口縁部が外反し、端部が屈曲して直立する。

まとめ

本遺構は、隅丸のやや歪んだ長方形を呈する堅穴住居跡である。時期は、出土遺物や重複状況から、10世紀前葉と考える。
(菊田)

17号堅穴住居跡 S I 17

遺構(図36、写真図版15)

本遺構は、調査区中央西部のD15グリッド、標高15.2m付近の平坦面に位置する。北半分は16号住居跡と重複し、本遺構が古い。また西半分は、試掘調査におけるトレンチ設定で破壊されている。

遺存度が小さいため、平面形ははっきりしないが、隅丸長方形であったと考える。規模は、南北セクション部分で3.4m、東西は最大で1.3mを測る。堆積土は8層に分かれ、下層の8層と上層の2層の間には、焼土や炭化物が混じった薄い堆積層があり、ここが床面であった可能性もある。床面はほぼ平坦で、検出面からの深さは45cmを測る。床面施設はないが、北辺に拳大の石が集積している地点があり、本遺跡の他の住居跡のうち、同じように集石部を持つ住居跡との関連が考えられる。周壁は東南隅のみ遺存する。東辺は緩やかに立ち上がり、比高差は20cmである。

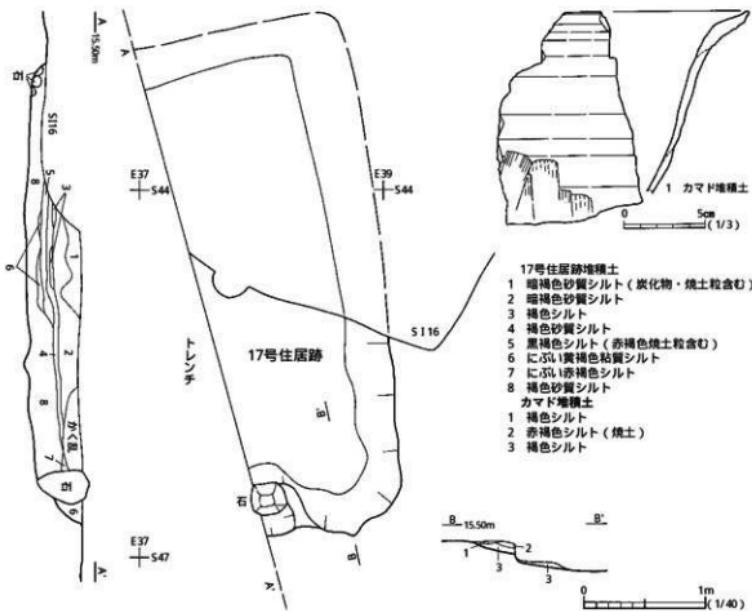


図36 17号住居跡・出土遺物

カマドは南東隅にあるが、遺存度が大変低い。住居跡の隅を掘込んで燃焼面を形成するが、袖は見あたらず、支柱や煙道などの施設も検出されなかった。遺存する燃焼部の規模は、焚口幅65cm、奥行50cmを測る。カマド内堆積土は、遺存部で3層を成し、褐色土と赤褐色土の互層である。

遺物 (図36)

本遺構からは土師器10点が出土している。16号住居跡に切られ、遺存率の低い遺構のため、カマドから出土した1点のみを図化した。本資料はロクロを用いた土師器の鉢で、内外面にロクロナデの痕跡を残している。外面胴部に縦方向にナデられた跡がある。胎土は比較的緻密である。

まとめ

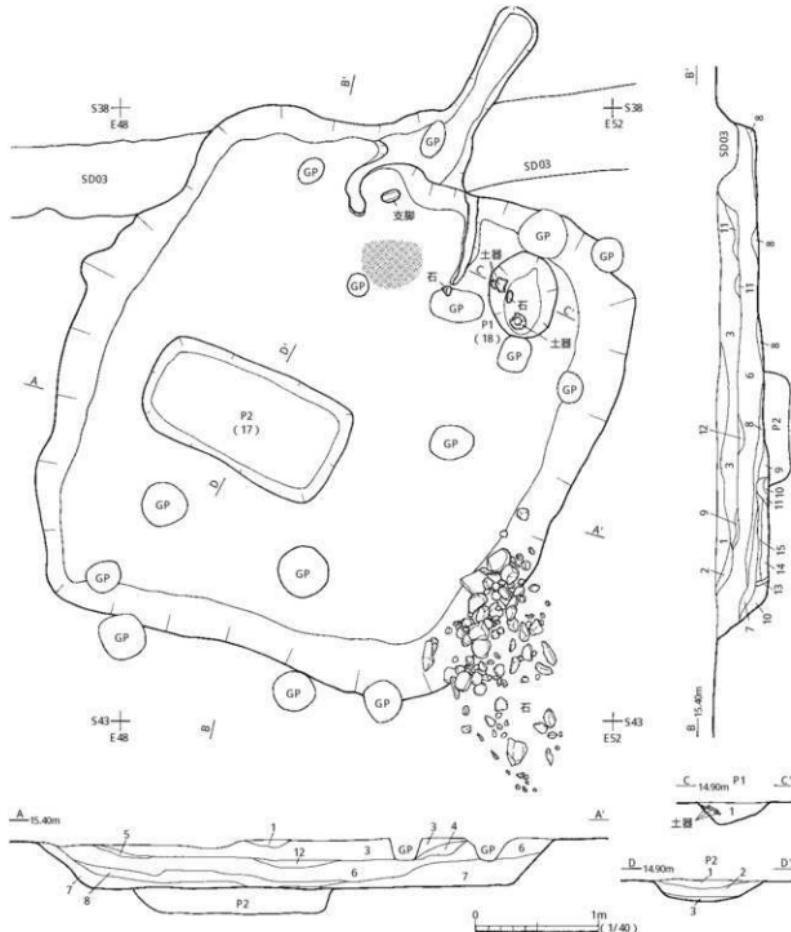
本遺構は、堅穴住居跡であるが、遺存度が低いため機能時の形態に不明な点が多い。時期は重複状況から、9世紀後葉以前と考える。

(菊田)

18号堅穴住居跡 S 118

遺構 (図37・38、写真図版16)

本遺構はE14・15、F14・15グリッドに位置する。3号溝跡と重複している。平面形の切り合ひ関係により、3号溝跡よりも古いことが明らかである。



18号住居跡堆積土

- 1 黒褐色砂質シルトにぶい黄褐色色砂(3mm大の炭化物粒1%含む)
 - 2 にぶい黄褐色砂質シルト
 - 3 黒褐色砂質シルト 5~10mm大の炭化物3%・燒土1%含む
 - 4 にぶい黄褐色色砂(2~5mm大の炭化物多く含む)
 - 5 灰黄褐色砂質シルト
 - 6 にぶい黄褐色砂質シルト(5~10mm大の炭化物10%含む)
 - 7 にぶい黄褐色砂質シルト
 - 8 灰黄褐色砂質シルト H 5mm大の炭化物5%・燒土1%含む
 - 9 明黄褐色砂質シルト(5%まだらに含む)
 - 10 にぶい黄褐色色砂(地山上土に類似)
 - 11 灰黄褐色砂質シルト
 - 12 にぶい黄褐色砂質シルト(黒褐色砂質シルト2%まだらに含む)
 - 13 黒褐色シルト 5~15mm大の粘土塊・5mm大の炭化物5%含む)
 - 14 にぶい黄褐色色砂(5~10mm大の粘土塊5%含む)
 - 15 にぶい黄褐色色砂(5~10mm大の粘土塊5%・5mm大の炭化物3%含む)
- P1堆積土
1 にぶい黄褐色砂質シルト
P2堆積土
1 にぶい黄褐色砂質シルト
2 黒色色砂(炭化物多く、P1を30%含む)
3 にぶい黄褐色色砂(P2を3%まだらに含む)

図37 18号住居跡

本遺構は標高約15.3mのⅢa層上面で検出されたが、平面形をつかむためにさらに10cm程度掘削した。本遺構の平面形は隅丸方形で、北辺中央部に煙道がついている。規模は、西辺が4.2m、南辺が3.2m、東辺が3.7m、北辺が3.4mを測っており、西辺が長い。煙道は長さが1.6mである。主軸方位はN23°Eである。南東の角に礫が集中しているが、断ち割ってみたところ掘形は認められず、集中している範囲も特定できなかったため、Ⅳ層が部分的に露頭したものだと判断した。本遺構の構築時にⅣ層に突き当たったため、西辺に比べて東辺が短いという平面形の制約を受けたものと考えられる。

堆積土は15層に分けられた。いずれも砂質シルトを基調としている。細かな焼土粒や炭化粒を含んでいるものの、全体として自然に埋没したものと思われる。周壁は40cm程度遺存しており、その立ち上がりは45°前後である。崩落しやすい砂質土であり、自然に埋没したのであれば、埋没するまでの間に崩落することも予想できる。本来の立ち上がりはもっと急斜度であったであろう。前述したように、本来検出されるべき高さから10cm程度掘り下げた時点で検出されたため、周壁の高さは調査開始時点ではさらに10cm程度が残存していたことになる。床面はおおよそ平坦であったが、貼り床や踏みしまりは検出されなかった。床面積は12.3m²を測る。

本遺構ではピットが2基検出された。P1は北東隅、カマドの脇にある。深さは20cm程度であるが、貯蔵穴であった可能性がある。底面および堆積土中より、土師器の杯が出土している。堆積土が本遺構の堆積土6層あるいは7層と共通していることから、本遺構埋没時には開口していたものと考えられる。P2は長さ190cm、幅90cmの隅丸長方形を呈している。本遺構の住居としての機能から、本遺構機能時には閉口していたはずである。本遺構堆積土とP2堆積土からそれぞれ出土した灰釉陶器が同一個体であること、本遺構堆積土7層に類似する土が入り込んでいたことから、本遺構が廃絶したときには、わずかでもくほんだ状態であったのであろう。

カマドは北辺ほぼ中央部に作りつけられていた。カマドの規模は長さ2.6m、幅1.2mである。軸方位は本遺構とはほぼ同一で、N27°Eを指している。カマドには煙道、袖、支脚が残存していた。煙道は長さが1.6mであるが、すでに崩落した状態であった。煙道内部の堆積土には熱を受けた形跡はなかった。袖は粘性の強いシルトを用いて構築していた。カマドはすでに崩落しており、袖も床面から20cmほどが残っていたにすぎない。支脚は凝灰岩製で、立ったままの状態で検出された。カマドの底面、支脚から30cmほど住居中央よりの位置で燃焼面が確認できた。燃焼面は長径50cm、短径40cmの不整形で、底面下6cmまで熱を受けて赤変していた。カマドの堆積土は16層に分けられるが、そのうち13~16はカマドの袖の構築土である。2~8はカマドの崩落土である。9、11、12はカマド崩落前の流入土、10はカマド崩落後の流入土である。カマド崩落前に土が流入していることから、本遺構廃絶後、カマド崩落までには間があったと考えられる。また、カマドの堆積土は自然に崩落した様子を見せている。

遺物(図39、写真図版62・71)

本遺構からは土師器441点、須恵器4点、陶磁器4点、石器1点が出土している。ここでは14点

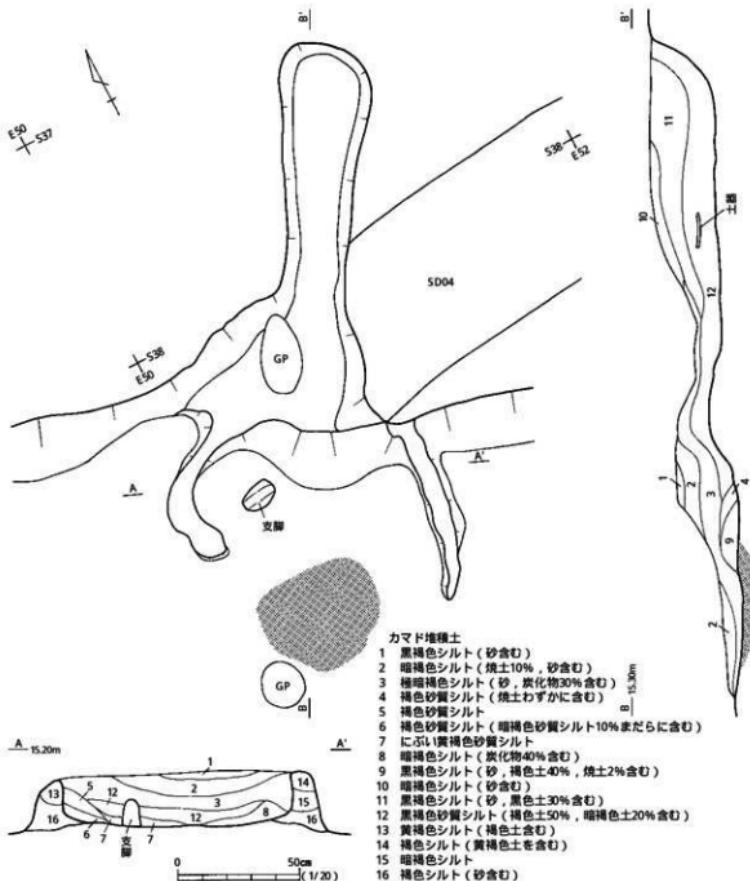


図38 18号住居跡カマド

を図化した。2・5・6・8・10はカマド脇のP1から出土している。7・12はカマドから出土しており、これらの遺物は本遺構廃絶時に遺棄されたものと考えられる。そのほかのものは堆積土からの出土である。1～8は土師器の杯、9～11は土師器の甌、12は瓶である。いずれもロクロを使用している。13は須恵器の長頸瓶、14は須恵器の広口壺である。15は灰釉陶器の段皿で、同一個体と考えられるものが本遺構堆積土およびP2堆積土から出土している。

1は回転糸切りの後、外面体部下端から底部周縁にかけてヘラケズリで再調整している。外面体部から底部にかけて、2カ所に墨書が見られる。いずれも正位で書かれており、「少川」および

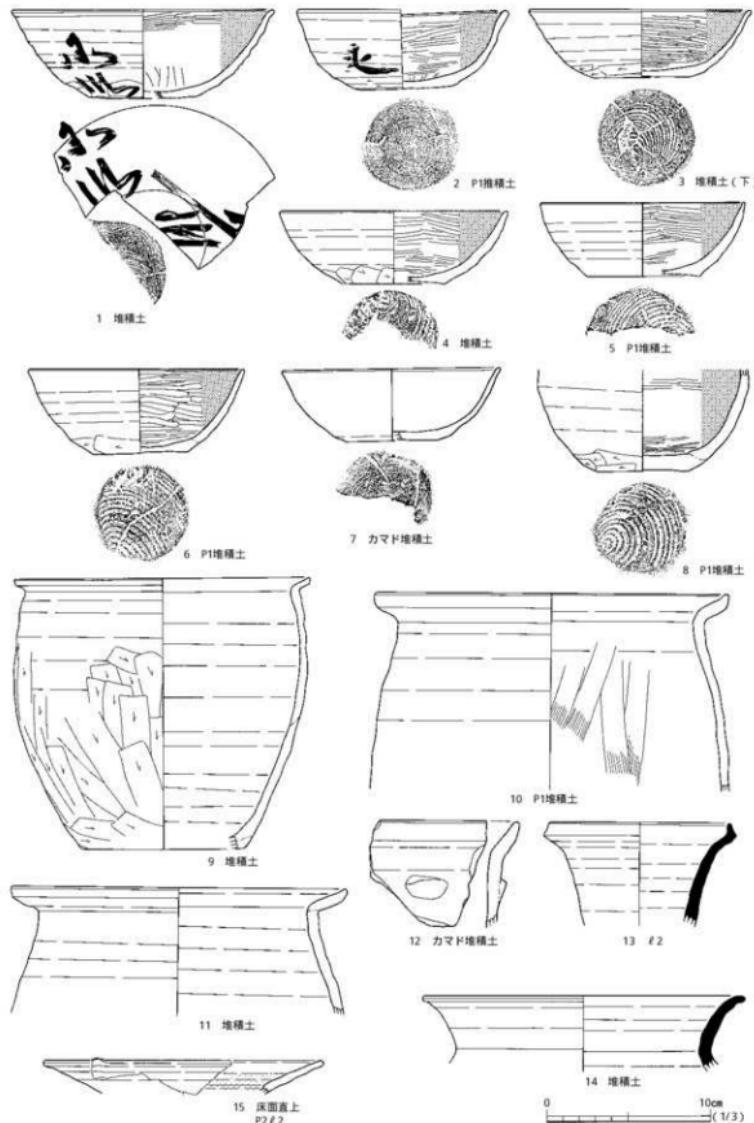


図39 18号居住跡出土遺物

「小川」と判読できる。

2は回転糸切りの後、外面体部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリによって再調整している。外面体部に墨書が見られるが、磨滅が激しいため、判読できない。あるいは正面で「走」かと思われる。

3・4・6は回転糸切りの後、外面体部下端から底部周縁にかけて、ヘラケズリによって再調整している。内面に横方向のヘラミガキ、黒色処理を施している。3は2次的に熱を受けており、外側が赤変している。5は回転糸切りの後、外面体部下端をナデている。7は回転糸切りによって切り離されている。本資料は磨滅が著しく、調整技法は不明である。

8は緩い回転糸切りの後、外面体部下端をヘラケズリで再調整している。口縁部を欠いており、本来の器高は不明である。外面はロクロナデ、内面はわずかにヘラミガキの痕跡が見られる。内外面とも暗灰色を呈しているが、本来は黒色処理が施されていた可能性がある。

9は胴部下半に縦方向のヘラケズリを加えている。胎土は粗く、砂を多く含んでいる。よく熱を受けており、外面胴部下半は赤変し、部分的に剥落している。10は外面胴部に土の焼き付きが見られる。胎土は粗く、砂、小礫を含んでいる。11は頸部の屈曲が強く、直角に近い角度で開いている。胎土には砂が多く含まれている。内外面に炭化物が付着しており、煮炊きに使われたことがわかる。12は制作にロクロを使用していると見られる。頸部は緩やかに屈曲している。口縁端部から4cm程度のところに突起がついており、双耳瓶と推定される。

13は須恵器の長頸瓶である。口縁部で内側に屈曲している。内面には自然釉がかかっている。14は広口壺である。頸部から口縁端部に向かって大きく外反している。

15は灰釉陶器の輪花段皿である。内面に赤色顔料が付着しており、赤色顔料専用の硯として転用していたものであろう。薄手であり、口縁部の外反も弱い。

ま と め

本遺構は1辺が3.2mから4.2mのゆがんだ隅丸方形を呈する住居跡である。上屋を支える柱穴は検出されなかった。本遺構の廃絶時にはカマドを破壊していないと思われ、堆積状況も自然なものと考えられる。出土した遺物から、本遺構は9世紀後葉に機能していたと考えられる。（轟・田）

19号竪穴住居跡 S 119

遺構（図40、写真図版17）

本住居跡は、調査区中央部より南東のG19グリッドに位置し、Ⅲa層上面で検出された。本住居跡と重複する遺構はないが、平成10年に福島県文化センターが実施した試掘調査の際に掘ったトレーナーが本住居跡の西側を破壊している。したがって、本住居跡の遺存状態は良好であるものの、北西壁と南西壁の一部とコーナー部は確認できなかった。本住居跡の北側には西から東へと流れていった2号溝跡がある。

平面形は北東から南西を長軸とする長方形で、規模は長軸約4.8m、短軸約4.5m、検出面から底

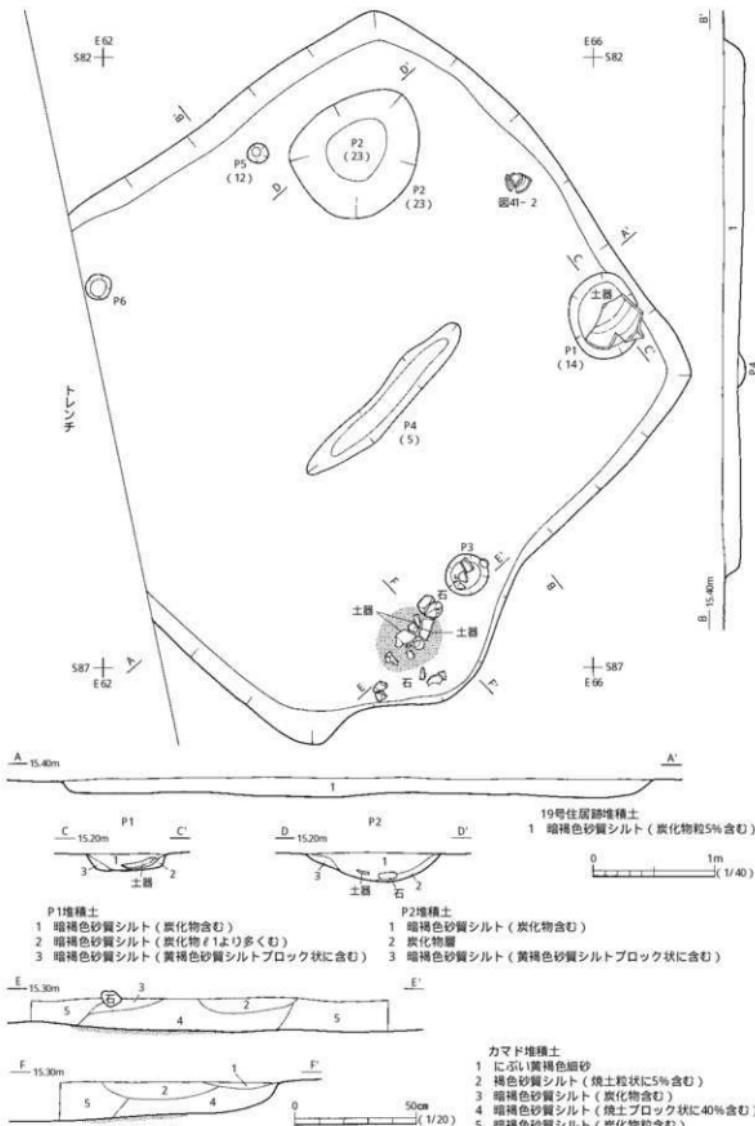


図40 19号住居跡

面までの深さは15cmを測る。長軸方向はおよそN50°Eである。底面はほぼ平坦であり、周壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は1層で、炭化物粒を少量含む暗褐色土が床面を覆って堆積しており、自然堆積である。

本住居跡の施設としては、南東壁南よりにカマド1基、床面でピット6基を検出している。

カマドは、住居内に張り出して作られたであろう袖部は残存しておらず、屋外へ延びる煙道や煙出しピットも検出していない。カマドの燃焼部と想定されるところは、土器が集中して出土しており、1cm程の厚さの焼土や炭化物も認められるものの、凹みはなく平坦である。したがって、カマドは故意に破壊されたと判断している。カマドの遺存部分は、南東壁よりも約45cm外に張り出している。カマド堆積土は5層に分類したが、1～3層は住居内堆積土より上層のⅢa層が流入したもの、4層は流入の際に多量の焼土を含んだものと考えている。4・5層は住居内堆積土に相当する。

ピットは6基検出しているが、カマド袖の左脇に作られた貯蔵穴と思われるP3以外には、その具体的な用途は不明である。P3は直径約35cmの円形であり、土器片も出土している。P1は70cm×60cmの規模の楕円形で、北西壁の東コーナー近くに位置する。床面からの深さは15cm程度であるが、ピット堆積土内からは須恵器甕の大きな破片が出土している。P2は北のコーナーにある110cm×95cmのピットである。P4は住居のはば中央に位置する、170cm×30cmの規模の深いピットである。P5とP6は、直径がそれぞれ20cmと30cm程の円形のピットであり、柱穴の可能性も考えられる。

遺物(図41、写真図版63)

本遺構からは、土師器694点、須恵器8点が出土している。特にカマド内堆積土と北東部に集中しているが、住居内の広い範囲から出土している。出土遺物のうち、8点を図化した。1・5は土師器の杯、2～4は高台付杯、6は土師器の甕である。いずれもロクロを使用している。7は須恵器の広口壺、8は須恵器の甕である。

1は黒色処理を施さず、橙色を呈する皿である。内面はヘラミガキ、外面はヘラケズリで調整が施されている。底面は回転糸切りの跡が認められ、再調整を施していない。2～4は、いずれも内面に黒色処理が施されている。2は、橙色の器面の外面口縁部が黒色を呈する、碗のような深みのある器形の杯である。外面にもミガキが見られ、黒色処理が施されていた可能性がある。3はカマド燃焼部から出土している。にぶい橙色を呈し、杯部は皿状で器高は低く、体部は丸みをもちつつ外に開いている。高台の脚部は杯部の割にがっしりとした造りで、底面には回転糸切り痕が残る。4は黄橙色の小ぶりの杯である。体部は直線的に開いており、底面はヘラ削りののちナデ調整が行われている。5は西部の床面から出土した、黒褐色を呈するミニチュア土器である。内外面にヘラミガキが施され、底面には回転糸切りの跡が残る、丁寧な作りである。

6は胴部が丸い膨らみをもって立ち上がる器形の甕で、短い口縁部は「く」の字に外反している。7は、大きく屈折した頸部が口縁部にかけて直線的に立ち上がり、口縁部でさらに外に開く器形の広口壺である。口縁部の高さから考えても、胴部の長い大型の壺であったと思われる。2次的に熱

第2節 墓穴住居跡

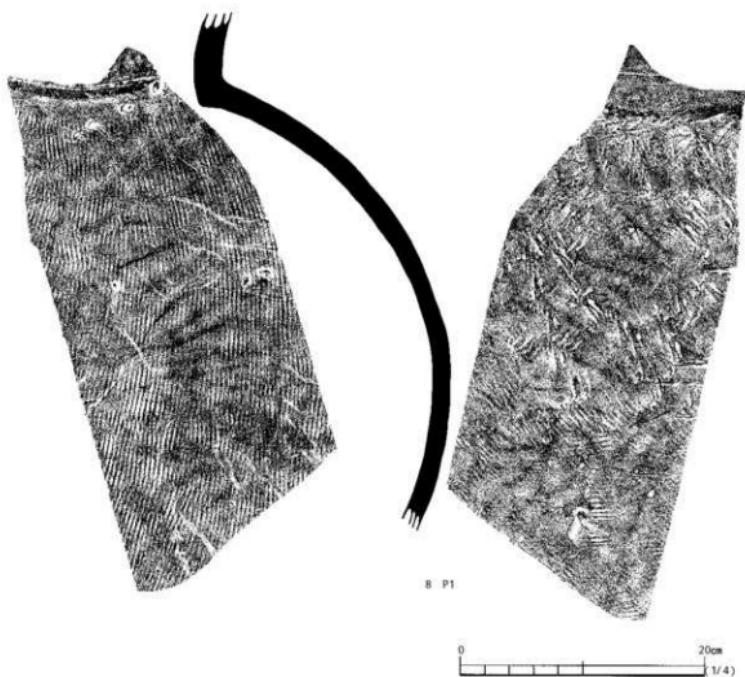
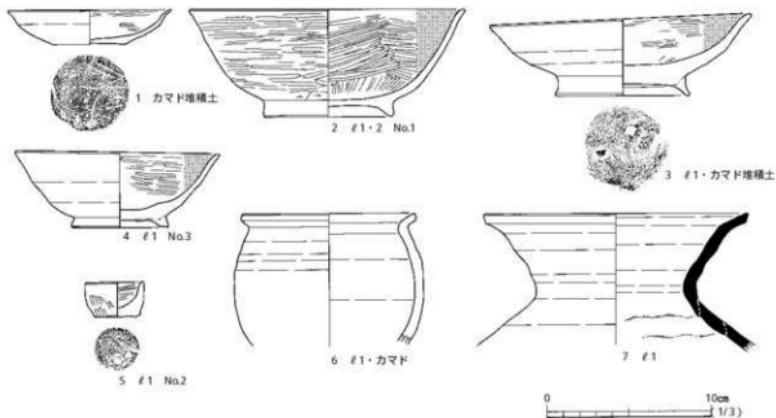


図41 19号住居跡出土遺物

を受けており、器面は赤褐色を呈している。内面に粘土紐の積み上げ痕を残し、非常に粗雑な作りである。8は須恵器甕の胴部から頸部にかけての破片であり、P1から出土したものである。頸部は大きく外反しており、口縁部は遺存しているよりもさらに長く延びていたのかもしれない。外面には平行タタキ目、内面にはナデ調整と当て具の跡が認められる。

ま と め

本住居跡は、試掘調査により北西・南西壁の一部と西コーナーが失われているが、整った方形の堅穴住居跡である。南東壁の南よりに設置されたカマドは、袖部や煙道が検出できなかったため、意図的に破壊されたと判断した。その一方、カマド周辺からの出土した土器片は多く、燃焼部と思われる箇所に置かれた土器片もあり、破壊の際に祭祀的な意味あいもあったかもしれない。本住居跡の所属時期は、出土遺物から10世紀中葉頃と考えている。(佐藤)

20号堅穴住居跡 S 120

遺構 (図42・43、写真図版18)

本遺構は、調査区中央部のF～G18グリッド、標高15.3m付近の平坦面に位置する。検出面はⅢa層上面である。南側で25号住居跡と重複し、本遺構の方が古い。

平面形はやや歪んだ隅丸方形を示し、規模は南北3.8m、東西3.7m、主軸方位はE15°Sである。堆積土は4層に分かれ、3・4層は地山の崩落砂を多く含む暗褐色土で、堆積状況から自然堆積と考える。2層は炭化物や焼土をかなり多く含む薄い層であり、自然堆積においてこのような層が生じる可能性は少ないと考えられる。本遺構はある程度自然堆積した後、その隙間で焚火や炭化物の投げ込みなど、なんらかの人為的行為を行った結果、2層が生成されたと考える。1層は自然堆積による暗褐色土である。

床面はほぼ水平で、検出面からの深さは中央部で35cmである。本遺構の北壁中央部に、拳大から人頭大の礫が塊状に集まる部分があるが、礫に被熱痕は認められなかった。本遺跡の他の住居跡にも、これと同様の集石部をもつ遺構が存在し、同一集落内で儀式などの行為を行っていた可能性が考えられる。

床面における施設として、南壁沿いにピット2基を検出した。柱痕は認められず、用途は不明である。形状はいずれも長径約30cmの楕円形で、床面からの深さは約25cmを示す。この他に貯蔵穴などの施設は存在しなかった。周壁は各辺とも床面から急斜度で立ち上がる。床面積は10.9m²である。

カマドは東壁のやや南寄りに位置し、全体として遺存状況は良く、燃焼部と袖部、支脚2本、および煙道の一部が遺存していた。燃焼面の平面形は楕円形で、規模は長径が105cm、短径が80cmを測る。中央やや南よりの支脚に挟まれた部分に楕円形の酸化面があり、規模は長径30cm、短径25cmを測る。袖部は左右とも褐色の砂質土を固めてあり、遺存部の規模は右が高さ18cm、幅15cm、長さ43cm、左は高さ11cm、幅28cm、長さ82cmを測る。左袖は掘形を伴い、袖構築土の下に、黄褐色粘土

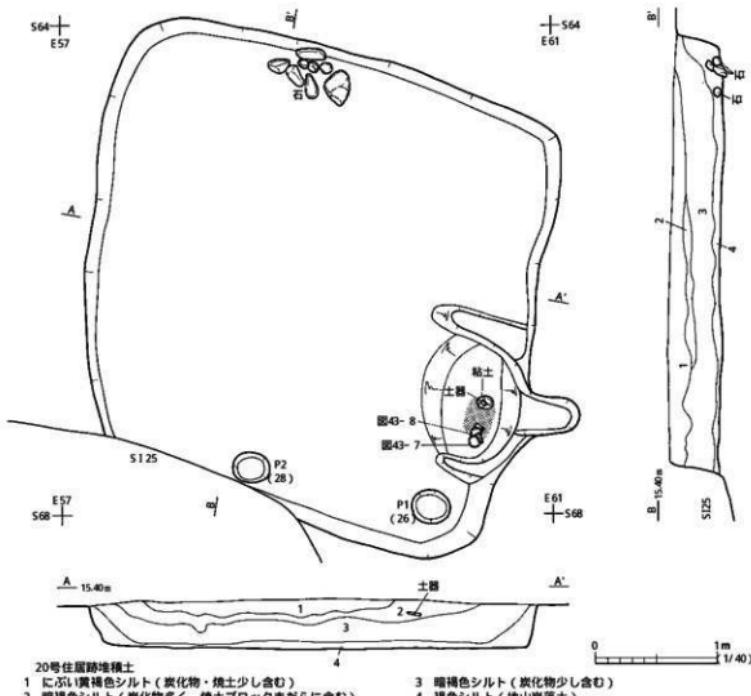


図42 20号住居跡

が土台として存在する。

支脚は2本確認された。左の支脚は、黄褐色粘土を円筒状に固めたもので、直径9cm、高さ18cmを測る。本来は筒形土器を伴っていたと考えられるが、剥落によるものか遺存していなかった。右の支脚は、筒形土器内部に黄褐色粘土を詰めたものを2つ重ねたものである。高さ18cmを測る。

煙道は周壁からほぼ直角に伸び、遺存部の長さ49cm、幅28cmを測る。底部は燃焼部から緩やかに煙道部へと続き、煙道部終端で急斜度に立ち上がる。

掘形は左袖下のみで検出した。袖下の床面を5cm掘り下げ、そこに土台として黄褐色粘土を詰め、その上に袖を構築したと考えられる。

カマド内堆積土は5層に分かれる。1層は黄褐色土にやや暗い黄褐色土が混入し、カマド天井の崩落土と考える。3層は暗赤褐色土に黄褐色土を含み、煙道天井の崩落土と考える。4層は暗赤褐色土に炭化物・焼土を多く含み、カマド内の崩落土と考える。5層は暗黄褐色の砂質土で、カマドが崩落する前に外部から流入したものと考える。カマドは人為的に潰したような痕跡はなく、自然

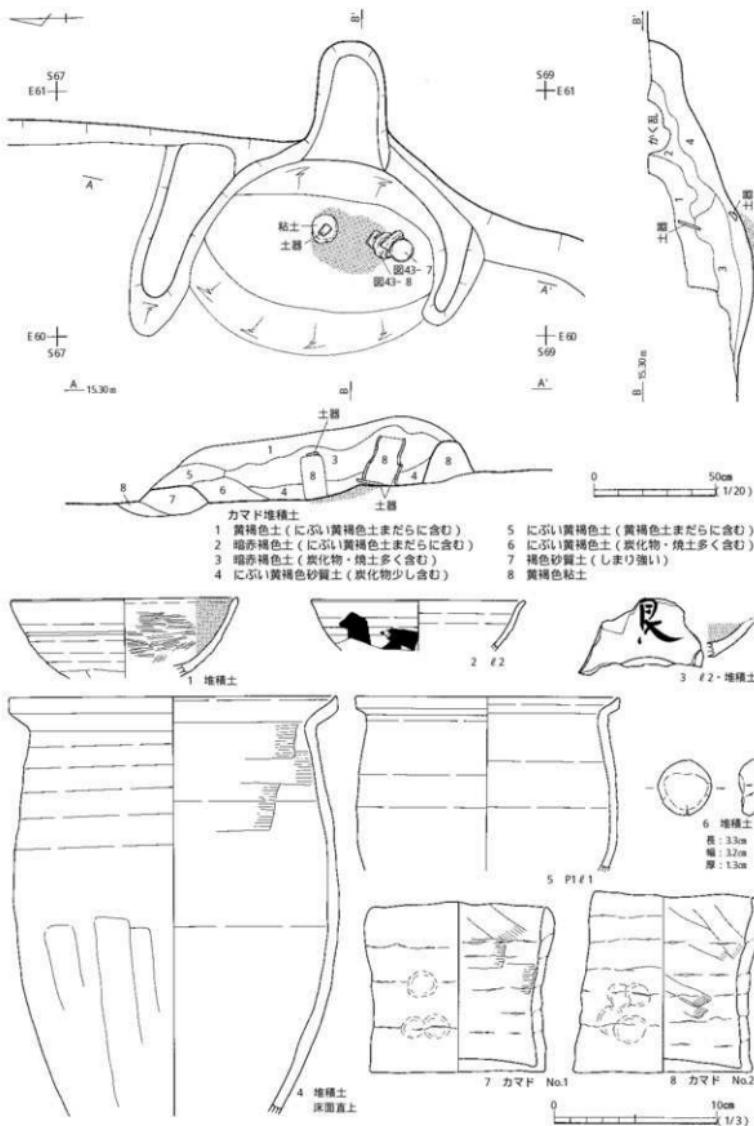


図43 20号住居跡カマド・出土遺物

に崩落したと考える。

遺 物 (図43, 写真図版63)

本遺構からは、土師器429点、須恵器3点、焼成粘土塊1点が出土している。そのうち9点を図示した。4は床面直上から、5はP1から出土している。7・8はカマドに設置されていたものである。ほかのものは堆積土から出土した。1~3はロクロを使用した土師器杯である。4・5はロクロを使用した土師器の甕、6は土製品、7・8は筒形土器である。

1は外表面下端をヘラケズリで再調整している。外表面に段があり、この段から口縁部にかけて、特に丁寧に仕上げている。2は、内外面ともにロクロナデの痕跡を残し、黒色処理も施していない。破片資料のため断定はできないが、外表面に正位で「少川」の墨書が見られる。3は外表面に正位で「良」の墨書がある。

4は長胴形の甕である。ロクロを用いて制作している。外表面下半はヘラケズリを加えている。内面はロクロナデののち、さらにナデで平滑に仕上げている。口縁部が外反し、端部で短く直立している。5はロクロを用いた甕で、口縁部が外反し、口縁端部が直立している。胎土は粗いが、内面は丁寧に仕上げられており平滑である。外面にすすが付着している。4・5はカマド前面付近の床面から散在するように出土した。

6は長さ3.3cm、厚さ1.3cmのボタン状の焼成粘土塊である。胎土はやや粗く、砂・小礫、白色針状物質を含んでいる。周縁部にひび割れが見られることから、球形の粘土を指頭で押しつぶしたものと考えられる。なにに用いられたものか、不明である。

7・8はほぼ完形の筒形土器である。8の上に7が乗せられ、カマドの燃焼部に立った状態で検出された。いずれも外表面はユビオサエのみ、内面はナデによって平滑に仕上げられている。検出時にはカマドの袖と同質の粘土が中に詰められており、その出土位置からみても、カマドの支脚として用いられていたものと判断できる。

ま と め

本遺構は、東辺にカマドを持つ壺穴住居跡である。カマドの支脚に筒形土器を利用した、珍しい形態である。時期は、出土遺物から10世紀前葉と考えるが、集石部を持つ他の住居跡と同時期であると考えられる。

(菊田)

21号壺穴住居跡 S 121

遺 構 (図44, 写真図版19)

本遺構はE17・18、F17・18グリッドに位置する。他の遺構との重複はない。本遺構は、遺構精査中にⅢa層上面で検出された。平面形は隅丸長方形で、北西辺が4m、南西辺が3m、南東辺が4.2m、北東辺が3mである。北東辺の中央やや東よりに煙道と見られる長さ60cmの突出部がつく。主軸方位はN41°Eを指している。軸の長さは、北東-南西軸が4.5m、北西-南東軸が3.5mである。

本遺構の調査では、軸にあわせて十字に畦を設定し、土層を観察しつつ掘削した。堆積土は11層

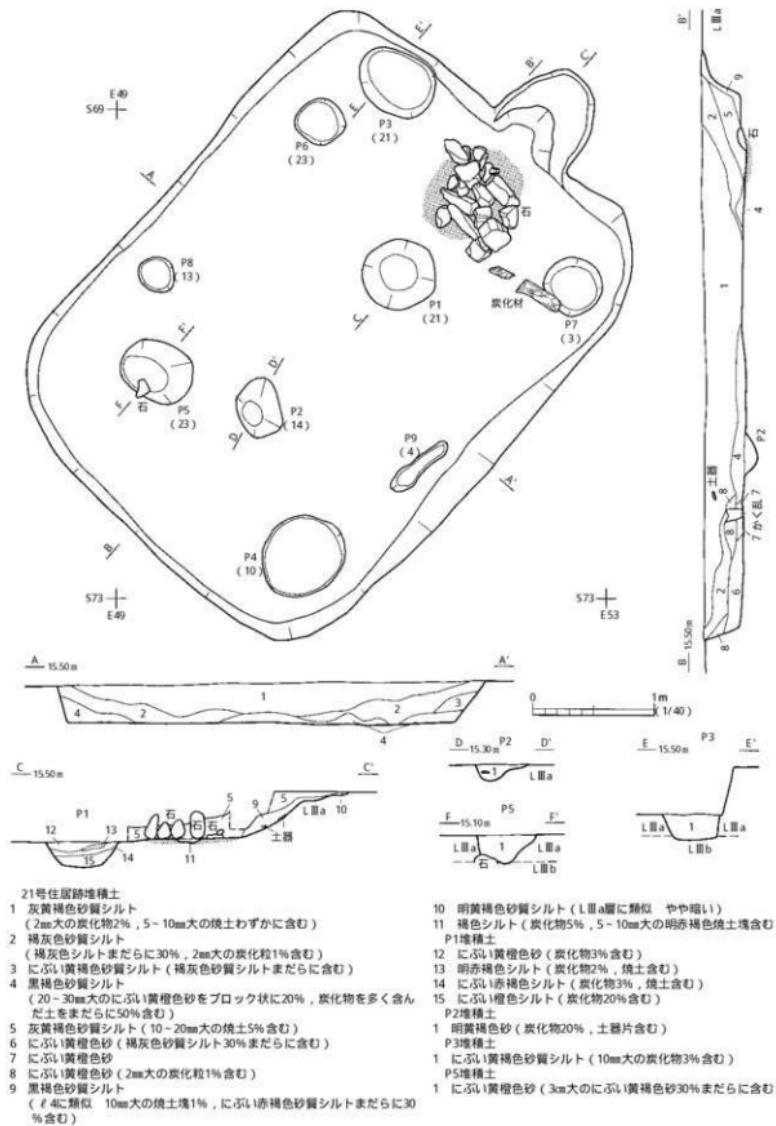


図44 21号住居跡

に分けられるが、そのうち9～11層はカマドの堆積土であると考えている。1～8層は、Ⅲa層類似の土や焼土をブロックの状態で多く含んでいることから、自然に流入したものではないと判断した。自然流入土が見られないことから、本遺構の堆積状況は遺構廃絶時に人為的に埋め戻された状況を示していると考えられる。周壁は35cm前後遺存していたが、圃場整備時に削平を受けていると考えられ、その本来の高さをることはできなかった。周壁の立ち上がりは60°～70°と急斜度である。本遺構が廃絶時に埋め戻されていると考えられることから、本遺構機能時の立ち上がりもこの程度であったと考える。

床面には貼り床は確認されなかった。Ⅲa層を掘削し、そのまま床面として利用していたのであろう。床面積は13.6m²である。床面では川原石と粘土塊、炭化材が検出された。川原石については後述する。粘土塊は2カ所で検出され、熱を受けて赤変していたことから、カマドの構築土であったと見られる。また、炭化材は本遺構東隅付近、川原石の脇で検出された。この材が本遺構の柱材であるかどうか、確認はできなかった。ただし、検出された炭化材が30cm程度のもの2点のみであったため、本遺構が火災にあったとは考えがたい。

床面ではピットが9基検出されたが、いずれにも柱痕は検出されなかった。P1はカマドの前面に位置し、堆積土に炭化物や焼土を多く含んでいることから、カマド内部の灰や燃え残りの炭化物を掘き出した穴と考えられる。P3、P5、P6は本遺構の柱穴である可能性もあるが、どれが主柱穴であるのかは判別できなかった。

本遺構のカマドはほとんど原形をとどめていなかった。煙道は長さが60cm程度遺存していたが、削平を受けていると考えられ、本来どのくらいの長さがあったのかは不明である。本遺構北東辺付近に花崗岩の川原石が集められていた。熱を受けて風化したものもあり、カマドの構築材であったものと考える。遺構内床面では粘土の塊も検出されており、本遺構のカマドは石と粘土を用いて構築されていたものと考えられる。10層はカマドの廃絶時の堆積土である。川原石の周りに堆積している土が人為的に埋め戻されたものであることから、カマドは本遺構廃絶時に破壊されたものであろう。なお、川原石の下に燃焼面を確認した。燃焼面は長径84cm、短径66cmの梢円形を呈し、深さ6cmまで熱を受けて赤変していた。カマドが機能していた時期には、川原石を組んだカマドがこの燃焼面を開いていたのであろう。

遺物 (図45、写真図版64・73・74)

本遺構からは、土師器430点、須恵器5点、鉄製品2点、石器1点が出土している。ここでは9点を図化した。そのうち1はP2から、ほかのものは堆積土から出土している。1～6はロクロ使用の杯であり、底部の遺存している3～5には高台がつく。7・8は甕で、ロクロを使用していない。9は鉄製品である。

1は復原口径が17.4cmと大きく、碗状の器形を呈する。2は内外面ともロクロナデ調整で、黒色処理をしていない。体部下半で屈曲し、口縁端部まで緩やかに外反している。底部は遺存していないものの、杯部の形状が4と類似しているため、本資料にも高台がついていた可能性がある。3

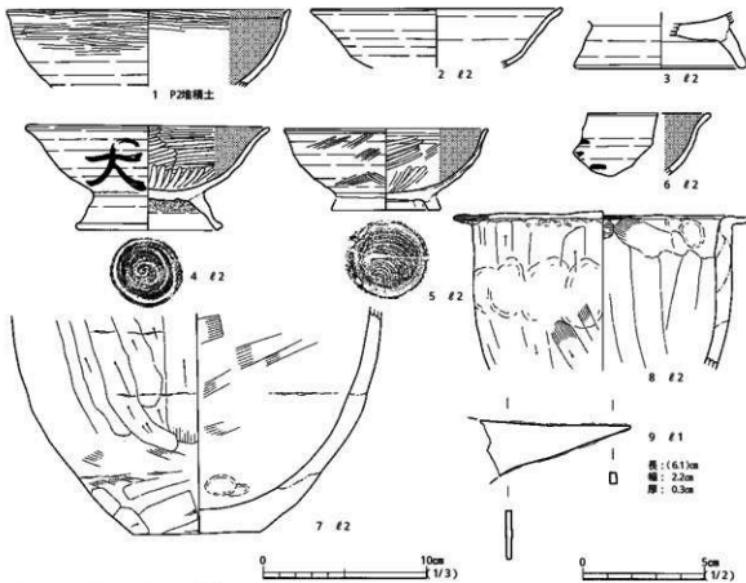


図45 21号住居跡出土遺物

は高台部から底部のみの資料である。底部を切り離した後、高台を貼り付けている。高台は高く力強い。復原された底径が10.6cmと、かなり大型である。杯部内面にはミガキの痕跡が見られ、黒色処理も施されていたものと思われる。4は高台付杯である。高台は後付けされている。ナデられていて底部切り離し技法は不明であるが、回転ヘラ切りの可能性がある。高台部は高く、中程で屈曲している。外面体部に正面で「大」の墨書がある。また、外面底部に墨痕があることから、高台付杯を倒置して硯に転用していたと見られる。5は回転糸切りの後、高台を貼り付けている。外面にミガキが見られ、内面は黒色処理を施している。6は外面体部に墨痕があるが、破片資料のため文字の判読はできなかった。

7は外面体部下半から底部全面にかけてヘラケズリを施し、内面はヘラナデ、底部にユビオサエが見られる。8はヘラケズリで整形した後、口縁部を折り返している。内面は縦方向のナデ調整を施す。口縁部はヨコナデによって、丁寧に作っている。

9は鉄製品である。三角形をした部分が遺存しており、その断面は長方形を呈している。用途は不明である。

まとめ

本遺構は4m×3mと、主軸方向に長い竪穴住居跡である。主柱穴は確認できなかったが、数本の柱を立てていたはずである。本遺構ではカマドを石で作っていたことが明らかになった。本遺跡

のように砂地で、良好な粘土の入手困難な土地では、カマドの芯材として入手しやすい石を用いることもあつたのであろう。本遺跡では、同様に集められた川原石がほかの住居内でも検出されていることから、カマド廃棄の様子をうかがうことができる。本遺構は、出土遺物から10世紀前葉以降に廃絶されたものと考える。

(轟 田)

22号堅穴住居跡 S I 22

遺構(図46、写真図版20)

本住居跡は、調査区中央部東端のD17・E17グリッドに位置し、Ⅲa層上面で検出された。重複する遺構ではなく、本遺跡の南東に32号土坑が存在する。遺存状態は良好である。

平面形は北東から南西方向に長い隅丸長方形をなし、規模は長軸約3.6m、短軸約2.9m、検出面から底面までの深さは51cmを測る。主軸方向はおよそE45°Sである。底面は砂質土で平坦であり、

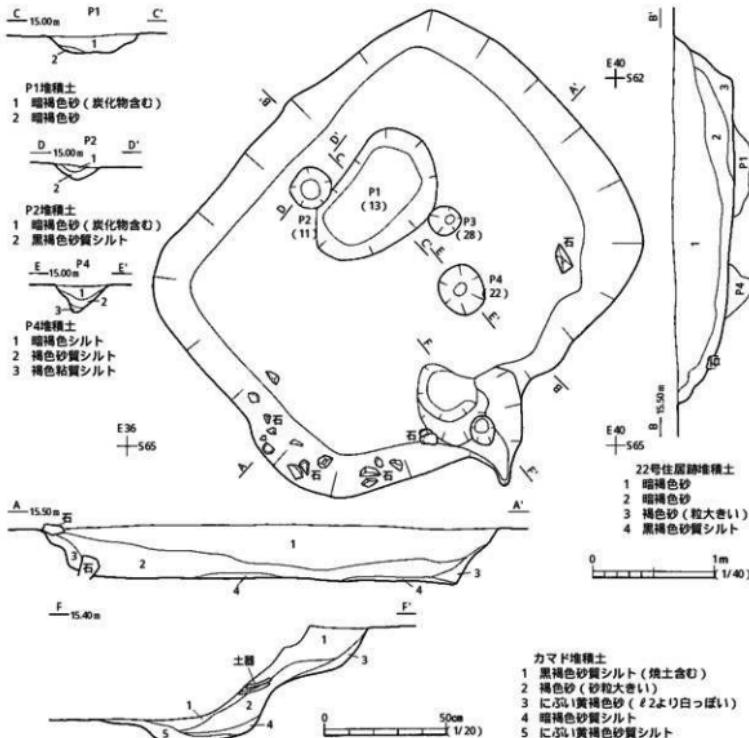


図46 22号住居跡

床面積は6.7m²を測る。周壁は、北東壁・北西壁は急斜度に、南東壁・南西壁は緩やかに、いずれも階段状に立ち上がる。

堆積土は4層に分類される。厚い層を成す1層と2層は暗褐色土で、3層は流入した褐色土の堆積層である。4層は床面中央部と壁際に残る黒褐色土で、貼床の残存した層である可能性が考えられる。堆積状況から自然堆積と判断している。

住居内施設としては、カマド1基、床面から4基のピットを検出している。

南東壁中央に設けられたカマドは、目立った被熱部が認められず、袖部も残存していない。カマド廃棄の際に取り去られたものと思われる。カマドの左側、南東壁の東角よりには、投げ込まれたと思われる焼土を検出しており、カマドの焼土の一部であると判断している。燃焼部の規模は奥行き約60cm、幅約50cmである。燃焼部底面は約35cm×約30cmの楕円形で、深さ10cm程の凹みとなっている。検出できた煙道は、短く先細りの形状で、その軸線は「く」の字状に南方向に折れている。本遺跡の中で、南南東よりに設けられたカマドから南南東方向へと煙道が延びていく住居跡は、本住居跡のほか、本住居跡の南に位置する23号住居跡だけである。奥壁頂部から35cm程の長さで、検出面からの深さは最大で約20cmを測る。

カマド堆積土は5層に分類される。1層はⅡ層に類似する黒褐色土で焼土を含む。2層は褐色土、3層はにぶい黄褐色土、4層は暗褐色土である。燃焼部に堆積する5層はにぶい黄褐色土である。

床面で検出された4基のピットのうち、P 1～3は中央部北西壁によりまとまっている。P 1は長軸約120cm、短軸約75cmの楕円形を呈し、深さは13cmを測る。P 2は直径30cm、P 3は直径25cmの円形を呈し、深さはそれぞれ11cm、28cmを測る。P 4は中央やや南東より、P 3から25cm程の位置にあり、40cm×35cmの規模の楕円形で、深さは23cmを測る。これらのピットは、その位置や形状から柱穴ではなく、堆積土からもその用途を特定することはできない。

遺物（図47、写真図版64・65）

本遺構からは土師器286点、須恵器16点が出土している。東角近くに遺物集中箇所が認められたが、他にも床面や壁際の周辺と、住居跡内の広い範囲から出土している。そのうちの13点を図化した。7・12はカマドの堆積土から、11はP 2堆積土から出土している。ほかのものは堆積土からの出土であるが、遺存率が高く、本遺構廃絶時に廃棄されたものである可能性がある。1～6は土師器の杯、8・9は高台付杯、10は小型の短頸壺である。いずれもロクロを使用している。11～13は土師器の甕である。

1・2・4～6は回転糸切りの後、再調整を施していない。3は回転糸切りの後、外面体部下端を回転ヘラケズリで再調整している。1～5は内面にヘラミガキ・黒色処理を施していない。6はヘラミガキ・黒色処理を施しているが、ヘラミガキは散漫である。7～9は回転糸切りの後、高台を貼り付けている。7は内面に黒色処理を施していない。8は内面にヘラミガキ・黒色処理を施しているが、ヘラミガキは散漫である。9は内外面ともに比較的緻密なヘラミガキが施されるが、黒色処理は見られない。10はにぶい黄橙色を呈する小型の短頸壺である。ロクロを使用しており、回

第2節 墓穴住居跡

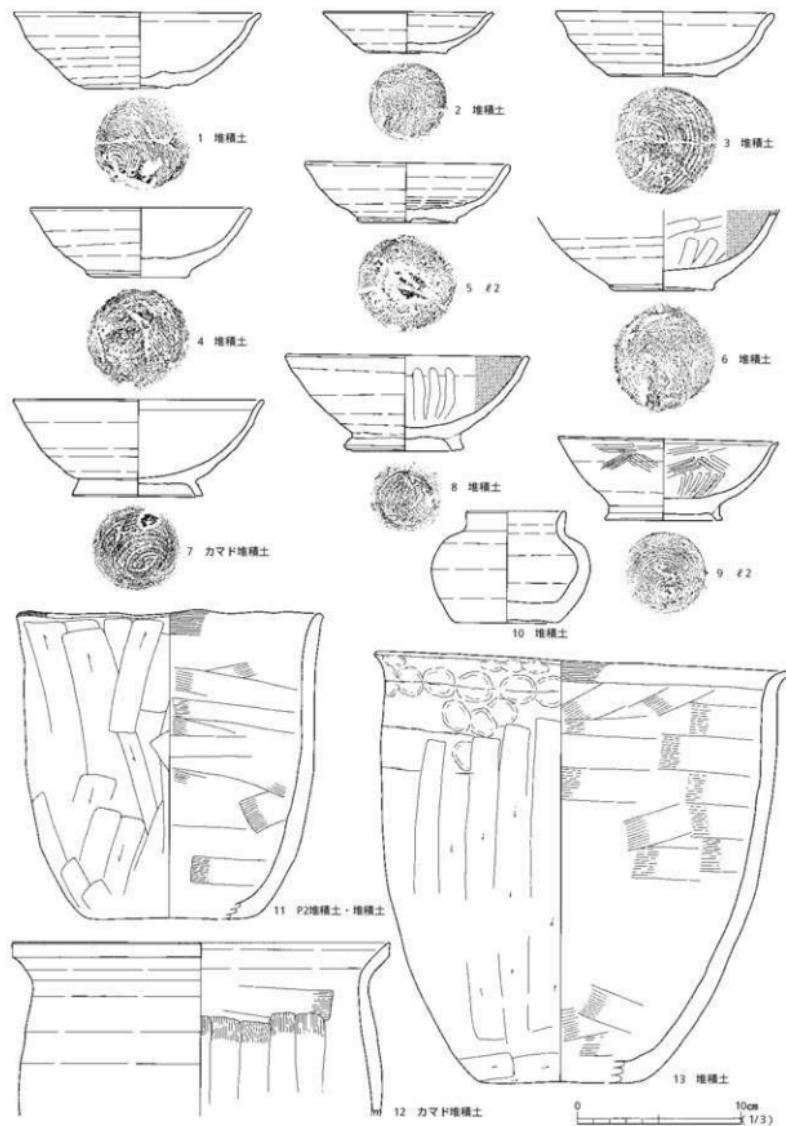


図47 22号住居跡出土遺物

転ヘラ切りの痕跡を残す。

11・13是非クロ成形の甕である。11は外面をヘラケズリで、内面をヘラナデで調整している。体部下半は丸みをもちながらも、体部上半は直立ぎみに立ち上がり、口縁部の外向の度合いも小さい。13は、東角よりに投げ込まれた焼土の下から出土した、底部に比べて口径の大きい長胴の甕である。体部下半は丸みをもって大きく広がり、上半は直立ぎみに立ち上がり、口縁部は上端が丸みを帯びつつ外反している。口縁部は粘土紐の積み上げ痕が残り、外面はヘラケズリ、内面はヘラナデで調整されている。12は、ロクロ調整がなされている、体部上半から口縁部にかけての甕の破片である。口縁部は「く」の字形に外反し、外面の上端は直立している。

ま と め

本住居跡は、南東よりに設けられたカマドから煙道が南に延びる点が特徴である、隅丸長方形の竪穴住居跡である。住居の廃棄の際にはカマドは破壊されており、焼土は取り去られ、その一部は住居内の東角近くに土器片とともに検出している。本住居跡から出土した土器の特徴から、本住居跡は10世紀中葉頃の所産と考えている。

(佐 藤)

23号竪穴住居跡 S 1 23

遺 構 (図48、写真図版21)

本住居跡は、調査区中央部西端のD17・18、E17・18グリッドに位置し、Ⅲa層上面で検出された。本住居跡は、南東壁の一一番南よりに寄った位置にカマドが設置され、煙道は南西壁のラインの延長方向に延びている。本遺跡ではコーナーを利用してカマドを設置している例は、本遺構の他に、北東コーナーを利用してカマドを設置している5号住居跡だけである。また、本住居跡の煙道は南南東方向に延びていたと推測され、北に約3mの位置にある22号住居跡と合わせて、煙道の向きも特徴的である。本住居跡の遺存状態は良好である。重複する遺構ではなく、本住居跡の北西には、南東へと流路が延びる5号溝跡が位置する。

平面形は方形をなし、コーナーは角張っている。規模は長軸約3.5m、短軸約3.4m、検出面から底面までの深さは42cmを測る。主軸方向はおよそE45°Sである。底面はほぼ平坦であり、周壁の立ち上がりは急斜度である。床面積は6.8m²である。

堆積土は3層に分類される。いずれも暗褐色土で、1層は炭化物と焼土を少量含み、2層は炭化物を含む壁からの流入土、3層は暗赤褐色焼土塊の混じる床上堆積土である。レンズ状の堆積がみられることから自然堆積と判断している。

本住居跡の施設としては、カマドのみを南コーナーで検出した。右袖は南西壁、左袖は南東壁を利用して、カマドの芯材である粘土と石を密着させて作られている。燃焼部の規模は奥行き約60cm、幅約50cmで、深さ5cmほどの凹みとなっている。燃焼部の端からは土器器が出土しているが、焼土は検出していない。芯材として用いられた粘土はよく焼けており、焼土を意図的に排出した可能性も考えられる。煙道は南南東に延びていたものと推測されるが、遺構検出の段階で判別することが

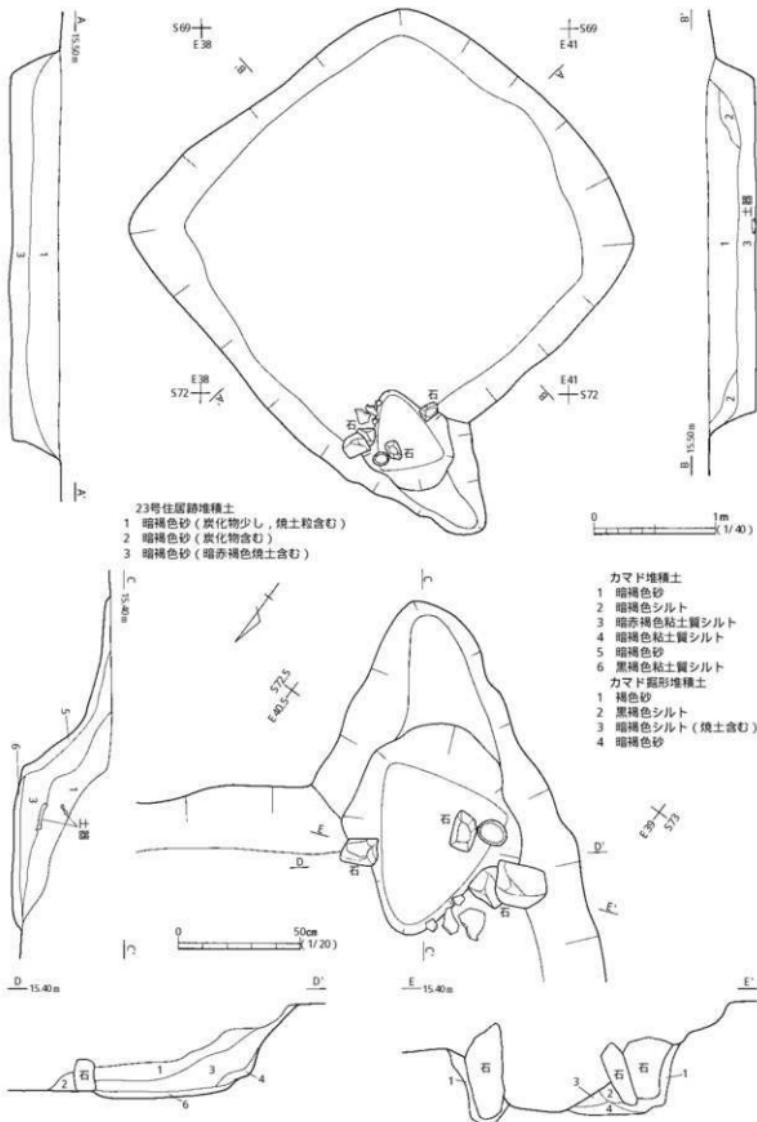


図48 23号住居跡

できず、住居より外に約70cmの地点までしか検出することができなかった。

遺物(図49、写真版66・75)

本遺構からは土師器309点、須恵器7点、繩文土器1点、鉄製品2点、石製品2点が出土している。そのうち、7点を図化した。1・4・5はカマド堆積土から、ほかのものは堆積土から出土している。1～4は土師器の杯、5は甕である。いずれもロクロを使用している。6は石製品、7は繩文土器である。

1は内面にヘラミガキ・黒色処理が施され、さらに外面にもわずかであるがヘラミガキの痕跡が見られる。2～4は内面にヘラミガキ・黒色処理を施していない。2・3は回転ヘラ切り、4は回転糸切りで切り離し、いずれも再調整を施していない。3・4は内面にわずかに油煙が付着していた。

5は上半部にロクロナデ整形を施している甕である。口縁部は「く」の字形に外反し、上端の外側には短い面が直立しており、内面はやや内向している。6は珪質頁岩の石製品で、住居跡のほぼ中央部の床面から出土している。砥石として使用された痕跡が縦横に残っている。7は丸みを帯びた沈線文が施されている。

まとめ

本住居跡は南東のコーナーにカマドが設置された、方形の堅穴住居跡である。唯一の住居内施設であるカマドには、燃焼部に土師器が置かれ、袖部は残るもの焼土が認められず、人為的に破壊したと思われる。本住居跡の所属時期は、出土遺物から10世紀中葉頃と考えている。(佐藤)

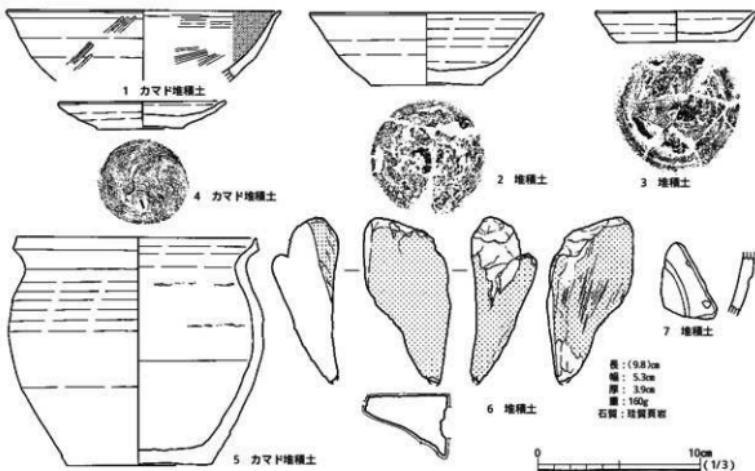


図49 23号住居跡出土遺物

24号堅穴住居跡 S 124

遺構 (図50、写真図版21)

本遺構はG18グリッドで検出された。2号溝跡と重複しており、本遺構の方が古い。2号溝跡完掘後に検出されたが、2号溝跡およびかく乱によって非常に遺存率が低い。また、東半分程度が調査区外にあり、調査できなかった。

上記のように遺存率が低いものの、本遺構の平面形は北東—南西方向に長い隅丸方形を呈するものと思われる。各辺の長さは、北西辺が3.6m以上、南西辺が3mである。南東辺は1.6mしか遺存していないが、北西辺と同程度はあったものと考えられる。また、北東辺は調査区外であった。仮に南西辺に直交する軸を主軸と考えると、その方位はN48°Eを指している。

調査区境の断面を用いて土層の観察を行い、本遺構を掘削した。堆積土は1層のみ確認できた。にぶい黄褐色砂で、堆積状況は不明である。周壁はもっとも残りの良い南角で16cm程度であり、北

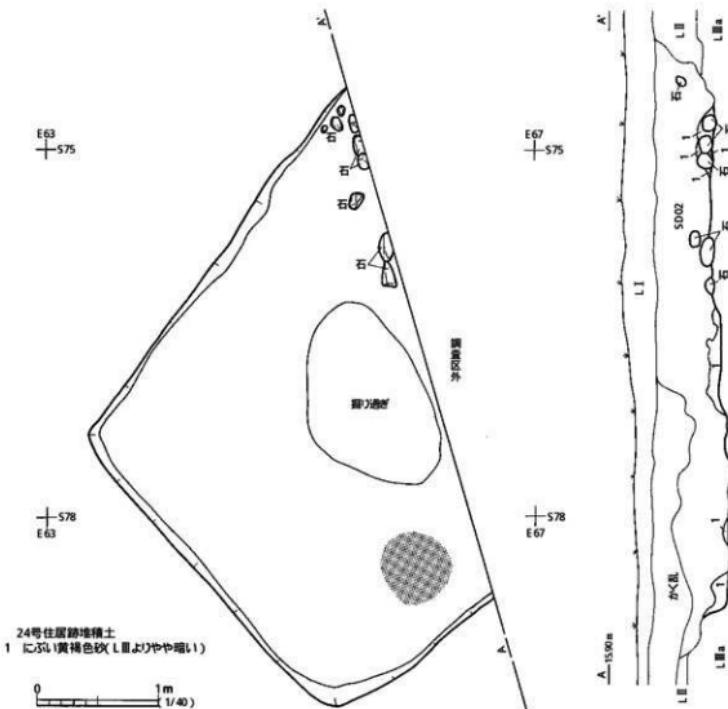


図50 24号住居跡

端部に至っては周壁は遺存していなかった。周壁の立ち上がりは65°である。

本遺構の南角付近では燃焼面を検出した。長径59cm、短径54cmのはば円形で、深さ5cmまで熱を受けて赤変していた。これはカマドの痕跡と考えている。

本遺構からは土師器68点が出土しているが、いずれも小片であり、固化できなかった。また、鉄滓25gが出土している。

まとめ

小山B遺跡では中程度の規模をもつ住居跡であるが、調査区の制約と重複する遺構によって削平されており、ほとんど遺存していなかった。本遺構の時期は確定できないが、ほかの住居群とそれほど変わらない9世紀後半から10世紀中頃に機能していたものと推測される。
(轟 田)

25号堅穴住居跡 S 125

遺構(図51、写真図版22)

本遺構は、調査区中央部のG18~19グリッド、標高15.2m付近の平坦面に位置する。検出面はⅢa層上面である。北辺を20号住居跡と接し、本遺構が20号住居跡の周壁を破壊しているので本遺構の方が新しい。また、2号溝跡が本遺構南部を東西に横断し、本遺構より新しい。この2号溝跡との重複部は、流水による鉄分の沈殿や土壤の変色が著しく、また西辺や北辺の一部でも土色の差が不明瞭であったため、本遺構の範囲確定に困難を極めた。

平面形は隅丸の不整五角形を呈するが、2号溝跡との重複部では不明瞭な点が多く、もともとの形は長方形であったと考える。大きさはセクションを設定した部分で長辺4.45m、短辺3.62mを測る。住居跡の主軸方位は、カマドのある東辺に直交する軸を主軸とするとE 2° Sである。

住居内堆積土は5層に分かれる。1層は焼土や炭化物、土器細片を含む暗褐色土で、短期間に埋まったものと考える。2層は炭化物や焼土を多く含む黒褐色土で、しまりがあり、貼床層である。3層は2層の土を含む黄褐色土で、これもしまりがあり、旧床面であると考える。この2~3層は、部分的にさらに細分化することができ、床面を何度も改修した形跡が伺える。4層は北辺からの流入土、5層は周壁の崩落土である。周壁はどの辺も急斜度で立ち上がる。床面の深さは中央部で55cmを測る。床面積は12.6m²である。

床面施設として西部からピットが2基検出された。P1は長径38cm、短径35cmの楕円形を呈し、底面からの深さは21cmで、底部に人頭大の石が存在する。P2は長径28cm、短径20cmの楕円形を呈し、床面からの深さは17cmである。

カマドは東辺北部に位置し、両袖および燃焼部が遺存していたが、煙道は検出されなかった。両袖は堀り残した地山の土台に石を据えて補強する作りである。石を含まない規模は右袖が高さ25cm、幅20~30cm、東辺からの長さ40cm、左袖は高さ20cm、幅25cm、東辺からの長さ80cmを測る。堆積土は4層に分かれる。1層は焼土や炭化物を多く含む暗赤褐色土で、多くの土器片が混入していた。2層は酸化砂、3層は黄褐色砂質土で、炭化物、焼土を少量含む。4層は石を据える際の掘形内堆

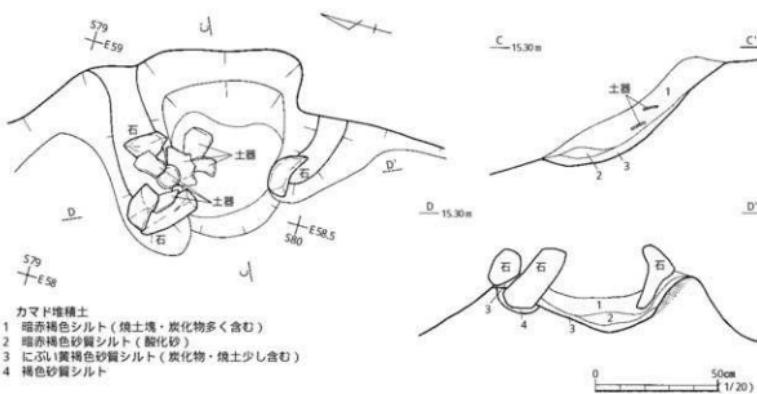
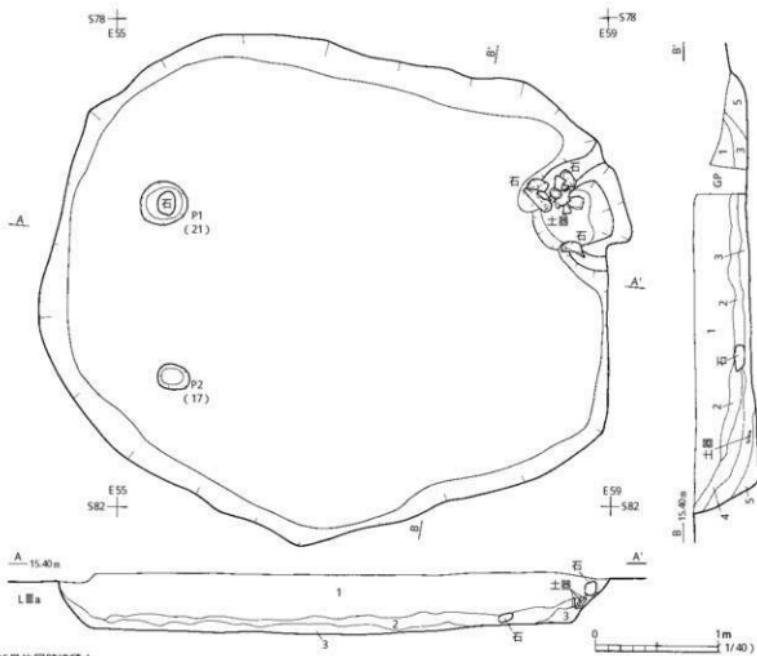


図51 25号住居跡

積土である。

燃焼部の大きさは奥行き50cm、幅40cmを測る。燃焼部底面は、本遺構の床から12cm高いが、本遺構ではカマドから住居内床面にかけて、貼床と思われる層が緩やかに傾斜しながら広がっており、本遺構機能時の床面と燃焼面の高さは、それ程差がなかったと考える。貼床に炭化物等が多く含まれること、カマドの周辺に灰捨ピットのようなものが存在しないことから、本遺構機能時は、カマドの灰を何度も床面に踏み固めたのではないかと考える。支脚らしい遺物は検出されなかった。煙道の痕跡は検出されなかった。ただし、燃焼面の周壁に対する立ち上がりが急であることから、遺構検出面より上部に存在した可能性もある。

遺物 (図52、写真図版66・74)

本遺構からは土師器489点、須恵器10点、鉄製品9点、石製品1点が出土している。ここでは12点を図化した。1・2・4・6・11・12は堆積土から出土している。6・11は最後の貼り床と考えられる2層から出土しており、本遺構改修時に埋め込まれたものと考えられる。3・5・7～10はカマドから出土している。1・2はロクロ使用の土師器杯であり、3～6はロクロ使用の土師器高台付杯、7～10はロクロを用いない土師器甕である。11・12は鉄製品である。

1は回転糸切りにより切り離した後、再調整を施していない。外面にはロクロナデの痕跡を残すが、内面は平滑に仕上げられている。黒色処理は施していない。内面に油煙が付着しており、灯明皿と考えられる。2は小型の杯である。

3は回転糸切りのうち高台を付け、ナデ調整が施される。高台は非常に華奢な作りである。4は切り離しのうち高台を付け、ナデ調整が施される。5は回転糸切りの後、遺存しないが高台を貼り付けていた。2次的に熱を受けており、黒色処理は痕跡を残すにとどまる。6は両面をヘラミガキ・黒色処理で仕上げている。回転糸切りの後、高台を貼り付けている。

7は口径28cmの大型の甕である。口縁部は直線的に外傾している。外面は単位のはっきりしないナデ、内面はヘラナデを施している。内面口縁部は特によくナデられており、その際外面に指頭圧痕を残している。8は口縁部が外反し、丸みを持っている。外面胴部は単位のはっきりしないナデ、内面は横方向のヘラナデである。9は口縁部をつまみ出し、ヨコナデで平滑に仕上げている。口縁部は直線的に外傾し、大きく開く。胴部外面は単位のはっきりしないナデ、内面はヘラナデで調整されている。10は口縁部が直線的に立ち上がるが、わずかに内側に屈曲している。外面胴部は縦方向のヘラケズリ、内面はヘラナデで調整されている。

11は鉄製の刀子である。全長は14.7cmであるが基の先が欠損しており、もとの長さは不明である。刃長は7.6cmである。茎長は7cmほどが遺存している。12は鉄製の釘である。長さは7.5cmを測るが、両端が欠損しているため、本来の長さは不明である。幅0.9cm程度、厚さ0.8cm程度で、断面形は方形である。一方がやや細くなっている。

まとめ

本遺構は不整形の堅穴住居跡であるが、本来の形は長方形であったと考える。床面に何層も貼床

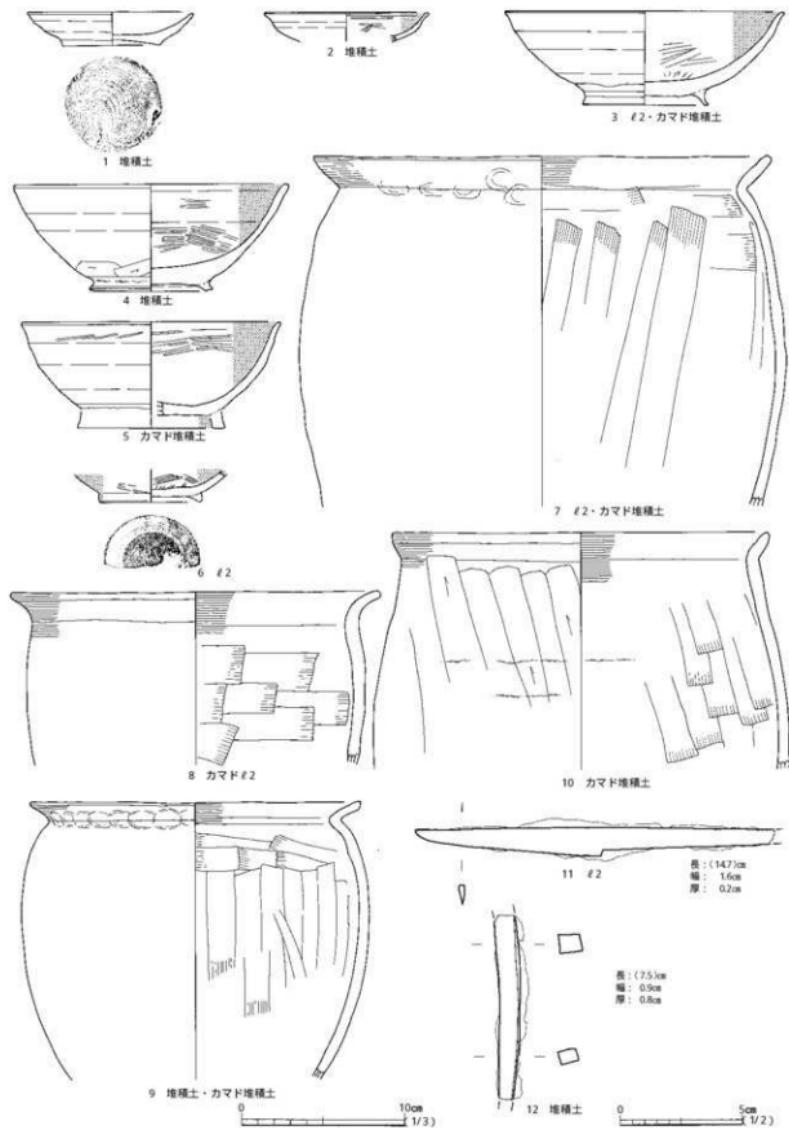


図52 25号住居跡出土物

が施され、比較的長期に渡って使用されたものと考えるが、廃絶後は何らかの原因で直ちに埋まったようである。時期は出土遺物から、10世紀中葉頃と考える。

(菊田)

29号竪穴住居跡 S I 29

遺構 (図53、写真図版23)

本住居跡は、調査区の中央部よりの西端であるD15・16グリッド、Ⅲa層上面で検出された。重複する遺構はないものの、本遺構の南西側半分程度が調査区外にあるため、住居跡の全体像を明らかにできなかった。また、調査区境に近づくほど堆積土は砂質が強くなり、本遺構の平面形を明確にすることはできなかった。

平面形は隅丸方形と推定される。規模は北東辺が3.7m、南東辺は3m遺存している。北東辺の

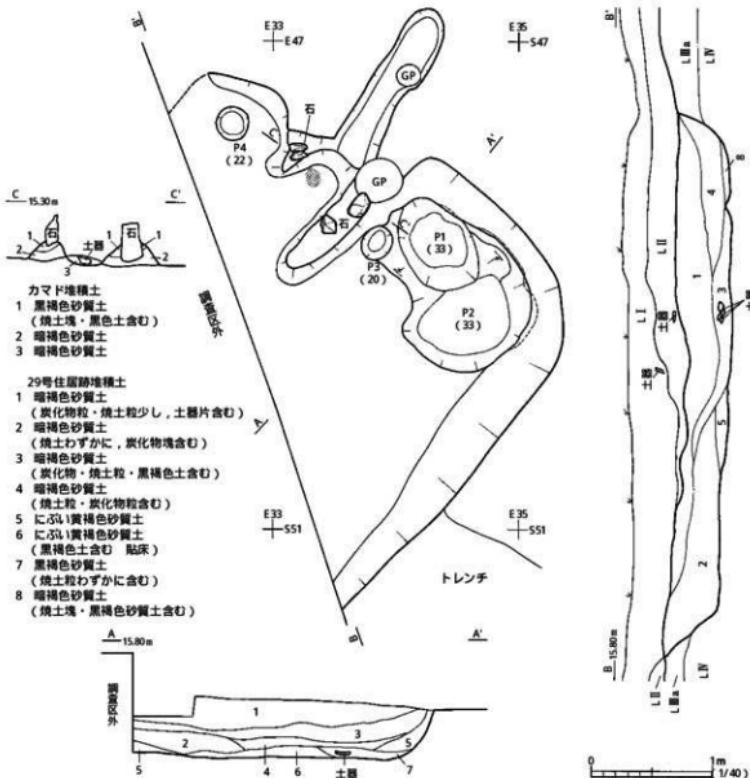


図53 29号住居跡

北側にカマドの煙道が付いている。検出面から底面までの深さは約40cmを測る。主軸方向はおよそN40°Eである。底面はほぼ平坦であり、踏みしまりなどは検出されなかった。遺存している北壁と東壁の立ち上がりは急斜度である。

堆積土は8層に分類される。1～4層は暗褐色土で、炭化物粒・焼土粒を含む。5・6層はにぶい黄褐色土で、6層は黒褐色土を含む貼床土であり、住居跡の中央部に認められた。7層は黒褐色土、8層は暗褐色土である。かく乱の影響を受けているものの、レンズ状の堆積がみられることから自然堆積と判断している。

本住居跡の施設として、カマド1基、ピット4基が検出された。

カマドは北東辺に作りつけられている。カマドの煙道と袖が残存していた。燃焼部・煙道の天井は崩落していた。煙道は長さが約1.4mである。袖は、礫を使用した芯材を砂質土で固定していた。天井がどのような素材で構築されていたのか、確認できなかった。燃焼部の底面では、わずかではあるが酸化面が検出された。

本住居跡では4基のピットを検出している。P1・2はカマド右袖から北壁際にかけて隣接して位置する。P1のほうがP2よりも新しく、いずれも貯蔵穴であると考えられる。P3はカマド右袖の右横に位置し、30×25cmの楕円形で、深さは20cmである。炭化物粒・焼土粒を含む黒褐色土が堆積している。P4はカマド左袖の左、北西角近くに位置し、径30cmの円形のピットで、暗褐色土が堆積していた。

遺物(図54、写真67・74・75)

本遺構から土師器255点、須恵器2点、陶磁器2点、石器1点、鉄製品4点が出土している。そのうち13点を図化した。2・7はカマドから、10はP1から出土している。1～3は土師器の杯、4は高台付杯、5～7は甕である。いずれもロクロを使用している。8は須恵器の杯である。9は石器である。10～13は鉄製品である。

1～3は内面にヘラミガキ・黒色処理を施している。1は回転糸切りの後、外面体部下端をヘラケズリで再調整している。外面体部に正位で「少川」の墨書が見られる。2は回転糸切りの後外面体部下端を回転ヘラケズリで再調整している。外面体部に墨書が見られるが、文字の判読はできなかった。3は外面体部に墨書が見られるが、残画がわずかなため文字の判読はできなかった。4は内外面ともヘラミガキ・黒色処理で仕上げている。高台部は、50°程の角度に大きく広がっている。

5～7は、いずれもにぶい黄橙色を呈し、口縁部から胴部上半にかけてロクロナデ調整が行われている。頸部が「く」の字状に外反して外に大きく開き、口縁部の外面には直立する面を持っていく。内面は口縁端部付近で角度を変えてやや内湾している。5・7は胴部の下半にはケズリの跡がみられる。

8は須恵器杯の、口縁部から体部上半の破片である。

9は、蛇紋岩を用いた定角式の磨製石斧である。基部には黒色の付着物の痕跡が認められる。

10～13は鉄製品である。10・11は鉄製の紡錘車で、紡錘車の孔に糸巻き棒が通ったまま出土した。

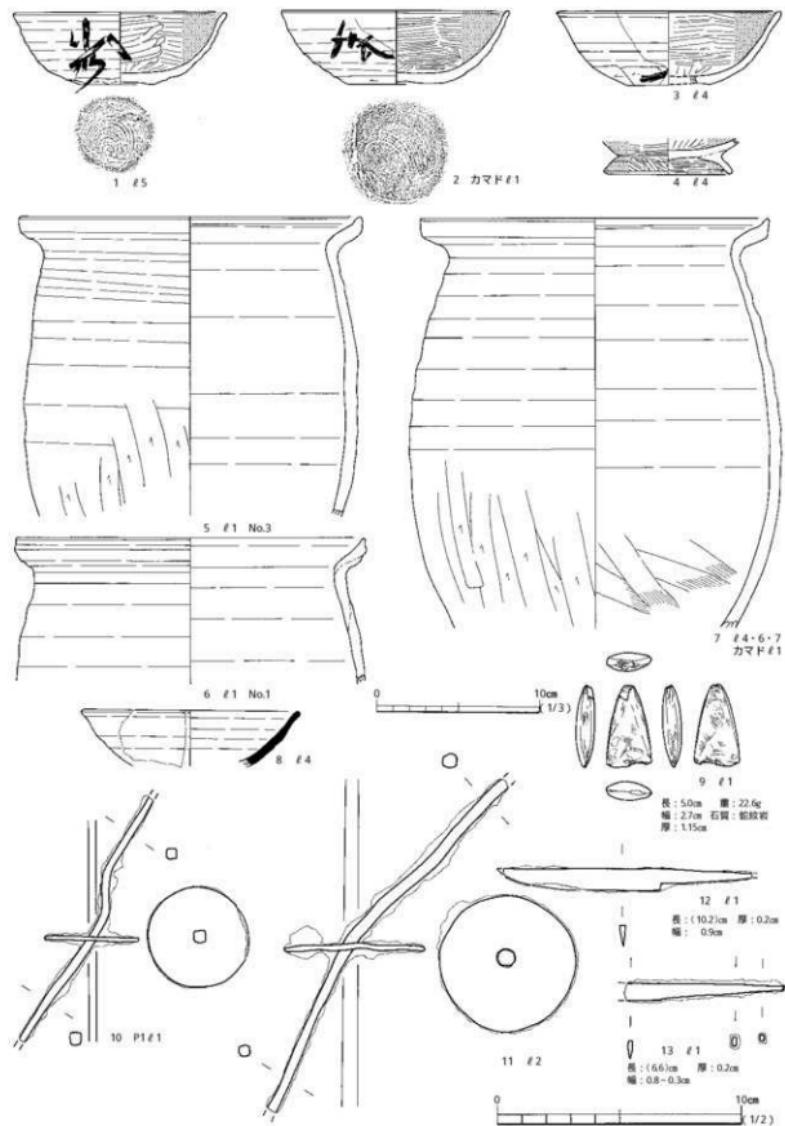


図54 29号住居跡出土遺物

10は直径4cmの円形で、厚さ3mm、孔は辺5mmの方形である。糸巻き棒は約12cmの長さで、堆積土の圧力で変形している。11は直径約5.5cmの円形で、厚さは約2mm、孔は7mmの円となっている。糸巻き棒の長さは17cm程度で、10同様変形している。12・13は刀子であり、細長い刃部はほぼ三角形状で茎は四角形状を呈する。13の刃部の先端は失われている。

まとめ

本住居跡は約半分が調査区外にあるため、全貌を明らかにできなかった。カマドや貯蔵穴の構造は、本遺跡の中では比較的しっかりしている。本住居跡の所属時期は、出土遺物から9世紀後葉ころと考えている。

(佐藤)

32号壁穴住居跡 S 132

遺構 (図55、写真図版24)

本遺構は、調査区中央部のD～E16およびD17グリッドにまたがる、標高15.2m付近の平坦面に位置する。検出面はⅢa層上面である。上部に12a・b号土坑があり、本遺構の方が古い。また、本遺構北東部の一部がかくらを受けている。12号土坑調査時には、まだ本遺構を確認できなかったが、土坑の完掘精査時に本遺構部分の土砂が周辺地山とわずかに違うことを確認し、本遺構の調査を行った。

平面形は隅丸長方形で、大きさは長辺3.7m、短辺2.9mを測り、向きは長軸方向でN49°Eである。堆積土は9層に分かれ、複雑な堆積状況を示している。下層部の4～9層までは自然堆積と考えられ、そのうち6・8・9層は周辺からの崩落土と考える。上部の1～3層は堆積が一様でないため、人為的埋め戻しと考える。周壁は急角度で立ち上がるが、本遺構周辺の地山は砂質のため崩落しやすく、調査中も特に南西辺からの崩落が著しかった。床面は起伏が多く、特に東部と北西部は床面が一段高くなり、拳大から人頭大の礫が散在していた。床面の深さは中央部で検出面から62cmを測る。床面積は7.6m²である。床面施設やカマドは存在せず、床や周壁から被熱部も検出されなかった。

遺物 (図55、写真図版75)

32号住居跡では土師器186点、須恵器4点、石製品1点、鉄滓25gが出土した。ここでは土師器の高台付杯と石製品を図化した。いずれも遺構検出面で出土したものである。

1は土師器の高台付杯である。回転糸切りによって杯部を切り離した後、高台を貼り付けている。内外面ともにミガキ・黒色処理を施している。外面は緻密なハラミガキであり、内面はミガキの単位がはっきりしない。

2は閃緑岩製の砥石である。目の粗い石材であり、断面方形の礫の一面を使用していた。粗砾である。

まとめ

本遺構は長方形の壁穴住居跡であるが、カマドがなく、床面の作りも粗雑であり、また周壁から

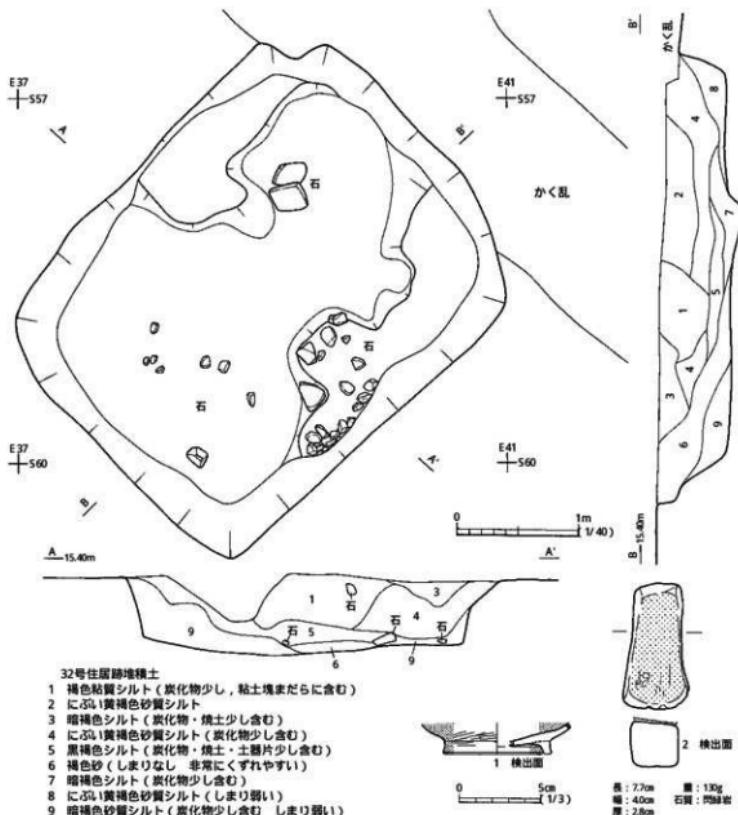


図55 32号住居跡・出土遺物

の土砂崩落が著しいため居住用としては大変不便である。堆積土下層からの遺物出土もなく、本遺構は製作途中の未使用状態のまま廃絶された可能性が高い。時期は周辺の遺構と同時期の9世紀後半から10世紀中頃と考える。

(菊田)

35号堅穴住居跡 S I 35

遺構 (図56、写真図版25)

本遺構は調査区南部のF22グリッドに位置する。検出面はⅢa層上面である。周辺の地形は平坦で、東へ向かってわずかに傾斜する。本遺構の北部が36号住居跡を壊している。東には5号溝跡がある。

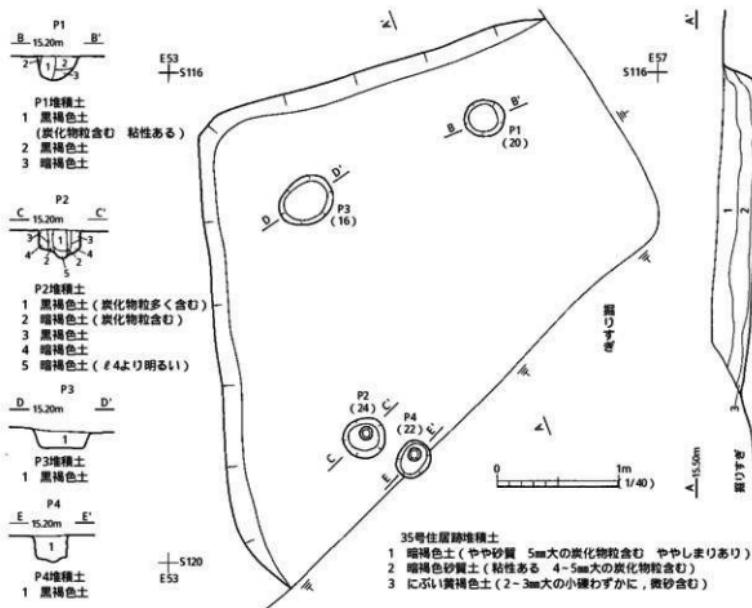


図56 35号住居跡

周辺は圃場整備などにより削平が著しく、遺構の平面形はⅢa層を約5~10cm程掘り進めた段階で把握した。本遺構の東側と南側は表土除去の際に過って掘り下げてしまった。したがって本遺構の全容をうかがい知ることはできないが、北壁と西壁が直線的に延びている点と考慮すると、住居の平面形は方形を基調としていると推察される。

住居内堆積土は3層に分けた。1・2層はともに暗褐色土で炭化物粒を含み、やや粘性がある。3層は床面付近に薄く堆積していた。これらは壁際から流れ込んだような堆積状況を見せることから、自然堆積と判断される。検出面から床面までの深さは30cmで、床面は東に緩やかに傾斜している。周壁は床面から約70°の角度で立ち上がる。

床面からは4基のビットが検出された。P1~P4は位置や規模から本遺構の主柱穴と考えられる。しかしながらP2・P4は近接していることから、併存していた可能性は低い。P1・P2は円形を基調とする。P1は直径33cm、P2は35cmである。P1・P2には、直径15cm程の柱痕が認められた。柱痕には縫まりのない黒褐色土が堆積していた。P3とP4はやや椭円形で、P3は長径48cm、短径37cm、P4は長径31cm、短径25cmを測る。これらのビットの床面から底面までの深さは、P1で20cm、P2で24cm、P3で16cm、P4で22cmである。各ビットの芯間距離はP1~P3間で1.6m、P3~P4間で2.2m、P2~P3間で2.0mを測る。

本遺構からはロクロを用いた土師器32点、須恵器3点が1層より出土している。しかし、いずれも細片で図示できなかった。

まとめ

本遺構は周辺が削平を受けていて、その全容を調査することはできなかった。床面がみとめられ、柱穴も検出した。出土遺物などから、9世紀後半から10世紀中頃の堅穴住居跡と考えられる。

(門 脇)

36号堅穴住居跡 S I 36

遺構 (図57、写真図版26)

本遺構は遺跡の南部、F22グリッドに位置し、Ⅲa層上面で検出された。遺構検出面はほぼ平坦で、東にある5号溝跡へ向かってわずかな傾斜がある。35号住居跡・55号土坑と重複していて、本遺構はこれらの遺構よりも古い。周辺は圃場整備などにより削平が著しく、遺構の平面形はⅢa層を約5~10cm程掘り進めた段階で把握した。また、本遺構の東側は表土除去の際に過って掘削しきってしまった。そのため本遺構の東側では遺構の輪郭を認識することはできなかった。なお北西部分は調査区外であるため、本遺構の全容をうかがい知ることはできない。

また、南側は35号住居跡との重複により削平されている。このため周壁が残存しているのは西壁

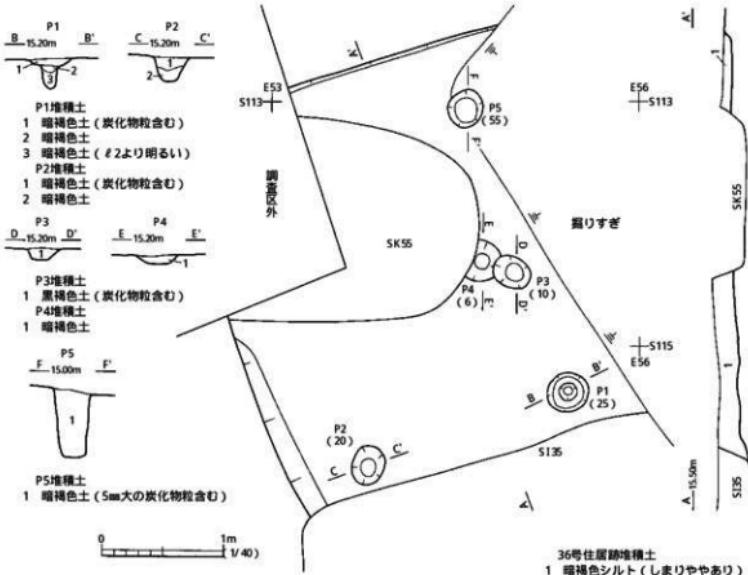


図57 36号住居跡

の一部のみである。西壁が直線的に延びていることから、住居の平面形は方形であったと推察される。西壁の立ち上がりは緩やかである。床面で南北長の最大値は3.6m、同じく東西長については2.5mである。検出面から床面までの深さは20~30cmを測り、床面は東へゆるやかに傾斜する。

住居内堆積土は暗褐色土の1層のみであった。炭化物粒や粘土粒が堆積土全体に一様に散漫な分布をしていたことから、自然堆積層と考える。貼床土は認められなかった。

床面からは5基のビットが検出された。ビットの埋土は1~3層に分けたが、多くが暗褐色土であった。堆積層の特徴として炭化物粒を含むことが挙げられる。特にP5は、5mm大の比較的大きいものも含まれていた。ビットの平面形はいずれも円形を基調とする。規模は直径25~35cm、床面からの深さは9~78cmを測る。P5が特に深い掘形を持つ。P3とP4は重複していて、P3の方が新しい。P4は55号土坑とも重複していて55号土坑の方が新しい。P1~P2間は1.76m、P1~P5間は2.44mである。また、それを結んだ線は直交する配置になっている。さらに、P1~P5をむすんだ線と西壁は平行している。そして、それぞれは真北より20°西へ傾く。P1~P2・P5は以上のことから主柱穴の可能性があると考えた。

カマドや貯蔵穴などの住居内施設の痕跡は確認されなかった。

本遺構からはロクロ成形の土師器1点が堆積土から出土したが、細片で図示できなかった。

ま と め

本遺構は周辺が削平を受けていて、その全容を調査することはできなかった。床面が認められ、柱穴も検出した。出土遺物などから、9世紀後半から10世紀中葉の壁穴住居跡と考えられる。

(鈴木)

第3節 壁 穴 遺 構

S1の遺構番号を付した遺構のうち、住居跡ではないと判断したものを壁穴遺構として報告する。

10号壁穴遺構 S110

遺 構 (図58)

調査区北側のE15・16グリッドで検出された壁穴遺構である。東壁はN 6° Eを指している。Ⅲa層上面で検出され、遺構の堆積土は褐色を呈していた。重複する遺構には、西辺南部から北辺中央部を通る本遺構より新しい3号溝跡と、本壁穴遺構埋没後に掘り込まれたビットが見られた。近接する遺構には、3号・18号壁穴住居跡がある。

堆積土は2層で、1層は2層のくぼみに堆積したものと考える。2層について、疊混じりの砂質土であることと、粘土ブロックや塊などが入っていないことから考え、周囲からの自然流入による堆積であると考える。平面形は隅丸の長方形を呈している。長辺が2.7~3.0mで、短辺が1.8mの規模をもつ。壁の立ち上がりはやや急で、最大19cmを測る。底面はほぼ平坦であるが、貼り床な

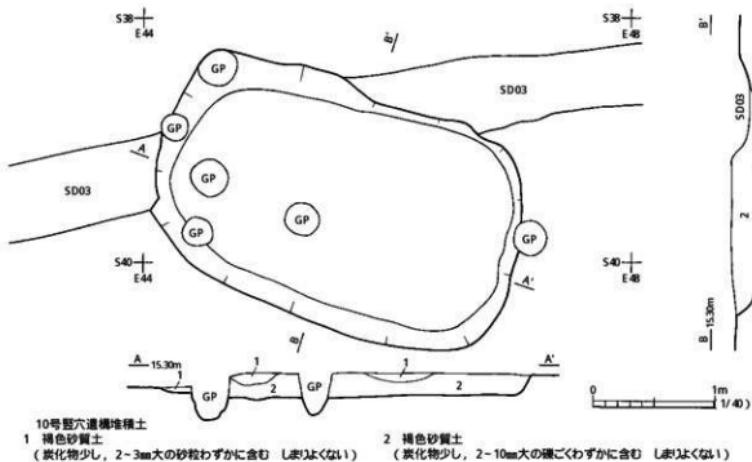


図58 10号竪穴遺構

どは見られず、地山をそのまま床にしていたと考える。床面の形も検出面における平面形と同様に隅丸長方形を呈している。

本遺構からは、カマド・煙道跡を検出することはできなかった。また、残存している床面上には、焼土や焼けた石なども見あたらなかったことから、本遺構にはカマドはなかったものと考える。本遺構の柱穴については、床面、遺構の周囲ともに検出することができなかった。

遺物は堆積土から土器師39点が出土したが、いずれも細片であり図化できなかった。

ま と め

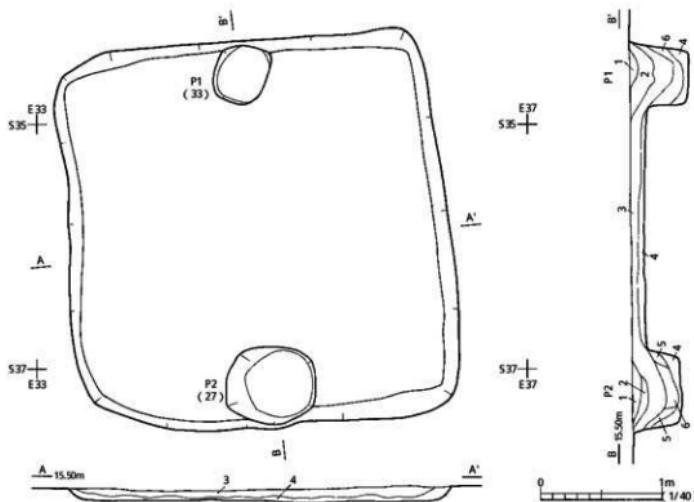
本竪穴遺構については、その大きさやカマドが設置されていない、近接する18号竪穴住居跡と軸の方向がほぼ同一であることから、そこで生活するという住居としての使われ方ではなく、18号竪穴住居に付属して建てられたものではないかと推定できる。しかし、本竪穴遺構からの出土遺物が乏しく、その関係を強く肯定できるものがないため、どのような性格のものであるかは不明である。時期については出土した遺物が9世紀後半以降に制作されているものと推定できるが、正確な時期は不明である。

(関)

11号竪穴遺構 S 111

遺 構 (図59)

本遺構は、調査区西部のD14グリッド、標高15.4m付近の平坦面に位置する。検出面はⅢa層上面であるが、この周辺はⅢ層の削平が著しい。重複遺構はないが、本遺構の北西3mに12号住居跡がある。



- 11号堅穴遺構堆積土
 1 暗褐色シルト
 2 暗褐色シルト(にぶい黄褐色シルト塊まだらに含む)
 3 暗褐色シルト(炭化物・焼土含む)
 4 棕褐色シルト(暗褐色シルト20%・炭化物粒・焼土粒少しある)
 5 暗褐色シルト
 6 にぶい黄褐色シルト(砂礫少し・1~3cm大の礫含む)

図59 11号堅穴遺構

平面形はほぼ正方形で、3.0m四方の小型の堅穴である。向きは東辺でN 5°Wを示す。堆積土は中央付近で2層に分かれ、3層は炭化物や焼土を含む暗褐色土、4層は3層と地山土が混在した土である。いずれもほぼ水平に堆積しており、自然堆積と考える。

床面はほぼ平坦であるが、整地状態はあまり良くない。検出面からの深さは中央部で10cmを測る。壁面はほぼ一様な角度で立ち上がっていた。

北部と南部の壁面沿いに柱穴と考えられるピットが存在した。P 1は長径50cmの楕円形で、床面からの深さは33cm、P 2は長径75cmの楕円形で、床面からの深さは27cmを測る。いずれのピットも疊層であるN層上面まで掘り込んでいる。堆積土は5層ないし6層に分かれるが、上部の堆積層は住居跡の堆積土が連続して流入していた。柱痕は確認できなかった。また、本遺構にカマドや貯蔵穴は存在しなかった。

本遺構からは土師器片29点が出土したが、いずれも細片のため図示できなかった。

まとめ

本遺構は、カマドや貯蔵穴が存在しない堅穴遺構である。南北2本の柱で屋根を支える簡便な構造であり、作業小屋のようなものであったと考える。時期は、出土遺物や周辺遺構から判断し、9世紀後半から10世紀中頃と考える。

(菊田)

第4節 掘立柱建物跡

本遺構では多数のピットが検出されており、その中から規模、堆積土、配列の状況によって5棟の掘立柱建物跡を検出した。E15グリッド付近に2棟、E16グリッド付近に1棟、F17グリッド付近に2棟である。E15グリッド付近のものとF17グリッド付近のものは、それぞれ互いに重複している。

1号掘立柱建物跡 SB01

遺構 (図60、写真図版27)

本遺構はF17グリッドで検出された。検出層位はⅢa層上面であり、その標高は15.3~15.4mである。

本遺構は8号掘立柱建物跡、4号堅穴住居跡と重複している。8号建物跡とは直接柱穴が重複していないため、新旧関係は不明である。4号住居跡とは重複関係にあるが、検出状況が良好でないため、新旧を判別できなかった。P3からP10まではⅢa層上面で遺構検出作業中に検出した。P1とP2は4号住居跡の堆積土上面では検出できず、4号住居跡完掘後に初めて検出した。このことから本遺構が4号住居跡に先行する可能性もある。しかし単純に住居跡と堆積土が類似しているために検出できなかつたということも考えられる。したがって、切り合ひ関係からは、4号住居跡との新旧関係は明らかにできなかつた。そのほか、P9がF17-P16と重複し、P9のほうが新しい。

本遺構では10基の柱穴が検出された。東西3間×南北2間の東西棟の側柱建物跡で、その規模は東西が6m、南北が3.6mである。柱間距離は1.6m~2.4mで、大きなばらつきがある。平側と妻側とで柱間距離に違いは見られない。東西軸はE11°Nを指している。各柱穴の堆積土は黒褐色から暗褐色の单層で、柱痕は検出されなかつた。

本遺構からは遺物は出土しなかつたため、遺物によって所属時期を特定することはできなかつた。

まとめ

本遺構は3間×2間の東西棟側柱建物跡であり、住居として用いられていたものと考える。遺物がともなわず、遺構の重複関係も不明であるため、機能していた時期は特定できなかつた。柱痕が検出されていないことから、本遺構は廃絶時に解体された可能性がある。

(図60)

2号掘立柱建物跡 SB02

遺構 (図61、写真図版28)

本遺構はE16・F16グリッドで検出された。検出層位はⅢa層上面であり、検出面標高は15.3~15.4mである。P2がE16-P25と、P4がE16-P39、P42と、P7がF16-P14と重複してい

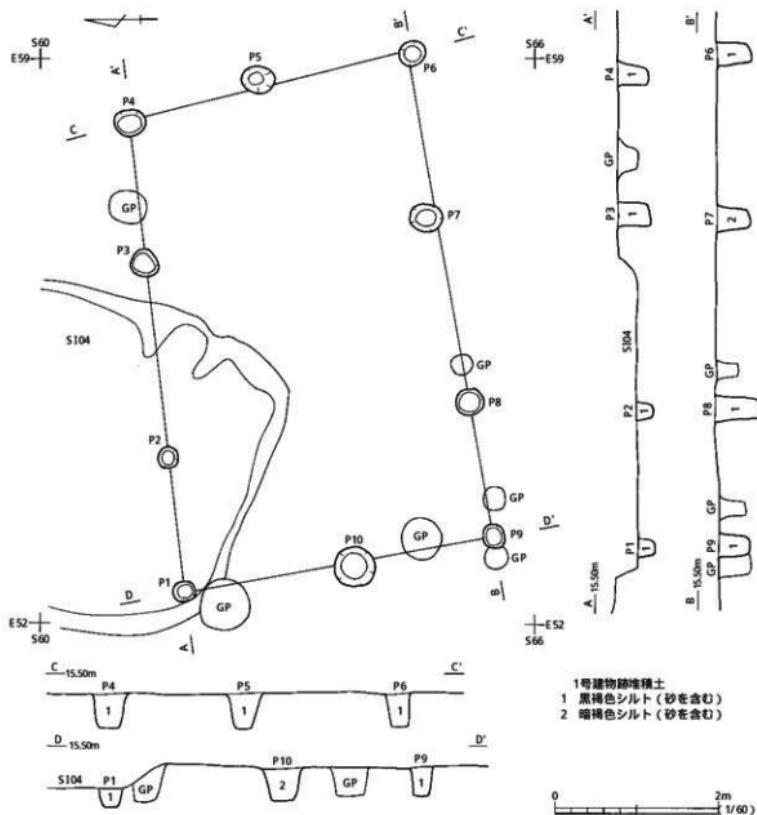


図60 1号建物跡

る。P 4 は E 16 - P 39 よりも古いが、ほかは本遺構が新しい。

本遺構の周辺は柱穴群が集中しており、掘立柱建物跡の存在が予想されていた。特に P 2 から P 5 の付近で、柱穴が南北に並んでいた。本遺構の検出にあたって柱穴間の距離を測り、その結果 P 2 から P 5 が柱間距離2.3m等間で並ぶことが明らかであった。これ以上南北に伸びる柱穴がないことから、P 2 と P 5 から東か西に展開すると考えられた。西方には柱穴が続かず、東方で P 6・P 7 および P 1 が検出された。これより東方には試掘坑があり、試掘坑の先には柱穴が続いていなかったことから、P 7 が角になると考えた。最終的に P 8 を検出し、本遺構が南北3間×東西2間の南北棟側柱建物跡であることが明らかとなった。

本遺構で検出された柱穴は8基である。本来は10基あったはずであるが、試掘坑によって2基が

欠損している。その規模は芯々間の距離で南北6.9m、東西4.1mを測る。西辺から推定する南北軸の方位はN 6°Wを指している。柱間距離は西辺が2.3m等間、北辺が2.1m、南辺が2.0~2.1m、東辺が2.3mとなり、平側に比べて妻側が短くなっている。

各柱穴の規模は、掘形上面で長軸26cm~30cm、深さは24cm~40cm程度である。底面標高は14.9m~15.1mである。柱痕はいずれの柱穴でも検出されなかった。堆積土はいずれも単層で、暗褐色土を基調としている。しまりは特に強くなかった。

遺物 (図61)

本遺構からは土器5点、須恵器3点が出土している。ここではP 6から出土した1点を図化した。須恵器の杯で、回転糸切りの後、外側底部下端をヘラケズリで再調整している。

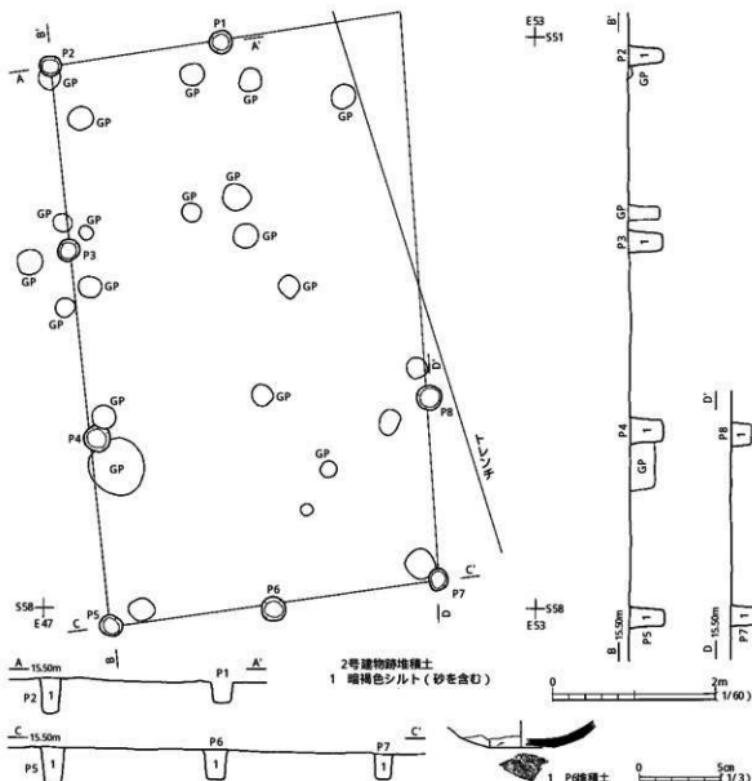


図61 2号建物跡・出土遺物

まとめ

本遺構は桁行3間×梁間2間の南北棟側柱建物跡であり、住居として用いられていたものと推測できる。住居跡などとの重複がないため、時期の決定は困難であるが、出土遺物より9世紀以降と考えられる。本遺構は南北方位を基準として建設されているようであり、本遺跡の堅穴住居跡が方位と関係なく主軸方向を決めていることは異なっている。

(図 III)

3号掘立柱建物跡 S B03

遺構(図62、写真図版29・30)

本遺構はE15・16グリッドに位置する。本遺構は2号堅穴住居跡、16号堅穴住居跡、9号掘立柱建物跡、3号柱列跡と重複している。2号住居跡との新旧関係は不明であった。16号住居跡の上面で本遺構の柱穴を検出できなかったため、本遺構の方が古いと考えられる。また、掘立柱建物跡、柱列跡とは直接柱穴の重複関係がないため、新旧関係は不明である。そのほか、P6がE15-P54と、P7がE15-P82・P84と、それぞれ重複している。E15-P54は本遺構より新しく、E15-P82・P84は本遺構よりも古い。

本遺構の周辺にはとくに柱穴が集中しており、建物の検出が困難であった。まず検出されたのはP4からP10までの南北の柱列である。その後西側でP4-P10に平行するP6からP8の柱列を検出した。P10の南側には柱列が伸びていないことから、P10が角になると判断した。この段階でP5を含めて南北3間×東西2間の南北棟の建物と推定している。南西角の柱穴は2号住居跡の掘形内にあるはずだが、2号住居跡の堆積土上面および底面でも検出できなかった。P10が南東角とすると、南辺の柱があるはずである。精査の結果P9を検出したが、予想された位置からはずれていた。16号住居跡完掘後にP3が検出され、本遺構が北に1間分伸びることが明らかとなった。

本遺構で検出された柱穴は12基で、そのうち1基のみに柱痕が認められた。柱の配列は南北4間×東西2間で、北から2列目の中央にも柱穴が検出された。規模は南北が8.4m、東西が3.7mである。柱間距離は西辺が2.0m~2.1m、東辺が2.0m~2.2m、北辺が1.9m~2.0mであり、ほぼ7尺の等間である。南辺はP9-P10で1.5mと、短くなっている。残りの良い東辺を主軸と見なすと、その方位はN10°Wである。

掘形の平面形はほぼ円形で、直径20cm~40cmとばらつきがある。検出面からの深さは22cm~50cmで、底面標高は14.8m~15.0mであった。柱痕はP9の1基のみで認められ、ほかの柱穴には認められなかった。柱の抜き取り穴は検出されていないが、16号住居跡建設時に抜き取り、埋め戻された可能性がある。

堆積土は基本的に単層で、黒褐色からⅢa層に近い褐色まで、様々であった。堆積状況は不明である。

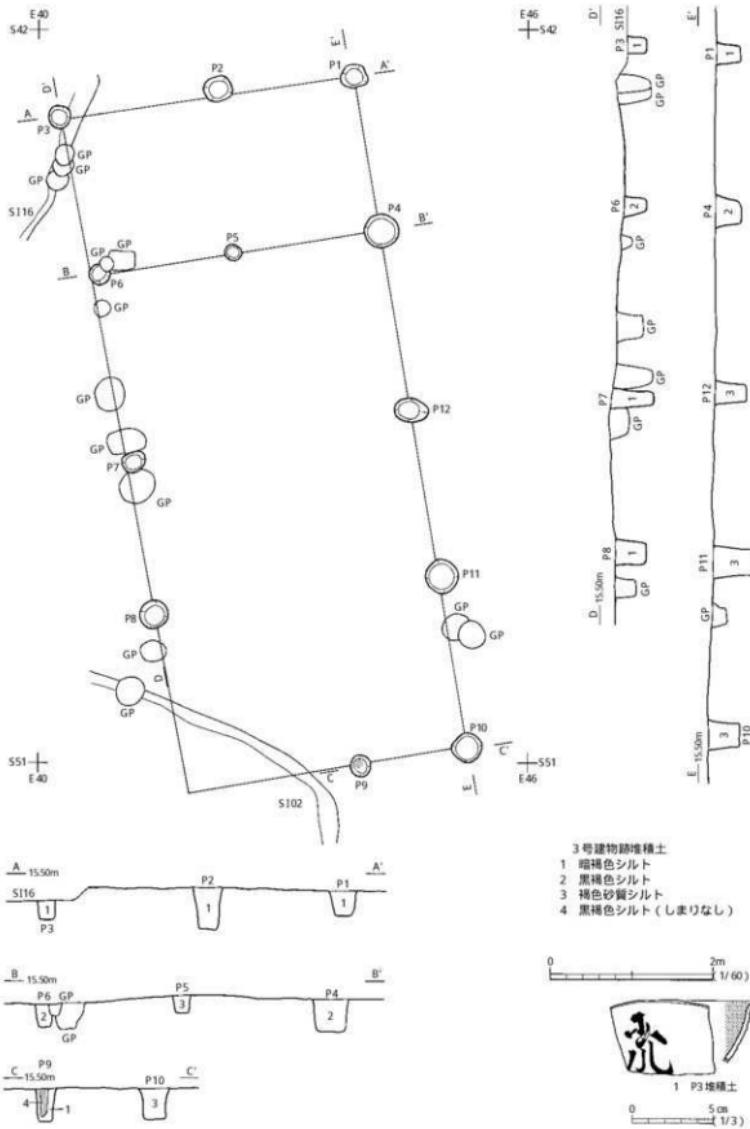


図62 3号建物跡・出土遺物

遺 物 (図62, 写真図版70)

本遺構からは土師器15点が出土している。そのうち1点を図化した。P 3 から出土したもので、ロクロを使用した土師器の杯である。墨書き器で、外面体部に正位で「少川」と書かれている。

ま と め

本遺構は4間×2間の南北棟側柱建物跡である。P 5 は東柱の可能性があるが、1基のみであり、総柱ではなかった。あるいは母屋と納屋のような機能の違いがあるのであろうか。本遺構の時期は、16号住居跡よりも古いことから、9世紀後半頃と考えられる。

(轡 田)

8号掘立柱建物跡 S B08**遺 構** (図63, 写真図版31)

本遺構はF17・G17グリッドで検出された。検出層位はⅢ a 層、検出面標高は15.3m～15.4mである。4号竪穴住居跡、1号掘立柱建物跡と重複している。4号住居跡との新旧関係は確認できなかった。4号住居跡の検出面では本遺構の柱穴は検出されなかったが、本遺構の堆積土と4号住居跡の堆積土とが類似しているために検出できなかった可能性もある。また、1号建物跡とは直接柱穴の重複がないため、新旧関係は不明である。

本遺構で検出された柱穴は9基である。北辺の1基が4号住居跡と重複し欠損しているが、東西3間×南北2間の東西棟の側柱建物跡であると考えられる。P 2, P 6 を棟持柱と考えると、その軸方向はE10°Nを指している。規模は東西6.9m～7.1m、南北5.3～5.5mである。柱間距離は1.9mから2.9mまで、ばらつきがある。柱振形はほぼ円形で、直径は34cm～60cmである。検出面からの深さは18cm～46cmで、底面標高は14.9m～15.1mであった。

堆積土は黒褐色から褐色の砂質シルトであった。9基の柱穴のうち、P 3～P 5 の3基にのみ柱痕が検出された。

本遺構からは土師器27点が出土しているが、いずれも小片であり、図化できなかった。

ま と め

本遺構は3間×2間の東西棟側柱建物跡で、住居の機能を持っていたと考えられる。4号住居跡との重複関係が不明であり、年代を決定できる遺物が出土していないことから、時期は不明である。1号建物跡とは軸線をほぼ一にすることから、1号建物跡廃絶後に一回り大きな本遺構を立て直した可能性がある。

(轡 田)

9号掘立柱建物跡 S B09**遺 構** (図64, 写真図版29・32)

本遺構はD15・E15グリッドで検出された。検出層位はⅢ a 層で、検出面標高は15.3mである。本遺構は3号掘立柱建物跡、3号柱列、16号竪穴住居跡、17号竪穴住居跡と重複している。そのうち3号建物跡、3号柱列とは直接柱穴の重複関係がないため、新旧関係は不明である。16号・17号

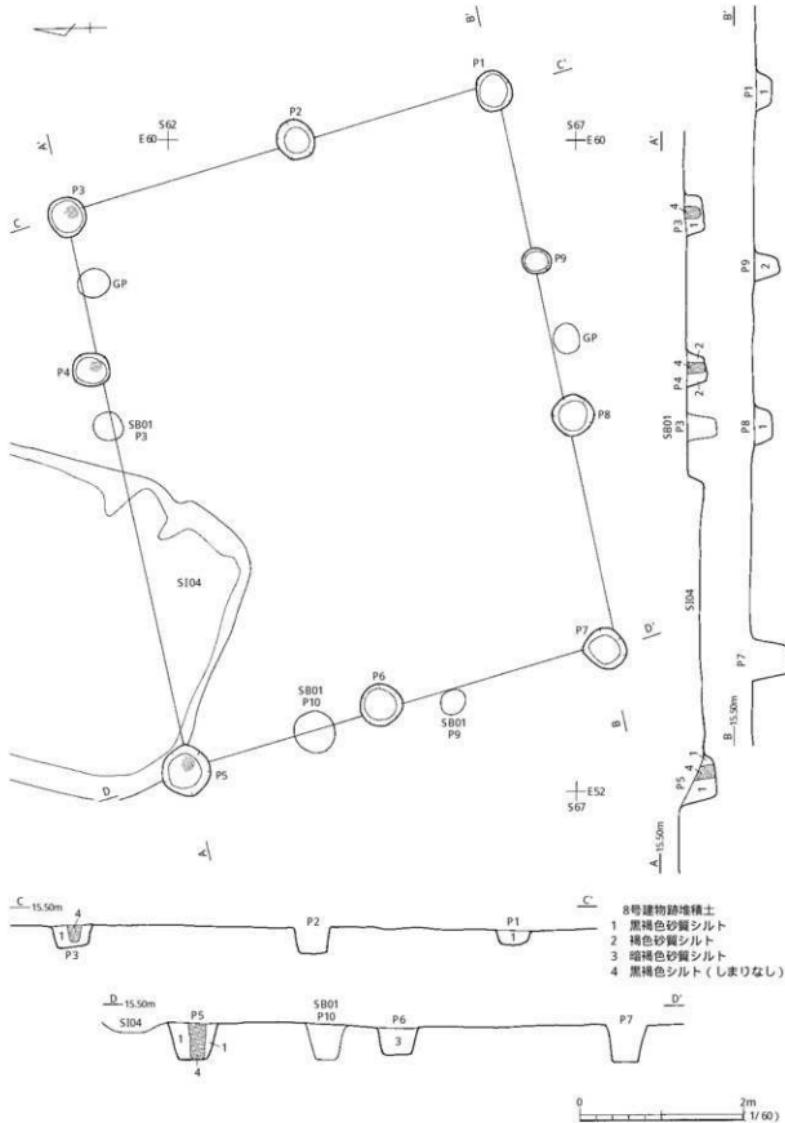


図63 8号建物跡

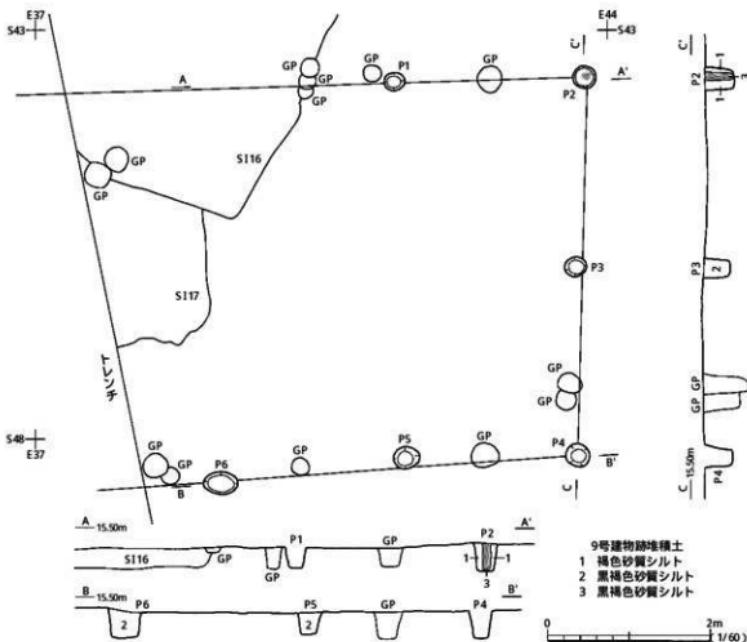


図64 9号建物跡

住居跡の検出時に、本遺構の柱穴が検出されなかったことから、本遺構のはうが古いと考えた。ただし、堆積土が酷似しているため、検出時に見落としている可能性もある。16号・17号住居跡の底面では、本遺構の柱穴は検出されなかった。

本遺構は西辺を試掘坑に破壊されているため、全体の規模は不明である。検出された柱穴は6基であり、試掘坑の先に柱穴が検出されなかったことから、東西3間×南北2間の東西棟側柱建物跡と考えられる。柱間距離は2.2m～2.3mであり、本遺構の規模は南北4.6m、東西は推定で6.7m前後である。柱穴が3基残っている南辺を基準にすると、軸方位はE 4°Nを指していた。柱掘形はP 6が楕円形、ほかはほぼ円形である。P 6は長径40cm、短径28cmである。ほかの柱穴は直径26cm～30cmであった。検出面からの掘形の深さは26cm～36cmで、底面標高は15.0m～15.1mであった。

堆積土は褐色・黒褐色の砂質シルトで、P 2のみに柱痕が見られた。P 2の1層は人為堆積土であるが、ほかの柱穴の堆積土は堆積状況が不明である。本遺構からは遺物は出土しなかった。

まとめ

本遺構は試掘坑に破壊され、遺存率が低いものの、3間×2間の東西棟側柱建物跡と考えられる。

本遺構にともなう遺物は出土していないが、16号・17号住居跡に壟されているとするならば、本遺構は古代に機能していたと考えられる。

(轡 田)

第5節 柱 列 跡

本遺跡で検出された小穴のうち、規則的な配列を持つものの、掘立柱建物跡にはならなかったものを、柱列跡として報告する。1号柱列跡は欠番である。

2号柱列跡 S A02

遺構 (図65)

本遺構はE15グリッドで検出された。検出層位はⅢ a層で、検出面標高は15.3m～15.4mである。3号柱列跡のP 4と本遺構のP 2とが重複している。重複関係がはっきりしなかったため、新旧関係は確認できなかった。ただし、本遺構の柱穴の方が深いと考えられ、柱穴の断面に3号柱列跡の浅い柱穴が観察できなかったことから、本遺構の方が新しい可能性が高い。

柱穴は4基検出された。当初掘立柱建物跡の1辺をなすものと考えたが、対応する辺は認められず、最終的に柱列と判断した。南北方向に並ぶ柱列で、その方向はN 4° Eを指している。柱列の長さは6.4mである。柱間距離はP 1～P 2が1.8mであり、ほかは2.3mであった。柱掘形はいずれも円形で、直径30cm～40cmである。検出面からの深さは、P 1が32cm、ほかが62cm～76cmである。底面標高もP 1が15.0mであるほかは、14.7m～14.8mであり、P 1が特に浅くなっている。

堆積土は暗褐色から黒褐色で、P 1のみに柱痕が認められた。本遺構からは遺物は出土しなかった。

まとめ

本遺構は4本の柱からなる柱列と考えるが、上記のようにP 1はほかの柱穴と明らかに異なっており、柱列としてはP 2からP 4までの3基で完結する可能性が高い。付近には軸線を一にする遺構がないため、本遺構がどのような機能を持っていたのか不明である。時期を特定することはできなかった。

(轡 田)

3号柱列跡 S A03

遺構 (図65)

本遺構はE15グリッド、Ⅲ a層で検出された。検出面標高は15.3m～15.4mである。3号掘立柱建物跡、9号掘立柱建物跡、2号柱列跡と重複している。3号建物跡、9号建物跡とは、直接柱穴の重複がないため、新旧関係は不明である。2号柱列跡のP 2と本遺構のP 4は同じ柱穴であるが、重複関係ははっきりしなかった。ただし、本遺構の柱穴は深いと考えられ、P 2の断面に浅い掘形が観察できなかったことから、本遺構の方が古い可能性が高い。

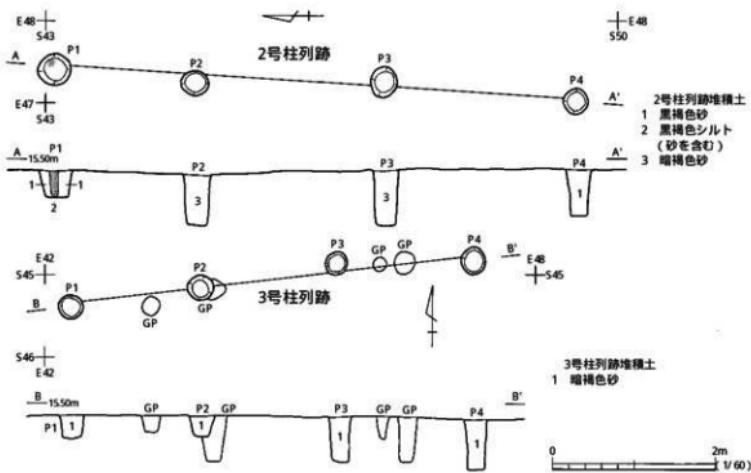


図65 2・3号柱列跡

検出された柱穴は4基であり、東西に並んでいた。軸線はE 6°Nを指している。柱列の長さは5.0mで、柱間距離は1.6m～1.7mのはば等間である。掘立柱建物の1辺である可能性も考えられたが、本遺構に対応する柱穴は検出されなかった。柱掘形はいずれも円形で、直径は28cmである。検出面からの深さはP 1が30cm、P 2が26cm、P 3が55cm、P 4が62cmで、極端に深さが異なる。本来3号柱列跡の掘形は浅いもので、P 4は2号柱列跡の柱穴を掘った際に深くなったものと考えられる。本遺構の堆積土はいずれも暗褐色砂であるが、堆積状況は不明である。本遺構からは遺物は出土しなかった。

まとめ

本遺構は柱穴4基からなる柱列の跡であるが、付近に軸線と同じくする遺構は存在しないことから、どのような機能を持っていたか、不明である。また、時期を特定することもできなかった。

(轡 田)

第6節 土 坑

遺構 (図66～73、写真図版33～44)

本遺跡の調査では51基の土坑が検出された。検出層位はⅢ a 層、Ⅲ b 層である。

土坑の多くには形態、堆積土に規則性は見られず、こうした観点からは分類することができなかった。土坑は竪穴住居跡の付近で検出されていることから、大部分は古代に属するものと考えられる。

遺構番号は調査時に検出した順につけたものである。調査の進展に伴って遺構でないと判断されたものについては、欠番とした。すべての土坑については観察表（表3）に記載した。観察表における観察項目は次の通りである。

1 形 態

平面形（検出面における土坑の形態を記載）

円 形：円形を呈するもののうち長径が短径の1.2倍未満のもの

椭円形：円形を呈するもののうち長径が短径の1.2倍以上のもの

方 形：方形を呈するもののうち長軸が短軸の1.2倍未満のもの

長方形：方形を呈するもののうち長軸が短軸の1.2倍以上のもの

不整形：上記の分類に当てはまらない、一定の平面形をもたないもの

断面形（土層観察用の断面を利用）

台形状：底部に平坦面を持ち、緩やか～急斜度に立ち上がるもの

箱 状：底部に平坦面を持ち、ほぼ垂直に立ち上がるもの

皿 状：底部に平坦面を持たず、緩やかに立ち上がるもの

半円状：底部に平坦面を持たず、急斜度～ほぼ垂直に立ち上がるもの

階段状：階段状に複数段の立ち上がりを持つもの

立ち上がり（おおよその角度によって緩やか・急斜度・垂直に分類）

2 規 模

検出面と底面について、それぞれ長径（長軸）・短径（短軸）・標高を記載した。深度は検出面からの深さを記載した。

3 堆積土

分層できた数、土坑内で主体を占める土色を記載した。堆積状況は調査時に判断したものを報告書作成中に修正して記載した。

4 遺 物

土坑内から出土した遺物の種類と数量を記載した。

5 時 期

調査時および報告書作成中に判断したものを見た。判断できなかったものについては空欄とした。

6 重複関係

土坑と重複する遺構について、その新旧関係を記載した。土坑からみて、「>古い遺構」、「<新しい遺構」を示している。

ここでは本遺跡で検出された土坑のうち、堆積状況や形態が特異な17号・23号・45号土坑について報告する。

第6節 土 坑

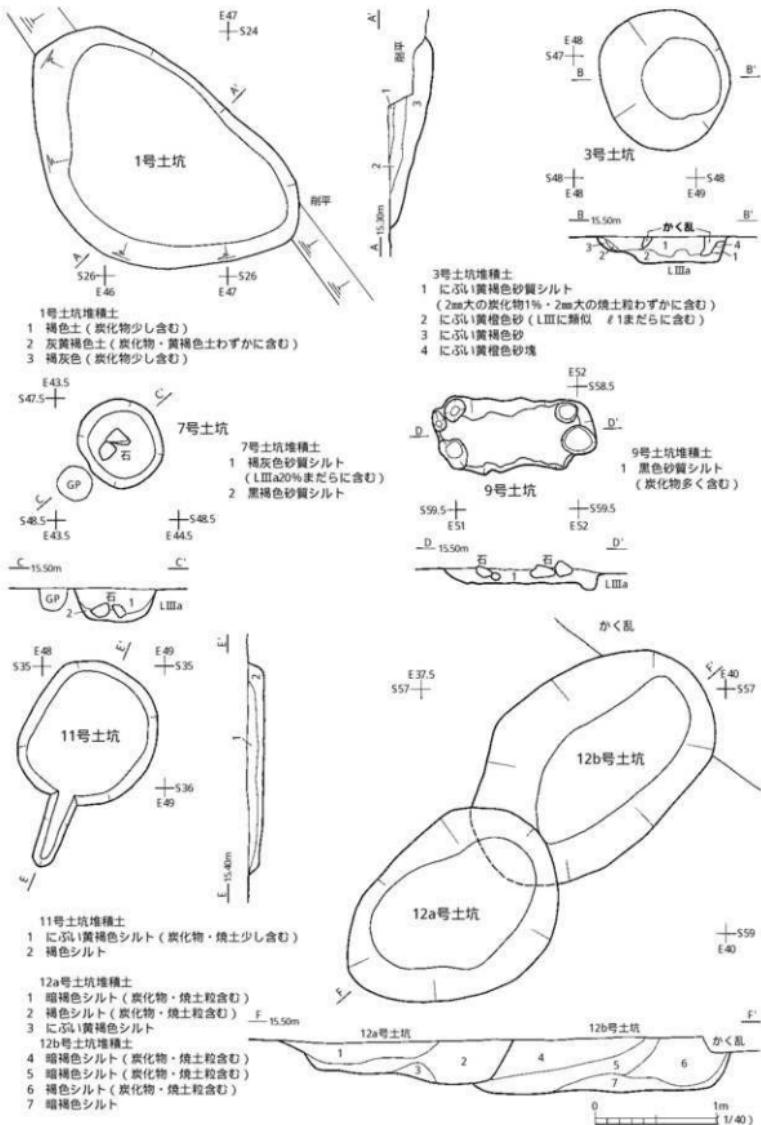


図66 1・3・7・9・11・12a・12b号土坑

17号土坑 S K17 (図67, 写真図版35)

本遺構は32号土坑と重複しており、検出面の違いから、本遺構の方が新しいことが明らかである。周辺には22号住居跡および23号住居跡がある。直接の重複関係はないものの、本遺構が火葬場であると考えられることから、これらの住居跡とは時期を異にしているものと推定される。

遺構検出作業中、真っ黒い炭化物のなかに焼骨片が混じっている堆積土を検出した。検出面はⅢa層上面である。平面形は長さ114cm、幅66cmの隅丸長方形で、長辺である西辺中央部に50cmの突出部がついている。本遺構の周辺、特に突出部の付け根部分は熱を受けて赤変していた。検出段階で火葬場であることが予想されたため、掘削開始前に調査員・作業員全員で焼香し、死者の冥福と調査の安全を祈った。

突出部を縱に割るように南半分を先に掘削し、掘り残した北側の壁で土層を観察した。堆積土は4層に分けられた。4層は掘削内の埋土である。一度掘った穴の形を整えるために、本遺構が機能する以前に埋め戻された土である。3層は炭化材を多く含み、骨片も含まれていることから、火葬時の堆積である。1層・2層は火葬後の埋め戻しで、1層は焚口が崩落したものであろう。

長方形部分の底面までの深さは10cm、突出部では22cmで、突出部の方が深くなっている。底面は凹凸があり、突出部の底面が長方形部分まで伸びている。本遺構南側底面で20cm大の礫が出土した。

以上のことから、本遺構は地面を掘りくぼめて薪を組み、その上に遺体を乗せて作りつけた焚口から火をつけた施設であったと推定する。遺物が出土していないため、時期の確定は困難であるが、32号土坑との重複関係から古代以降であり、Ⅱ層に類似した土が堆積していることから、本遺跡のなかでは比較的新しい遺構であると考えられる。

(齊田)

23号土坑 S K23 (図68, 写真図版36)

本遺構は調査区中央部東端のF15・16グリッドに位置し、Ⅲa層上面で検出された。重複する遺構はなく、本遺構の北約1.5mに1号特殊遺構が位置する。

平面形は円形で、規模は長径160cm、短径135cm、検出面から底面までの深さは54cmを測る。中央から南半分にかけて直径90cmほどの落ち込みを有する。底面はほぼ平坦であり、北半部から西にかけての周壁は緩やかに、落ち込みを伴う南半部は垂直ぎみに急斜度で立ち上がる。堆積土は4層に分類され、1・3・4層からは土師器片が出土している。1層は須恵器・鉄製品・鉄滓を含む暗褐色土、2層は周壁からの崩落土であり、炭化物を含む褐色土、3層は黄褐色土、4層はにぶい黄褐色土である。堆積状況および遺物の出土状況は人為的に埋め戻された状況を示している。緩やかに立ち上がる北半部から西にかけての周壁は埋め戻された時に崩されたものと考えられ、本来の立ち上がりは垂直に近いものであったと推測される。

本土坑からは土師器314点、須恵器3点、鉄製品2点が出土している。そのうち土師器4点、鉄



図67 13~15・17・20~22号土坑

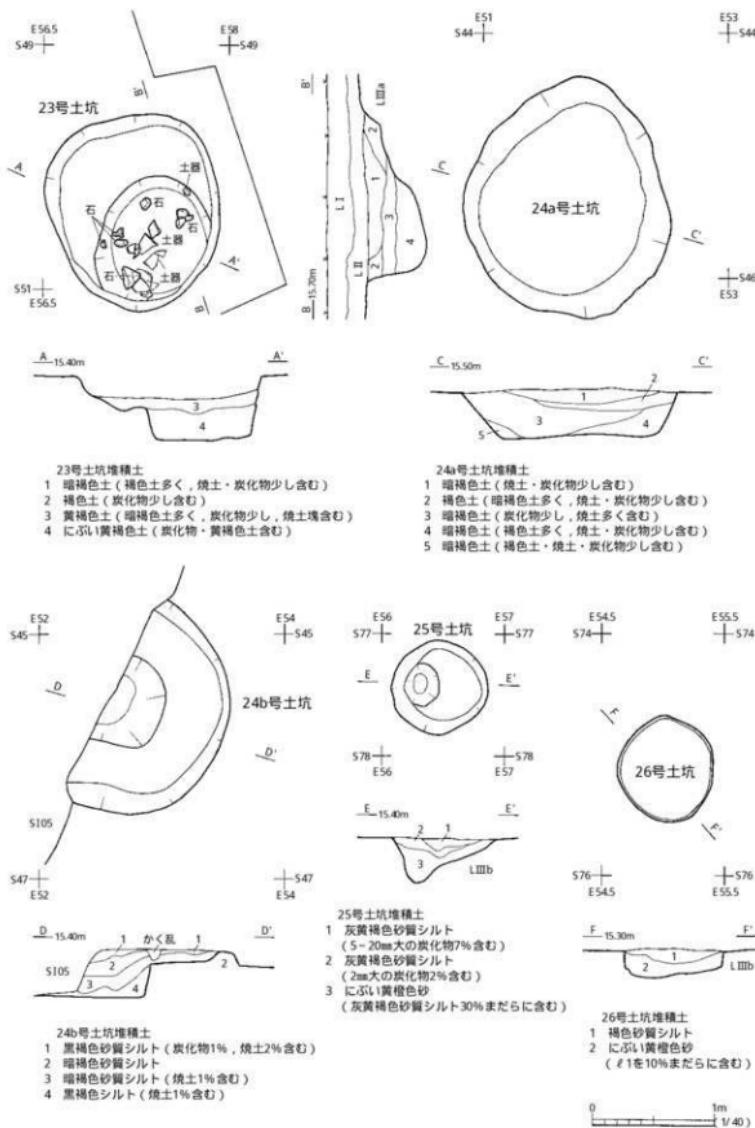


図68 23~26号土坑

製品2点を図74に示した。

本土坑は1層と4層出土の土師器片が接合している状況から、落ち込み部も含めて1時に機能していたものである。埋め戻された状況や、鉄製の刀子・釘が出土していることから、本土坑は埋葬施設であった可能性がある。所属時期は明確にできないが、平安時代以降と推定される。形態・規模・堆積状況が類似していることから、30b号・31号土坑も本土坑と同様の機能を持っていたと推測される。

(佐藤)

45号土坑 SK45(図72, 写真図版41)

本遺構は調査区中央北部のE14グリッドから検出された。検出面はⅡ層である。11号土坑と重複し、本遺構が新しい。

当初は溝状の土坑と考えたが、土坑の壁面に強く焼けたような跡があること、また堆積土から炭化物や焦土に混じって、微細な焼骨片が多数出土していることから、本遺構は17号土坑と同様の火葬施設の底部と考える。したがって、削平されていたものの、本遺構も本来は長方形に突出部が付く平面形を持っていたものと推測できよう。本遺構内には直径5cm程度の小ビットが複数検出されており、これらは櫛状に組まれていた棺台の痕跡であろう。

時期は検出面の高さや骨片の状況から、中世以降と推測される。

(菊田)

土坑出土遺物(図74, 写真図版67・71・73・74)

土坑から出土した遺物のうち、14点を図化した。1~8, 10・11はロクロを使用した土師器の杯、9は土師器の甕、12は須恵器の杯、13・14は鉄製品である。1, 10~12は12号土坑から、2~4, 9・13・14は23号土坑から出土した。

1は回転糸切りの後、外面体部下端から底部周縁をヘラケズリで再調整している。2・3は回転糸切りの後、外面体部下端にヘラケズリを施している。2は外面体部に墨痕があるが、文字の判読はできなかった。3は外面体部に横位で「平□」の墨書がある。2字目にはウ冠が見られ、あるいは「平安」と書かれたものであろうか。4は外面体部から底部にかけて墨痕が見られるが、文字は判読できなかった。5は外面底部に墨痕が見られるが、文字の判読はできなかった。7は外面体部にやや傾いているが正位で「少川」の墨書が見られる。10は土師器杯の外面体部に正位で「少川」と書かれている。11は土師器杯の外面体部に墨書が見られるが、破片資料のため、文字の判読はできなかった。

6は内外面ともにヘラミガキ・黒色処理を施した杯である。外面は緻密な横方向のヘラミガキが体部上半に施され、黒色処理の痕跡が部分的に残っている。8は土師器の高台付杯である。回転糸切りの後、高台を貼り付けている。

9はロクロを使用した甕である。長胴形を呈し、口縁部に最大径がある。口縁部は大きく外反し、口縁端部で直立する。外面胴部下半にヘラケズリを施している。外面には部分的にすが付着している。

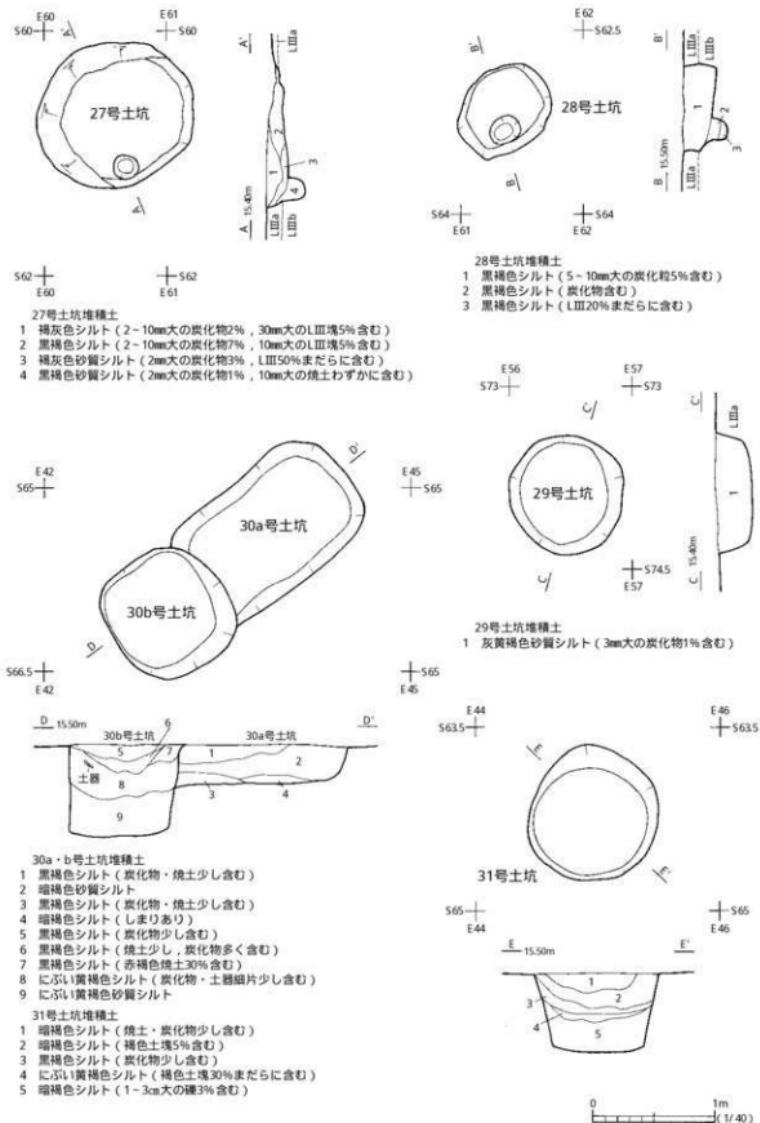


図69 27~31号土坑

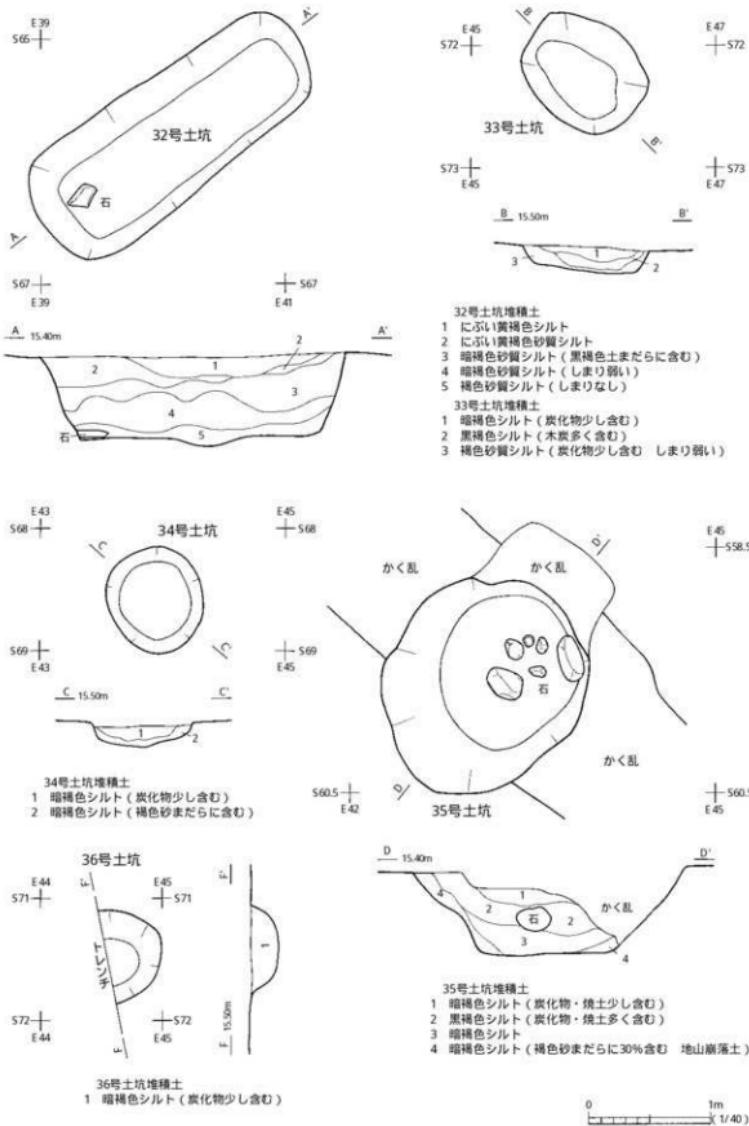


図70 32~36号土坑

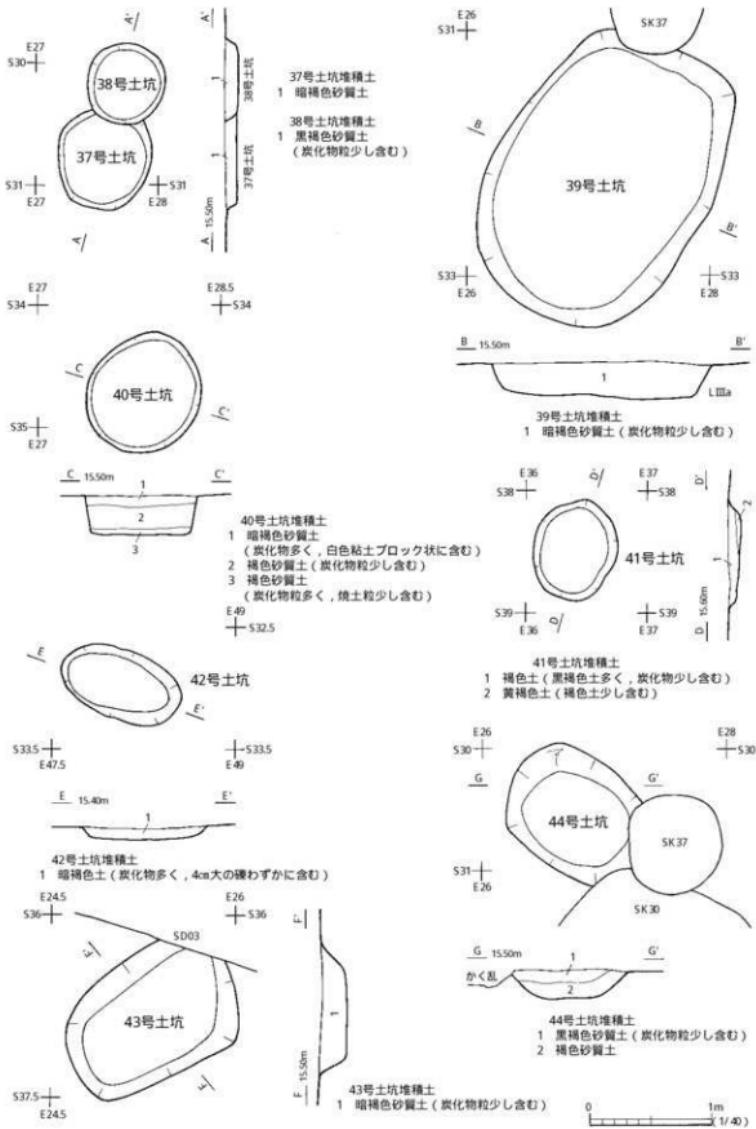


図71 37~44号土坑

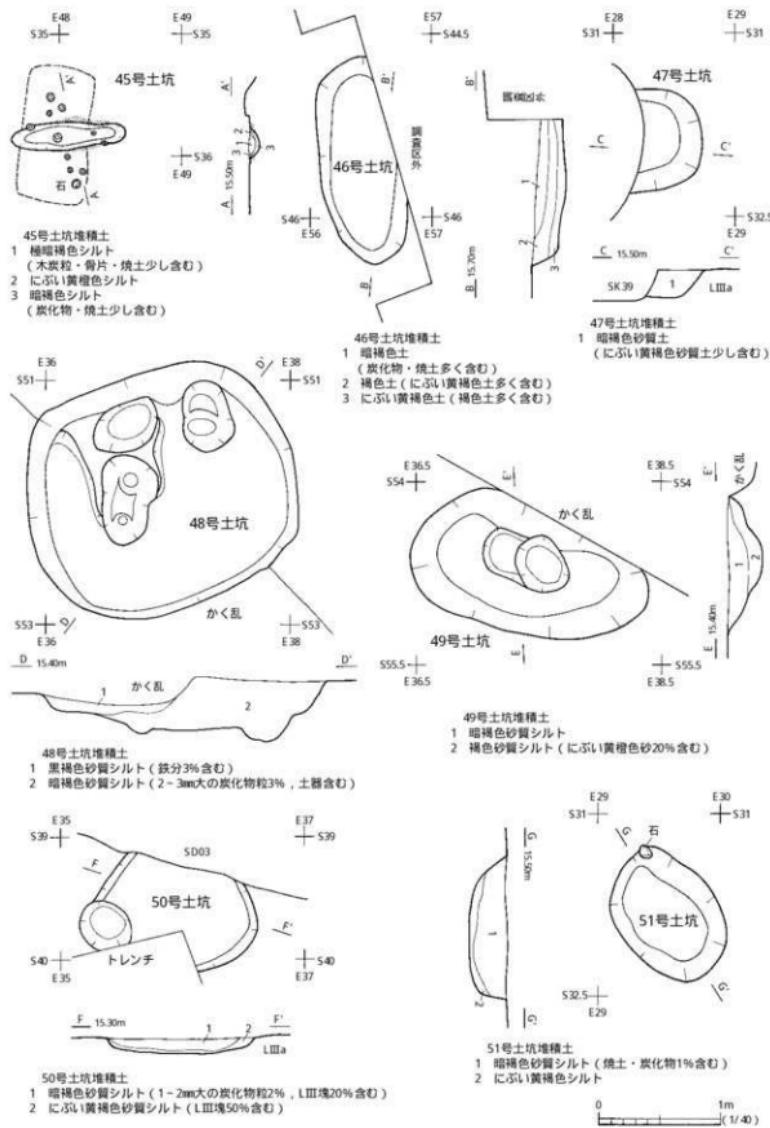


図72 45~51号土坑

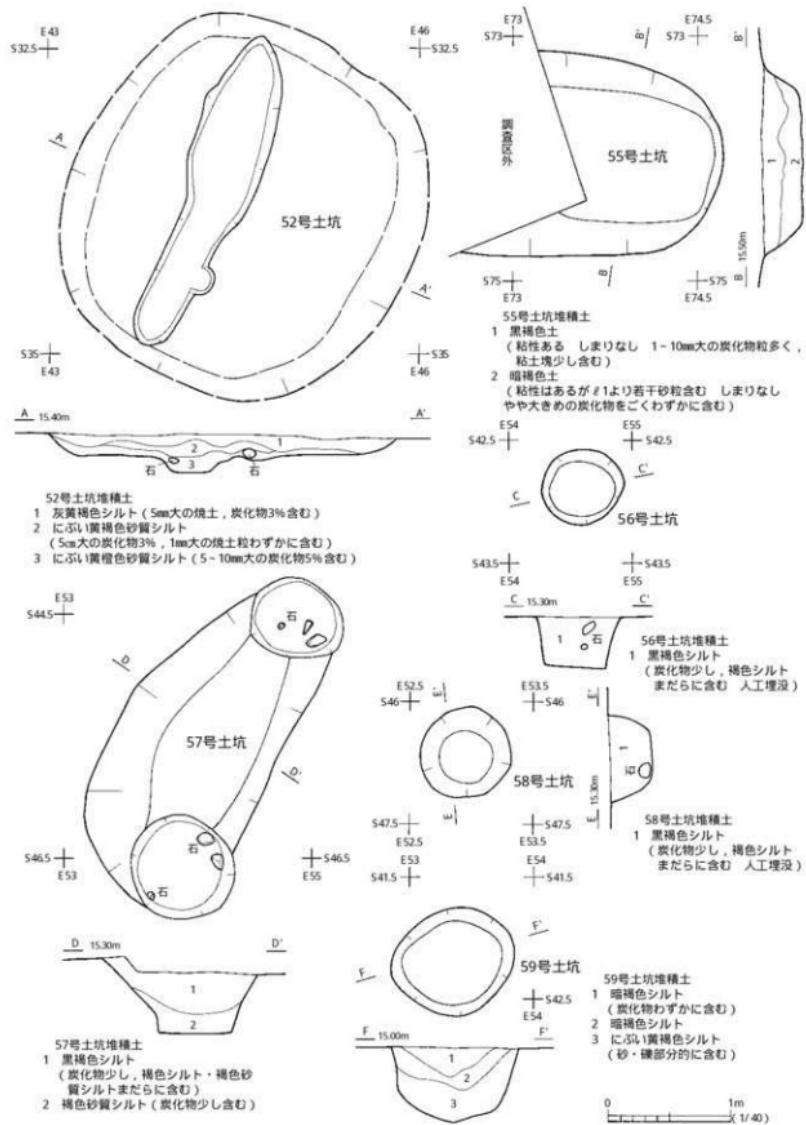


図73 52~55号土坑

表3 土坑觀察表

番号 ブリュ	形態 平面形 断面形 立上地形	幅員 (cm) 厚径 (cm) 槽高 (cm)	底面 長径 (cm) 厚径 (cm) 槽高 (cm) 傾斜度 (cm)	堆積土 堆積土と上層		堆積状況	遺物	輪郭	堆積個体	備考
				堆積土 自然	堆積土 自然					
1 E11	不整形 直底 線ひびき	366 ~ 15.2	216 ~ 14.9 36	3	褐色	自然	土頭部E1 直壁部1	古代山廬	>SKD9	
3 E35	円形 亂形状 金糸庵	115 108 15.4	64 64 15.2 20	1	紅茶-黃褐色	不明				2層中より露出
7 E35	円形 平底状 金糸庵	72 67 15.3	56 30 15.1 27	2	褐色	人为				
9 F16	長方形 直底 線ひびき	128 66 15.3	113 69 15.2 15	1	黑色	人为	土頭部F1 直壁部1	古代山廬		黒縞・灰化物多
11 E14	不整形 台形状 金糸庵	174 104 15.2	166 90 15.1 15	2	紅茶-黃褐色	自然	土頭部E1 直壁部1	古代山廬		1層上部より土 盤片 黑化物・斑状 含む
12a D16	精円形 斜段状 金糸庵	192 148 15.4	184 94 15.0 36	3	褐色	人为・自然	土頭部D16 斜壁部1 直壁部1	古代山廬		
12b D16	精円形 台形状 金糸庵	~ 150 15.4	164 73 14.9 40	4	褐色	人为・自然	土頭部D16 斜壁部1 直壁部1	古代		黒縞物・斑状 含む
13 D13	円形 亂形状 線ひびき	96 88 15.4	56 63 15.2 30	2	黑褐色	自然	土頭部D13 直壁部1	古代		紅茶中央に黒化
14 D13	円形 台形状 金糸庵	115 96 15.4	72 46 15.0 34	1	褐色	自然				
15 E16	円形 亂形状 金糸庵	106 96 15.4	68 56 15.1 36	5	褐色-黃褐色	自然				
17 E17 / E17	不整形 斜段状 金糸庵	116 111 15.3	79 56 15.0 22	2	褐色	人为				
20 F16	円形 ? 7 台形状 金糸庵	110 22 15.4	82 26 15.0 26	2	褐色	人为	土頭部F16 直壁部1	古代	<SK32	黒縞・土質分出
21 F15	精円形 台形状 金糸庵	89 70 15.3	82 40 15.0 36	1	褐色	人为	土頭部F15 直壁部1	古代		上・中傾斜
22 F15	円形 台形状 金糸庵	92 73 15.3	69 40 15.0 32	1	褐色	自然	土頭部F15 直壁部1	古代		
23 F15 / 16	円形 亂形状 金糸庵	100 135 15.3	87 75 14.8 54	4	褐色	人为	土頭部F15 直壁部1 斜壁部1	古代		
24 E15	円形 台形状 金糸庵	114 172 15.3	159 132 14.9 80	5	褐褐色土	自然	土頭部E15 直壁部1	古代山廬	>SKD9	黒縞土多く含む
24b F15	円形 亂形状 金糸庵	182 ~ 15.3	166 ~ 14.9 30	4	褐褐色土	自然		古代	<SKD9	黒縞土多く含む
25 F16	円形 亂形状 金糸庵	27 75 15.2	28 12 14.9 30	2	褐色	自然				
26 F16	円形 亂形状 金糸庵	34 80 15.2	35 26 15.0 24	2	褐色	自然				
27 G17	円形 亂形状 金糸庵	126 120 15.4	13 12 15.1 32	2	褐色土-黑褐色	人为	土頭部G17 直壁部1	古代山廬		
G7	円形 亂形状 金糸庵	81 65 15.4	16 32 15.0 36	2	黑褐色	人为	土頭部G7 直壁部1	古代山廬		
29 F18	円形 台形状 金糸庵	86 94 15.3	84 72 15.0 30	1	褐褐色土	自然	土頭部F18 直壁部1	古代山廬		
30a E17	長方形 台形状 金糸庵	~ 98 15.3	~ 77 15.0 30	1	褐色	自然	土頭部E17 直壁部1	古代山廬	<SKC70b	黒化物・地少 量含む
30b E17	方形 築底 重直	102 94 15.4	83 81 14.6 71	5	紅茶-黃褐色	自然			>SKC70	黒化物・地少 量含む
31 E17	円形 台形状 金糸庵	110 106 15.3	106 87 14.7 65	5	褐褐色	自然	直壁部5g			
32 D17 / E17	長方形 台形状 金糸庵	258 100 15.4	217 60 14.6 75	3	褐褐色	不明	土頭部D17			紅茶上端
33 E18	精円形 台形状 金糸庵	105 86 15.3	80 43 15.1 23	3	褐色	自然	土頭部E18			木炭多量含む
34 E17	円形 亂形状 金糸庵	84 78 15.3	64 56 15.1 30	2	褐褐色	自然	土頭部E17 直壁部1			黒化物少量化含 む・中傾斜風化を 受けた跡
E16 / F16	不整形 斜段状 金糸庵	105 100 15.3	129 110 14.6 68	4	褐褐色	自然	土頭部E16 直壁部1			
36 E18	円形 ? 築底 亂形状	75 ~ 15.3	57 ~ 15.1 22	1	褐褐色	自然			>SKC70c	黒化物少量化含む
37 C14	内円形 台形状 亂形状	~ 7.7 15.4	~ 6.8 15.3 11	2	褐褐色	自然			<SKC70	
38 C11 / 14	円形 台形状 亂形状	67 63 15.4	37 54 15.3 12	1	黑褐色	自然	土頭部C11		>SKC7	
C11	内円形 台形状 亂形状	204 174 15.4	213 132 15.1 30	1	褐褐色	自然			>SKC7 3c, <SKC7	
40 C14	円形 台形状 金糸庵	99 90 15.4	75 68 15.1 32	3	褐色	人为		古代		
E11	円形 築底 亂形状	85 79 15.5	79 58 15.1 30	2	褐色	自然				黒褐色土多量含 む
42 E14	内円形 台形状 亂形状	100 37 15.2	88 41 15.1 12	1	褐褐色	自然	直壁部5mg		>SKC7	
C14	内円形 台形状 亂形状	142 101 15.4	123 79 15.2 24	1	褐褐色	自然			<SKC7	
H11 / H14	内円形 台形状 亂形状	119 92 15.4	97 79 15.2 21	2	褐色	自然	土頭部H11		>SKC7 3c, <SKC7	
E14	内円形 亂形状 亂形状	95 25 15.4	74 13 15.3 9	3	褐褐色	人为			44 + 47	
44 F15	精円形 台形状 金糸庵	170 ~ 15.2	162 54 15.0 28	3	褐色	自然				画面に多量の木 炭、1・2段間 に白色土
E11	円形 築底 亂形状	85 79 15.5	79 58 15.1 30	2	褐色	自然				黒褐色土多量含 む
47 C14	円形 ? 台形状 金糸庵	~ 84 15.4	~ 38 15.2 25	1	褐褐色	自然			>SKC7	
D16	内円形 斜段状 亂形状	221 209 15.3	190 146 14.9 40	2	褐褐色	自然	土頭部D16 直壁部1		<SKC7	黒化物少量化含む
E16	不整形 亂形状 亂形状	199 165 15.3	169 64 15.1 18	2	褐褐色	自然				
D11 / 15	不整形 亂形状 亂形状	~ 15.2	124 112 15.1 14	2	褐褐色	自然				
C11 / D14	内円形 台形状 亂形状	108 81 15.2	83 52 15.0 30	2	褐褐色	自然				
E14	内円形 亂形状 亂形状	302 297 15.3	261 228 15.0 31	3	紅茶-黃褐色	人为	土頭部E14 直壁部1		>SKC7	木炭1+骨片・ 黒土多量含む
55 F22	内円形 台形状 亂形状	~ 15.4	~ 108 15.1 22	2	褐褐色	不明				
56 F17	内円形 台形状 金糸庵	66 63 15.2	51 21 14.8 45	1	褐褐色	人为				画面に黒土
F13	内円形 台形状 金糸庵	206 126 15.2	~ 72 16.6 43	2	褐褐色	自然	土頭部F13			1・2層間 に白色土
F13	内円形 平底状 金糸庵	72 72 15.2	~ 44 14.9 36	1	褐褐色	人为	土頭部F12			黒褐色土多量含 む
F13	内円形 平底状 金糸庵	73 70 15.2	79 68 14.3 60	3	紅茶-黃褐色	自然	土頭部F12			下層に通

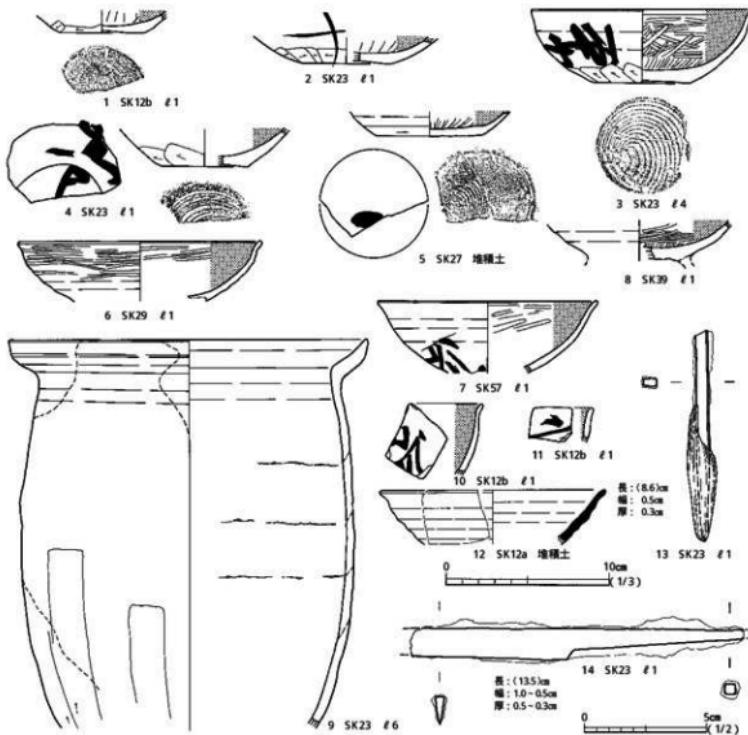


図74 土坑出土遺物

12は須恵器の杯である。復原された口径は13.8cmである。13は鉄製の釘である。上半が欠損しており、本来の長さは不明である。長さ8.6cmが遺存している。断面形は幅0.5cm、厚さ0.3cmの長方形である。先端部に木質が付着していた。14は鉄製の刀子である。13.5cmが遺存しているが、本来の長さは不明である。刃の元幅は1.3cm、元重は0.3cmである。

(轡 田)

第7節 溝 跡

本遺跡では6条の溝跡が検出されている。調査時に遺構番号を1号から順に7号まで付けたが、1号溝跡は畦と平行に伸びる現代の水路跡であることが明らかになったため、欠番とした。

2号溝跡 SD02

遺構 (図75・76, 写真図版45)

本遺構はE19, F19, G18・19の各グリッドにまたがる、東西に伸びる溝跡である。長さは20m程検出されたが、西端はかく乱に突き当たり、東端はさらに調査区外に伸びている。

遺構検出作業中に、やや蛇行する砂の列として検出された。検出層位はⅡ層である。幅は2m～4mである。検出面標高は24号竪穴住居跡、25号竪穴住居跡、6号溝跡と重複している。平面形の重複関係によって、そのいずれよりも新しいことが明らかである。2号溝跡は5a号・5b号溝跡と接しているはずであるが、圃場整備の際のものと思われるかく乱を受けていたため、重複関係は不明であった。軟弱な地盤を強化するため、人頭大の礫が多数埋められていた。

断面形状は緩やかな皿状で、残存していた深さは42cmであった。底面には凹凸があり、本遺構の西側と東側の底面の高さを比べることはできなかった。堆積土は8層に分けられる。しまりのない砂やシルトの堆積で、いずれも流水による堆積の様相を呈し、自然に埋没した様子を見せる。底面には酸化鉄が固着していた。護岸のための施設や、管理していた様子は確認できなかった。

本遺構からは土師器165点、須恵器23点、羽口1点、鉄滓65gが出土しているが、いずれも磨滅した小片ばかりであり、図化できなかった。

まとめ

本遺構は素ぼりの溝で、水田耕作用の水路であったと考えられる。水の流れは、周辺の地形から推測すると、おそらく西から東へ流れていたのであろう。本遺構の機能時期は、遺物が乏しいため確定できない。遺構の重複関係から、古代以降であることは明らかである。本遺構の掘りこみが圃場整備以前の水田耕作土と考えられるⅡ層から行われていることから、かなり新しいものであると思われる。

(轟 田)

3号溝跡 SD03 (写真図版46)

本遺構は、調査区中央部のC～E14およびD～E15グリッドに位置する。検出面はⅡ層である。検出面の標高は、西端で15.4m、東端で15.3mであり、わずかに東に傾斜している。43号土坑、10号竪穴状遺構と重複し、本遺構が新しい。また、多数のグリッドピットと重複し、そのうち10基は本遺構の方が古い。

溝跡は調査区を東西に横切っており、E15グリッド北西隅から西に二股に分かれている。規模は、

本流と考えられる部分では東西の長さが30.4m、幅は80cm前後、深さは20~30cmである。南に分岐する部分では、分岐部から調査区端までの長さ10m、幅は40cm前後、深さは5cm前後である。断面形は逆台形を呈する。堆積土は最大5層に分かれ、レンズ状の自然堆積である。また溝跡の底面や壁面では、土中の鉄分が赤錆化している部分が多く見られる。下流部にあたるE14グリッド付近では、底面から礫が検出されている。遺物は土師器58点、須恵器1点、羽口1点が出土したが、いずれも流入したものと考える。

本遺構は、底面の状況や堆積状況から、耕作地を区画する溝を兼ねた水路と考えられる。流水の方向は西から東である。現在の耕地の直下から検出されたため、本遺構は近世まで機能していたと考える。

(菊田)

4号溝跡 SD04 (写真図版47)

本遺構は、調査区北部のD~E13グリッドから検出された。検出面はⅡ層上面である。この付近は上部を削平されており、また東端は圃場整備の際に大きく削平されて失われている。検出面の標高は西端で15.4m、東端で15.2mと、僅かに東に傾斜している。14号住居跡、1号土坑と重複し、本遺構が新しい。

溝跡の規模は、遺存部の長さがおよそ25m、幅は30~60cm、深さは4~12cmである。E13グリッド付近で、池状に広がる部分があり、底面や壁面において鉄分の錆化による赤変がみられる。断面形は半円形であるが、上部を大きく削平されているため、本来の断面形は不明である。堆積土は1層のみ認められ、灰黄褐色粘質土が堆積していた。遺物は出土していない。

本遺構は、水路を兼ねた耕作地の区画溝と考える。流水の方向は西から東である。下流部の池状になっている部分では、1号土坑から土師器がまとまって出土しており、本来住居跡であった部分に流水が浸透して、遺構を破壊した可能性もある。本遺構の時期であるが、南側にはほぼ平行する3号溝跡と同時期と考えられ、近世まで機能していたと考える。

(菊田)

5号溝跡 SD05a, SD05b

調査区南半分を縦貫する溝跡である。調査した順にしたがい、5a号と5b号とに分けて報告するが、同じところを流れていた1条の溝である。5a号は廃絶直前の溝の状態であり、5b号は古代の溝の状態である。調査開始当初は1時期にのみ機能していたと考えていたため、一部5a号の底面に気づかず掘りすぎてしまった。

5a号溝跡 遺構 (図75~78, 写真図版48・49)

本溝跡は調査区の南半分に位置している。D18グリッドから北西方に、I25グリッドから南東方向に、それぞれ調査区外に伸びている。検出面はⅡ層である。6号溝跡と重複し、そのいずれよりも新しい。また、2号溝跡と接しているはずであるが、かく乱を受けており新旧関係は不明であった。

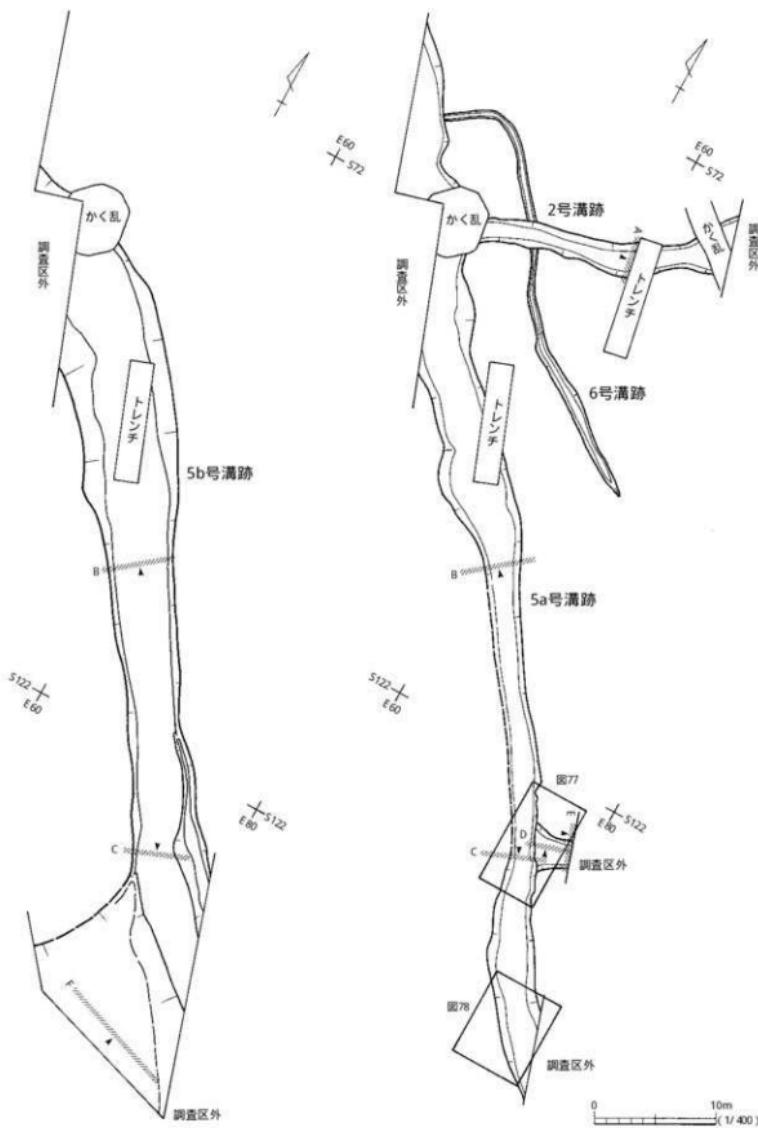


図75 2・5a・5b・6号溝跡

第2章 構造と遺物

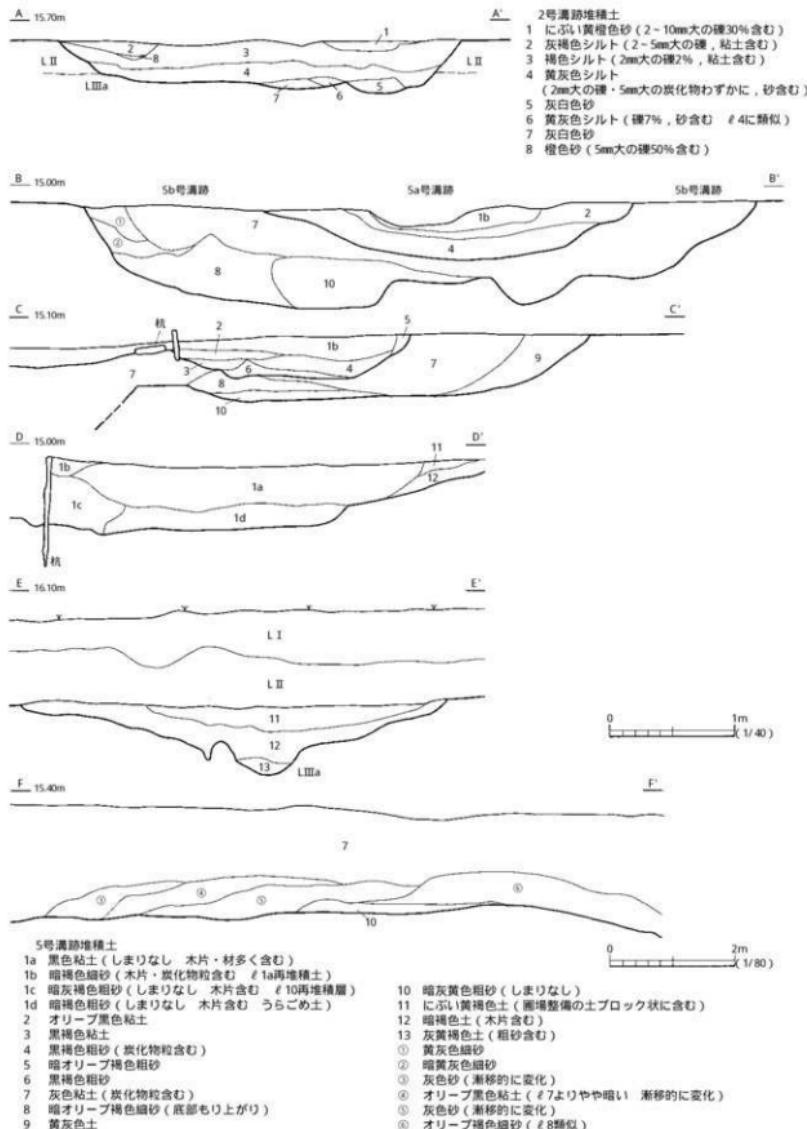


図76 2・5 a・5 b号溝跡土層断面図

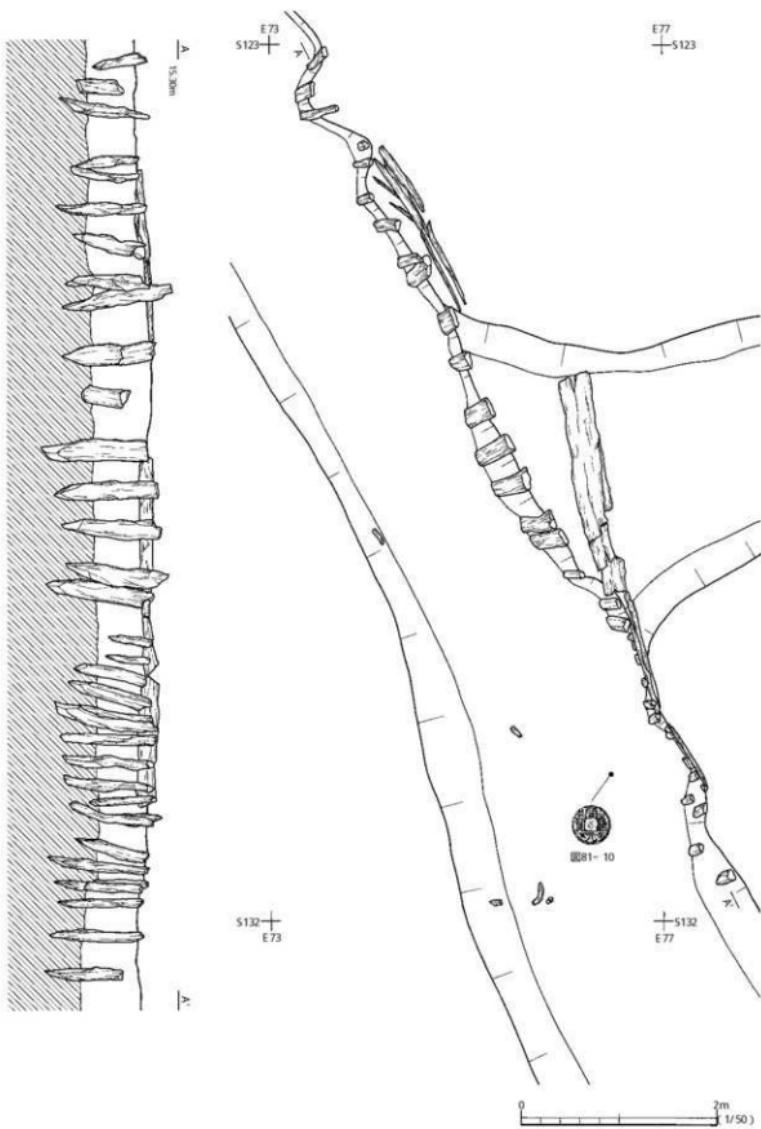


図77 5号溝跡 桿列検出状況(1)



図78 5a号溝跡 杭列検出状況(2)

の堆積は溝跡が廃絶した後に短期間で起こったものであろう。

本遺構では杭列が検出された（図77・78）。崩落しやすい土質のため、護岸を目的としたものであろう。杭列は本遺構内の数箇所で検出されているが、特にH23・24グリッド付近に集中している。H23グリッド付近では、0.5m～1.2mほどの杭が10cm～30cmの間隔で鉛直方向に打ち込まれ、さらに杭の裏側に横木が渡してあった。杭はいずれも割材で、板状にしたもの、角材状にしたものがある。先端は鉈状の鋭利な刃物で尖らせてある。横木は板状である。この地点は本溝跡が分岐するところであり、これらの護岸施設は東に向かう溝をふさぐ形になっている。なんらかの理由で東に向かう水路を埋め戻し、杭を打って補強したのであろう。調査時点では杭の基部のみが残存しており、本来の規模は不明である。

H24グリッド付近の杭列はH23グリッドのものとはだいぶ様子が異なる。杭は割材であるが細い角材状のものが多くなり、溝跡の壁に直交するように斜めになった状態で検出された。密度もまばらである。この杭列も基本的には護岸の機能を持っていたのであろう。この地点は5b号段階には深い落ち込みがあった場所であり、地盤が軟弱であったと思われる。

5a号溝跡出土遺物（図79・80、写真図版68）

本溝跡からは土師器525点、須恵器42点、繩文土器1点、陶磁器1点、石器2点、鉄滓10gなど

本溝跡の幅は最大5.7m、最小2.3mである。平面形はわずかに蛇行しながらも、ほぼまっすぐN36°Wの方向に伸びている。H23グリッド付近で分岐し、一方はまっすぐ南流し、もう一方は東に向かっている。東に向かう溝は、なんらかの理由によって埋め戻されている。

深さは45cm程度であるが、掘削したII層の厚さを考えればさらに20cmは深かったことになる。堆積土は基本的に6層に分けられる。いずれも水性堆積により自然に埋没したものと考えられる。粗い砂を基調としており、水流はやや速かったものと推測される。後述するように本溝跡はよく管理されており、これら

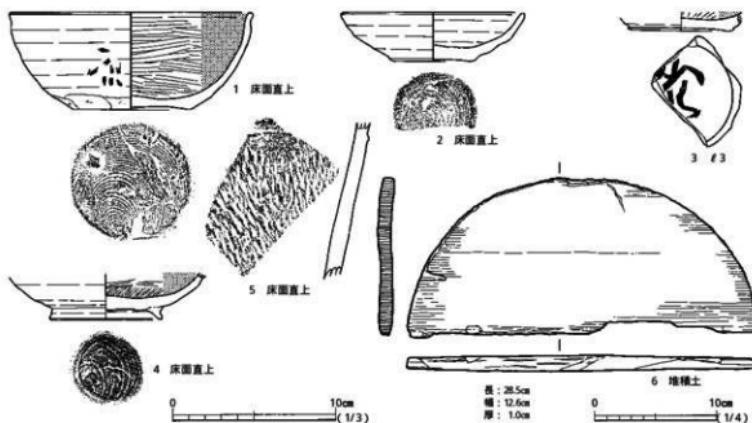


図79 5a号溝跡出土遺物

が出土している。ここでは5a号段階の調査で出土した遺物のうち6点を図化した。図79-1~3はロクロを使用した土器器の杯、4は高台付杯である。5は縄文土器、6は木製品である。

1は回転糸切りの後、外面体部下端をヘラケグリで再調整している。外面体部に墨痕が見られ、正位で「少川」と書かれている。2は底部を回転糸切りで切り離し、再調整を施していない。器面調整は内外面ともにロクロナデであり、黒色処理を施していない。3は回転糸切りの後、再調整を施していない。外面底部に「少川」の墨書きが見られる。4は回転糸切りの後、高台を貼り付けている。5は縄文土器である。沈線で区画し、縄文を施している。6は木製品である。半分ほどが欠損しているが、もともと円形を呈していたと考えられる。取っ手・つまみなどがないため、曲げ物か桶の底板と考えられる。

護岸で用いられていた杭・板材のうち、140点を取り上げることができた。ここではそのうちの状態の良い21点を図化した。

図80-17・18は板材である。ほかのものは杭であり、鉈状の鋭意な刃物を用いて一方の先端を削って尖らせてある。もう一方の端は地上に出ていたと考えられ、すべての資料で欠損している。1~3・7~11・13~16はミカン割りの角杭である。4~6・12は丸太杭である。19~21は厚めの板材の先端を尖らせた杭である。3はほぞ穴が1つ開けられており、建築材を杭に再利用したものと考えられる。ほぞ穴は $2\text{cm} \times 2.5\text{cm} \times \text{深さ } 3.5\text{cm}$ で、貫通していない。取り上げた総数140点のうち、82点が角杭、11点が丸太杭、板材を利用した杭が20点、板材が7点、その他の木片が20点である。

まとめ

5a号とした溝跡は古代以前から続く溝の埋没直前の最終段階である。護岸工事を行っており、堆砂をさらうなどの管理も行き届いていたと思われる。水田耕作の用水路の機能を果たしていたと

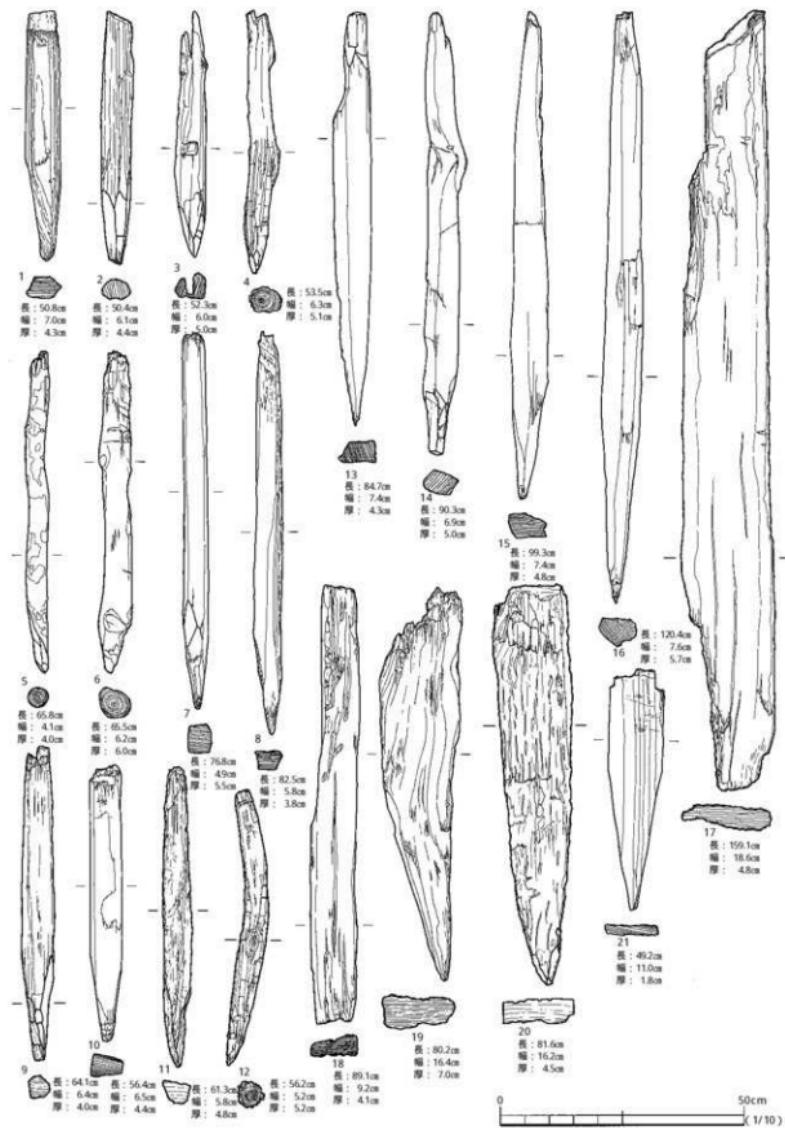


図80 5 a号溝跡出土杭

推測される。遺物の出土状況・遺構の重複関係からは、本遺構の機能時期・廃絶時期を明らかにできなかった。ただし、本遺構にともなう杭の遺存状態が良好なことから、本遺構の廃絶時期は本遺跡のはかの遺構に比べて新しいものと思われる。

5 b 号溝跡 遺構（図75・76、写真図版48・50）

5号溝跡の古代の状況であると考えている。幅は4m～8mで、南端部で大きく広がり、調査区外に伸びる。D19グリッド付近で調査区外に伸びている。

検出面はⅢ層である。検出面からの深さはおおむね50cm～80cmで推移するが、大きく広がる南端部では東側と西側に深く落ち込み、その深さは2mを超える。調査区のもっとも外側の地点であり、崩落の危険もあったため、最大深度を確認できなかった。堆積土は4層に分けられ、南端部ではさらに4つの層が堆積している。底面近くには砂が堆積しており、ある程度流水が速かったものと考えられる。7層は粒子の細かいシルト層で、流れが緩くなったことを示している。7層中から土師器・筒形土器が良好な状態で出土しており、本溝跡が機能していた時期に投棄されたものと考えられる。

5 b 号溝跡出土遺物（図81、写真図版68・71・72・74・75）

5 b 号段階の調査で出土した遺物のうち10点を図示した。1～3はロクロを使用した土師器の杯、4は高台付杯である。5・6は土師器の甕、7は筒形土器である。8は須恵器の広口壺である。

1は底部を欠いているが、外面体部下端にヘラケズリを施している。外面体部に正位で「少川」の墨書がある。2は切り離し後、外面体部下端から底部全面までヘラケズリで再調整されており、切り離し技法は不明である。外面体部に正位で「少川」の墨書がある。3は底部を回転糸切りで切り離し、再調整を施していない。内外面ともにロクロナデの痕跡を残し、黒色処理を施していない。4は回転糸切りの後、高台を貼り付けている。高台は高く、ハ字状に開いている。外面体部に正位で「中内」の墨書が見られる。外面底部に墨痕があり、擦痕も認められることから、現に転用していたものと考えられる。

5・6はロクロを使用していない土師器の甕である。5は胴部がほぼ直立し、口縁部がつまみ出されて大きく開いている。外面胴部は縦方向のヘラケズリが、内面胴部はヘラナデが施されている。口縁部はヨコナデで仕上げられているが、やや雑な作りである。最大径は口縁部にある。6は胴部がやや内湾し、口縁部が緩やかに外反している。外面胴部には縦方向のヘラケズリが、内面にはヘラナデが施されている。外面口縁部にはヨコナデが施されている。最大径は胴部にある。7は筒形土器である。内外面ともにナデであり、特に内面は丁寧に仕上げられている。8は須恵器の広口壺である。頸部は緩やかに外反している。内外面ともにぶい赤橙色を呈しており、二次的に熱を受けた可能性がある。

9は鉄製の鎌である。先端部の断面は菱形であり、根の断面は方形となる。断面方形の茎が付く。10は開元通寶である。

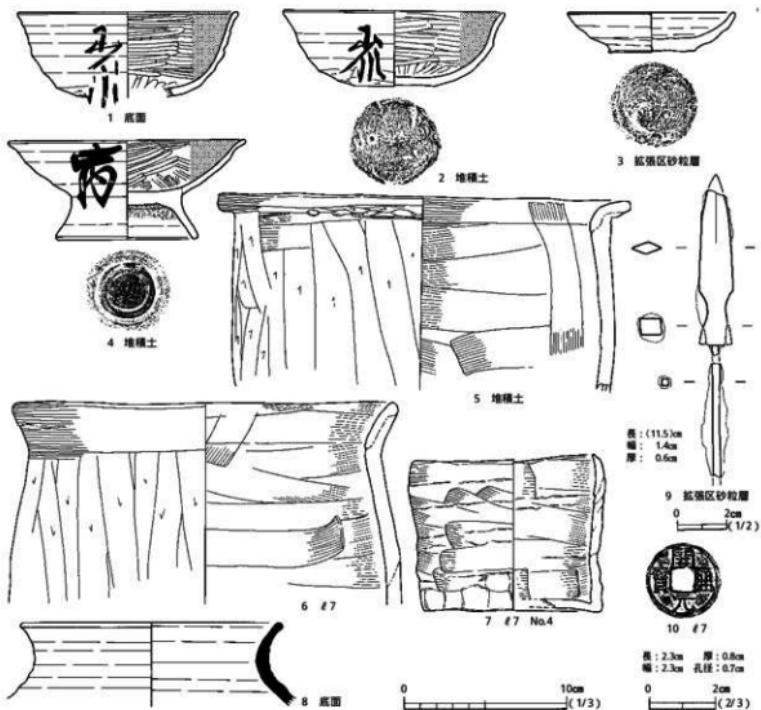


図81 5 b号溝跡出土遺物

まとめ

5 b号溝跡は、本遺跡南部を縦貫する大溝の古代の状況を示していると考えられる。古代においては、本溝跡を積極的に管理した形跡は見られなかった。遺物の出土層位から、古代における底面は7層下端であった。7層より下層には遺物が含まれないことから、本遺構の形成は古代の集落が営まれる以前であったと考えられる。

本遺構の形成が人為的なものなのか、自然なものなのか、判断できなかった。それぞれの根拠を以下に記す。

人工の溝と考える根拠は、立地と形状である。5号溝跡は木戸川沖積地の山よりに位置しており、標高もわずかではあるが高くなっている。そのように高い地点に沿って自然流路が流れるのは考えにくいことであろう。また、本溝跡の形状は、調査区内ではわずかに蛇行するものの、ほぼ直線である。自然流路であれば、複雑に蛇行しているはずである。人工の溝であるならば、木戸川から引いた水を沖積地に配水するための用水の機能があったものと考えられる。

これに対し、自然に形成されたとみる根拠は3点ある。まず、5 b号段階の深さ0.8m以上、幅5.7mもの巨大な溝は、用水路と言うには規模が大きすぎ、深すぎるために実用性が低い。このようなものを多大な労力をかけて掘る意味が見いだせない。次に、本溝跡の南端部では底面が大きく落ち込んでおり、水路としての機能を果たし得ない。また、本遺跡には軍事的性格がないことから、防衛施設であったとも考えがたい。

上記のように本遺構の成因は断定しがたいが、それには今回の調査で底面を確認しなかったという事情もある。今回の調査では古代の遺物を包含するシルト層の下の砂層下部まで掘削したが、あるいはN層まで掘りこまれていた可能性もある。シルト層より下では遺物が出土しないため掘削しなかったが、溝の形成過程を探るためにさらに掘削すべきであった。

水流の方向は、周辺の地形から、また南端部が深く落ち込んでいることから、北から南へと流れている可能性が高い。
(轟 田)

6号溝跡 SD06

遺構(図75)

本遺構はE18からG20グリッドにかけて検出された溝の跡である。III a層を精査中、E18グリッド付近で大きく湾曲する溝の平面形を検出し、それが南東方向に伸びていることが確認された。検出面標高は15.1m～15.3m程度である。2号溝跡、5 a号溝跡、2号特殊遺構と重複関係にあり、検出面の違いにより、そのいずれよりも古いことが明らかである。2号特殊遺構とは重複部分が大きく、何らかの関係があるものと考えられる。

本溝跡の幅は30cm～120cmである。断面形状は皿状で、検出面からの深さは20cm前後であった。南に行くにしたがって深くなっていくが、南端のG20グリッドでは浅くなっているようである。さらに調査区外に伸びている可能性もあるが、確認できなかった。堆積土は暗褐色の砂質土であったが、堆積状況は不明である。北西端が5 a号溝跡に壊されているため、その先どのように伸びていたのかは不明である。

遺物(図82、写真図版69)

本遺構からは土師器65点、須恵器5点、石器1点が出土している。ここでは4点を図示した。1・2・4は土師器の杯である。3は高台付杯である。本遺構と重複関係にある住居跡がないことや、遺物の磨滅が少ないとから、これらの遺物は本遺構が開口しているときに廃棄されたものと考えられる。

1は底部を回転糸切りによって切り離し、その後外面体部下端から底部周縁をヘラケズリで再調整している。2は切り離した後、外面体部下端から底部全面をヘラケズリで再調整している。3は切り離した後、高台を貼り付けている。4は回転ヘラ切りで切り離した後、再調整を施していない。内外面ともに黒色処理を施さず、ロクロナデの痕跡を残している。

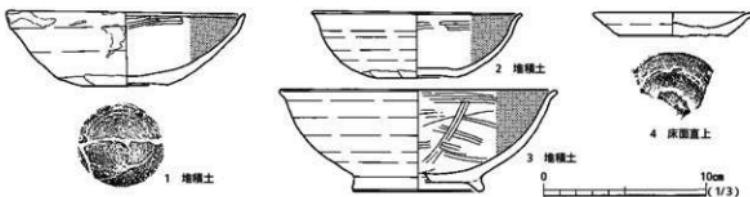


図82 6号溝跡出土遺物

まとめ

本遺構は比較的小さな溝の跡で、機能としては水路であったと考えている。南端部の残存率が低かったため、流水の方向は不明である。底面標高の推移や周辺の地形と比較してみると、本溝跡の流水方向も北から南への流れであった可能性が高い。本遺構は出土遺物から、集落が営まれた9世紀後半から10世紀中頃までの間に収まるものと考えられる。

(轟 田)

7号溝跡 S D 07

本遺構はC13・D13グリッドに位置する。III a層で検出された。15号住居跡と重複し、本遺構の方が新しい。平面形は長さ3.1m、幅0.5mの溝状で、東西に長い。ただし東西のどちらにも伸びていない。深さは30cm前後で、底面は皿状を呈する。また、東西の端部は壁が急斜度に立ちあがっている。これらの形態から、本遺構が水を流すためのものでないことは明らかである。本遺構からは土師器8点が出土しているが、いずれも細片であり図化できなかった。

時期は遺構の重複関係から10世紀以降と考えられるが、時期を決定できる遺物が出土していないため、正確には不明とせざるを得ない。また、機能についても、水路でないことは明らかであるが、詳細は不明である。

(轟 田)

第8節 焼土遺構

1号焼土遺構 SG 01 (図83, 写真図版51)

F15グリッド、III a層上面で検出した、不整形の遺構である。酸化面と焼土塊の広がりとして検出した。1号特殊遺構と重複し、本遺構の方が新しい。断ち割ってみたところ、薄い落ち込みが確認された。落ち込みの堆積土は3層に分けられ、いずれも焼土を多く含んでいる。また、堆積土の上面は熱を受けてさらに赤変していた。本遺構ではこぶし大の礫が2個出土しているが、熱を受けた痕跡はなかった。本遺構の機能は不明である。遺物は出土していない。

(轟 田)

2号焼土遺構 SG 02 (図83, 写真図版51)

本遺構はF15グリッド、III a層で検出された。試掘坑で破壊してしまったが、平面形は梢円形を

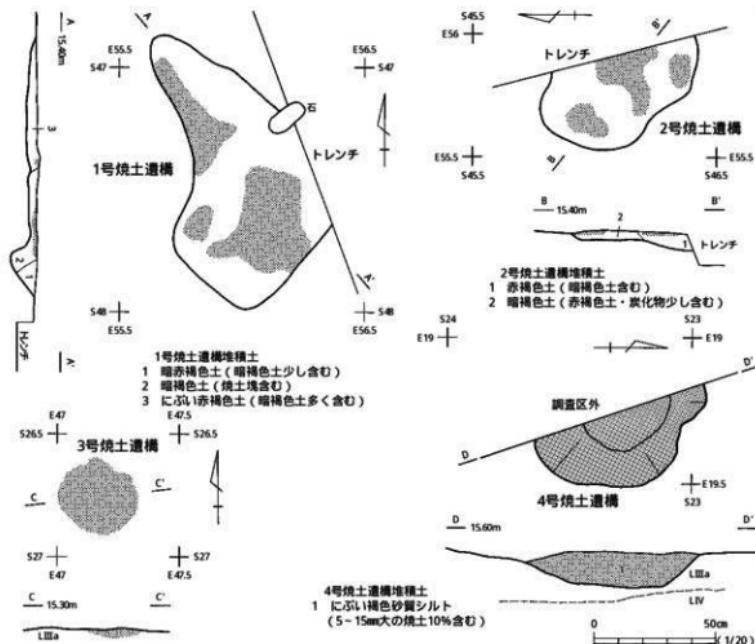


図83 1～4号焼土遺構

呈するものと思われる。1号焼土遺構と同様、酸化面と焼土塊の広がりである。断ち割ってみたところ、焼土を多く含む堆積土が2層確認され、堆積土上面はさらに熱を受けて赤変していることが明らかになった。本遺構の性格は不明である。遺物は出土しなかった。

(轟 田)

3号焼土遺構 SG 03 (図83, 写真図版51)

E13グリッド、III a層上面で検出した。

平面形は長径33cm、短径31cmの、ほぼ円形を呈する。長径方向に断ち割ったところ、深さ8cmまで熱を受けて赤変していたが、本遺構の周辺には住居跡の掘形などは見られなかった。

(轟 田)

4号焼土遺構 SG 04 (図83, 写真図版51)

D13グリッド、III a層上面で検出された。重複する遺構はない。平面形は長径70cmほどの不整円形を呈すると思われるが、半分が調査区外に存在するため、実際にどのような形と規模を持っているのかは不明である。調査開始時にはカマドの痕跡ではないかと予想したが、残存率が低いためその確証は得られなかった。

本遺構の調査に当たって、平面形を記録した後、調査区界に沿って断ち割った。その結果、本遺構は土自体が赤変しているのではなく、堆積土に赤変した焼土を多く含んでいることが判明した。本遺構は燃焼面ではなく、土坑状のくぼみに焼土が二次的に堆積したものである。堆積土の厚さは14cmであった。堆積土からは土師器69点、鉄製品1点が出土しているが、いずれも細片のため細化できなかった。

(図 III)

第9節 特殊遺構

形態などが特殊で、他の分類としては報告できない遺構を、ここで報告する。

1号特殊遺構 SX01

遺構 (図84、写真図版52)

本遺構はF15グリッド、Ⅲa層上面において、黒色土と焼土粒の広がりとして検出された。1号・2号焼土遺構と重複し、本遺構の方が古い。また46号・57号土坑と重複しており、46号よりも古く、57号よりも新しい。

平面形は長方形を呈すると思われるが、東側は調査区外に伸びており、全容は明らかにならなかった。長方形の北西辺にP1がとりついている。P1と本遺構は堆積土が共通しているため、同時に機能していたと考えている。北西辺の長さは3.7m、南西辺の長さは2.8mである。

堆積土は4層に分けられた。全体としてレンズ状に堆積しており、自然堆積と判断した。底面はほぼ平坦で、踏みしまりは見られなかった。周壁は緩やかに立ち上がる。底面では酸化面が3カ所検出された。断ち割ってみたところ、1~3cmの深さまで赤変していた。このことから鍛冶に関連する遺構である可能性を考えたが、鍛冶に関連する遺物は出土しなかった。

また、底面ではピットが5基検出された。そのうちP4~P6は、堆積土が類似していたため本遺構検出時に検出できなかった本遺構よりも新しいピットであると考える。P2・P3は本遺構に伴うものと考えている。機能は不明であるが、P2から出土した土師器片と本遺構堆積土から出土したものとが接合したことから、P2は本遺構と同時に開口していたものである。P2・P3は形態・規模・堆積土がよく似ていることから、P3も同様に開口していた可能性がある。

遺物 (図85、写真図版69~73)

本遺構からは土師器117点が出土している。そのうち5点を図化した。1~4は土師器の杯で、いずれもロクロを使用している。5は土師器の甕である。2は堆積土からの出土であり、1・3~5はP2から出土している。

1・4は回転糸切りの後、外面体部下端をヘラケズリで再調整されている。内面にはヘラミガキ・黒色処理が施されているが、ヘラミガキはやや散漫である。4は墨書き器である。外面体部に正位で「吉原」の墨書きが見られる。2・3は内外面ともにヘラミガキ・黒色処理が施されている。

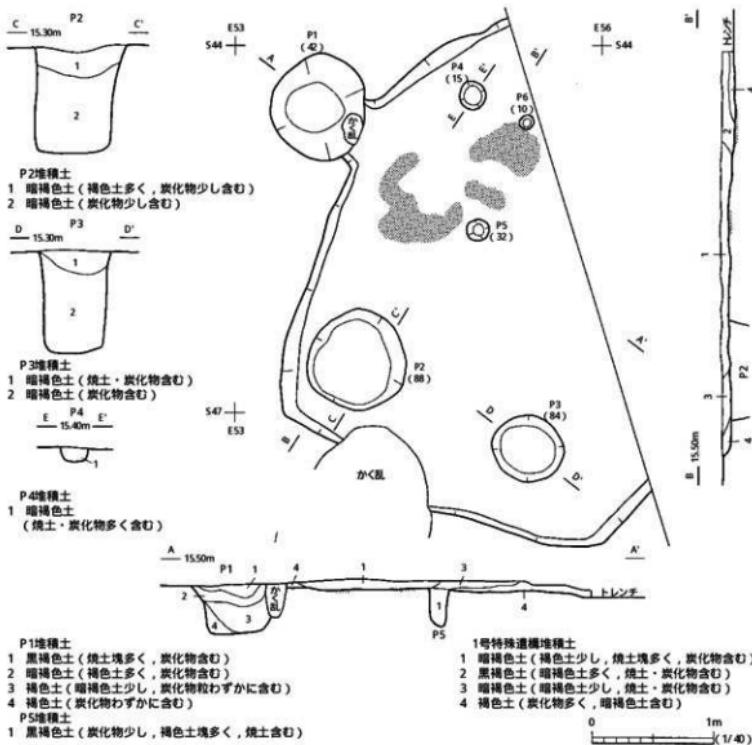


図84 1号特殊遺構

ヘラミガキは非常に緻密で、丁寧な作りである。

5は土師器の甕で、胴部下半から底部にかけて遺存している。外面はヘラケズリ、内面はヘラナデを施している。

まとめ

本遺構の機能は不明である。あるいは竪穴住居であった可能性もある。ただし底面には踏みしまりは見られず、底面で検出された酸化面はカマドの痕跡というには内部に入り込みすぎていよう。本遺構の所属時期は、出土した遺物から9世紀後半から10世紀前半と考えている。
(齊田)

2号特殊遺構 SX02

遺構 (図版86, 写真図版53)

本遺構はF20・G20グリッドに位置する。検出層位はⅢa層上面で、検出面標高は15.3mである。

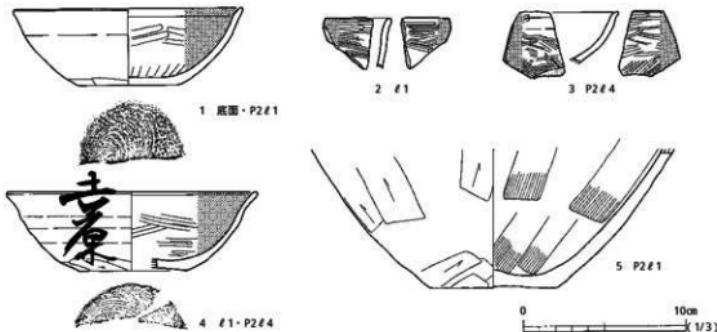


図85 1号特殊遺構出土遺物

6号溝跡と重複しているが、平面形の切り合いからと土層断面の観察から、本遺構が新しいことが明らかである。本遺構の周辺には5a号溝跡がある。付近では竪穴住居跡や掘立柱建物は検出されていない。

平面形は東西に長い不整形である。長さは8.6m、幅は0.7m~1.4mである。短軸方向に土層観察用の畦を残し、掘削した。溝状の遺構であり、検出面からの深さは20cm程度、断面形状は皿状を呈している。

堆積土は単層であった。暗灰黄色の砂質シルトで、木炭を多く含んでいた。また、多量の礫が出土した。礫はいずれも花崗岩で、熱を受けて部分的に赤変し、ぼろぼろに風化していた。数えられた点数は419点で、その重量は総計72kgに及ぶ。これらの礫は明らかに人為的な堆積状況を示しているが、礫の配列に規則性を認めることはできなかった。17号土坑に関連する遺構かと思われたが、本遺構からは骨片は検出されなかった。

本遺構からは土器169点が出土しているが、小破片のみであり、図化できなかった。

まとめ

本遺構の機能は不明である。人為的に埋め戻されているものの、何のための溝であったのかを明らかにできなかった。礫や木炭を廃棄することが本遺構の本質であったと考えることもできよう。本遺構は6号溝跡と重複する部分が多いことから、6号溝跡廃絶後、埋まりきらずに残ったくぼみに不要となった礫などを投棄したものと推測する。

本遺構からは時期を決定できる遺物は出土していないが、上記の推測が正しいならば、6号溝跡廃絶からあまり時間差がないものと考えられる。

(轟 田)

3号特殊遺構 S X 03 (図87、写真図版54)

本遺構はC13・D13グリッドにおいて、IIIa層上面で炭化物と焼土の広がりとして検出された。15号住居跡と重複しており、本遺構の方が新しい。明確な平面形が捉えられなかつたため、当初は

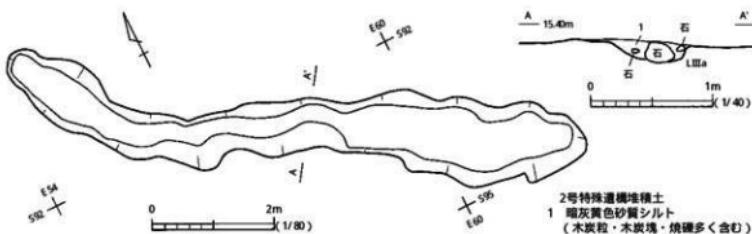


図86 2号特殊遺構

15号住居跡も含め、堅穴住居跡が数軒重複している可能性を考えた。しかし畦を残して部分的に掘削したところ、15号住居跡に重複する部分と、Ⅲ a層に直に炭化物等が堆積する部分があることが判明し、本遺構自体は堅穴住居跡ではないことが明らかになった。

本遺構の平面形は不整形である。東西6.5m、南北4mの範囲に炭化物が堆積し、東側には加えて焼土が堆積している。堆積の厚さは3cm程度である。本遺構からは土師器47点が出土しているが、いずれも小片であり図化できなかった。

まとめ

本遺構は、性格等を明らかにできなかったため特殊遺構としたが、おそらくは15号住居跡の堆積土が後世のかく乱により拡散したものであろうと推測できる。かく乱の時期は不明である。

(轟 田)

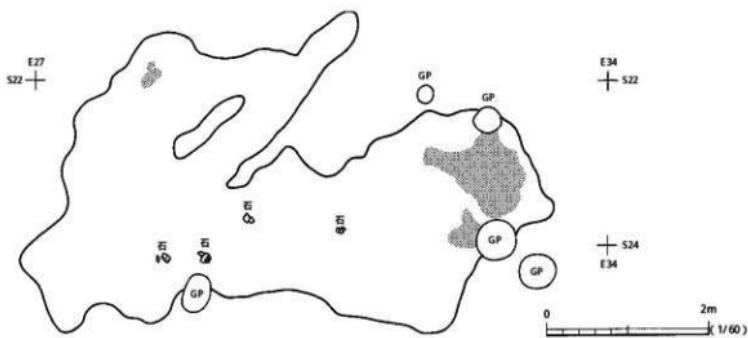


図87 3号特殊遺構

第10節 その他の柱穴群 (図88~90, 表4~7)

調査区北部から中央部付近のC13~14グリッド, D13~15グリッド, E13~17グリッド, F14~18グリッドにかけて、457個のピットを検出した。特にE15グリッドは密度が濃く、113個のピットを検出している。付近は標高15.4m前後のほぼ平坦面で、ごく緩やかに東に傾斜する。ピット群は、多数の遺構と重複し、一部を除いてピットが新しい。群在が顕著なE13グリッドやF17グリッドではピット同士の重複も見られる。

これらのピットの大半は柱穴と考えるが、柱真をもつものはわずかで、また配置にも規則性を認められず、ピット群から復元できた遺構はE15グリッドから掘立柱建物跡2基と柱列跡2基、E16グリッドから掘立柱建物跡1基、F17グリッドから掘立柱建物跡2基にとどまった。

ピットの平面形は、円形ないし稍円形を呈するものが大半で、直径は建物跡および柱列跡を構成するピットは40cm前後、その他のピットは25cm前後のものが多数を占める。堆積土は大別して黒褐色・暗褐色・褐色の3色を呈し、住居跡と重複ないし隣接するピットには、住居内堆積土が混入するものが多い。

表4~7は本遺跡で検出されたピットをまとめたものである。長軸・短軸・深さは、単位cmである。深さは検出面からの深さを記録した。検出面標高は単位mである。平面形は土坑の場合と同様の分類を行った。堆積土はa・b・cの3種類に分けており、それぞれaは黒褐色土、bは暗褐色土、cは褐色土である。備考には重複関係のほか、掘立柱建物跡の柱穴になっているものは、その番号を記した。

遺物 (図88・90, 写真図版69)

ピットからはほとんど遺物が出土していない。ピットから出土した遺物のうち、特徴的な2点を図示した。図88-1はロクロ土師器杯である。外面はロクロ調整の後、底部に手持ちヘラケズリが施される。内面はヘラミガキ後黒色処理である。底面には回転糸切り痕が残る。なおこの遺物が出土したピットは、18号住居跡のカマド煙道を破壊している。図90-1は土師器杯の細片であるが、体部から底部にかけて墨書きが見られる。細片のため文字の判読は出来なかった。

F21P1 (図90)

調査区南西部のF21グリッドから、単独ピットが検出された。検出面はⅢa層上面の標高15.7m付近で、平面形は隅丸方形、規模は長辺70cm、短辺43cm、深さは検出面から32cmを測る。ピット中央部からは、直径27cmの柱真が検出された。ピット内堆積土は、柱真部が暗褐色砂質土、埋土は上部が黒褐色、底部が黄褐色を呈する砂質土である。

このピットは調査区の端に位置していたため、本ピットの長軸および短軸方向の延長線上を調査することが出来なかつたが、その形態や堆積状況から、掘立柱建物跡を構成するピットと考える。なお、遺物は出土しなかつた。

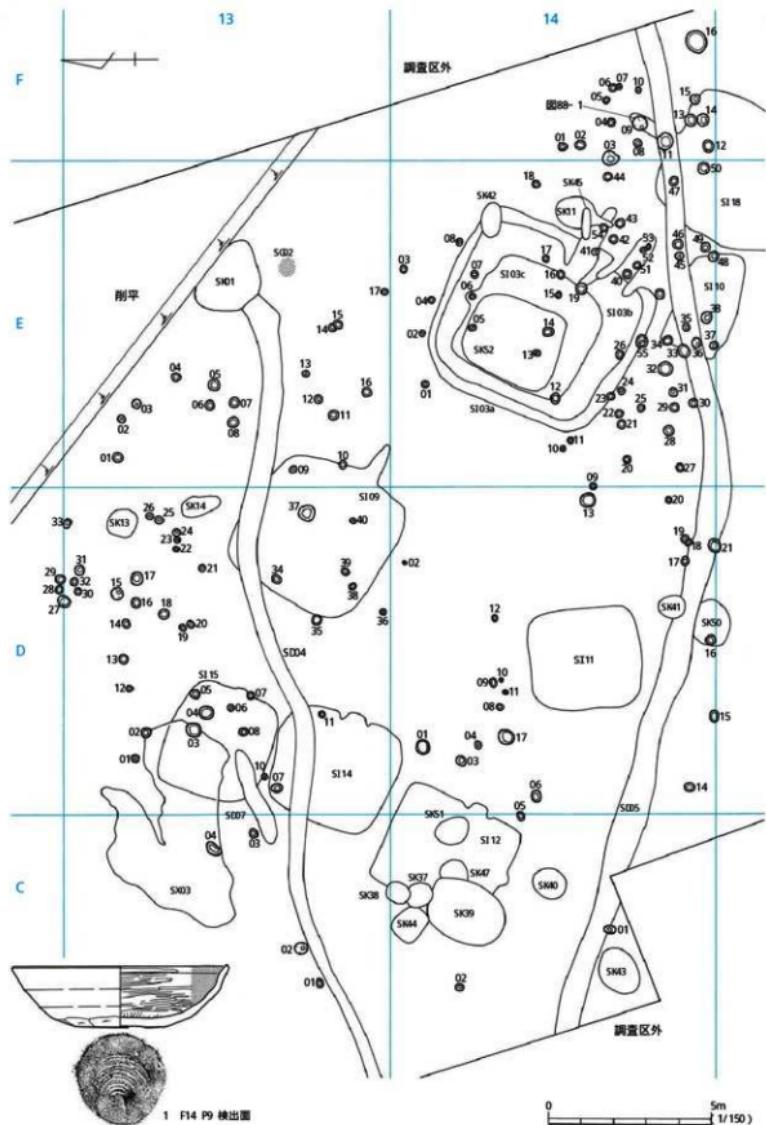


図88 その他の柱穴群配置図(1)

まとめ

本ピット群は、本遺構から検出された竪穴住居群が廃絶された後ないし竪穴住居とほぼ同時期に建てられた建物群を構成するものと考える。大型の建物がなく、柱穴の配列も不規則なことから、ここでは作業小屋や倉庫などの小型建物が幾度かに渡って建て替えられたものと考える。形態や堆積土による時期分類も試みたが、本遺跡はよく耕作地であったと推定され、堆積土に顕著な傾向がないため断念した。時期の推定は困難だが、遺構の重複状況から平安前期以降のピットが多いものと考える。

(菊田)

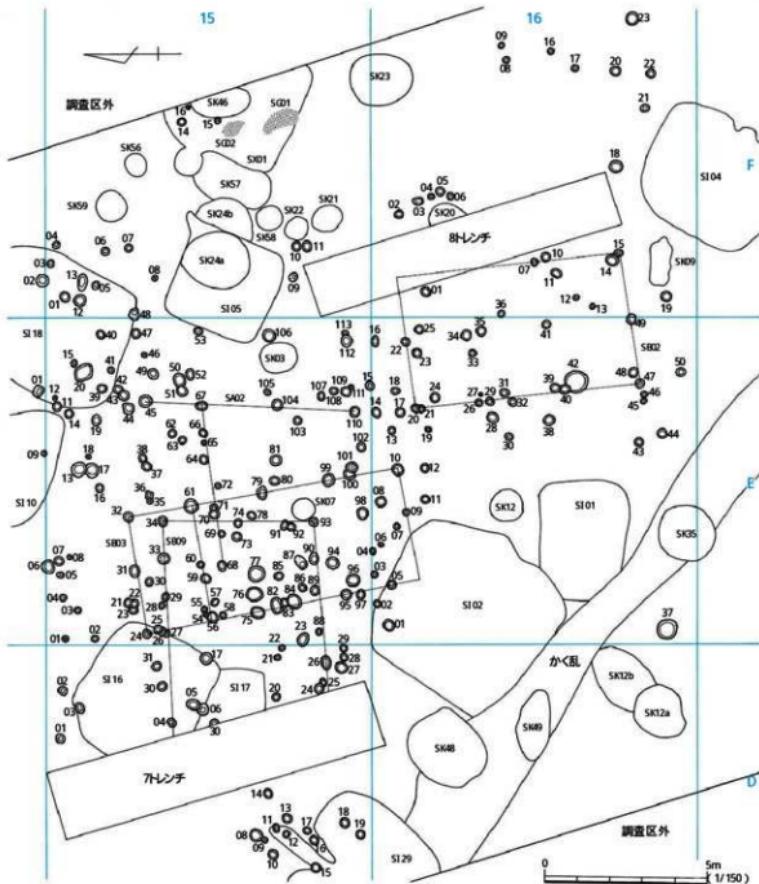


図89 その他の柱穴群配置図(2)

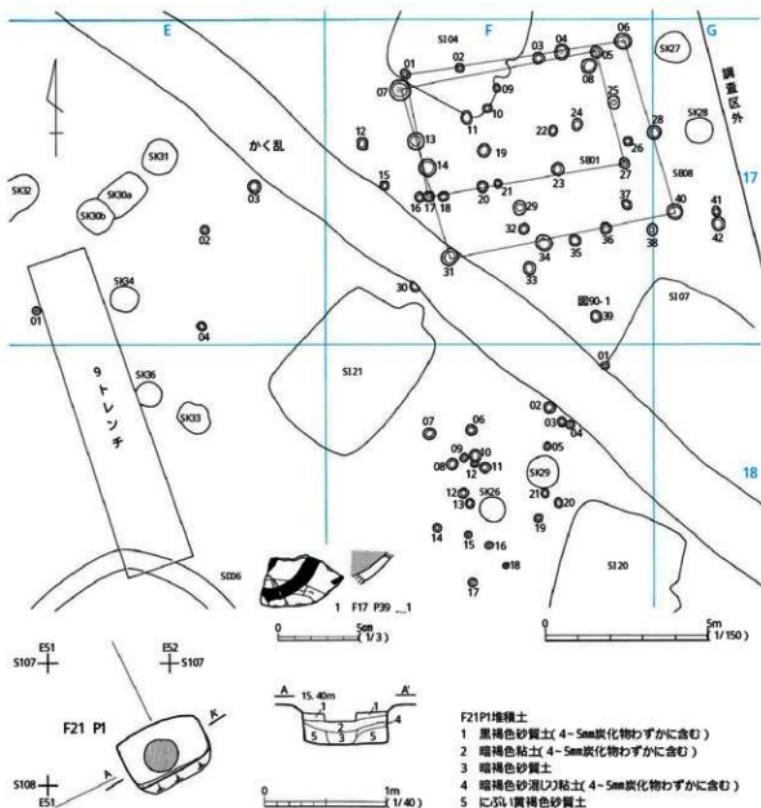


図90 その他の柱穴群配置図(3)・F21 P1

表4 その他の柱穴群一覧表(1)

ピット番号	長幅	短幅	深さ	底面標高	平面形	土	柱頭	備考	ピット番号	長幅	短幅	深さ	底面標高	平面形	土	柱頭	備考
C13	1	29	20	32	底面標高	平面形	a	無	17	40	35	32	15.1	楕円形	c	無	
	2	28	33	30	15.1	円形	b	無	18	30	30	15	15.3	円形	b	無	
	3	28	24	28	15.1	円形	b	無	19	20	20	14	15.3	円形	b	無	
	4	40	32	3	15.4	不規則	c	無	20	22	21	18	15.2	円形	c	無	
D13	1	19	16	18	15.2	楕円形	a	無	21	23	23	-	-	円形	c	無	
	2	20	20	31	15.1	楕円形	b	無	22	23	23	14	15.3	楕円形	c	無	
	3	43	40	-	-	円形	a	無	23	18	18	14	15.2	円形	c	無	
	4	45	40	-	-	円形	a	無	24	23	21	12	15.3	円形	c	無	
	5	31	24	-	-	楕円形	a	無	25	28	27	-	-	円形	a	無	
	6	18	18	-	-	円形	b	無	26	23	22	-	-	円形	a	無	
	7	22	22	-	-	円形	a	無	27	42	33	35	15.1	楕円形	b	無	
	8	24	22	-	-	楕円形	a	無	28	23	22	34	15.1	円形	a	無	
	9	33	27	-	-	楕円形	b	無	29	32	32	26	15.2	円形	b	無	
	10	17	17	-	-	楕円形	a	無	30	25	21	13	15.3	楕円形	c	無	
	11	18	18	-	-	円形	b	無	31	31	31	26	15.2	楕円形	b	無	
	12	27	27	25	15.2	円形	a	無	32	29	23	20	15.2	楕円形	b	無	
	13	31	29	35	15.1	円形	b	無	33	31	27	-	-	楕円形	b	無	>S109
	14	26	22	45	15.0	円形	a	無	34	32	28	-	-	楕円形	a	無	
	15	36	36	29	15.1	円形	b	無	35	27	27	-	-	円形	a	無	
	16	30	27	35	15.1	楕円形	c	無	36	17	17	-	-	円形	c	無	

表6 その他の柱穴群一覧表(3)

ピット番号	長軸	短軸	深さ	底面標高	平面形	土	柱机	備考
E15 43	33	29	15	15.2	扇内形	c	無	>E15-P42
44	33	30	65	14.7	千鳥形	a	有	SA02-P1
45	34	30	20	14.8	扇内形	c	無	>SI18
46	18	16	20	15.1	扇内形	c	無	
47	28	25	24	15.1	扇内形	c	無	
48	35	26	30	15.0	扇丸丘方型	a	無	>SI18
49	31	30	19	15.1	円形	a	無	>E15-P51
50	29	34	14	15.2	扇内形	c	無	
51	34	32	19	15.0	扇内形	b	無	
52	33	25	49	14.8	扇内形	b	無	
53	25	19	27	15.0	扇内形	b	無	
54	18	15	14	15.2	扇内形	a	無	>E15-P55,56
55	31	20	23	15.1	扇方型	a	無	
56	24	24	28	15.0	扇内形	b	無	SB02-P6 G
57	27	27	27	15.1	扇内形	b	無	
58	20	19	16	15.1	円形	c	無	
59	35	29	28	15.0	扇内形	a	無	SB02-P5, 6
60	19	19	22	15.1	円形	b	無	SB02-P4
61	40	38	14	14.9	円形	a	無	
62	26	20	21	15.1	円形	c	無	
63	25	16	16	15.1	円形	c	無	
64	28	25	56	14.7	扇内形	b	無	SA03-P3
65	15	15	59	14.7	円形	b	無	
66	26	24	56	14.7	扇内形	b	無	
67	34	28	61	14.7	扇内形	b	無	SA02-P2
68	39	29	27	15.0	扇内形	b	無	SA03-P1
69	29	29	26	15.1	扇内形	b	無	SA03-P2,
70	31	31	25	15.1	円形	b	無	>E15-P71 <E15-P70
71	25	-	55	14.8	扇内形	b	無	
72	29	19	13	15.2	円形	b	無	
73	25	25	25	15.0	扇内形	b	無	
74	25	23	15.0	扇内形	c	無		
75	41	35	30	15.0	扇内形	c	無	SB02-P3
76	58	45	32	15.0	扇内形	c	無	
77	50	46	41	14.9	扇内形	c	無	G
78	38	26	43	14.9	扇内形	b	無	SB03-P12
79	40	28	38	14.9	扇内形	c	無	
80	36	28	38	14.9	扇内形	c	無	
81	31	31	22	15.0	扇内形	a	無	
82	48	29	44	14.9	扇丸丘方型	a	無	
83	28	25	44	14.9	扇内形	a	無	SB03-P7
84	45	39	21	15.1	扇内形	c	無	
85	28	26	44	14.9	扇内形	c	無	G
86	25	31	15.0	円形	b	無		
87	46	29	38	15.0	扇内形	b	無	
88	21	19	30	15.0	扇内形	b	無	
89	30	26	26	15.0	扇内形	b	無	SB02-P5
90	34	28	21	15.0	扇内形	a	無	>E15-P92
91	28	23	52	14.8	扇内形	a	無	
92	25	21	52	14.8	扇内形	a	無	
93	29	28	-	15.2	円形	a	無	
94	38	36	17	15.1	円形	c	無	SB02-P4
95	33	33	38	14.9	円形	b	無	
96	39	36	64	14.7	扇内形	b	無	SB03-P6
97	31	25	26	15.0	扇内形	b	無	
98	38	28	42	14.9	扇内形	a	無	
99	39	39	51	14.8	円形	c	無	SB03-P11
100	35	35	19	15.1	円形	c	無	
101	33	33	40	14.9	円形	c	有	>E15-P100
102	31	29	40	14.9	円形	c	無	
103	28	26	47	14.8	扇内形	c	無	SA02-P3
104	36	36	48	14.6	扇内形	c	無	
105	29	19	9	15.2	円形	a	無	
106	38	36	41	14.9	円形	a	無	
107	36	20	33	14.9	扇内形	b	無	
108	25	23	42	14.9	円形	c	無	
109	27	27	42	14.9	円形	a	無	
110	30	30	56	14.7	円形	c	無	
111	14	14	49	14.9	円形	-	-	SA02-P4
112	38	38	-	-	円形	-	-	>E15-P113
113	19	19	-	-	円形	-	-	
F15 1	34	34	54	14.8	円形	-	無	>SI18
2	47	49	48	14.8	扇内形	c	無	>SI18
3	24	24	45	14.9	扇内形	c	無	>SI18
4	25	25	22	15.0	円形	-	-	
5	23	23	17	15.2	円形	-	-	>SI18
6	25	25	30	15.1	円形	-	-	
7	28	26	34	15.0	円形	-	-	
8	18	18	16	15.3	円形	-	-	
9	26	26	19	15.0	扇内形	c	無	
10	29	29	49	15.0	円形	-	-	
11	31	29	13	15.2	扇丸丘方型	b	無	>SI18
12	29	27	28	15.1	扇内形	-	-	>SI18
13	45	37	32	15.0	扇内形	-	-	>SI18
14	21	21	15	15.1	円形	b	無	SA01-P4
15	19	19	32	14.9	円形	c	無	
16	12	12	16	15.1	円形	-	-	SA01-P6
E16 1	23	23	15	15.4	円形	b	無	
2	20	20	42	14.9	扇内形	a	無	
3	21	20	24	15.1	円形	b	無	
4	20	20	22	15.1	円形	b	無	
5	28	25	41	15.0	扇内形	b	無	
6	26	20	28	15.1	不整扇内形	c	無	
7	19	17	31	15.1	扇内形	c	無	

表7 その他の柱穴群一覧表(4)

ピット番号	長軸	短軸	深さ	底面標高	平面形	土	柱机	備考	ピット番号	長軸	短軸	深さ	底面標高	平面形	土	柱机	備考
F17 23	40	33	29	15.0	扇円形	b	無	SB01-P7	2	32	32	22	15.1	円形	b	無	
24	34	31	45	14.9	扇円形	c	無		3	24	24	15	15.1	円形	c	無	
25	40	32	53	14.8	扇円形	c	無	SB01-P5	4	24	24	17	15.1	円形	b	無	
26	28	26	29	15.1	扇円形	c	無		5	20	20	30	15.0	円形	c	無	
27	30	30	42	14.9	円形	c	無	SB01-P6	6	30	29	27	15.0	円形	a	無	
28	48	47	33	15.0	円形	c	無	SB08-P2	7	35	32	25	15.0	扇円形	b	無	
29	49	38	31	15.0	扇円形	c	無		8	35	30	24	15.0	扇円形	b	無	
30	30	—	—	—	扇円形	a	無	<かく足	9	22	22	20	15.1	円形	b	無	
31	53	47	55	14.8	扇円形	—	無	SB08-P7	10	40	32	23	15.1	扇円形	c	無	
								<かく足	11	33	32	19	15.1	扇円形	b	無	
32	29	29	23	15.1	円形	b	無		12	32	30	24	15.0	扇円形	b	無	
33	37	34	27	15.1	扇円形	b	無		13	30	30	21	15.1	円形	b	無	
34	51	48	22	15.1	扇円形	a	無	SB08-P8	14	24	24	18	15.1	円形	c	無	
35	35	31	46	14.9	扇円形	c	無		15	18	18	21	15.1	円形	b	無	
36	32	31	32	15.0	円形	c	無	SB08-P9	16	23	20	19	15.1	扇円形	a	無	
37	27	24	25	15.1	扇円形	b	無		17	24	24	24	15.0	円形	b	無	
38	33	28	33	15.0	扇円形	a	無		18	16	16	19	15.1	円形	b	無	
39	36	33	46	14.9	扇円形	b	無		19	25	23	17	15.1	扇円形	b	無	
40	48	44	—	—	扇円形	—	無	SB08-P1	20	30	27	24	15.0	扇円形	c	無	
41	24	24	—	—	円形	a	無		21	28	24	—	—	扇円形	c	無	
42	40	36	—	—	扇円形	a	無		22	24	23	29	15.0	円形	b	無	>Pis-P10
F18 1	24	20	26	15.0	扇円形	b	無										

第11節 遺構外出土遺物 (図91・92, 写真図版69・71・73・75)

小山B遺跡では、遺構外から9,453点の土師器、289点の須恵器、79点の陶磁器、鉄滓20gなどが出土している。ここでは状態の良好な39点を掲載した。図91-1～28は土師器の杯であり、13には高台が付く。29～34は陶器である。35は縄文土器、36は土錘である。図92-1は磨製石斧、2は砥石、3は鉄製品である。

図91-3・6はヘラミガキ・黒色処理を施さず、口クロナデの痕跡をよく残している。また、13・14は内外面ともに黒色処理を施している。それ以外の杯はいずれも内面のみ黒色処理を施している。両面黒色処理を施す14は、内湾して立ち上がり、口縁部で強く外反している。

1・2・4・5・7～12・15～28は墨書き器である。いずれも外面部から底部にかけて墨書きが見られる。1は2カ所に正位の「少川」の墨書きがある。そのほか7～9・12・23・24・26・28も、破片ではあるが正位の「少川」がある。2は横位で「平□」、10は正位で「□萬」と読める。11は「州」であろうか。15は「良」、19は「主」である。これ以外のものは文字の解説には至らなかった。

29は近世陶器、30・31・33は縁軸陶器である。30は碗である。直線的に立ち上がり、口縁部でわざわざに外反する。内外面ともに全面に釉薬がかかっている。31は碗の底部である。削りだし輪高台で、全面に釉薬がかかっている。33は碗の高台部である。輪高台で、全面に釉薬がかかっている。32は古瀬戸の灰釉碗形鉢である。内面に釉薬がかかっている。破断面に樹脂が付着しており、破損したときに漆で補修したものと思われる。34は常滑の大甕である。外面に釉薬がかかっており、綾杉の押印が見られる。

35は縄文土器である。太めの沈線で区画し、区画内に縄文を施している。36は土錘で、外面を丁寧に撫でている。

図92-1は定角式の磨製石斧である。珪質凝灰岩製で、基部に敲打痕を残している。刃部は一度

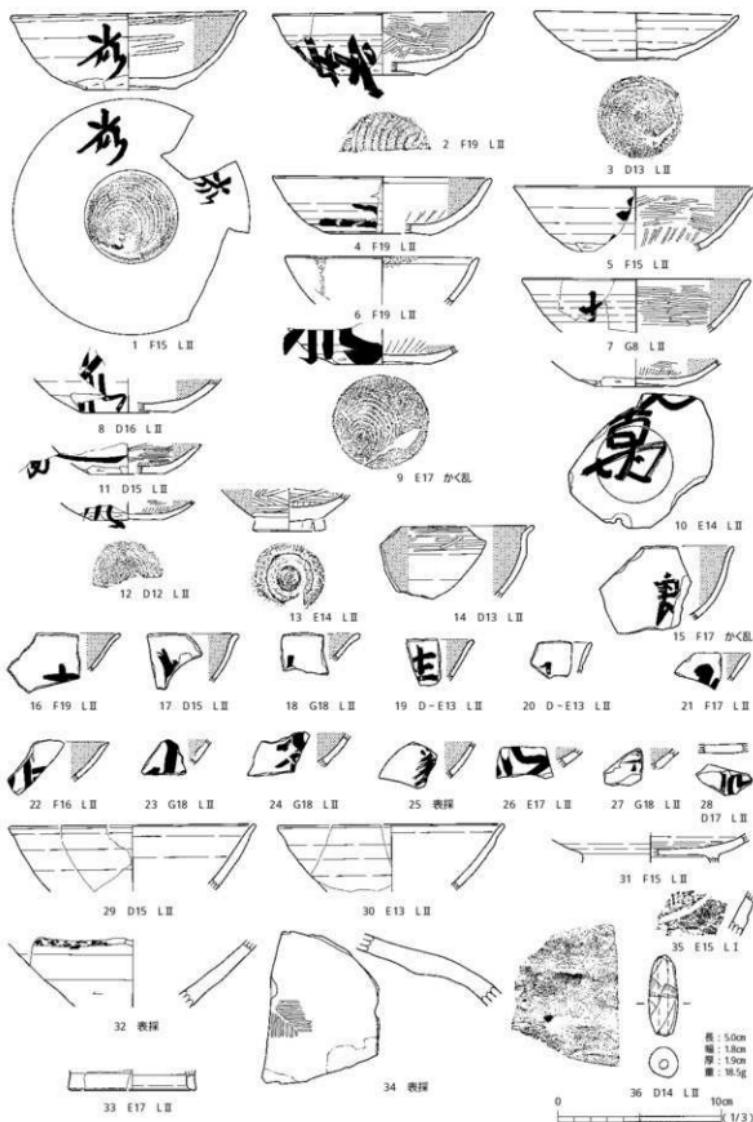


図91 遺構外出土遺物(1)

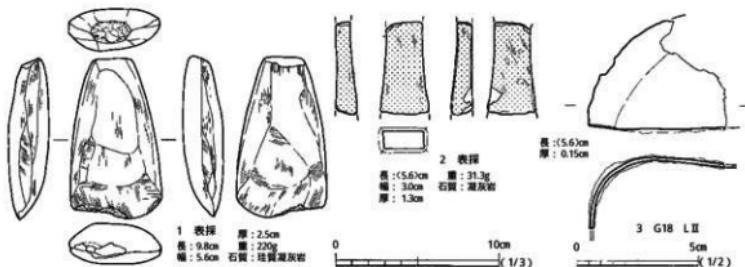


図92 遺構外出土遺物(2)

破損した後、研ぎ直して再生している。2は硫質灰岩製の砥石で、中砥である。表面に鋸が付着しているものの、4面を使用していた。3は鉄製品である。使途は不明であるが、その形状から鍋である可能性もある。

本遺跡から出土し、報告した土器について、観察表（表8～12）を付した。それぞれ法量・調整技法等について記載している。「底／口」には口径に対する底径の割合を、「高／口」には口径に対する器高の割合を記した。「遺存」は土器の遺存率を単位%で示した。「胎土」には、胎土中にいわゆる白色針状物質を含むものについて、「白含む」と記した。

また、鉄滓一覧表（表13）では、鉄滓の大きさ・重さのほか、外面の特徴などから、鉄滓の種類を判断して記載している。

(轟 田)

表8 上器観察表(1)

番号	遺構	遺物名	器形	口径	底径	器高	底／口	高／口	遺存	外面の特徴	内部の特徴		参考	胎土
											(%)	(%)		
8-1	SI01	土師器	杯		(5.8)	(2.8)				ロクロナデ	黒色	ヘラミガキ	白含む	墨書
8-2	SI01	土師器	杯		(6.0)	(0.8)				ロクロナデ	黒色	ヘラミガキ	白含む	墨書
8-3	SI01	土師器	高台付杯		(4.2)	(3.8)				ロクロナデ	黒色	ヘラミガキ	白含む	
10-1	SI02	土師器	高台付杯		(3.2)	(3.7)			50	ロクロナデ	黒色	ヘラミガキ	白含む	墨書
10-2	SI02	土師器	杯	(12.8)	6.0	3.5	0.47	0.27	40	ロクロナデ	ロクロナデ	白含む		
10-3	SI02	土師器	杯	(11.6)	(5.2)	3.3	0.45	0.28	60	ロクロナデ	黒色	ヘラミガキ	白含む	
10-4	SI02	土師器	杯	(13.6)		(3.4)			25	ロクロナデ	黒色	ヘラミガキ	白含む	
10-5	SI02	土師器	杯	(11.2)	5.4	3.2	0.48	0.29	70	ロクロナデ	ロクロナデ	白含む		
10-6	SI02	土師器	甕	(15.4)		(7.0)			20	ヘラケツリ	ヘラナデ	白含む		
10-7	SI02	土師器	甕	(24.7)	12.4	27.3				ヘラケツリ	ヘラナデ			
13-1	SI03a	土師器	杯	(15.0)	(6.0)	5.6	0.40	0.37	30	ロクロナデ	黒色	ヘラミガキ	白含む	
13-2	SI03a	土師器	杯	(14.2)		(4.1)			20	ロクロナデ	黒色	ヘラミガキ	白含む	
13-3	SI03a	土師器	杯		5.0	(2.8)			40	ロクロナデ	黒色	ヘラミガキ	白含む	
13-4	SI03a	土師器	甕	(23.2)		(24.6)				ロクロナデ	ヘラナデ			
13-5	SI03a	土師器	甕	(23.4)		(17.5)			35	ロクロナデ	ロクロナデ			
15-1	SI03b	土師器	耳皿			6.2				ナデ	ナデ			
15-2	SI03b	陶磁器	皿	(14.0)		(3.1)				ロクロナデ	ロクロナデ			灰釉
17-1	SI03c	土師器	杯	(12.6)	(4.8)	3.9	0.38	0.31	40	ロクロナデ	黒色	ヘラミガキ	墨書	
17-2	SI03c	土師器	杯	(13.7)	(7.4)	3.6	0.54	0.26	45	ロクロナデ	黒色	ヘラミガキ		
17-3	SI03c	土師器	杯	(15.0)	(6.2)	3.7	0.41	0.25	40	ロクロナデ	黒色	ヘラミガキ		
17-4	SI03c	土師器	杯	(15.2)	(7.6)	4.0	0.50	0.26	30	ロクロナデ	黒色	ヘラミガキ		
17-5	SI03c	土師器	杯							ロクロナデ	黒色	墨書	白含む	
17-6	SI03c	土師器	杯							ロクロナデ	黒色	墨書	白含む	
17-7	SI03c	土師器	杯	(14.4)	(5.8)	6.1	0.40	0.42	25	ロクロナデ	ヘラミガキ			
17-8	SI03c	土師器	甕		18.7		(8.5)		75	ロクロナデ	ロクロナデ			
17-9	SI03c	土師器	跳熊形器			10.6	(7.5)		35	ユビオサエ	ヘラナデ			
17-10	SI03c	土師器	跳熊形器	11.0		12.1	12.9		90	ユビオサエ	ヘラナデ			
17-11	SI03c	土師器	耳皿			5.6			100	ナデ	ナデ			

第11節 遺構外出土遺物

表11 土器觀察表(4)

() : 推定, < > : 遺存値, 単位: cm

番号	遺構	遺物名	器 形	口径	底径	器高	底/口	高/口	遺存	外面の特徴	内面の特徴	備考	胎土	
47-10	SI22	土師器	甕	6.1	6.3	5.8			100	ロクロナデ	ロクロナデ			
47-11	SI22	土師器	甕	(18.8)		(18.7)			40	ヘラケズリ	ヘラナデ			
47-12	SI22	土師器	甕	(23.2)		(19.6)			50	ロクロナデ	ヘラナデ			
47-13	SI22	土師器	甕	(25.2)	(10.0)	26.5			50	ヘラケズリ	ヘラナデ			
49- 1	SI23	土師器	杯	(16.8)		(4.3)			25	ロクロナデ	黒色, ヘラミガキ	白含む		
49- 2	SI23	土師器	杯	14.2	6.8	4.4	0.48	0.31	60	ロクロナデ	コテアデ			
49- 3	SI23	土師器	杯	10.0	7.4	2.1	0.74	0.21	80	ロクロナデ	ロクロナデ	白含む		
49- 4	SI23	土師器	杯	10.3	5.2	1.7	0.50	0.17	100	ロクロナデ	ロクロナデ	白含む		
49- 5	SI23	土師器	甕	14.0	9.0	13.9			85	ロクロナデ	ロクロナデ	白含む		
49- 7	SI23	土師器	甕											
52- 1	SI25	土師器	杯	10.0	5.9	2.1	0.59	0.21	90	ロクロナデ	ロクロナデ	白含む		
52- 2	SI25	土師器	杯	(10.0)		(1.8)			25	ロクロナデ	黒色, ヘラミガキ	白含む		
52- 3	SI25	土師器	高台付杯	(16.6)	7.7	5.7			70	ロクロナデ	黒色, ヘラミガキ			
52- 4	SI25	土師器	高台付杯	(16.8)	7.5	6.5			50	ロクロナデ	黒色, ヘラミガキ	白含む		
52- 5	SI25	土師器	高台付杯	(15.8)	7.8	(5.7)			55	ロクロナデ	黒色, ヘラミガキ	白含む		
52- 6	SI25	土師器	高台付杯	(6.2)	(1.7)				50	ロクロナデ	黒色, ヘラミガキ	白含む		
52- 7	SI25	土師器	甕	(28.0)		<21.4>			35	ナデ	ヘラナデ			
52- 8	SI25	土師器	甕	(22.6)		(10.5)			10	ロクロナデ	ヘラナデ	白含む		
52- 9	SI25	土師器	甕	(20.2)		(16.9)			40	ナデ	ヘラナデ			
52-10	SI25	土師器	甕	(23.0)		(14.4)			20	ヘラナデ	ヘラナデ	白含む		
54- 1	SI29	土師器	杯	13.0	4.5	4.0	0.35	0.31	100	ロクロナデ	黒色, ヘラミガキ	墨書き	白含む	
54- 2	SI29	土師器	杯	13.9	5.8	4.5	0.42	0.32	80	ロクロナデ	黒色, ヘラミガキ	墨書き	白含む	
54- 3	SI29	土師器	杯	(13.7)	(5.2)	4.5	0.38	0.33	10	ロクロナデ	黒色, ヘラミガキ	墨書き	白含む	
54- 4	SI29	土師器	高台付杯		7.8	(2.2)			100	黒色, ヘラミガキ				
54- 5	SI29	土師器	甕	21.0		(18.3)			50	ロクロナデ	ロクロナデ			
54- 6	SI29	土師器	甕	(21.4)		(25.0)			20	ロクロナデ	ロクロナデ			
54- 7	SI29	土師器	甕	(21.4)		(8.9)			10	ロクロナデ	ロクロナデ			
54- 8	SI29	須恵器	杯	(13.4)		(3.4)			5	ロクロナデ	ロクロナデ			
55- 1	SI32	土師器	高台付杯		(6.6)	(1.9)			25	黒色, ヘラミガキ	黒色, ヘラミガキ			
61- 1	SB02	須恵器	杯							ロクロナデ	ロクロナデ			
62- 1	SB03	土師器	杯		4.0	(1.6)				ロクロナデ	黒色	墨書き	白含む	
74- 1	SK12	土師器	杯						40	ロクロナデ	黒色, ヘラミガキ	墨書き	白含む	
74- 2	SK23	土師器	杯		5.2	(1.3)			15	ロクロナデ	黒色, ロクロナデ	墨書き	白含む	
74- 3	SK23	土師器	杯		5.4	(1.6)			70	ロクロナデ	黒色, ヘラミガキ	墨書き	白含む	
74- 4	SK23	土師器	杯		(13.6)	5.8	4.6	0.43	0.34	20	ロクロナデ	黒色, ロクロナデ	墨書き	白含む
74- 5	SK27	土師器	杯		(5.0)	(1.8)			20	ロクロナデ	黒色, ヘラミガキ	墨書き	白含む	
74- 6	SK29	土師器	杯		(6.6)	(1.5)			25	ロクロナデ	黒色, ヘラミガキ	墨書き	白含む	
74- 7	SK57	土師器	杯		(14.8)	(3.6)			29	ロクロナデ	黒色, ヘラミガキ	墨書き	白含む	
74- 8	SK39	土師器	高台付杯		(13.4)	(4.4)			40	ロクロナデ	黒色, ヘラミガキ	墨書き	白含む	
74- 9	SK23	土師器	甕	21.8		(23.7)			40	ロクロナデ	黒色, ヘラミガキ	白含む		
74-10	SK12b	土師器	杯						5	ロクロナデ	ロクロナデ	墨書き	白含む	
74-11	SK12b	土師器	杯						5	ロクロナデ	ロクロナデ	墨書き	白含む	
74-12	SK12a	須恵器	杯		(13.8)	(3.3)			5	ロクロナデ	ロクロナデ	墨書き	白含む	
79- 1	SD05a	土師器	杯	(14.8)	7.2	5.9	0.49	0.40	50	ロクロナデ	黒色, ヘラミガキ	墨書き	白含む	
79- 2	SD05a	土師器	杯	(11.2)	(5.0)	2.9	0.45	0.26	80	ロクロナデ	ロクロナデ	白含む		
79- 3	SD05a	土師器	杯		(6.4)	(1.2)			30	ロクロナデ	黒色, ヘラミガキ	白含む		
79- 4	SD05a	土師器	高台付杯			6.8	(2.8)		100	ロクロナデ	黒色, ヘラミガキ	白含む		
79- 5	SD05a	須恵器	杯											
81- 1	SD05b	土師器	杯		(13.6)		(5.1)		30	ロクロナデ	黒色, ヘラミガキ	墨書き	白含む	
81- 2	SD05b	土師器	杯		13.5	5.0	4.6	0.37	0.34	80	ロクロナデ	黒色, ヘラミガキ	墨書き	白含む
81- 3	SD05b	土師器	杯		(10.2)	5.2	2.4	0.51	0.24	70	ロクロナデ	ロクロナデ	墨書き	白含む
81- 4	SD05b	土師器	高台付杯		(14.6)	8.4	6.1			100	ロクロナデ	黒色, ヘラミガキ	墨書き	白含む
81- 5	SD05b	土師器	甕		(25.2)		(11.7)		20	ヘラケズリ	ヘラナデ	白含む		
81- 6	SD05b	土師器	甕		(23.5)		(12.3)		20	ヘラケズリ	ヘラナデ	白含む		
81- 7	SD05b	舞形土器	甕	11.0	10.8	9.4			100	ユビオサエ	ナデ	白含む		
81- 8	SD05b	須恵器	甕	(16.0)		(5.0)			30	ロクロナデ	ロクロナデ	白含む		
82- 1	SD06	土師器	杯	14.6	5.2	4.7	0.36	0.32	80	ロクロナデ	黒色, ヘラミガキ	白含む		
82- 2	SD06	土師器	杯	12.8	4.8	(4.1)	0.38		70	ロクロナデ	黒色, ヘラミガキ	白含む		
82- 3	SD06	土師器	高台付杯	(17.0)	(8.0)	6.2			40	ロクロナデ	黒色, ヘラミガキ			
82- 4	SD06	土師器	杯	(9.8)	(6.6)	1.4	0.67	0.14	30	ロクロナデ	ロクロナデ	白含む		
85- 1	SX01	土師器	杯	(14.0)	(6.0)	4.7	0.43	0.34	40	ロクロナデ	黒色, ロクロナデ			
85- 2	SX01	土師器	杯						40	ロクロナデ	黒色, ロクロナデ	白含む		
85- 3	SX01	土師器	杯						40	ロクロナデ	黒色, ヘラミガキ	白含む		

表12 土器観察表(5)

番号	遺構	遺物名	器 形	口径	底径	器高	底/口	高/口	遺存	外側の特徴	内面の特徴	備考	船土
85-4	SX01	土師器	杯	(15.4)	(6.6)	4.8	0.43	0.31	40	ロクロナデ ヘラケズリ	黒色。ヘラミガキ ヘラナデ	黒書	白含む
85-5	SX01	土師器	甕			7.6							
88-1	F14P9	土師器	杯	13.1	5.5	3.8	0.42	0.29	65	ロクロナデ	黒色。ヘラミガキ	黒書	
90-1	F17P39	土師器	杯							ロクロナデ	黒色	白含む	
91-1	F15	土師器	杯	14.4	5.4	4.7	0.38	0.33	80	ロクロナデ	黒色。ヘラミガキ	黒書	
91-2	F19	土師器	杯	(13.6)	(5.5)	3.8	0.40	0.28	40	ロクロナデ	黒色。ヘラミガキ	黒書	
91-3	D13	土師器	杯	(12.6)	5.0	3.0	0.40	0.24		ロクロナデ	ロクロナデ	黒書	
91-4	F19	土師器	杯	(13.2)	(6.2)	3.5			25	ロクロナデ	黒化。ヘラミガキ	黒書	
91-5	F15	土師器	杯	(14.8)		(3.9)			30	ロクロナデ	黒色。ヘラミガキ	黒書	白含む
91-6	F19	土師器	杯	(11.8)		(2.9)			20	ロクロナデ	ロクロナデ	黒書	
91-7	G8	土師器	杯	(13.8)		(3.2)			20	ロクロナデ	黒色。ヘラミガキ	黒書	
91-8	D16	土師器	杯			(5.6)	(2.1)		30	ロクロナデ	黒色。ヘラミガキ	黒書	
91-9	E17	土師器	杯					5.8		ロクロナデ	黒色。ヘラミガキ	黒書	白含む
91-10	E14	土師器	杯			4.8	(1.5)		40	ロクロナデ	黒色。ヘラミガキ	黒書	白含む
91-11	D15	土師器	杯			(4.4)	(1.8)		30	ロクロナデ	黒色。ヘラミガキ	黒書	白含む
91-12	D12	土師器	杯			(4.2)	(1.1)		60	ロクロナデ ヘラケズリ	黒色。ヘラミガキ	黒書	
91-13	E14	高台付杯				(4.2)	(2.0)				黒色。ヘラミガキ	黒書	
91-14	D13	土師器	杯							ロクロナデ	黒色。ヘラミガキ	黒書	
91-15	F17	土師器	杯							ロクロナデ	黒色。ヘラミガキ	黒書	白含む
91-16	F19	土師器	杯							ロクロナデ	黒色	黒書	
91-17	D15	土師器	杯							ロクロナデ	黒色	黒書	
91-18	G18	土師器	杯							ロクロナデ	黒色	黒書	
91-19	D-E13	土師器	杯							ロクロナデ	黒色。ヘラミガキ	黒書	
91-20	D-E13	土師器	杯							ロクロナデ	ロクロナデ	黒書	
91-21	F17	土師器	杯							ロクロナデ	黒色	黒書	
91-22	F16	土師器	杯							ロクロナデ	黒色	黒書	
91-23	G18	土師器	杯							ロクロナデ	黒色	黒書	
91-24	G18	土師器	杯							ロクロナデ	黒色	黒書	
91-25	表様	土師器	杯							ロクロナデ	黒色。ヘラミガキ	黒書	
91-26	E17	土師器	杯							ロクロナデ	黒色	黒書	
91-27	G18	土師器	杯							ロクロナデ	黒色。ヘラミガキ	黒書	
91-28	D17	土師器	杯							ロクロナデ	黒色。ヘラミガキ	黒書	
91-29	D15	陶短器	瓶	(15.0)		(4.0)			10	ロクロナデ	ロクロナデ	黒書	
91-30	E13	陶短器	瓶	(13.8)		(4.1)			10	ロクロナデ	ロクロナデ	黒書	
91-31	F15	陶短器	瓶			(1.8)			40	ロクロナデ	ロクロナデ	黒書	
91-32	表様	陶短器	瓶										
91-33	E17	陶短器	瓶							ロクロナデ	ロクロナデ	黒書	
91-34	表様	陶短器	甕										
91-35	E15	陶文	甕										

表13 鉄滓一覧表

出土地点	出土層位	種類	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	備考	
1	SI03	€ 2	鍛治滓	5.4	3.4	1.8	30	大小気泡多數、内部黒色
2	SI07	堆積土	鍛治滓	5.1	3.4	3.7	80	大小気泡多數
3	SI07	堆積土	鍛治滓	5.4	4.5	3.1	65	大小気泡多數、木炭痕、砂粒多數
4	SI07	堆積土	鍛治滓	7.6	5.1	2.8	90	大小気泡多數、赤褐色鉄滓、木炭痕
5	SI07	堆積土	鍛治滓	5.2	4.8	3.9	110	大小気泡多數、赤褐色鉄滓、木炭痕
6	SI07	堆積土	鍛治滓	3.7	3.0	2.8	30	大小気泡多數、赤褐色鉄滓
7	SI24	検出面	鍛治滓	3.6	3.2	2.0	25	大小気泡多數、赤褐色鉄滓、内部黒色
8	SI32	堆積土	鍛治滓	3.2	2.8	2.0	20	大小気泡多數、赤褐色鉄滓、砂粒多數
9	SK12a	堆積土	鍛治滓	4.4	2.3	1.7	10	木炭痕
10	SK23	€ 1	鍛治滓	11.7	7.4	3.9	410	大小気泡多數、木炭痕
11	SK31	堆積土	鍛治滓	2.6	1.7	1.0	5	砂粒多數
12	SK42	底面	鍛治滓	10.4	7.8	7.0	550	大小気泡多數、赤褐色鉄滓
13	SD02	€ 2	炉底	7.4	4.0	1.8	40	砂粒多數、黒色
14	SD02	€ 2	鍛治滓	4.9	3.1	1.8	25	大小気泡多數
15	SD05a	€ 3	鍛治滓	3.2	2.1	1.2	10	砂粒多數
16	D14	L II	鍛治滓	3.0	2.5	2.0	20	気泡多數、砂粒多數

第3章 考察

小山B遺跡の発掘調査において得られた成果の事実報告は第2章で記述したとおりである。この章ではこれらの事実をふまえ、遺構・遺物について若干の検討を加え、調査報告のまとめとしたい。

第1節 遺物について

小山B遺跡出土遺物の概観

本遺跡では縄文土器、磨製石斧、土師器、須恵器、古代の陶器、鉄製品、銅製品、砥石、中近世の陶器などが出土している。縄文土器はわずかに破片が出土しているに過ぎず、磨製石斧を含めて考えても本遺跡内に縄文時代の遺構が存在するとは考えられない。本遺跡の周辺には馬場前遺跡や鍛冶屋遺跡といった縄文時代の集落遺跡が分布しており、本遺跡で出土した縄文時代の遺物はそれらの遺跡から流入したものであろう。また、中世の遺構としては溝跡・火葬場跡があるほか、掘立柱建物も中世まで下る可能性がある。ただし、中世の陶器は小破片が散見されるのみである。したがって本遺跡で主体を占めるのは平安時代の遺物である。ここでは平安時代の遺物にしぼって、概略を述べたい。平安時代の土器・陶器では、土師器・須恵器・灰釉陶器・綠釉陶器が出土している。出土量は土師器が圧倒的に多く、そこに須恵器が少量含まれており、施釉陶器の出土はごくわずかである。

土師器では杯・高台付杯・甕・筒形土器・小型短頸壺・瓶・鉢が出土している。それぞれの出土点数を見てみると、土師器の杯・高台付杯は4,801点、土師器の甕が10,732点出土しており、甕の出土量が多くなっている。また筒形土器がほぼ関係のものも含めて4,637点と、数多く出土していることは特徴的である。珍しいものでは、耳皿が2点出土している。須恵器では杯・瓶・甕・広口壺が出土している。須恵器は545点出土しているのみであり、とくに杯はごくわずかしか出土していない。ここで用いているのは破片点数であり、実際の構成比を表すものではないが、おおよその傾向をつかむことはできよう。次に、土師器から器種ごとに概観していきたい。

杯

本遺跡で出土している杯はいずれもロクロを用いて製作されており、黒色処理を施すもの（A類）と施さないもの（B類）とに大別することができる。B類については、從来から「須恵系土器」「土師質土器」「赤焼土器」などと呼称されてきたが、ここでは土師器の中に含めて報告したい。

A類は体部が内湾して立ち上がり、口縁部がわずかに外反する椀形を呈するものがほとんどである。底部の切り離し技法は回転糸切りであり、外面体部下端から底部周縁あるいは全面にかけてヘラケズリによる再調整を施している。1点のみ、底部が丸底になっているものがある（図33-6）。内面調整は黒色処理のほか、ヘラミガキを施すものがほとんどであり、ロクロナデの痕跡を残すも

のがわずかに見られる（図33-1・4）。ヘラミガキは底部付近が放射状になるものが多い。体部から口縁部にかけては横方向のヘラミガキである。ヘラミガキには、非常に緻密なものと散漫なものが含まれる。また、外面の調整はロクロナデのみである。口径は8.2cm～22.2cmとばらつきがあるが、13cm台の資料が多くなっている。また、図39-8は口縁部が遺存していないが、器形から盛りつけ用の鉢であると考えられる。底径は4.2cm～9.0cmで、平均すると5.7cmである。

B類では、碗形を呈するもの（B I類）と浅い皿形を呈するもの（B II類）とがある。底部の切り離しは回転糸切りがほとんどであり、わずかに回転ヘラ切りのものがある。切り離し後の再調整は施されない。皿形のものでは灯明皿として用いられていたものもある。外面の調整はロクロナデのみのものがほとんどであり、内面にはコテアテあるいはロクロナデが見られる。口径は3.5cm～15.4cmで、平均すると11.9cmであるが、10cm前後のものと13cm前後のもの、15cm前後のものとにわかれれる。底径は2.8cm～7.4cmで、平均すると5.6cmである。

高台付杯

高台付杯には内面に黒色処理を施すものと、施さないものとがあるが、前者が主体となっている。黒色処理を施すものは内外面ともに黒色処理を施すものも含まれている。杯部の切り離し技法は回転糸切りである。高台は後付け高台で、貼り付ける際に接着力を強めるために刻みを入れる、いわゆる菊花状製作痕を持つものが多い。高台は厚くしっかりした造りのものと、非常に高く華奢な造りのものがある。高台が高いものは、杯部が浅く皿に近い形状を呈す。口径は12.3cm～17.0cmで、平均すると15.0cmである。

甕

甕にはロクロを用いないもの（A類）と用いたもの（B類）とがある。A類の口径は、15cm前後のものと25cm前後のものとに分かれれる。口縁部は、くの字に強く外反するものと、外反せずに直立するものとがある。最大径が口縁部にあるものが多いが、最大径が胴部にあるものも見られる。B類は口径が11cm前後のもの、15cm前後のもの、23cm～25cmのもの、30cmを超えるものとがある。最大径が口縁部にあるものと胴部にあるものとがある。面取りされつまみ上げられた口縁部を持ち、体部過半をヘラケズリされている。最大径が胴部にあるものは、いわゆる陸奥型と常総型との折衷型の甕と考えられる。図36-1は小破片のみの資料であるが、胴部の外傾が著しいため、鉢であろうと推定している。

壺

図47-10の1点のみ出土した、小型短頸壺である。器面の磨滅が著しく、細かな調整ははっきりしないが、ロクロを用いて製作されている。黒色処理はなされておらず、また二次的に熱を受けた痕跡も見られない。器形から、施釉陶器を模倣したものと考えられ、仏教系遺物である可能性が高い。

耳皿

耳皿は2点のみ出土している。いずれも手づくねで、非常に粗雑な造りである。器面調整はヘラケズリとナデのみであり、ミガキや黒色処理は施されていない。耳皿については、すでに県内出土

例の集成が行われている。それによると、耳皿は祭祀用食膳具として多く用いられていたという。ただし、本遺跡で出土している耳皿は、ほかの遺跡で出土したものとは製作技法、形態が大きく異なっている。耳皿を見た人物が模倣して作製したものであろうか。

筒形土器

本遺跡では数多くの筒形土器が出土している。口径と底径がほぼ等しい筒形をしており、底部がやや上げ底状になる特徴がある。多くのものは口径が10cm～13cm、器高が13cm前後であるが、口径9cm、器高9cmのやや小型のものもある。輪積み痕をよく残しているが、内面はナデによって比較的平滑に仕上げられている。筒形土器は、製塩に関係して用いられていると考えられているが、本遺跡では中に土を詰めてカマドの支脚として用いられていた例が確認されている（図43-7・8）。また、図18-22は大きく変形しており、容器として使用することは不可能である。完形の筒形土器が多く出土していることとあわせ、本遺跡では筒形土器が容易に入手可能であったことを示している。

須恵器

本遺跡で出土している須恵器は、土師器と比較して非常に少ない。その内訳を見ると、甕・瓶などの貯蔵具がほとんどであり、杯はわずかに破片2点が出土しているにすぎない。

施釉陶器

本遺跡では5点の施釉陶器が出土している。そのうち灰釉陶器が2点、綠釉陶器が3点である。いずれも小破片のみで、接合できるものはほとんどなかった。灰釉陶器は住居跡から出土している。胎土はやや粗く、灰白色を呈している。胎土分析を行っていないが、猿投産である可能性が高い。形態的な特徴から、灰釉陶器は黒窯90窯式（840～900年）に位置づけられる。綠釉陶器はいずれも遺構外から出土している。胎土はやや粗く、灰白色を呈している。焼成は堅緻で、釉は淡い色調を呈している。具体的な産地は明らかではないが、東海産であると考えられる。綠釉陶器は平尾編年第三段階（840頃～930年頃）に位置づけられよう。

小山B遺跡の諸土器群とその様相

上に見た平安時代の土器を遺構との伴出関係やセット関係の点からまとめると、次の4つの土器群に大別することができる。東北地方の平安時代の土器については、多賀城跡出土の資料を中心に多くの研究がなされており、ここで諸先学の成果に照らして土器群の年代を推定しておきたい。

I群は3c号住居跡から出土したものがあてている。3c号住居跡からは土師器の杯・甕・筒形土器・耳皿が出土しており、須恵器の杯は出土していない。土師器の杯はいずれもA類である。口径は12.6～15.2cm、平均すると14.2cmである。底径口径比は0.38～0.54、平均0.45であり、口径に比べて底径が大きいことがわかる。甕はB類が出土している。

本土器群の特徴は赤粉遺跡のⅣ期（14号住居跡出土土器）と類似しているが、本土器群はより底径が大きく、やや古い様相を示している。赤粉遺跡例が9世紀中葉～後葉とされているため、本土器群はおよそ9世紀中葉に位置づけることができよう。

II群は、18号住居跡から出土した土器をあてている。本遺構からは土師器の杯、甕、瓶、須恵器の瓶、壺、灰釉陶器が出土している。杯は、器面調整が明らかでない図39-7を除いて、いずれもA類である。口径は12.6~16.2cmであるが、13cm前後のものと16.2cmのものとに分化していると言えるだろう。口径に比べて底径が小さくなっている、より皿形に近づいている。底径口径比は小型のものでは0.42~0.56であり、大型のものでは0.40である。土師器の甕はいずれもB類である。灰釉陶器の段皿（K-90）が搬入されているので、本土器群は9世紀中葉から後半に位置づけられるが、I群に後続し、III群よりも先行することから9世紀後半の年代を考えたい。

18号住居跡出土遺物と同様の特徴を持つものが、3a号住居跡から出土した土器である。3a号住居跡は3c号住居跡よりも新しいことが明らかになっている。3a号住居跡から出土しているもののうち、図化したものはいずれもカマド構築材および補強材であり、住居が構築されるより前に使用されたものと考えられる。3a号住居跡と3c号住居跡から出土した杯を比較してみると、底径が大きいものから小さいものへと変化することを看取できる。3a号より古く3c号より新しい3b号住居跡からは、9世紀後半と考えられる灰釉陶器が出土している。このことからも、I群土器からII群土器への変化は9世紀後半頃に起きていると考えられる。

III群は2号住居跡から出土した土器をあてている。本遺構からは土師器の杯・高台付杯・甕が出土している。土師器の杯には、A類とB類とが含まれる。B類の杯は口径が11cm代と小型であるが、皿形にはなっていない（B I類）。高台付杯はヘラミガキ・黒色処理が施されている。甕は、A類が出土している。次に、III群土器の位置づけを考えてみたい。1号住居跡と2号住居跡とは重複関係にあり、平面形の切り合いから2号住居跡のほうが新しいことが判明している。1号住居跡から出土した遺物は遺存率も低く、あまり良好な資料ではないが、それぞれの杯を比較してみる。1号住居跡から出土した土器は、杯と高台付杯とがあるが、杯はいずれもA類である。それに比べて2号住居跡からはA類と、B類とが出土している。このことから、B類の杯を含むIII群土器は、すべての杯に黒色処理を施すI群・II群土器よりも後発的であることが推測される。

本土器群は土師器杯B類をやや多く含み、B II類をほとんど含まないという特徴が高崎遺跡S X1080土坑と類似している。このことから本土器群はおおよそ10世紀の前半に位置づけられよう。

IV群は、22号住居跡から出土した土器である。本遺構からは土師器の杯、高台付杯、小型の壺、甕が出土している。土師器の杯にはA類とB類とがあるが、B類が主体となっている。A類のなかでも、ミガキの単位は非常に散漫である。口径は15cmを超えるもの、13cm前後のもの、10cm台のものの3種類が見られる。小型のものは、浅い皿形を呈している。高台付杯は、内面にヘラミガキ・黒色処理を施すものと施さないものとがある。甕はA類とB類とが出土している。IV群土器の位置づけを考えるときに、20号住居跡と25号住居跡の重複関係は有効であろう。25号住居跡から出土した土器群はB II類の杯を含んでおり、IV群土器に含めることができる。20号住居跡から出土した土器群は、III群土器と同様の特徴を持っている。25号住居跡は20号住居跡よりも新しいことが明らかになっている。したがってIV群土器はIII群土器よりも新しいといえよう。

本土器群はBⅡ類の杯が出土している点、赤粉遺跡M期（24号住居跡出土土器）と類似している。赤粉遺跡M期には10世紀初頭～中葉の年代が与えられ、「10世紀中葉でもややさかのぼる年代を与えることができる」とされている。本土器群は、BⅠ類の杯を含むⅢ群土器に後続することから、おおよそ10世紀中葉に位置づけられるものと考えられる。

以上の内容をまとめてみると、土師器杯の特徴と遺構の重複関係から、各土器群はI→II→III→IVの順に変遷することが推測された。各土器群の年代は、それぞれ類例との比較により、I群土器は9世紀中葉に、II群土器は9世紀後葉に、III群土器は10世紀前葉に、IV群土器は10世紀中葉に、おおよそ位置づけられよう。

第2節 遺構について

堅穴住居跡

本遺跡では、27件の堅穴住居跡が検出されている。本遺構で検出されている住居跡は規格性が乏しいが、それでもいくつか共通する特徴を有する。ここでは、住居跡の特徴を概観する。

まずあげられることは、平面形が整った隅丸方形・隅丸長方形を呈していないことである。25号住居に至っては、不整五角形となっている。この要因としては、第一には本遺跡の地山が砂質土であり、崩落しやすいことが考えられる。構築当時は整った形状をしていたものの、崩落してしまったのである。第二には、構築年代の差を示していると考えることもできよう。10世紀中葉と考えられるIV群土器が出土する22号住居跡は、9世紀後葉のII群土器が出土する18号住居跡にくらべて、しまりのない平面形をしている。

カマドは南東辺あるいは北東辺に作りつけられているが、煙道まで良好に遺存しているものと、煙道がほとんど遺存しないものがある。このことにも時期差が反映している可能性がある。煙道は半地下式であったと考えられる。3a号住居跡では、煙道に土師器の甕を2個体埋め込んでいた。カマドの袖には芯材として石を用いているものが多い。袖自体は遺存していない19号・20号住居跡でも、芯材と見られる石が出土している。石はいずれも花崗岩の川原石で、遺跡近くを流れる木戸川で容易に入手可能な石材である。カマドは石とともに粘性の強い土を用いて構築されていたのであろう。3c号・7号住居跡ではカマドの袖は遺存していないものの、カマド構築材とみられる粘土塊が検出されている。また、3a号住居跡ではカマドの天井石が検出されている。2号住居跡のカマドで出土した甕も、カマド天井の構築材として用いられていた可能性がある。燃焼部では、支脚が検出されているものが多い。支脚は凝灰岩を削りだしたものが多いが、なかには20号住居跡のように筒形土器に粘質土を詰めたものとが見られる。カマドは意図的に破壊されたものと、自然に崩壊したものとが検出されている。破壊されたものでも、酸化面は残されている場合が多い。

そのほかの住居内施設として、柱穴や壁溝はほとんど検出されていない。もともと存在しなかったのか、地山と堆積土との差異が乏しかったために検出できなかったのか、確認できなかった。18

号・29号住居跡では、カマドの脇に貯蔵穴が検出されている。

掘立柱建物跡

本遺跡では総計457基の小穴が検出されている。これらはいずれも何らかの柱を立てた跡であると考えられるが、検出された掘立柱建物跡はF21P1を含めても6棟にとどまる。そのうち、1号・3号・8号・9号は竪穴住居跡と重複関係にあり、3号・9号は16号住居跡よりも古い可能性が高い。

3号建物跡は4間×2間であり、F21P1は柱穴1基のみであるが、ほかのものは3間×2間である。2号・3号は南北棟であり、1号・8号・9号は東西棟である。いずれの建物も真北あるいは磁北を基準に建設されており、竪穴住居跡が北あるいは東から 30° ~ 45° ふれて構築されているのとは異なる。あるいは竪穴住居跡とは時期がまったく異なることも考えられるが、確認できなかつた。

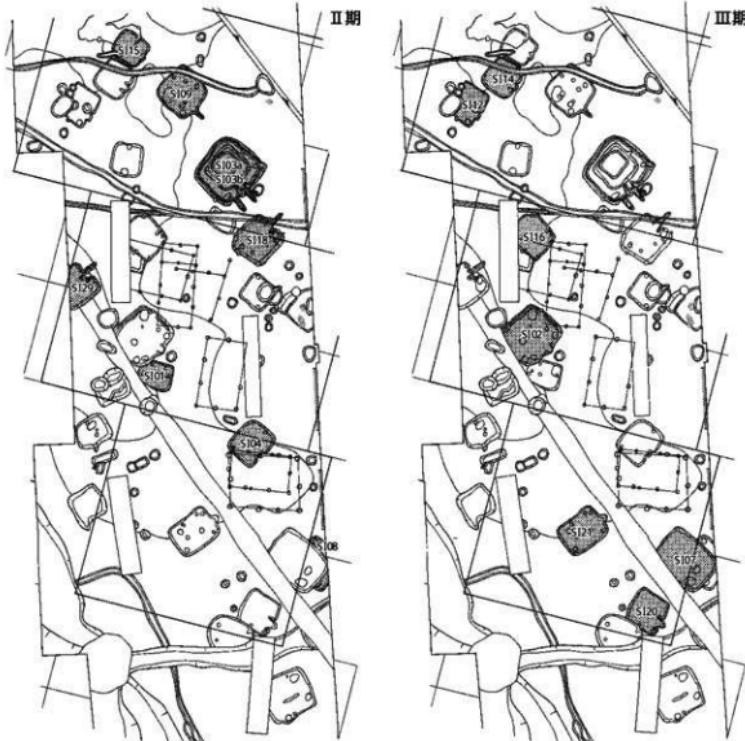


図93 竪穴住居跡変遷図(1)

竪穴住居跡の年代

竪穴住居跡の変遷について、遺構の重複関係、出土した遺物の年代によって考えてみたい。ほかの遺構の変遷については、出土した遺物が乏しく時期の決定が困難なものが多いので、ここでは扱わないこととする。

まず、遺構の切り合い関係をもう一度整理しておく。1号住居跡と2号住居跡は重複関係にあり、2号住居跡が新しい。3a号住居跡・3b号住居跡・3c号住居跡は重複関係にあり、3c号→3b号→3a号の順に変遷している。7号住居跡は8号住居跡よりも新しい。16号住居跡は17号住居跡よりも新しい。20号住居跡と25号住居跡は重複関係にあり、25号住居跡のほうが新しい。35号住居跡と36号住居跡は重複関係にあり、35号住居跡のほうが新しい。そのほか、14号住居跡と15号住居跡は重複していないが、非常に近接しているため、同時に機能していたとは考えられない。これらの竪穴住居跡は、遺物の年代と同様に4時期にわたって変遷しているものと考えたい。ただし、時期ごとにすべての住居が建て替えられているわけではないので、この変遷案は大まかな集落の景観を示して

いるに過ぎない。I期に該当する住居跡は、I群土器が出土している3c号住居跡のみである。床面積が9.7m²の隅丸方形の平面形を呈し、カマドは北辺に取り付けられていたと推定されている。主軸方位はN30°Eを指している。

II期はII群土器が出土している住居跡である。該期の住居跡としては、1号・3a号・3b号・4号・8号・9号・15号・17号・18号・29号が検出されている。3a号住居跡は、重複関係から3b号住居跡よりも新しいことが明らかであるが、堆積土からも黒色処理を施さない土師器杯が出土していないことから、該期に含まれるものと考えたい。3a号・3b号の重複関係から、II期には明らかに新旧2時期が含まれる。17号住居跡は、遺物の出土状況・遺存率ともによくないが、遺構の重複関係からこの時期に該当すると推測した。I期に属する住居跡が1軒のみであったことと比べると、飛躍的に住居が増加したことがわかる。この時期の住居跡は、床面積が6.7~26.1m²と、大きさのはらつきが非常に大きい。平面形は整った隅丸方形を呈するものが多い。カマドは18号・

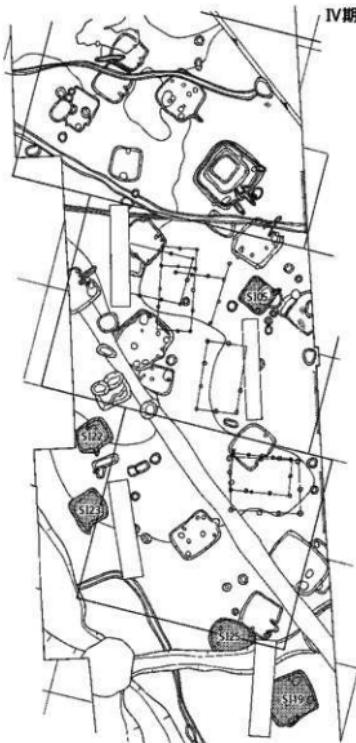


図94 竪穴住居跡変遷図(2)

29号住居跡では北東辺に付いているが、3a号・3b号・4号・9号・12号のものは南東辺に付いている。主軸方位は北あるいは東から時計回りに 20° ～ 40° 振れている。煙道まで残る、比較的しっかりした造りのカマドが多い。

Ⅲ期はⅢ群土器が出土している住居跡である。該期に属する住居跡は、2号・7号・12号・14号・16号・20号・21号である。7号住居跡は、堆積土から黒色処理を施さない小型の皿形杯が出土しているが、主体を占めるのは黒色処理を施した杯であり、Ⅳ群土器よりも古い様相を示しているため、該期に含めておきたい。12号と14号とは、非常に近接しているため、Ⅲ期のなかでも時期差があるものと考えられる。床面積は $9.4\sim22.6\text{m}^2$ と、ばらつきがある。カマドは16号住居跡のものが北東辺に付いている以外は、南東辺に付いている。また、長く延びる煙道は検出されていない。住居跡の主軸方位は北あるいは東から時計回りに 15° ～ 33° 振れている。Ⅱ期のものに比べて、やや反時計回りに戻ったと言えよう。

Ⅳ期は、Ⅳ群土器が出土している住居跡で、5号・19号・22号・23号・25号が該当する。この時期の住居跡はこれまでのものより、分布域をやや南に移している。平面形は不整形のものが多くなっている。床面積は $6.7\sim13.6\text{m}^2$ と、これまでのものより小型化し、ばらつきも小さくなっている。カマドの作りつけられる位置は、北東辺あるいは南東辺というのはこれまでのものと同様であるが、コーナーに作りつけて住居跡の掘形の辺を利用するものが現れる。主軸方向は、北あるいは東から時計回りに 2° ～ 50° 振れており、ばらつきが大きくなっている。このⅣ期を最後に、本遺跡では住居が作られなくなる。

第3節 墨書土器

文字の種類と分布の様相

小山B遺跡では88点の墨書土器が出土している。出土した地点は、遺構外のものを除外すると、住居跡から49点、土坑から7点、溝跡から5点などとなっている。いずれも堆積土からの出土で、祭祀行為などが復元できる出土状況を示すものはない。本遺跡では転用硯が出土しており、墨書は本遺跡内でなされたものと見られる。墨書がなされる土器・部位を見ると、1点を除いて土師器杯・高台付杯の外側部から底部にかけて書かれている。墨書の内3分の2を判読することができた。判読ができるもののでは、「少川」「中内」「大」「平口」「上」「主」「吉原」「財口」「州」「口萬」「富」「良」の文字が書かれている。ほとんどの文字は正位で書かれている。そのうち全体の41パーセントと圧倒的多数を占めるのが「少川」の文字である。

墨書土器が認められる土器群はⅠ群～Ⅳ群まで、すべてに渡っている。したがって、このことから本遺跡において墨書がなされる時期となされない時期とを区別することはできない。つぎに各時期の墨書内容を見てみたい。Ⅰ期では、3c号住居跡から墨書土器が出土しており、文字は判読できたものでは「少川」のみである。Ⅱ期では、1号・8号・9号・15号・18号・29号住居跡から出

表14 小山B遺跡出土墨書土器一覽

番号	遺構	層位	文字	部位	方向	遺存	番号	遺構	層位	文字	部位	方向	遺存			
8 - 2	S I 01	堆積土	少用	外腹	体~底	正位	破片	43 - 3	S I 20	I 2	良	外腹	体	正位	破片	
10 - 1	S I 02	床面直上	少用	外腹	体	横位	50	45 - 4	S I 21	I 2	大	外腹	体	正位	70	
17 - 1	S I 03c	堆積土	少用	外腹	底		40	45 - 6	S I 21	I 2	□	外腹	体		5	
17 - 4	S I 03c	床面直上	□	外腹	体		30	54 - 1	S I 29	I 5	少用	外腹	体	正位	100	
17 - 5	S I 03c	堆積土	少用	外腹	体	正位	破片	54 - 2	S I 29	I 7	□	外腹	体		80	
17 - 6	S I 03c	堆積土	□	外腹	体		破片	54 - 3	S I 29	I 4	□	外腹	体		10	
18 - 1	S I 03	堆積土	少用	外腹	体~底	正位	60	62 - 1	S B03 P 3	堆積土	少用	外腹	体	正位	破片	
18 - 5	S I 03	堆積土	断(二)(單ニ)	外腹	体	正位	15									
18 - 6	S I 03	堆積土	□	外腹	体		破片	74 - 2	S K23	I 1	□(十九)	外腹	体	正位	15	
18 - 10	S I 03	堆積土	□	外腹	体		破片	74 - 3	S K23	I 4	平□	外腹	体	橫位	70	
18 - 11	S I 03	堆積土	□	外腹	体		破片	74 - 4	S K23	I 1	□	外腹	体~底	正位	20	
18 - 12	S I 03	堆積土	□	外腹	体		破片	74 - 5	S K27	堆積土	□	外腹	底		20	
18 - 13	S I 03	堆積土(下)	□	外腹	体		破片	74 - 7	S K57	I 1	少用	外腹	体	正位	20	
18 - 14	S I 03	堆積土	少用	外腹	体	正位	破片	74 - 10	S K12b	I 1	少用	外腹	体	正位	破片	
18 - 15	S I 03	堆積土	少用	外腹	体~底	正位	破片	74 - 11	S K12b	I 1	□	外腹	体	正位	破片	
18 - 16	S I 03	堆積土(下)	□	外腹	体		破片									
18 - 17	S I 03	堆積土	□(單ニ)	外腹	体	正位	破片	79 - 1	S D05a	床面直上	少用	外腹	体	正位	50	
18 - 18	S I 03	□ 1	少用	外腹	体~底	正位	破片	79 - 3	S D05a	I 3	少用	外腹	底		30	
18 - 19	S I 03	□ 1	□	外腹	体		破片	81 - 1	S D05b	底面	少用	外腹	体	正位	30	
18 - 20	S I 03	堆積土	□	外腹	体		破片	81 - 2	S D05b	堆積土	少用	外腹	体	正位	80	
								81 - 4	S D05b	堆積土	中内	外腹	体	正位	100	
21 - 4	S I 05	床面	上	外腹	体	正位	95									
21 - 5	S I 05	□ 1	少用	外腹	体	正位	20	85 - 4	S X01	I 1	吉原	外腹	体	正位	40	
									P2	I 4						
23 - 1	S I 07	堆積土	少用	外腹	体~底	正位	60									
23 - 3	S I 07	堆積土	少用	外腹	体	正位	40	90 - 1	F 17	P 29	I 1	□	外腹	体~底	破片	
23 - 6	S I 07	堆積土	少用	外腹	体~底	正位	25									
23 - 7	S I 07	堆積土	富	外腹	体	正位	破片	91 - 1	造模外	F 15	L II	少用	少用	外腹	正位	80
23 - 8	S I 07	堆積土	□	外腹	体		破片	91 - 2	造模外	F 19	L II	平□(單ニ)	外腹	体	正位	40
23 - 9	S I 07	堆積土	中内	外腹	体	正位	破片	91 - 4	造模外	F 19	L II	□	外腹	体		35
23 - 10	S I 07	堆積土	□	外腹	底		破片	91 - 5	造模外	F 15	L II	□	外腹	体		30
23 - 11	S I 07	堆積土	少用	外腹	体	正位	破片	91 - 7	造模外	G 8	L II	少用	外腹	体	正位	20
23 - 12	S I 07	堆積土	□	外腹	体		破片	91 - 8	造模外	D 16	L II	少用	外腹	体	正位	30
23 - 13	S I 07	堆積土	少用	外腹	体	正位	破片	91 - 9	造模外	E 14	L II	少用	外腹	体~底	破片	
23 - 14	S I 07	堆積土	□	外腹	體形		破片	91 - 10	造模外	D 15	L II	□萬	外腹	体~底	正位	40
								91 - 11	造模外	D 15	L II	□(樹ニ)	外腹	体	正位	30
24 - 2	S I 08	堆積土	中内	外腹	体	正位	20	91 - 12	造模外	D 12	L II	少用	外腹	体	正位	60
								91 - 15	造模外	F 17	少用	外腹	体	正位	破片	
27 - 4	S I 09	堆積土(下)	上	外腹	体	正位	40	91 - 16	造模外	F 19	L II	□	外腹	体	破片	
33 - 1	S I 15	堆積土	上	外腹	体	正位	15	91 - 17	造模外	D 15	L II	□	外腹	体	破片	
35 - 6	S I 16	堆積土	□	外腹	体		破片	91 - 19	造模外	D/E13	L II	主	外腹	体	正位	破片
35 - 7	S I 16	堆積土	上	外腹	体	正位	破片	91 - 20	造模外	D/E13	L II	少用	外腹	体	正位	破片
35 - 8	S I 16	堆積土	□	外腹	体~底		破片	91 - 21	造模外	F 17	L II	少用	外腹	体	正位	破片
35 - 9	S I 16	堆積土	少用	外腹	体~底	正位	破片	91 - 22	造模外	F 16	L II	□	外腹	体	破片	
								91 - 23	造模外	G 18	L II	□	外腹	体	破片	
								91 - 24	造模外	G 18	L II	少用	外腹	体	正位	破片
39 - 1	S I 18	堆積土(下)	少用	小頭	外腹	体~底	正位	30	91 - 25	造模外	去探	□	外腹	体	破片	
39 - 2	S I 18 P 1	堆積土	□(樹ニ)	外腹	体	正位	95	91 - 26	造模外	E 17	L II	少用	外腹	体	正位	破片
								91 - 27	造模外	G 18	L II	少用	外腹	体	正位	破片
								91 - 28	造模外	D 17	L II	少用	外腹	底	破片	
43 - 2	S I 20	I 2	少用	外腹	体	正位	25									

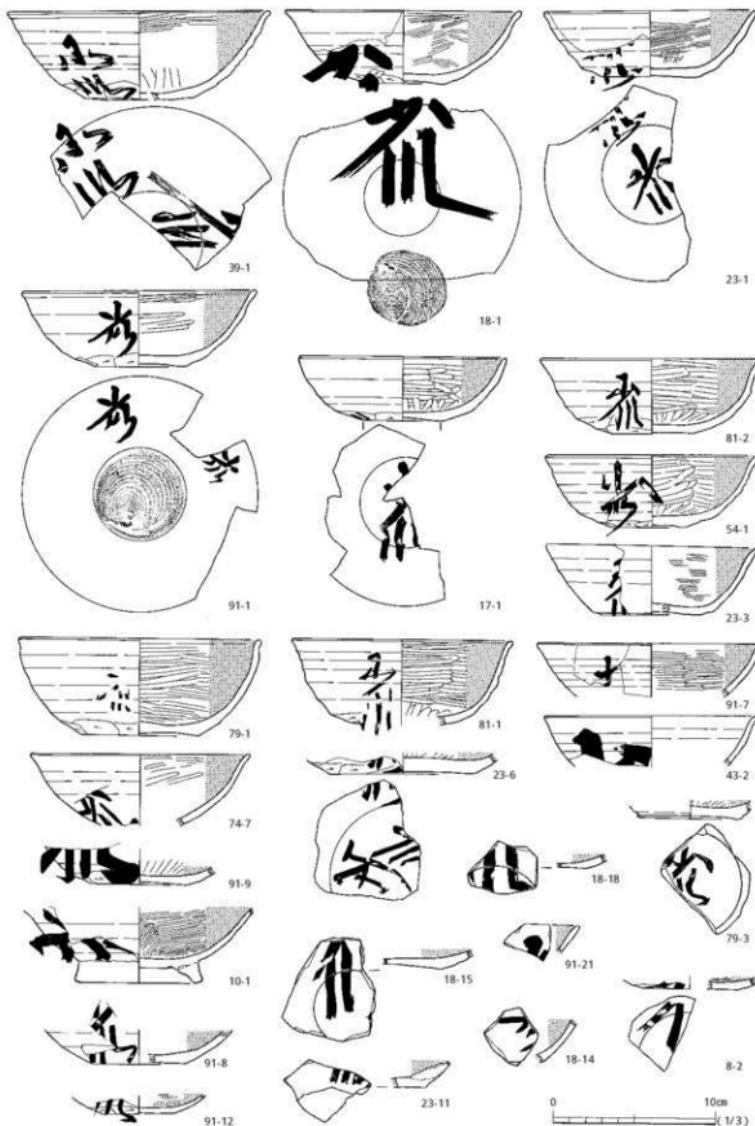


図95 小山B遺跡出土墨書土器(1)

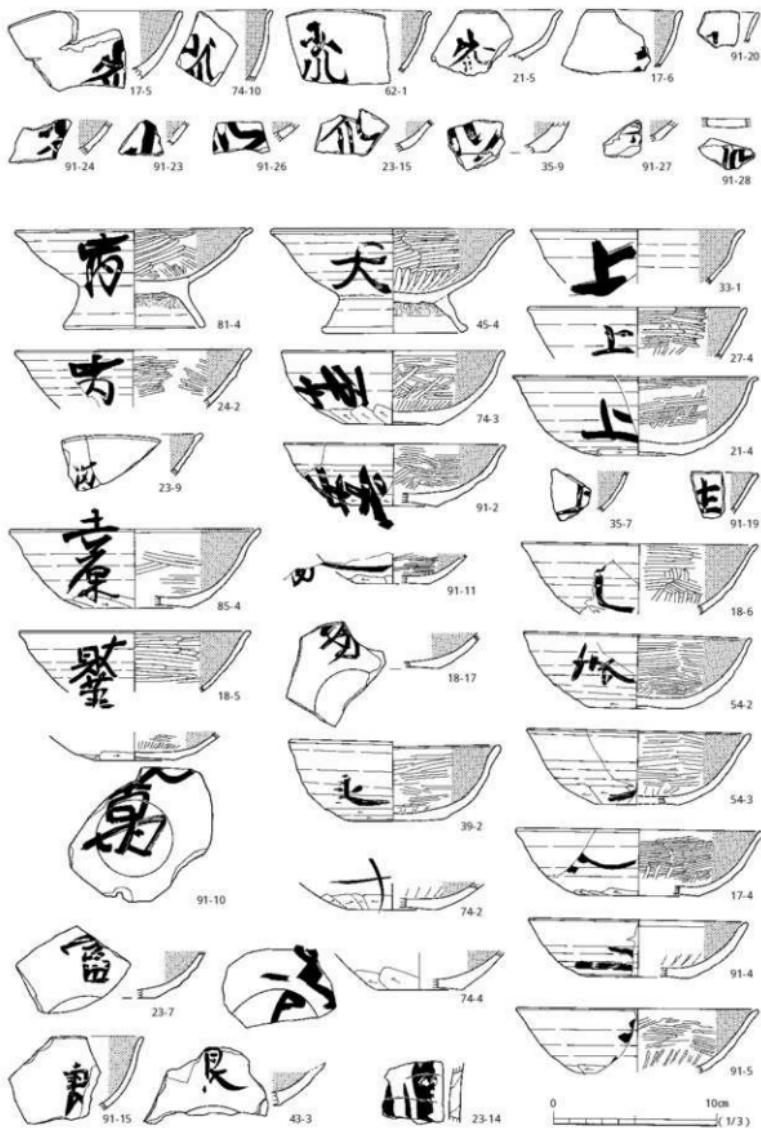


図96 小山B遺跡出土墨書土器(2)

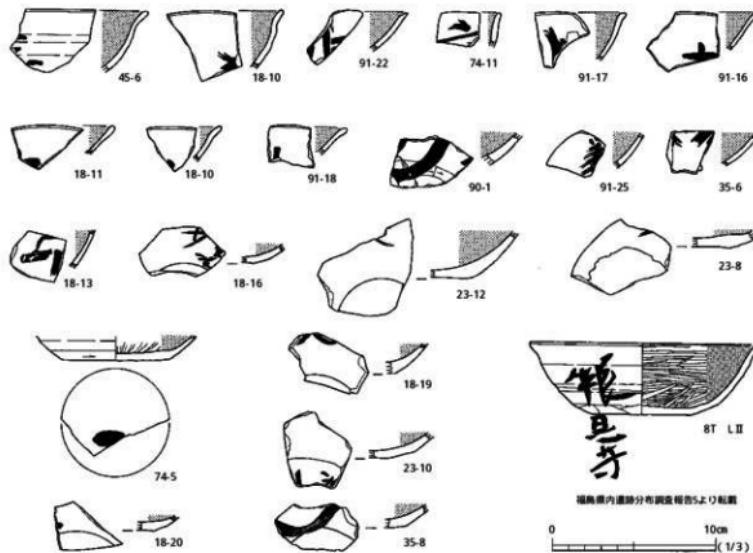


図97 小山B遺跡出土墨書き器(3)

土している。8号住居跡からは「中内」が、9号・15号住居跡からは「上」の墨書き器が出土しているが、多くは「少川」である。Ⅲ期になると、2号・7号・16号・20号・21号住居跡から出土している。7号に「富」「中内」、16号に「上」、20号に「良」、21号に「大」が含まれるもの、依然として「少川」が多く出土している。Ⅳ期では、5号住居跡から「上」「少川」の墨書き器が出土している。以上のことから、本遺跡では各期を通じて「少川」が主体であり、その他の文字は客体的に混じる程度であることが明らかである。

「少川」の墨書きにはどのような意味があるのだろうか。「少川」と「小川」とが同一の土器に書かれている例があり、意味が通じていることを示していよう。具体的な読み方は明らかではないが、木戸川やほかの中小河川が流れる沖積地の景観を表現したものと考えができるだろう。「少川」は多くの住居跡から出土しており、文字からも吉祥句であるとは考えがたい。ここでは本遺跡に居住していた集団の標識であったと考えたい。ただし、集落内に1つの集団のみが存在しているのであれば、標識など不要であろう。注目されるのは「中内」の墨書き器が出土していることである。「中内」の墨書きは、同じ楳葉町内の赤粉遺跡で多数出土しており、なんらかの集団の標識であろうとされている。本遺跡で「中内」の墨書き器が出土するということは、「少川」を標識とする集団と、「中内」を標識とする集団との交流を示しているのである。本遺跡で「少川」が標識として用いられる背景には、このような交流が広く行われていたことがあるのであろう。

そのほかの墨書土器は1字あるいは2字の資料であり、歴密にはその意味するところを解明することはできない。地名や人名、吉祥句など、さまざまに考えることができる。ただし、「大」「平□」「上」「吉原」「財□」「□萬」「富」「良」については、吉祥句である可能性が高いように思われる。

「報恩寺」の墨書土器について

本遺跡の試掘調査では、土師器杯の外面体部に正位で「報恩寺」と書かれた墨書土器が出土している。本遺跡では、銅鏡を模倣したと見られる丸底の両面黒色土器（図33-6）や小型短頸壺が出土しており、灰釉陶器の内面には朱が付着していた（図39-15）。これらは仏教に関係する遺物である可能性が高い。したがって、実態は明らかではないが「報恩寺」と呼ばれる寺院が本遺跡周辺に存在したものと考えられる。ただし、仏教に関する墨書土器は試掘調査時出土の1点のみであり、寺院・堂と見られる遺構も検出されなかった。調査区の周辺には仏教に関する遺構が存在しているものと考えられる。今後の調査を待ちたい。

第4節 分析依頼結果について

樹種同定結果について

本遺跡では5号溝跡から杭列が検出されている。杭の材質を知るために、櫛吉田生物研究所に委託して樹種の同定を行った。5点を試料としたが、その結果マツ科モミ属・モチノキ科モチノキ属・イチイ科カヤ属カヤであることが明らかになった。杭の種類と樹種との関係は、角杭にはマツ科モミ属とイチイ科カヤ属カヤとがあった。板材はマツ科モミ属であり、丸太杭はモチノキ科モチノキ属であった。

分析結果は以上であるが、杭の種類と樹種との関連を把握するためには、試料とする点数が少なすぎた。反省すべき点である。

放射性炭素年代測定結果について

放射性炭素年代測定には、2号住居跡から出土した炭化材と5号溝跡から出土した杭とを試料とした。2号住居跡では炭化材が床面やビットから多く出土しており、この炭化材は住居の柱材などであった可能性がある。したがって、炭化材の年代を測定することは、本遺構の構築年代を推定する手がかりになる。5号溝跡からは、古代を中心とする遺物が多く出土しているが、最終的にいつまで溝として機能していたかを示す遺物は出土していない。溝の最終段階に伴う杭の年代を測定することによって、5号溝跡の終末年代を推定する試料とする。以上の問題意識をもって、年代測定を櫛古環境研究所に委託した。

その結果、2号住居跡から出土した炭化材は交点で西暦910年・920年・960年と900年であった。2号住居跡から出土している土器群はⅢ群土器であり、その年代は10世紀前葉と推定している。したがって土器群の年代と炭化材の年代とは近接していることになる。さらにいえば、10世紀の初頭に構築された本遺構は、10世紀前葉のうちに廃絶したという状況も考えられよう。

5号溝跡から出土した杭の年代は交点で西暦1430年であり、5号溝跡が最終的に放棄されたのが15世紀頃であることが、強く推定される結果となった。

第5節 総括

小山B遺跡の調査結果の詳細については、前章および本章前節までに報告した。ここでは本遺跡の特徴をまとめてみたい。

本遺跡は、9世紀中葉に突如として出現し、10世紀中葉を最後に終焉をむかえる集落の跡である。9世紀以前には人々の居住の痕跡は見られなかった。本遺跡はいわゆる伝統的集落ではないものの本遺跡の出現から終焉までのありかたは、9世紀に急激に遺構数が増え10世紀代に遺跡内から姿を消すという、県内外で多く認められている現象と同様のものである。遺構変遷図に見るように、調査区の中には竪穴住居跡を主体とするまとまりが認められ、そのまとまりは時期によって若干移動しているようである。また、時期が下るにしたがって住居の規模は小型化するようであるが、集落の最終段階まで、竪穴住居を中心とした集落であり続けている。この点は同じ町内に存在する赤粉遺跡や鍛冶屋遺跡と類似している。

調査区内に集落を区画する施設は認められなかった。調査区内を縦貫する5号溝跡にしても、住居跡の主軸方位を規制することはなかったと考えている。住居跡の主軸方位自体も大きくぶれており、遺構の特徴からは本遺跡に官衙的な性格を認めることはできない。

本遺跡は木戸川右岸の沖積地に立地しており、現況の土地利用は水田である。発達した自然堤防を除けば、常に出水の危険性にさらされた、非常に不安定な土地であるといえる。このような土地に、どのような人々が暮らしていたのであろうか。

注目されるのは、多数の墨書き土器の出土、碌釉陶器、灰釉陶器や小型短頸壺、銅鏡を模倣したと見られる両面黒色の丸底杯の出土である。灰釉陶器の段皿には朱泥が付着していた。墨書き土器の字形はしっかりとおり、転用硯も出土していることから、本遺跡には文字を理解し、書くことのできる人物が居住していたものと推定される。また、試掘調査で出土した「報恩寺」の墨書き土器や施釉陶器・小型短頸壺・丸底杯などは、仏教に関係する遺物であるとされている。このような仏教系遺物が出土する集落遺跡は県内外に分布しており、特に千葉県では数多くの事例が集成されている。須田勉は農村社会に展開した小規模な寺を「村落内寺院」と名付け、その社会的な背景を考察している。須田によると「村落内寺院」は、農業開発を主体的に進める豪族層と一般農民との精神的結合の装置として機能したという。また、崔生衛は「村落内寺院」の規模に階層性が認められるとし、それぞれ経営主体が異なる可能性を指摘している。

これらの研究を通して本遺跡のあり方を見てみよう。本遺跡では庇の付く建物や双堂形式の建物、正方形の建物など、寺院や堂と考えられる遺構は検出されていない。長方形の側柱建物はいくつか検出されているものの、いずれも寺院や堂を見る根拠を欠く。しかし遺物の面からは、具体的な寺

院名を記した土器など、かなり規模の大きな寺院が推測される。これらのことから「報恩寺」と呼ばれた寺院は調査区内には存在せず、調査区周辺、あるいは遺跡周辺に存在していた可能性が高いのではないか。鎌倉時代創建とされる海会寺の存在する現在の小山集落や、本遺跡の南に隣接する馬場前遺跡・鍛冶屋遺跡の周辺も、「報恩寺」の比定地として可能性がある。馬場前遺跡では古代の瓦が、鍛冶屋遺跡では灰釉陶器が出土している。一般に9世紀後半は、経済成長が著しかった時期であると考えられている。経済成長の一端を支えたものは、このような仏教を中心として行われた、地方における農業開発だったのであろう。

しかしこの集落は10世紀中葉を最後に、終焉を迎える。その理由は明らかではないが、集落があまりにも不安定な沖積地に立地していたことも関係するのであろう。その後、この土地がどのように利用されていたのかを示す資料は少ないので、中世までは5号溝跡を水路として利用した水田耕作が行われていたものと考えている。5号溝跡が廃絶した後は、現在とそれほど変わらない景観となつていったのである。

(轟 田)

引用・参考文献

- 石川智紀ほか 2001 「新保遺跡」『国営は場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』新潟県埋蔵文化財調査報告書第103集、新潟県教育委員会・財新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 石本 弘 1983 「下堀際遺跡」『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告1』福島県文化財調査報告書第111集、福島県教育委員会・財福島県文化センター
- 井 憲治ほか 2000 「鍛冶屋遺跡(1次調査)」『常磐自動車道遺跡調査報告21』福島県文化財調査報告書第365集、福島県教育委員会・財福島県文化センター
- 磐瀬清雄・能登谷宜康ほか 1997 「原町火力発電所関連遺跡調査報告書VII」福島県文化財調査報告書第336集、福島県教育委員会・財福島県文化センター
- 宇佐見雅夫ほか 1997 「赤粉遺跡」『橋垂町文化財調査報告書』第11集、橋垂町教育委員会
- 大河原勉ほか 2000 「下小塙上ノ原遺跡」「上本町D遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告20』福島県文化財調査報告書第364集、福島県教育委員会・財福島県文化センター
- 大津 透 2001 『道長と宮廷社会』日本の歴史 第6巻、講談社
- 岡田光生・佐々木慎一ほか 1999 『福島県内遺跡分布調査報告5』福島県文化財調査報告書第357集、福島県教育委員会・財福島県文化センター
- 金子裕之 1989 『古代の都と村』古代史復元 第9巻、講談社
- 上高津貝塚ふるさと歴史の広場 1998 『仏のすまう空間—古代謹ヶ浦の仏教信仰—』
- 鬼頭清明 1985 『古代の村』古代日本を発掘する 第6巻、岩波書店
- 木本元治 1990 『福島県内の黒色土器(平安時代)』『東国土器研究』第3号
- 考古学から古代を考える会 2000 『古代仏教系遺物集成・関東 一考古学の新たなる開拓をめざして』
- 小山正忠・竹原秀雄 1991 『新版 標準土色帖』日本色検事業株式会社
- 斎藤孝正 1994 『東海地方の施釉陶器生産 一猿投窯を中心に』『古代の土器研究 一律令的土器様式の西・東3 施釉陶器—』古代の土器研究会
- 坂井秀弥 1989 「山三賀Ⅱ遺跡」『新バイパス関係発掘調査報告書』新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集、新潟県教育委員会

第3章 考 察

- 坂上康俊 2001 「律令国家の転換と「日本」 日本の歴史 第5巻」講談社
- 笠生 衛 1993 「『村落内寺院』における堂宇建物と仏教信仰」『野中徹先生還暦記念論集』野中徹先生還暦記念祝賀会
- 笠生 衛 1993 「第5章 第4節 国分寺以降の地方寺院」『房総考古学ライブラリー7 歴史時代(1)』、財千葉県文化財センター
- 笠生 衛 1994 「古代仏教信仰の一侧面 一房總における8・9世紀の事例を中心に―」『古代文化』第46巻 第12号
- 渋江芳浩 1988 「東国平安時代集落の考古学的検討」「歴史評論」歴史科学協議会
- 菅原祥夫はか 1996 「大久保F遺跡」『常磐自動車道遺跡発掘調査報告6』福島県文化財調査報告書第330集、福島県教育委員会・財福島県文化センター
- 須田 勉 1999 「東国における古代民間仏教の展開」『國立館大学文学部人文学会紀要』第32号
- 高島美之 2000 『古代出土文字資料の研究』東京堂出版
- 高橋照彦 2001 「地方官衙出土の平安時代の経釉陶器」「考古学ジャーナル』475
- 千葉県文化財センター 1998 「千葉県文化財センター研究紀要」第18号、財千葉県文化財センター
- 中世土器研究会編 1995 「概説 中世の土器・陶磁器」真陽社
- 仲田茂司 1994 「東北地方におけるロクロ土器の受容とその背景」「考古学雑誌」第79巻 第3号
- 中山雅弘 1996 「古代常磐地域における土器様相」「物質文化」第60号
- 沼山源喜治 1999 「北上盆地の古代集落における仏神信仰(1)」「北上市立埋蔵文化財センター紀要」第1号、北上市立埋蔵文化財センター
- 能登谷宜康 2001 「鍛冶屋遺跡(2次調査)」「常磐自動車道遺跡調査報告24」福島県文化財調査報告書第377集、福島県教育委員会・財福島県文化センター
- 能登谷宜康 2001 「馬場前遺跡(1次調査)」「常磐自動車道遺跡調査報告25」福島県文化財調査報告書第378集、福島県教育委員会・財福島県文化センター
- 平尾政幸 1994 「経釉陶器の変質と波及」「古代の土器研究 一律令の土器様式の西・東3施釉陶器』古代の土器研究会
- 平川 南 2000 『墨書き土器の研究』吉川弘文館
- 福島雅儀・小平良男 1983 「上悪戸遺跡」「下悪戸遺跡」「国営総合農地開発事業 母畑地区遺跡発掘調査報告12」福島県文化財調査報告書第116集、福島県教育委員会・財福島県文化センター
- 福島雅儀・伊藤勝彦 1993 「四合内B遺跡」「三春ダム関連遺跡発掘調査報告7」福島県文化財調査報告書第289集、福島県教育委員会・財福島県文化センター
- 船橋市遺跡調査会 2000 「千葉県船橋市 本郷台遺跡 一第7次発掘調査報告書一」
- 本間 宏 1992 「鶴沢道南遺跡」「国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告X N」福島県文化財調査報告書第273集、福島県教育委員会・財福島県文化センター
- 馬目順一ほか 1991 『柄葉町史』柄葉町
- 村田晃一 1995 「宮城郡における10世紀前後の土器」「福島考古」第36号
- 安田 稔はか 1998 「大庭田遺跡(2次調査)」「常磐自動車道遺跡調査報告11」福島県文化財調査報告書第341集、福島県教育委員会・財福島県文化センター
- 柳澤和明 1994 「東北の施釉陶器」「古代の土器研究 一律令の土器様式の西東3一」古代の土器研究会
- 柳澤和明・吾妻俊典 2000 「多賀城周辺における土器編年との対比とその基準資料」東北古代土器研究会
- 吉野滋夫 2002 「馬場前遺跡(2次調査)」「常磐自動車道遺跡調査報告29」福島県文化財調査報告書第388集、福島県教育委員会・財福島県文化振興事業団

付章 1 福島県楢葉町小山B遺跡出土 木製品の樹種調査結果

株式会社吉田生物研究所

1. 試 料

試料は福島県楢葉町小山B遺跡から出土した木製遺物5点である。

2. 観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3. 結 果

樹種同定結果（針葉樹2種、広葉樹1種）の顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) イチイ科カヤ属カヤ (*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.)

（遺物№.5）

（写真№.5）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。晩材部は狭く年輪界は比較的不明瞭である。軸方向柔細胞を欠く。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1～4個ある。仮道管の壁には対になった螺旋肥厚が存在する。板目では放射組織はすべて単列であった。カヤは本州（中・南部）、四国、九州に分布する。

2) マツ科モミ属 (*Abies* sp.)

（遺物№.1～3）

（写真№.1～3）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は比較的ゆるやかで晩材部の幅は狭い。柾目では放射組織の上下縁辺部に不規則な形状の放射柔細胞がみられる。放射柔細胞の壁は厚く、数珠状末端壁になっている。放射組織の分野壁孔はスギ型で1分野に1～4個ある。板目では放射組織は単列であった。モミ属はトドマツ、モミ、シラベがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

3) モチノキ科モチノキ属 (*Ilex* sp.)

(遺物№.4)

(写真№.4)

散孔材である。木口では小道管（～ $60\mu\text{m}$ ）が単独ないし数個が放射状、集団状に複合している。年輪界が放射組織部分で凸になる。板目では道管は階段壁孔と螺旋肥厚を有する。木纖維も螺旋肥厚を有する。放射組織は直立、平伏細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔は小型の壁孔である。板目では放射組織は1～7細胞列、高さ～ 1.8mm からなる。モチノキ属はアオハダ、イヌツゲ、モチノキ等があり、北海道、本州、四国、九州、琉球に分布する。

1	FBW 010027	角 杭	マツ科モミ属
2	FBW 010028	板 材	マツ科モミ属
3	FBW 010029	板 材	マツ科モミ属
4	FBW 010030	丸 杭	モチノキ科モチノキ属
5	FBW 010031	角 杭	イチイ科カヤ属カヤ

◆参考文献◆

島地 謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版（1988）

島地 謙・伊東隆夫「図説木材組織」地球社（1982）

伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載 I～V」京都大学木質科学研究所（1999）

北村四郎・村田 源「原色日本植物図鑑木本編 I・II」保育社（1979）

深澤和三「樹体の解剖」海青社（1997）

◆使用顕微鏡◆

Nikon

MICROFLEEX UFX-DX Type 115



図1 マツ科モミ属



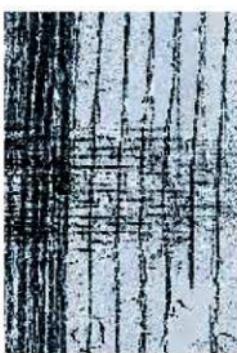
絞目×100



板目×40
FBW010027



図2 マツ科モミ属



絞目×100



板目×40
FBW010028

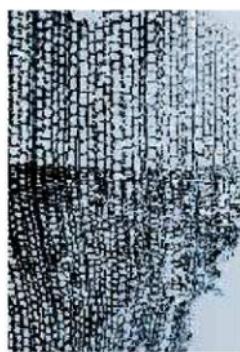


図3 マツ科モミ属



絞目×40



板目×40
FBW010029

付章1 福島県猪苗町小山B遺跡出土木製品の樹種調査結果



Mo-4 モチノキ科モチノキ属
木口×40



征目×40



板目×40
FBW010030



Mo-5 イチイ科カヤ属カヤ
木口×40



征目×100



板目×40
FBW010031

付章 2 福島県楢葉町小山B遺跡における放射性炭素年代測定

株式会社古環境研究所

1. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No. 1	SD05a	炭化物	酸一アルカリ一酸洗浄、石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No. 2	SI02 P3 覆土	炭化物	酸一アルカリ一酸洗浄、石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No. 3	SI02 床上	炭化物	酸一アルカリ一酸洗浄、石墨調整	加速器質量分析(AMS)法

2. 測定結果

試料名	^{14}C 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年BP)	曆年代(西暦)	測定値 (Beta-)
No. 1	510 ± 50	-27.6	470 ± 50	交点: Cal AD 1430 2 σ : Cal AD 1400 ~ 1490 1 σ : Cal AD 1420 ~ 1450	153112
No. 2	1140 ± 50	-26.6	1120 ± 50	交点: Cal AD 910, Cal AD 920, : Cal AD 960 2 σ : Cal AD 790 ~ 1010 1 σ : Cal AD 880 ~ 990	153113
No. 3	1120 ± 60	-23.9	1140 ± 60	交点: Cal AD 900 2 σ : Cal AD 770 ~ 1010 1 σ : Cal AD 810 ~ 840, : Cal AD 860 ~ 980	153114

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から単純に現在(AD1950年)から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は国際慣例に従って5568年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

3) 補正¹⁴C年代値

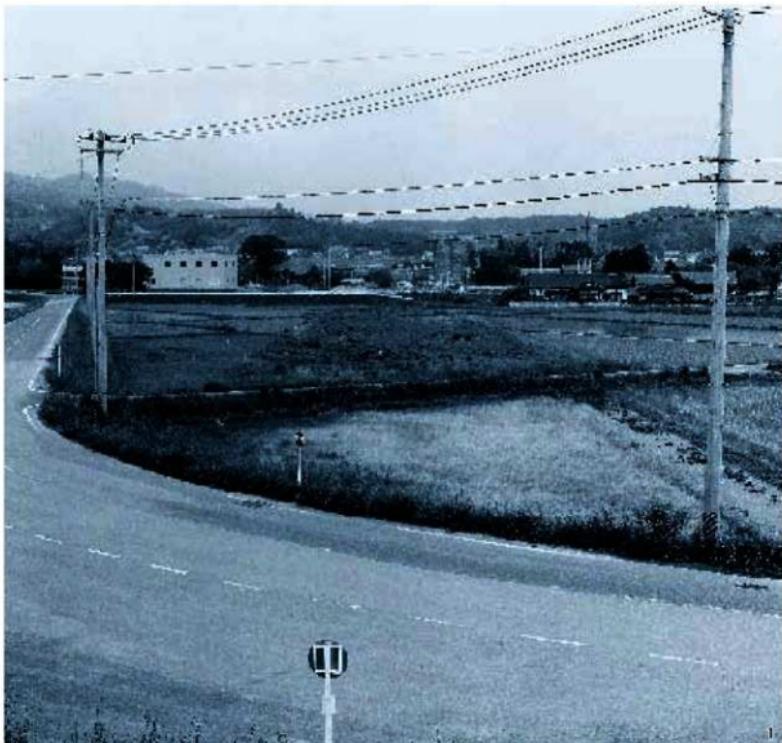
$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、¹⁴C/¹²Cの測定値に補正值を加えた上で算出した年代。

4) 历年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中¹⁴C濃度の変動を較正することにより算出した年代。較正には年代既知の樹木年輪の¹⁴Cの詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と¹⁴C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベース("INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40(3))により、約19,000年BPまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年BP以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

歴年代の交点とは、補正¹⁴C年代値と歴年代較正曲線との交点の歴年代値を意味する。 1σ (68%確率) および 2σ (95%確率) は、補正¹⁴C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した歴年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1σ ・ 2σ 値が表記される場合もある。

写 真 図 版



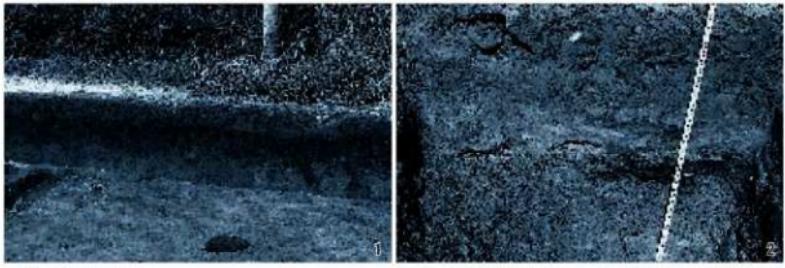
1 小山B遺跡調査区



1 調査前の小山B遺跡（南から）
2 道路近景（北から） 3 水没した調査区（北から）



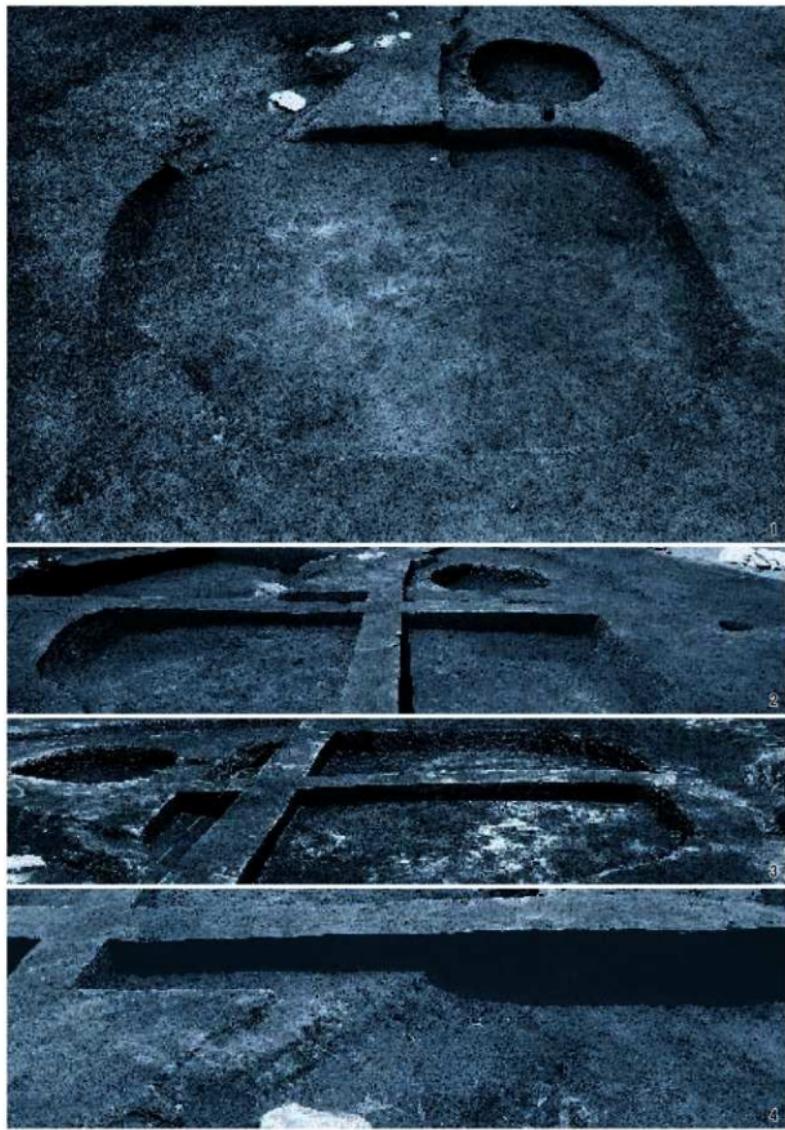
2 調査区全景（北から）



3 基本土層

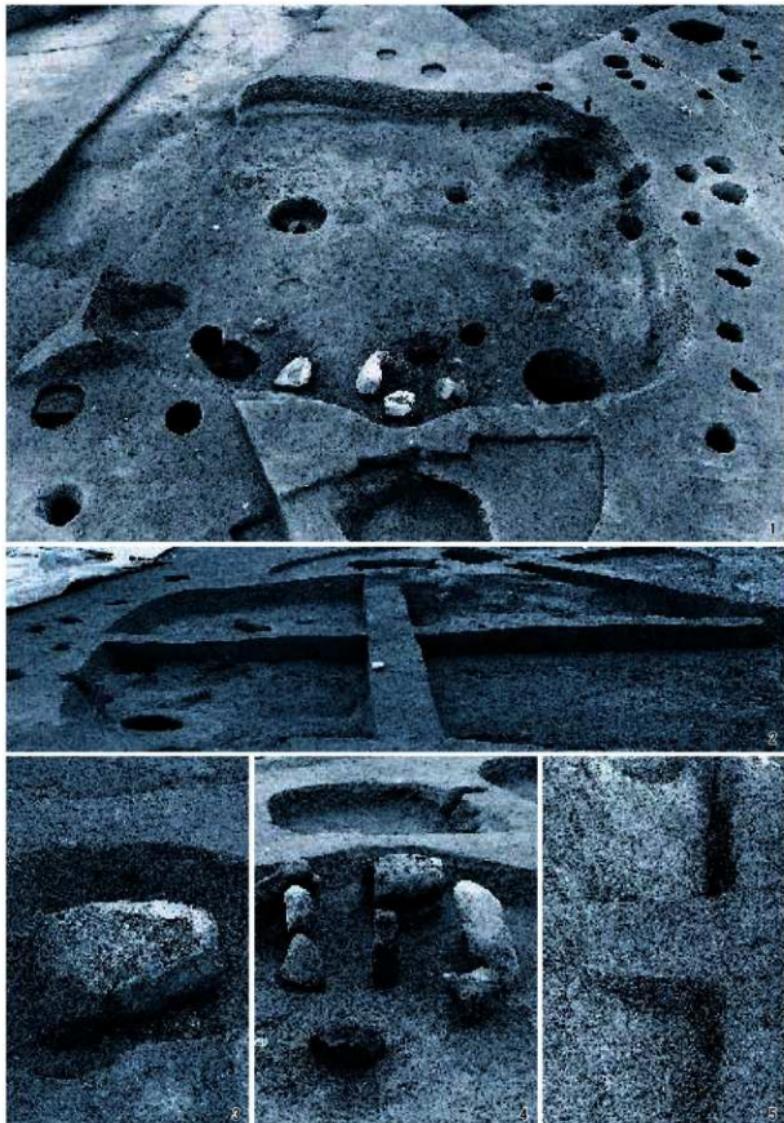
1 F15グリッド付近土層（西から）

2 試掘11トレンチ土層（西から）



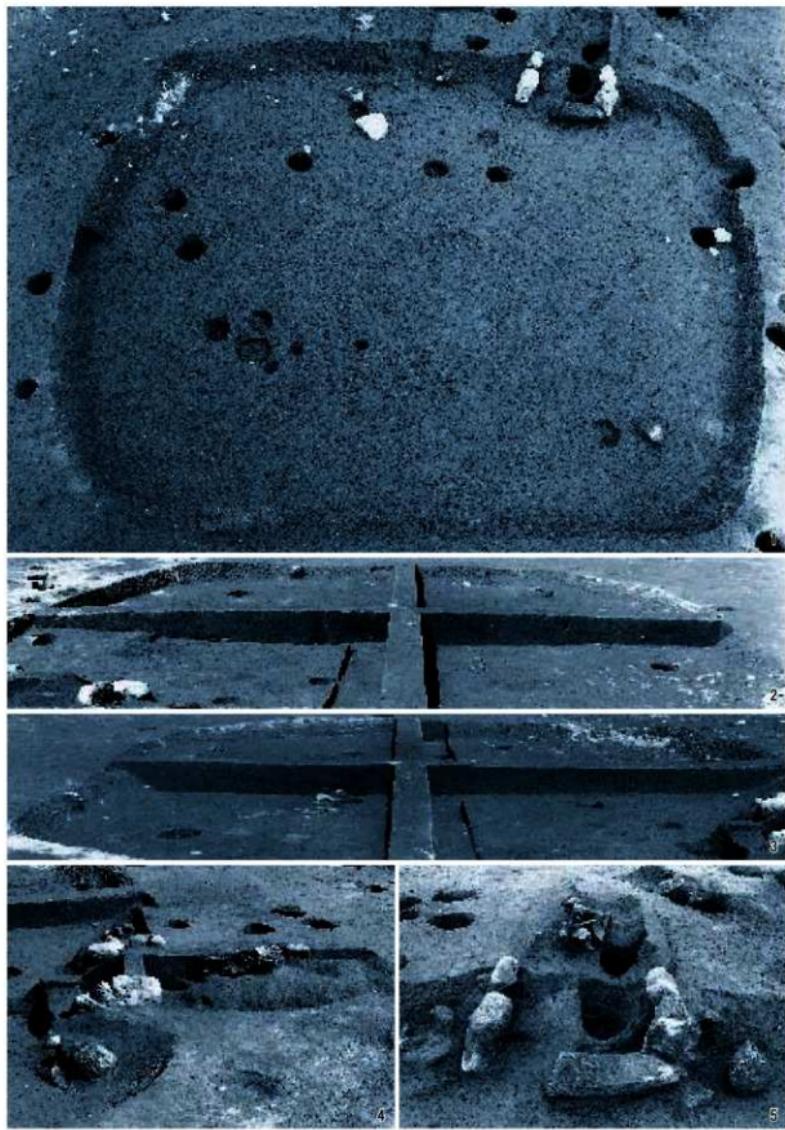
4 1号住居跡

1 全景（西から） 2 断面（南から） 3 断面（西から）
4 1・2号住居跡重複部（北から）



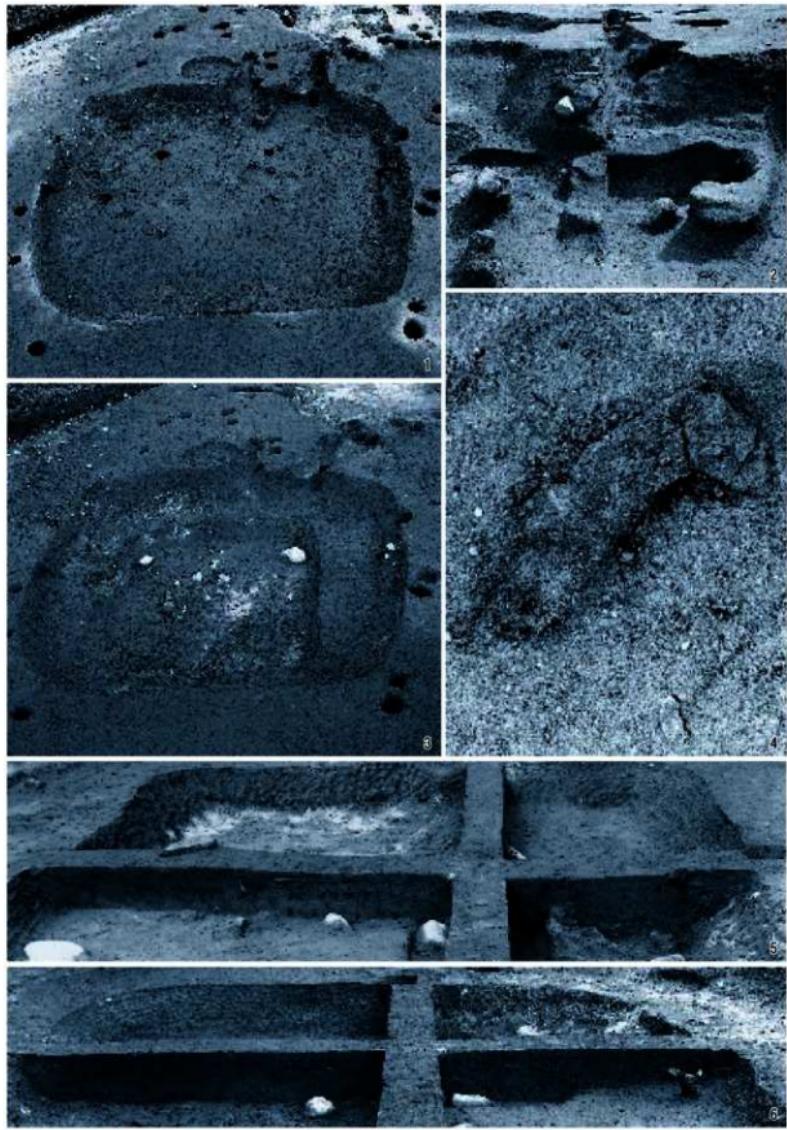
5 2号住居跡

- 1 全景（南東から）
 2 断面（北から）
 3 カマド土器出土状況（北から）
 4 カマド（北西から）
 5 壁溝断面（西から）



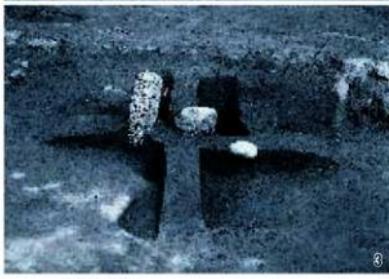
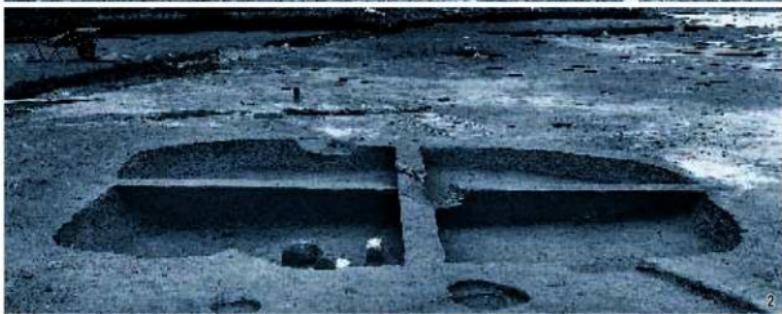
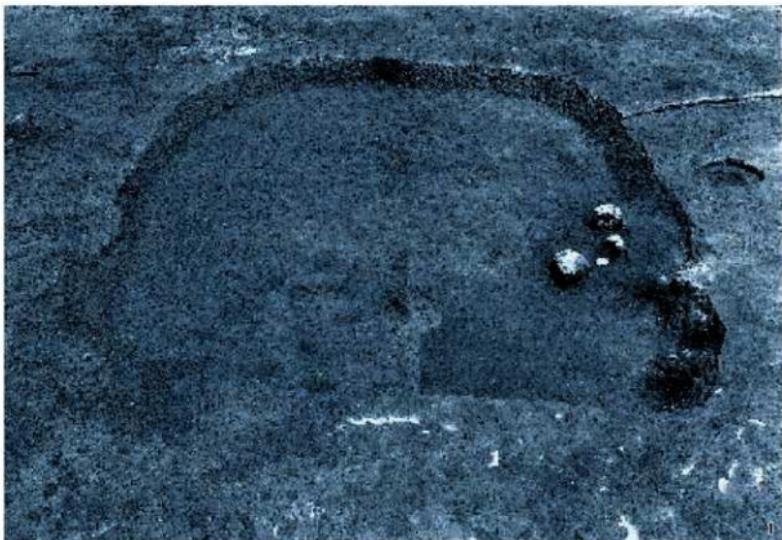
6 3a号住居跡

1 全景（西から） 2 断面（東から） 3 断面（西から）
4 カマド断面（南から） 5 カマド（西から）



7 3b・3c号住居跡

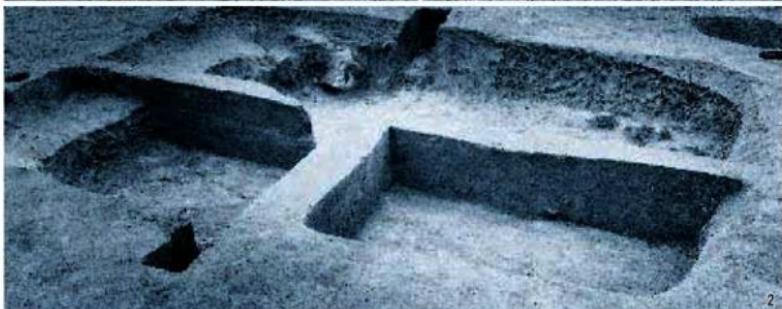
- 1 3b号住居跡全景（西から）
2 3b号住居跡方マド（西から）
3 3c号住居跡全景（西から）
4 縦検出状況（西から）
5 3c号住居跡断面（東から）
6 3c号住居跡断面（南から）



8. 4号住居跡

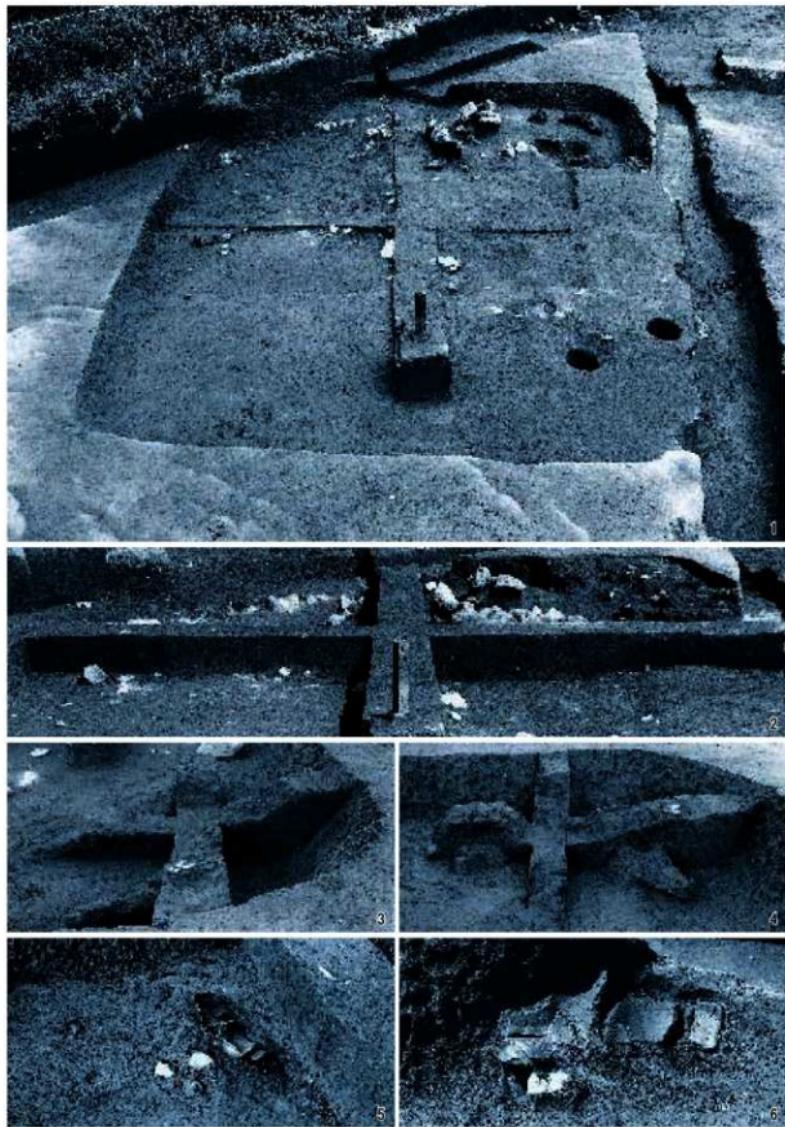
1 全景（南から）
3 カマド断面（西から）

2 断面（東から）
4 カマド（西から）



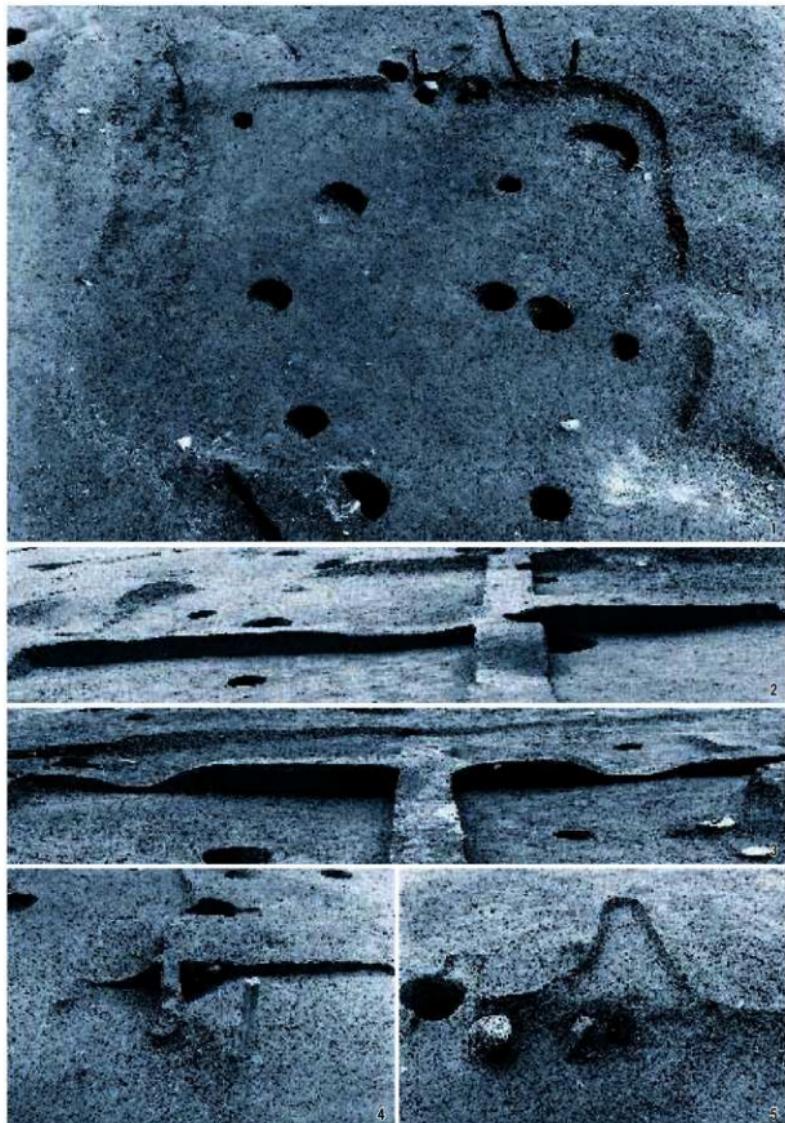
9 5号住居跡

1 全景(西から) 2 断面(西から) 3 土器出土状況(東から)
4 土器出土状況(南から) 5 カマド土器出土状況(北西から)



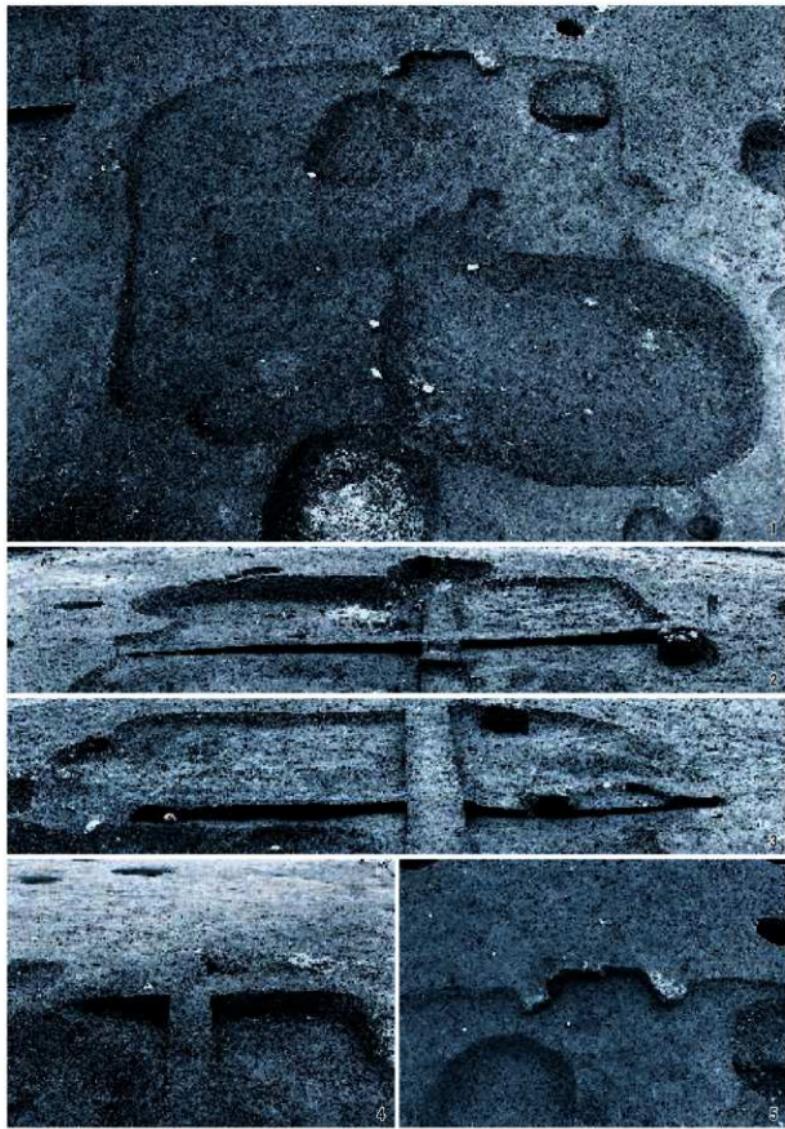
10 7号住居跡

1 全景（西から） 2 断面（西から） 3 カマド断面（西から）
4 カマド断面（北から） 5 土器出土状況（西から） 6 土器出土状況（東から）



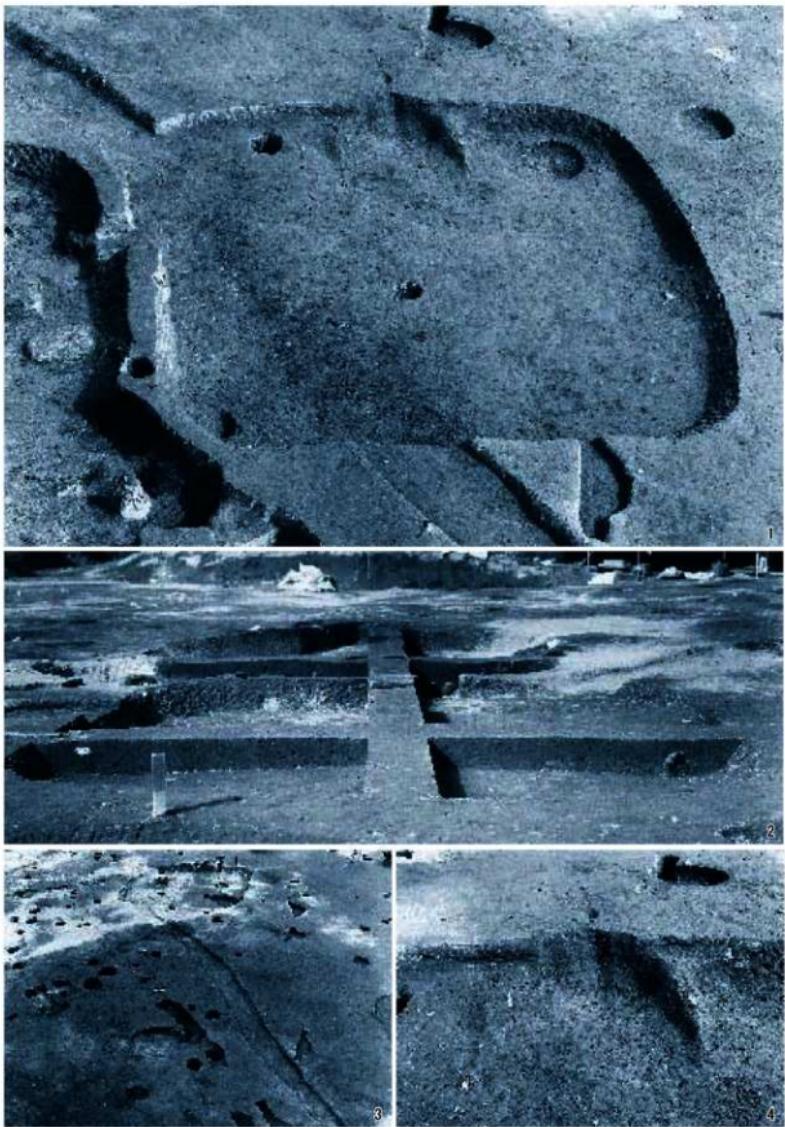
11 9号住居跡

1 全景（西から） 2 断面（西から） 3 断面（南から）
4 カマド断面（南から） 5 カマド（西から）



12 12号住居跡

1 全景（西から） 2 断面（東から） 3 断面（南から）
4 カマド断面（西から） 5 カマド（西から）

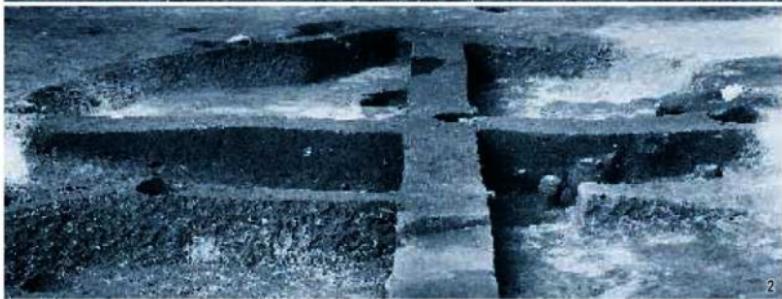


13 14号住居跡

1 全景（西から）
2 断面（南から）
3 14・15号住居跡検出状況（西から）
4 カマド（西から）



1



2

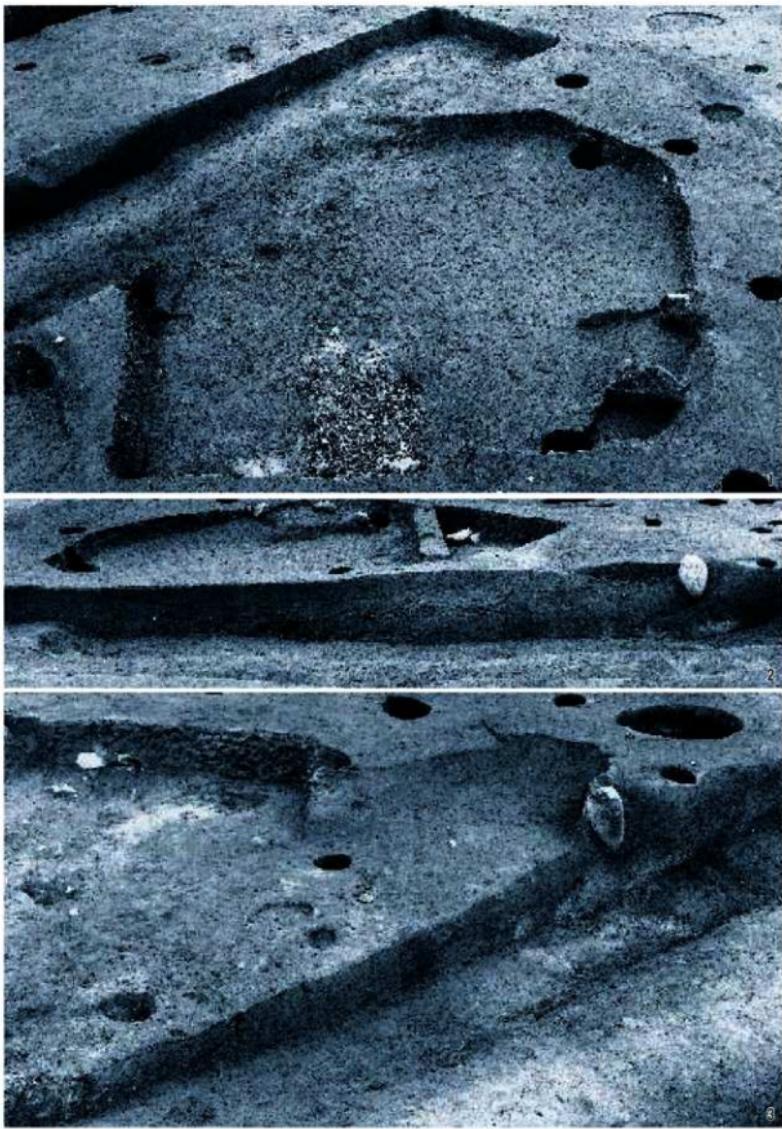


3



1 全景（西から）
2 断面（南から）
3 土器出土状況（南から）
4 カマド（西から）

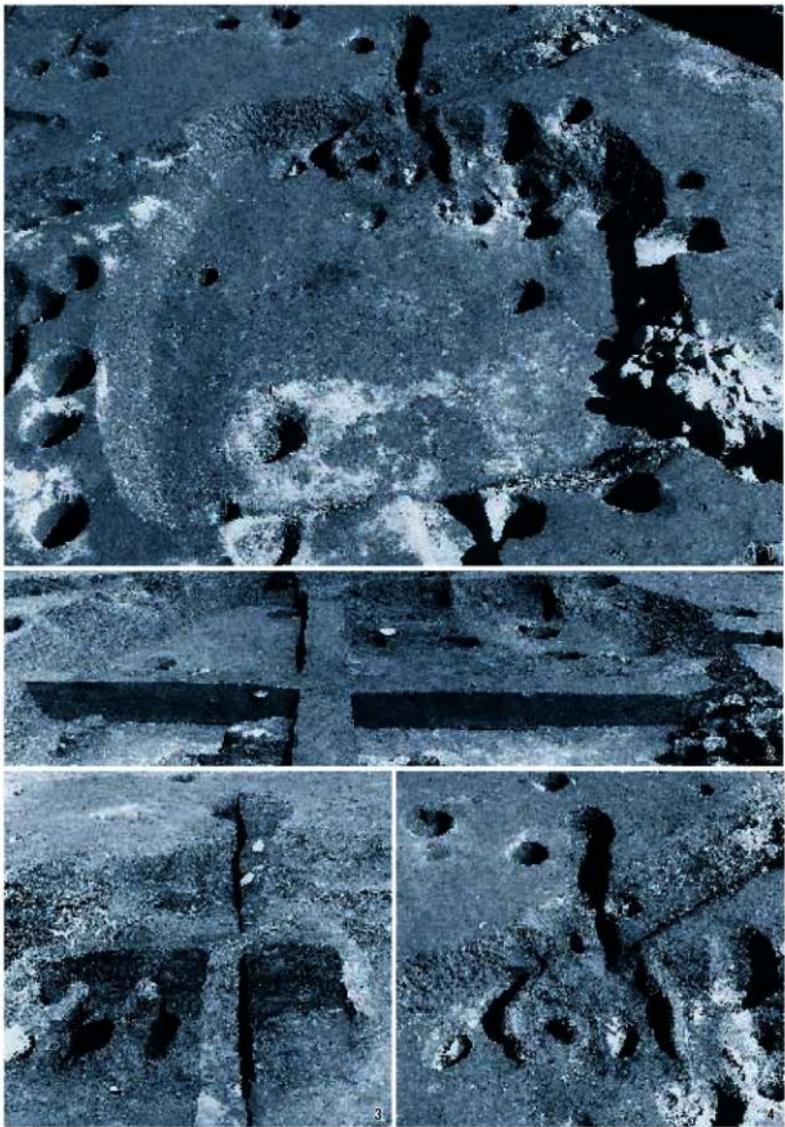
14 15号住居跡



15 16・17号住居跡

1 16号住居跡（南から）
3 17号住居跡

2 16・17号住居跡断面（西から）



16 18号住居跡

1 全景（南から）
3 カマド断面（南から）

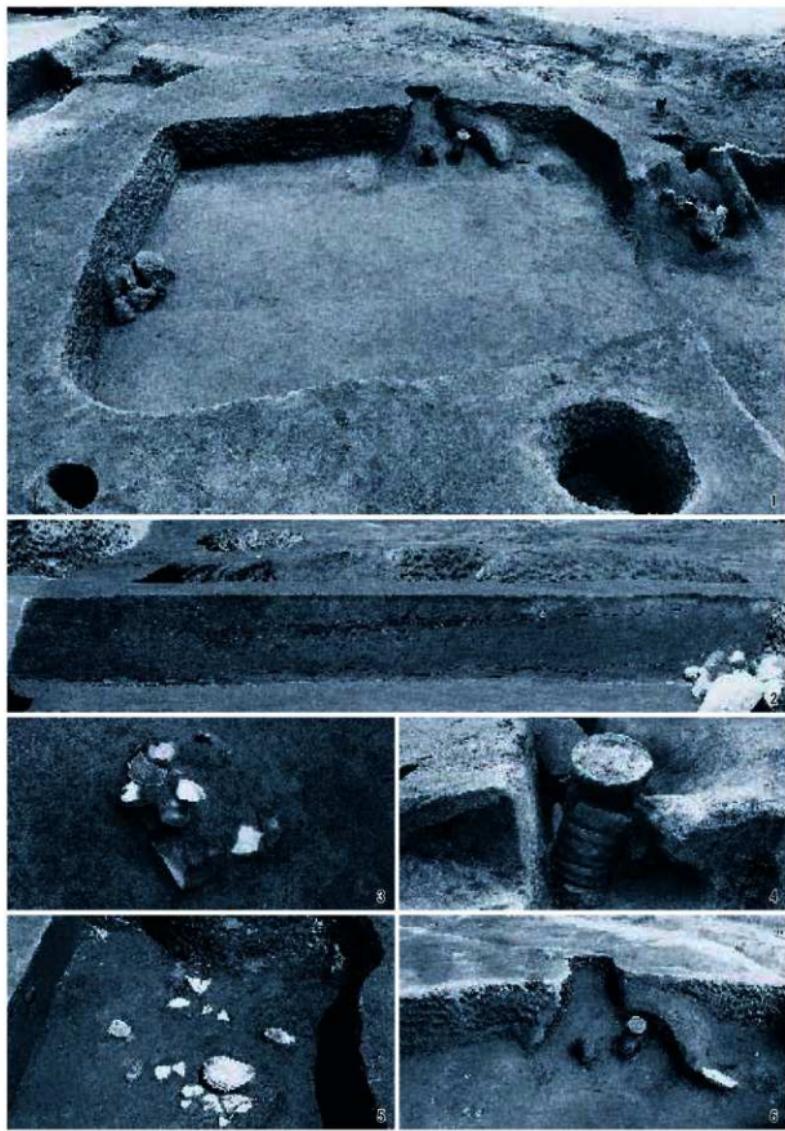
2 断面（南から）
4 カマド（南から）



17 19号住居跡

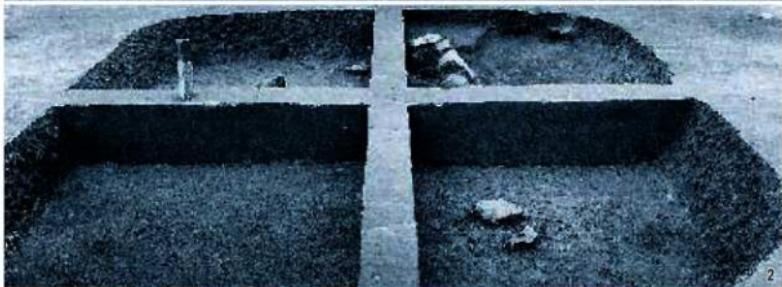
1 全景（北から）
3 カマド（北から）

2 断面（南から）
4 P1土器出土状況（北から）



18 20号住居跡

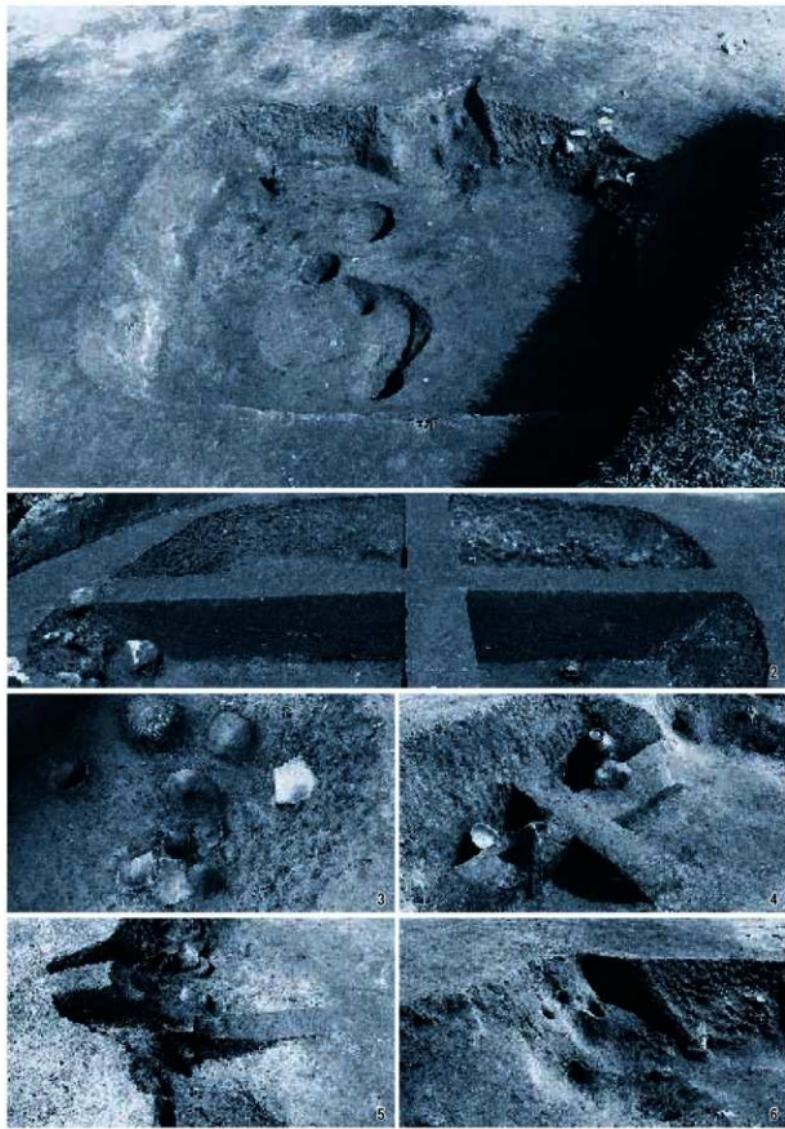
- 1 全景（西から）
- 2 断面（東から）
- 3 植出土器出土状況（南から）
- 4 鋼形土器出土状況（西から）
- 5 土器出土状況（西から）
- 6 カマド（北から）



19 21号住居跡

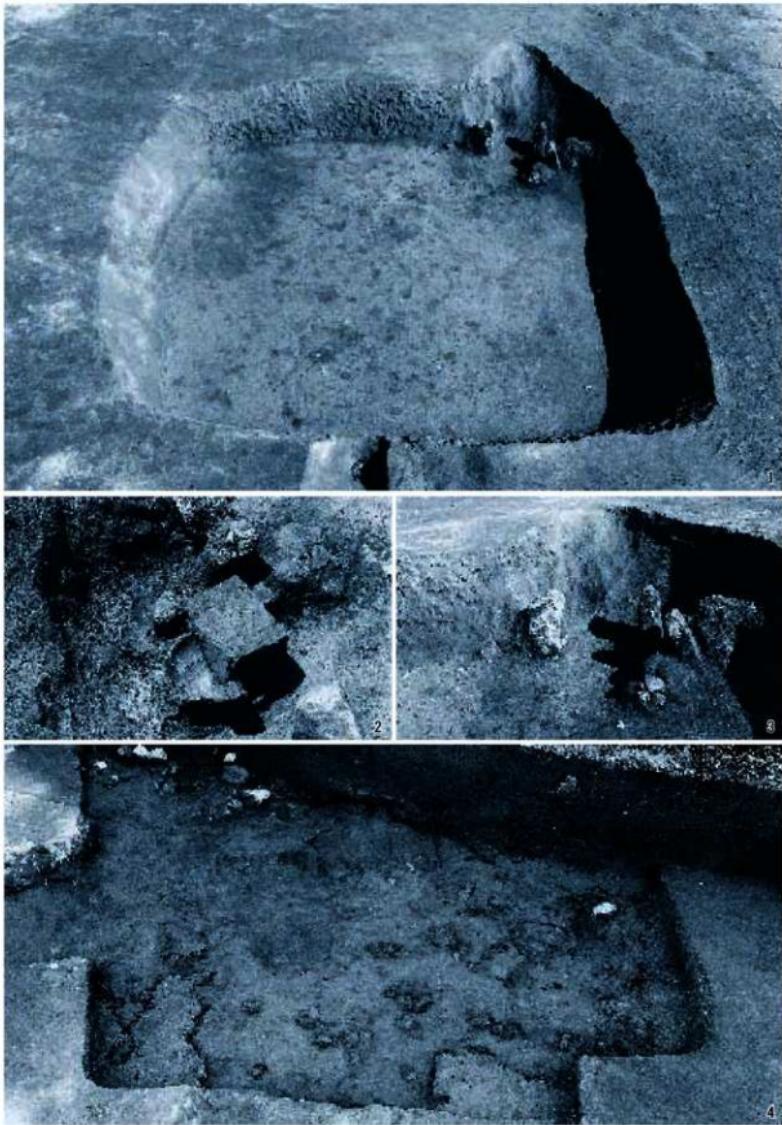
1 全景（南西から）
3 土器出土状況（東から）

2 断面（南西から）
4 カマド（南西から）



20 22号住居跡

- | | |
|---------------|---------------|
| 1 全景（北から） | 2 断面（南から） |
| 3 土器出土状況（南から） | 4 土器出土状況（東から） |
| 5 カマド断面（東から） | 6 カマド（北から） |



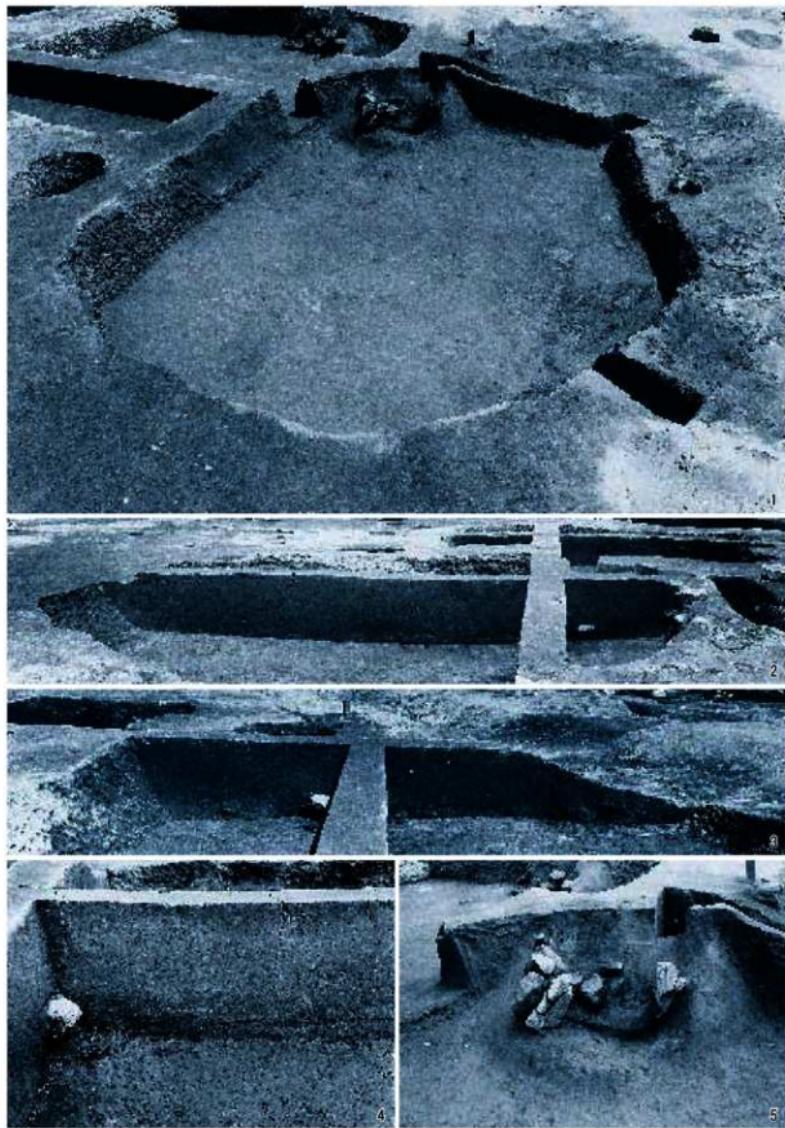
21 23・24号住居跡

1 23号住居跡（北から）

2 23号住居跡カマド遺物出土状況（南から）

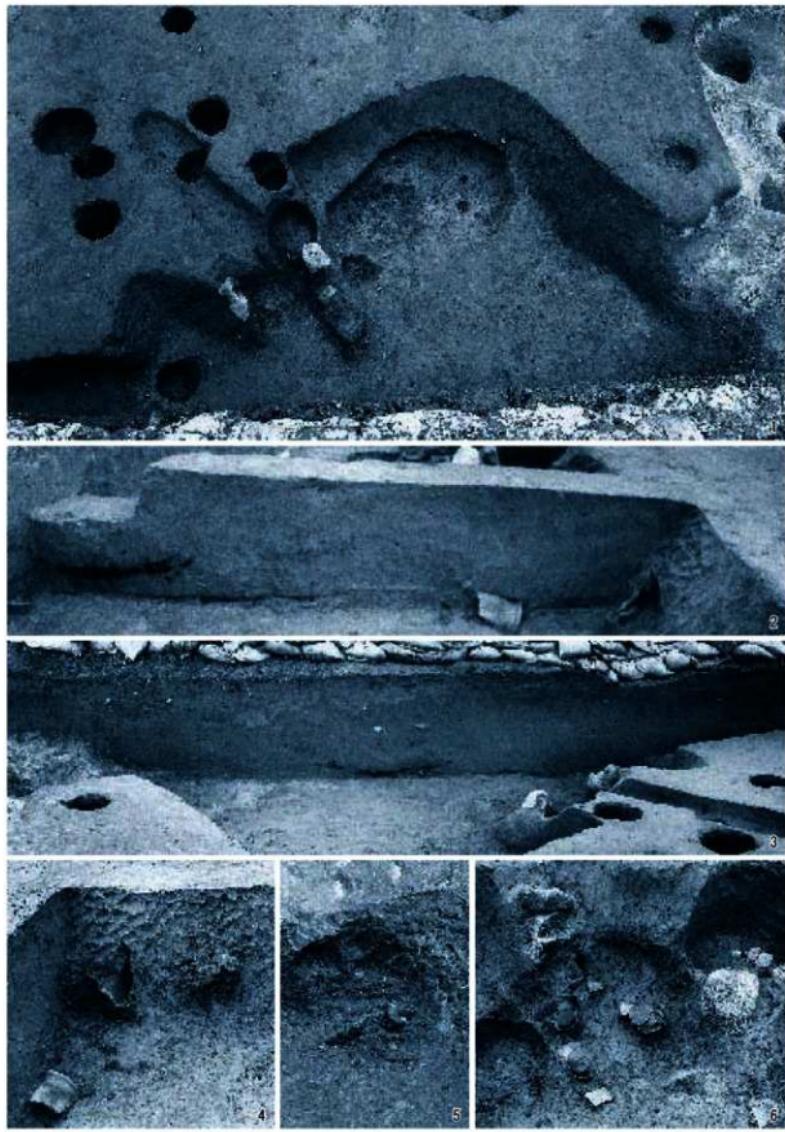
3 23号住居跡カマド（北から）

4 24号住居跡（西から）



22 25号住居跡

1 全景（西から） 2 断面（南から） 3 断面（西から）
4 踏床状況（北から） 5 カマド（西から）



23 29号住居跡

1 全景（西から）
 2 断面（南から）
 3 断面（東から）
 4 遺物出土状況（西から）
 5 勉縫車出土状況（西から）
 6 カマド土器出土状況（西から）



24 32号住居跡

1 全景（南から）
2 断面（南から）
3 断面（東から）
4 作業風景
5 作業風景



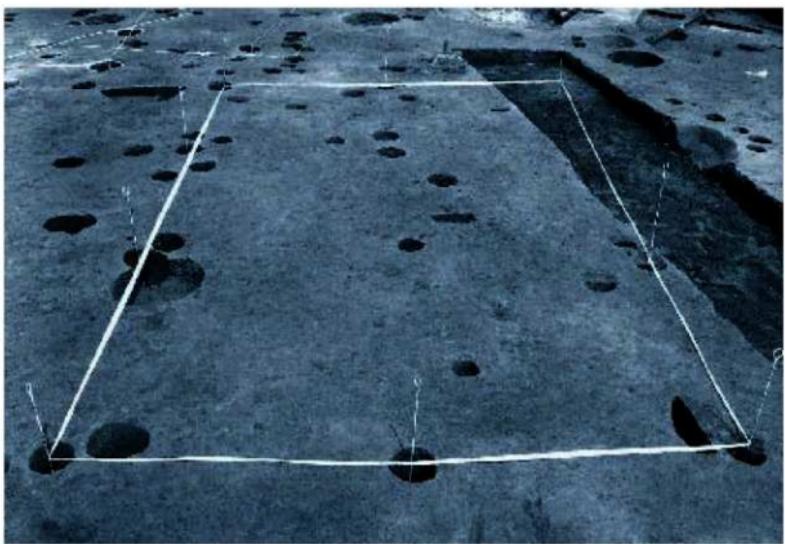
25 35号住居跡（南東から）



26 36号住居跡（南から）



27 1号建物跡（北から）



28 2号建物跡（南から）



29 3・9号建物跡検出状況（南から）



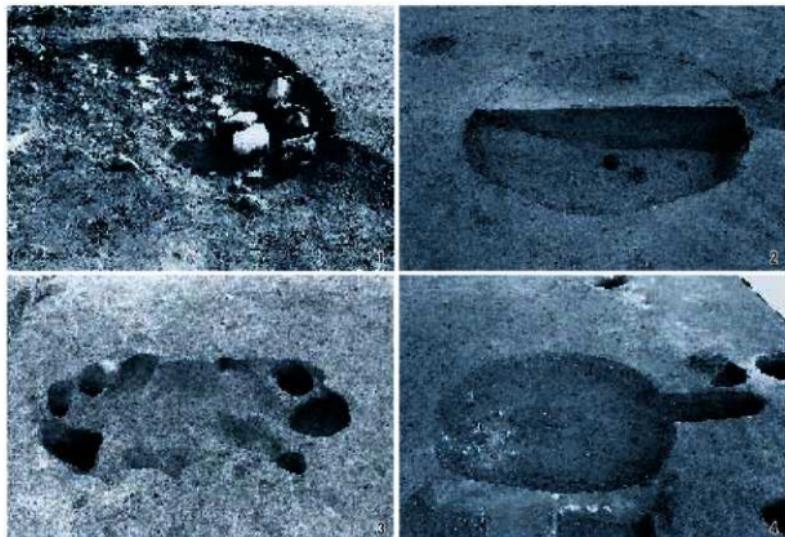
30 3号建物跡（南から）



31 8号建物跡（南から）



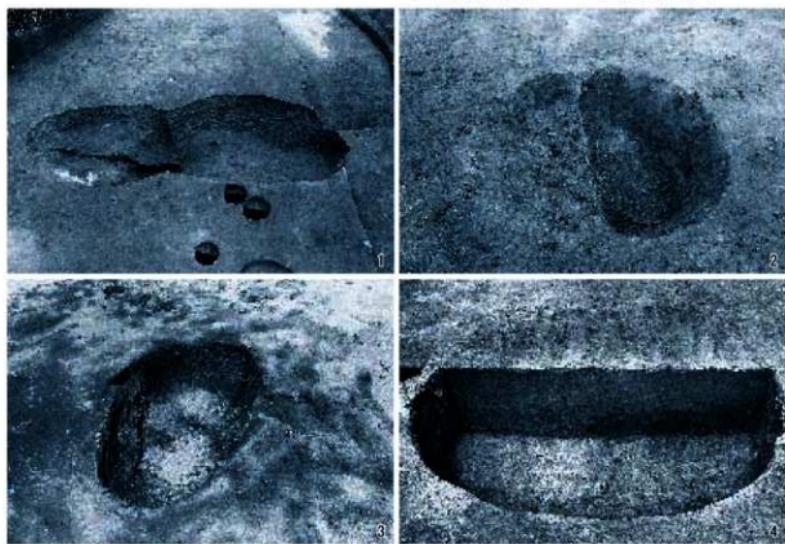
32 9号建物跡（南から）



33 1・3・9・11号土坑

1 1号土坑（北東から）
3 9号土坑（南から）

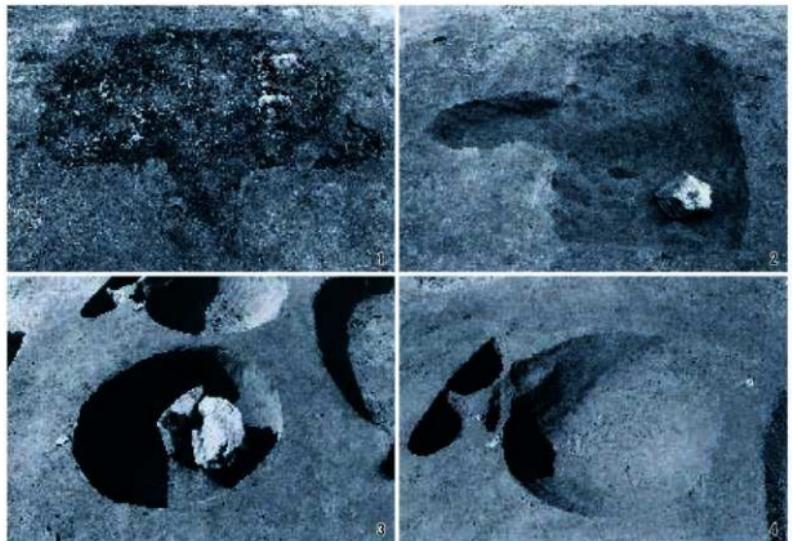
2 3号土坑断面（南から）
4 11号土坑（西から）



34 12a・12b～15号土坑

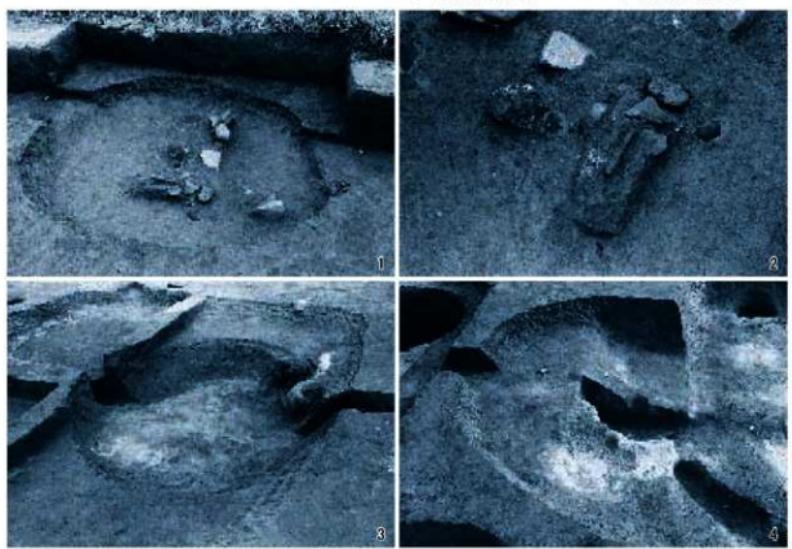
1 12a・12b号土坑（南から）
3 14号土坑（南から）

2 13号土坑（南から）
4 15号土坑断面（東から）



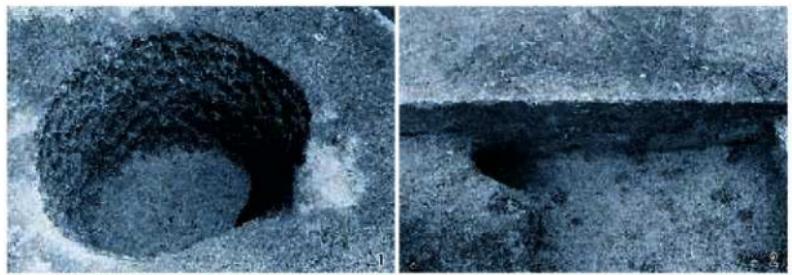
35 17・21・22号土坑

1 17号土坑検出状況（東から）
2 17号土坑（南から）
3 21号土坑（南から）
4 22号土坑（南から）



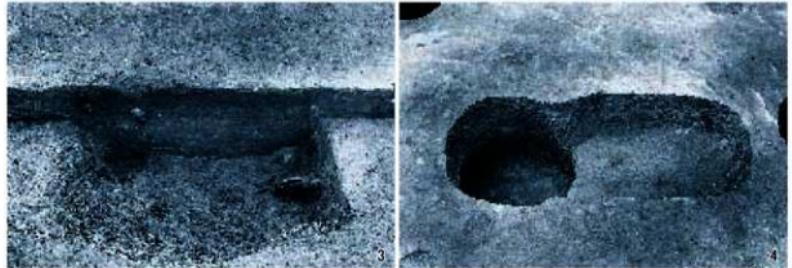
36 23～24b号土坑

1 23号土坑（西から）
2 23号土坑遺物出土状況（北から）
3 24a号土坑（南から）
4 24b号土坑（北から）



1

2

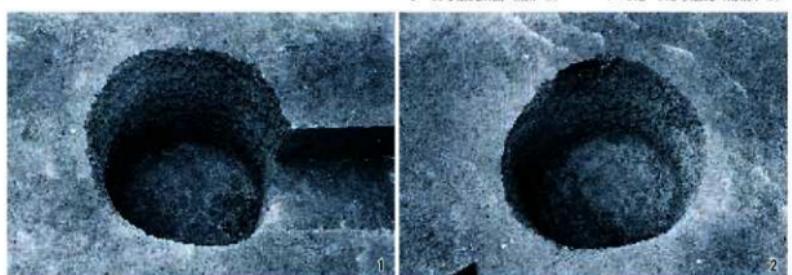


3

4

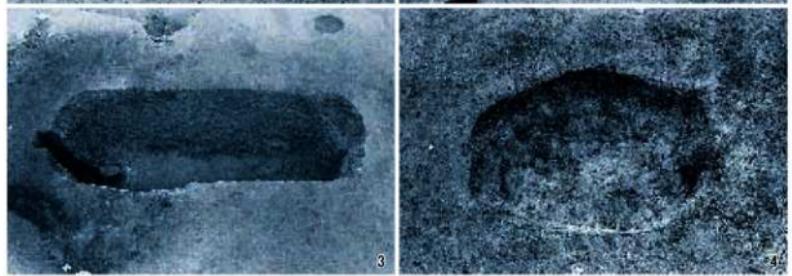
37 25・27・28・30a・30b号土坑

1 25号土坑（南から）
2 27号土坑断面（東から）
3 28号土坑断面（東から）
4 30a・30b号土坑（南東から）



1

2

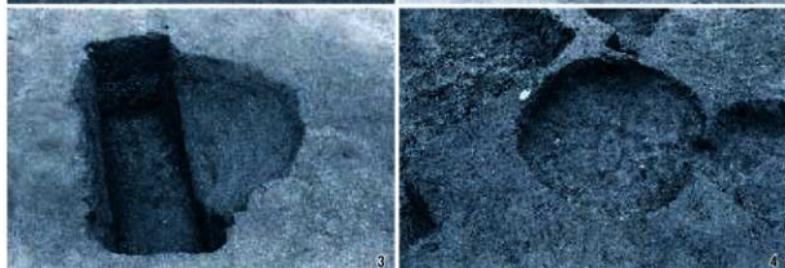
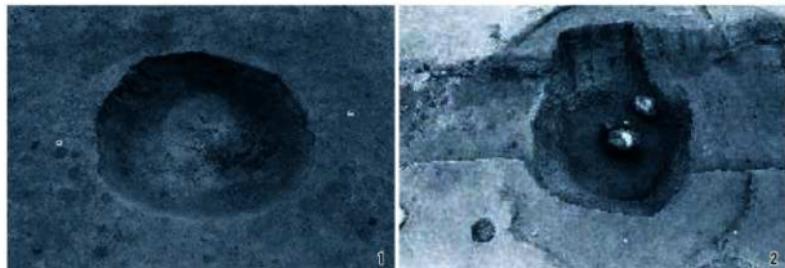


3

4

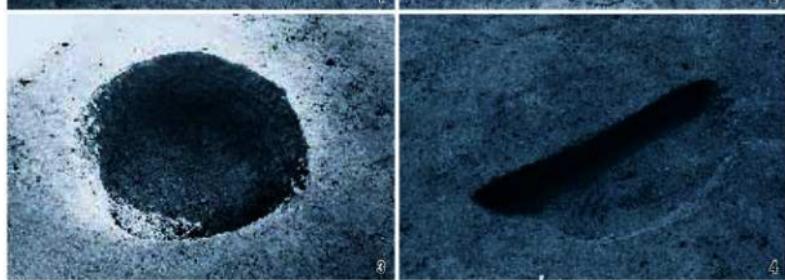
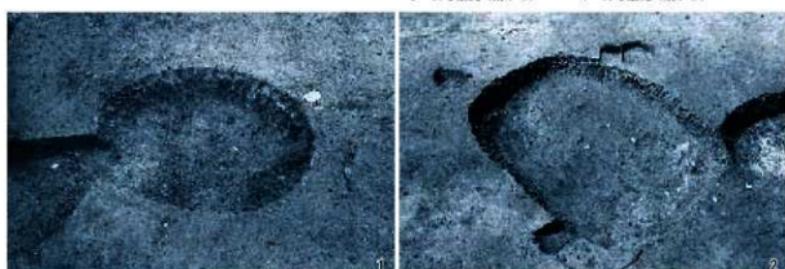
38 30b～33号土坑

1 30b号土坑（南東から）
2 31号土坑（南東から）
3 32号土坑（南から）
4 33号土坑（南から）



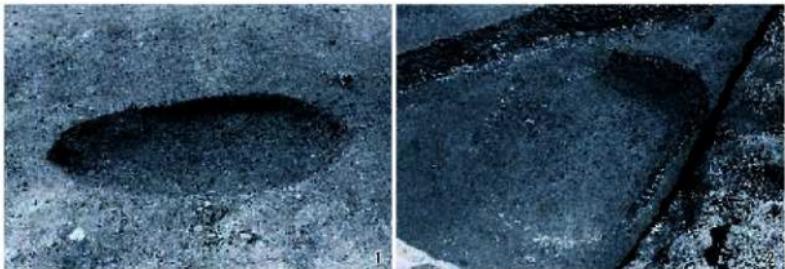
39 34～37号土坑

1 34号土坑（南から）
2 35号土坑（南から）
3 36号土坑（南から）
4 37号土坑（東から）



40 38～41号土坑

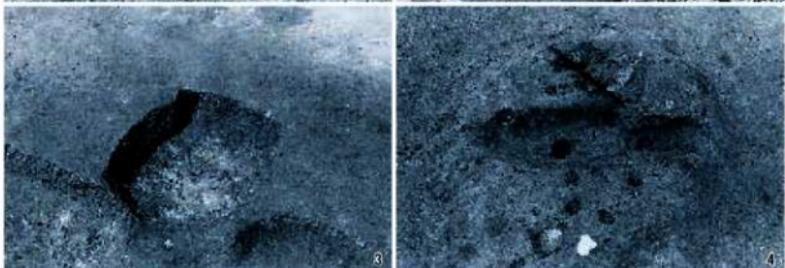
1 38号土坑（東から）
2 39号土坑（南東から）
3 40号土坑（東から）
4 41号土坑（北西から）



1



2



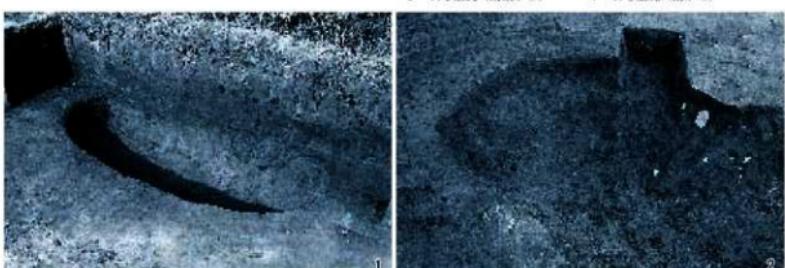
3



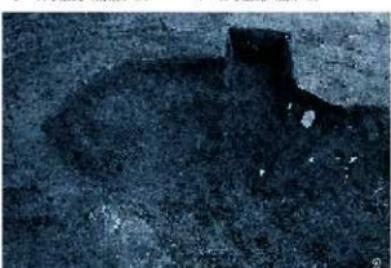
4

41 42～45号土坑

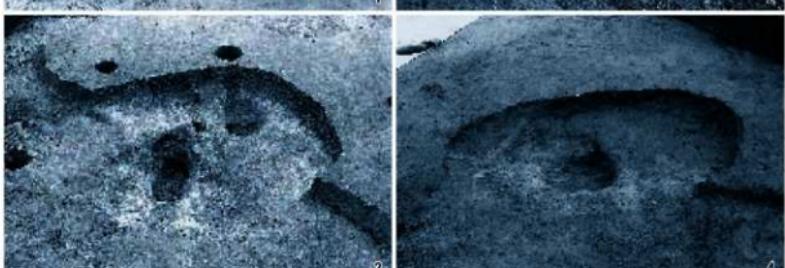
1 42号土坑（北東から）
2 43号土坑（西から）
3 44号土坑（南東から）
4 45号土坑（南から）



1



2



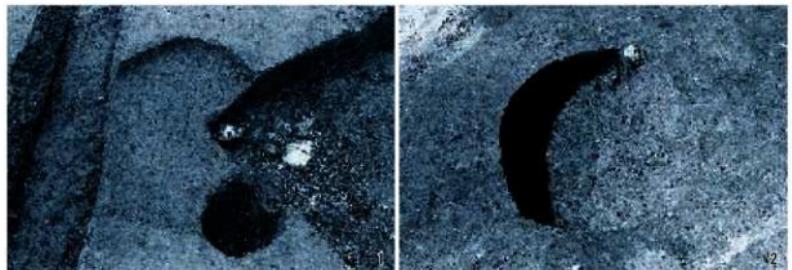
3



4

42 46～49号土坑

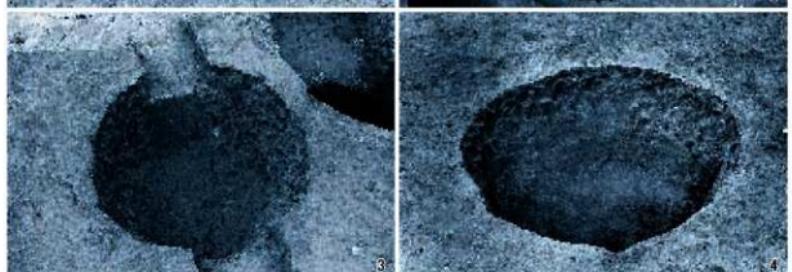
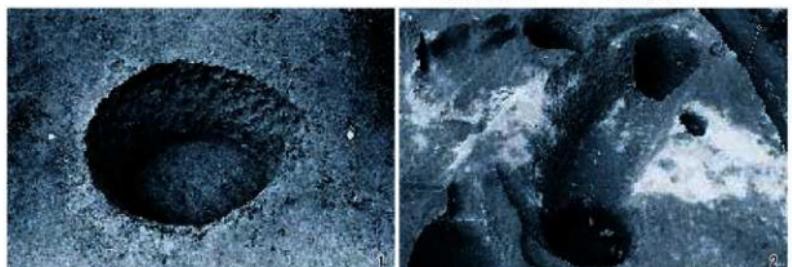
1 46号土坑（南西から）
2 47号土坑（北西から）
3 48号土坑（南から）
4 49号土坑（北から）



43 50～52・55号土坑

1 50号土坑（西から）
3 52号土坑（南から）

2 51号土坑（東から）
4 55号土坑（東から）



44 56～59号土坑

1 56号土坑（南から）
3 58号土坑（南から）

2 57号土坑（南から）
4 59号土坑（南から）



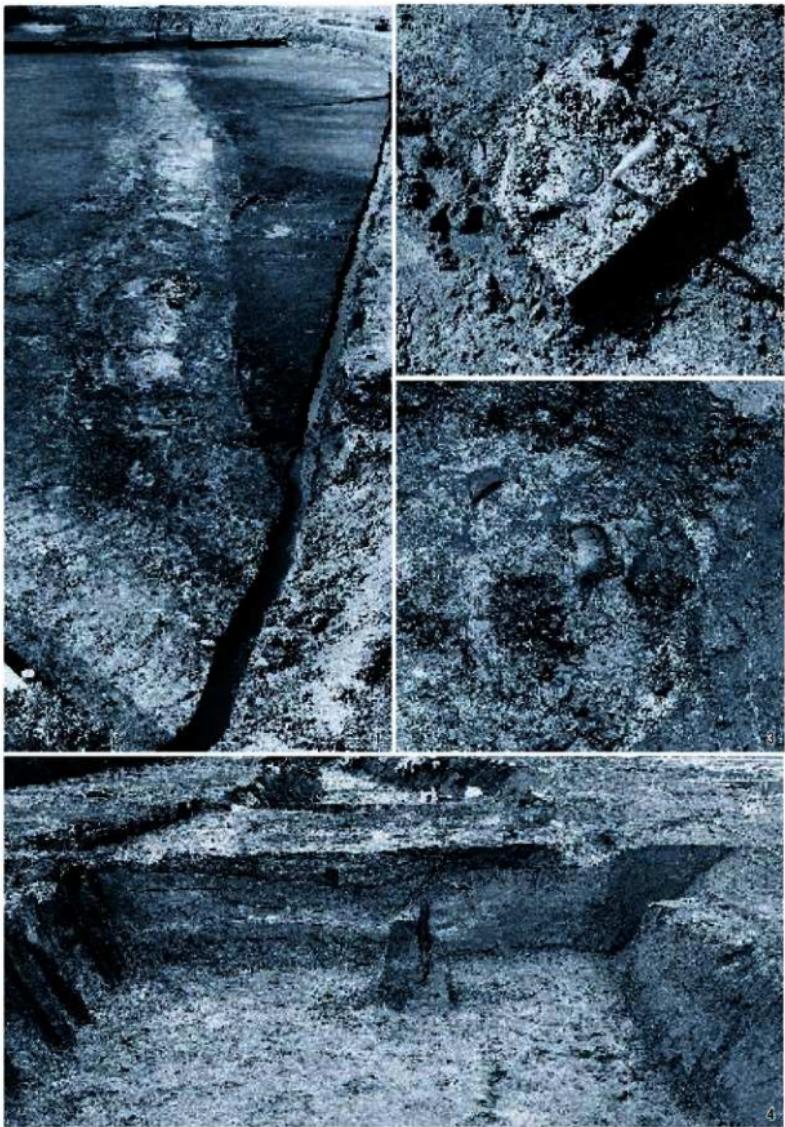
45 2号溝跡（東から）



46 3号溝跡（西から）



47 4号溝跡（西から）

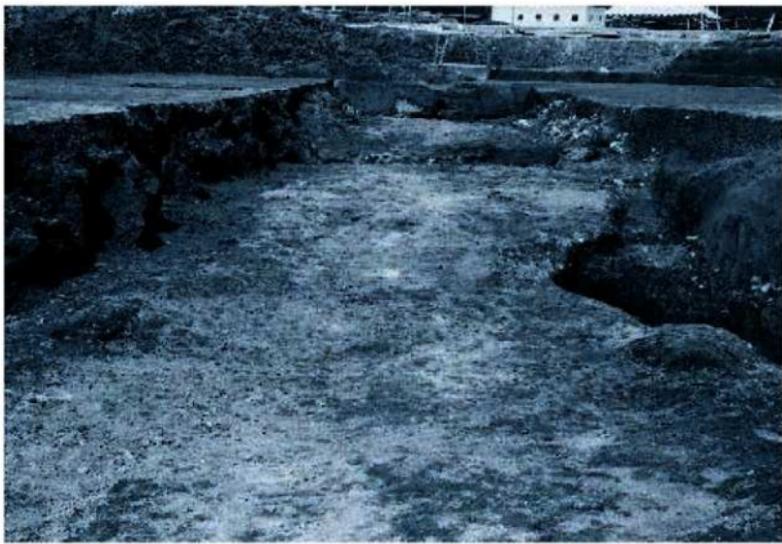


48 5a・5b号溝跡

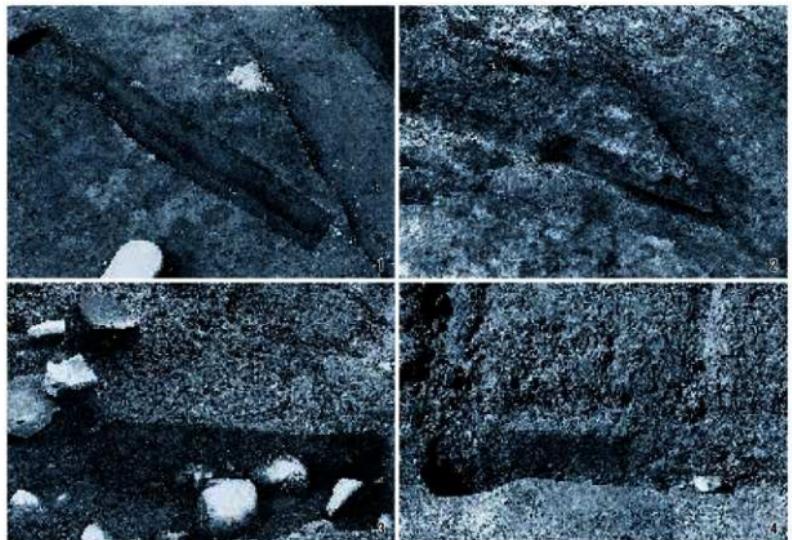
- 1 検出状況（南東から）
2 開元通宝出土状況（南から）
3 墨書き器出土状況（東から）
4 断面（北西から）



49 5a号溝跡 縦列検出状況（西から）



50 5b号溝跡 全景（南から）



51 1～4号焼土遺構

1 1号焼土遺構断面（南西から）
3 3号焼土遺構断面（北から）

2 2号焼土遺構断面（南西から）
4 4号焼土遺構断面（東から）



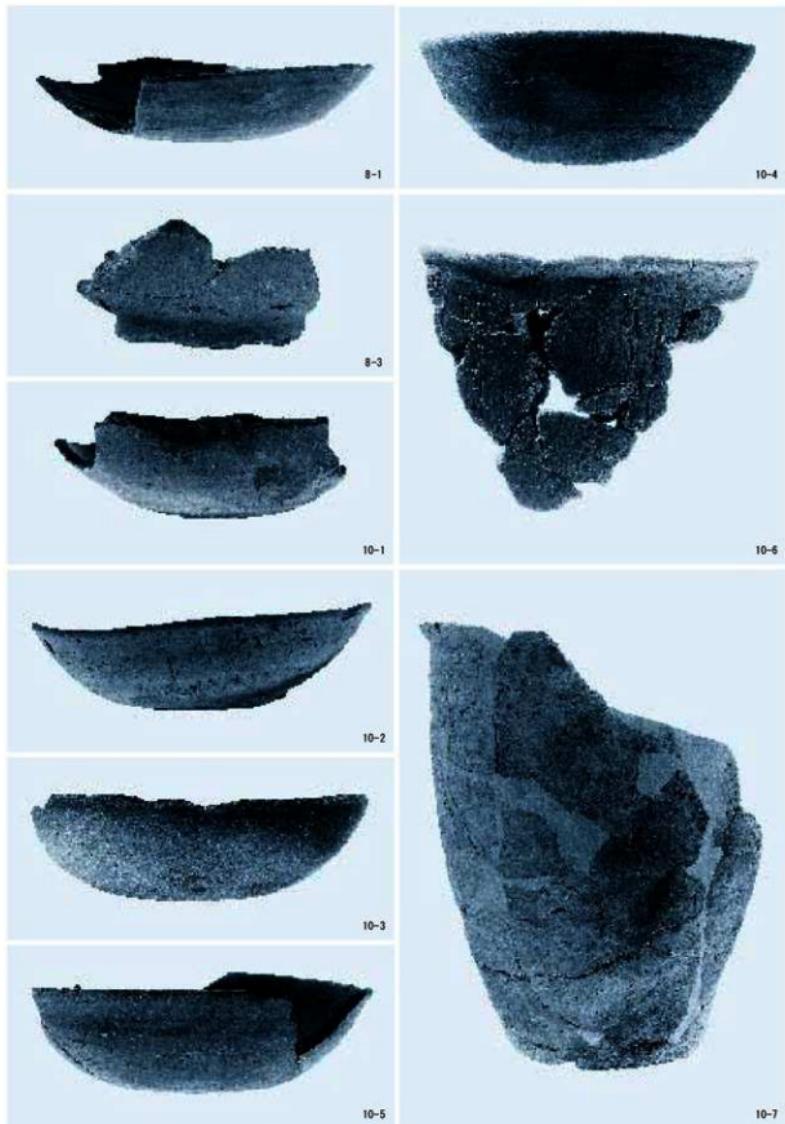
52 1号特殊遺構（西から）



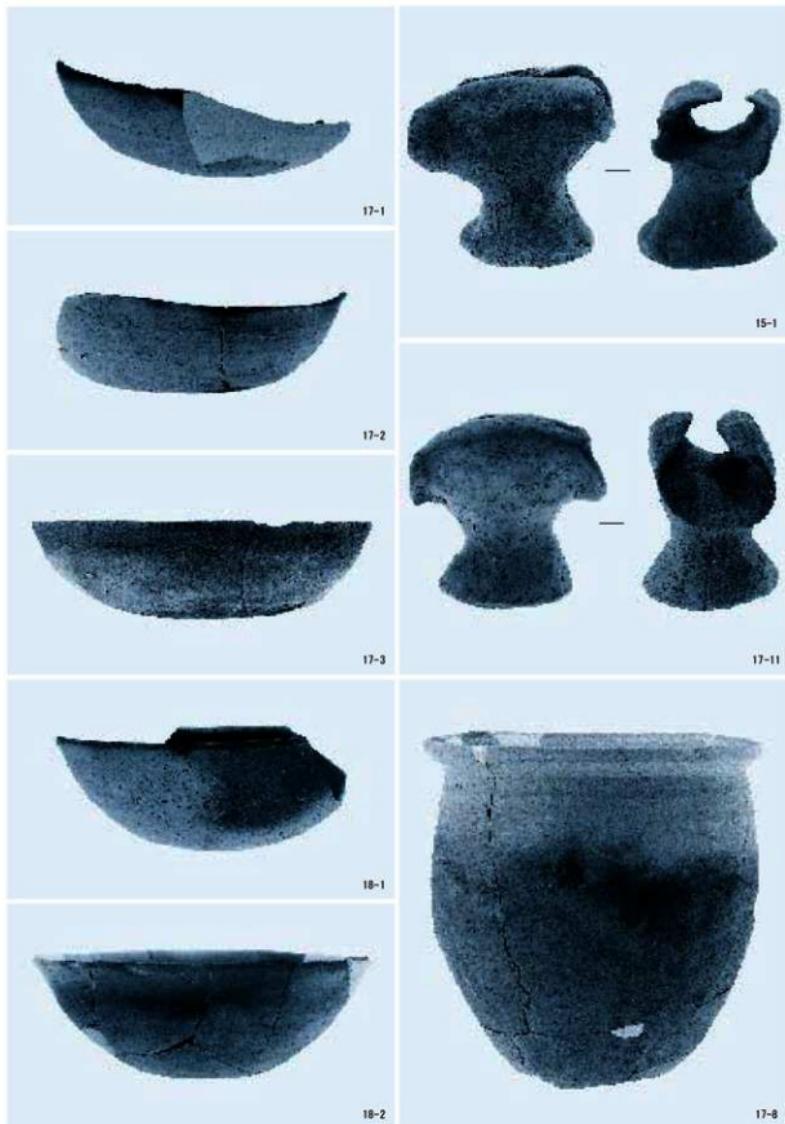
53 2号特殊遺構（北から）



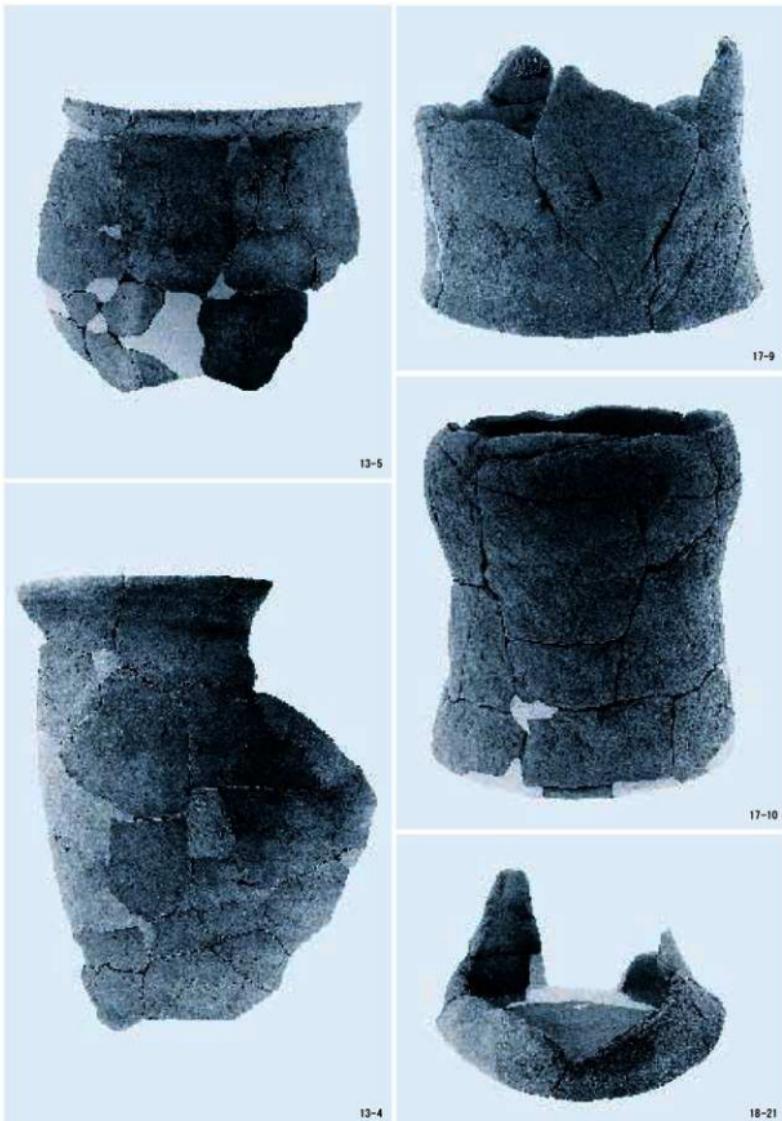
54 3号特殊遺構（東から）



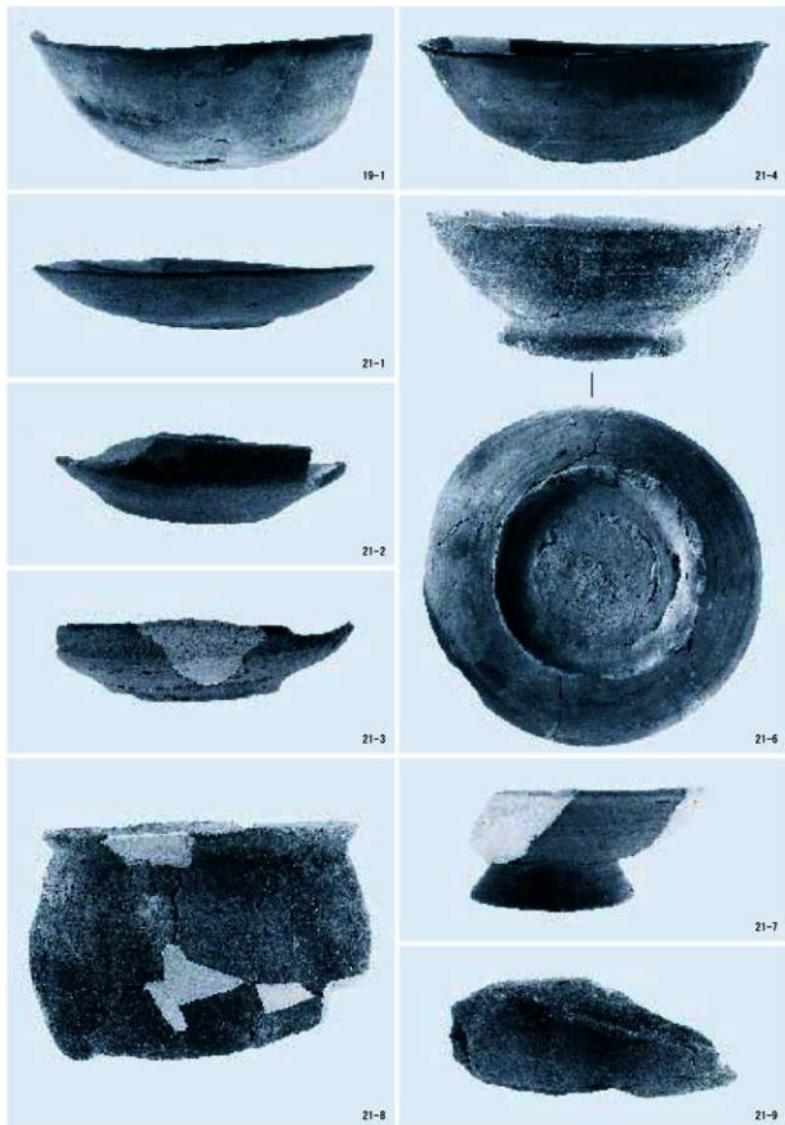
55 1·2号住居跡出土土器



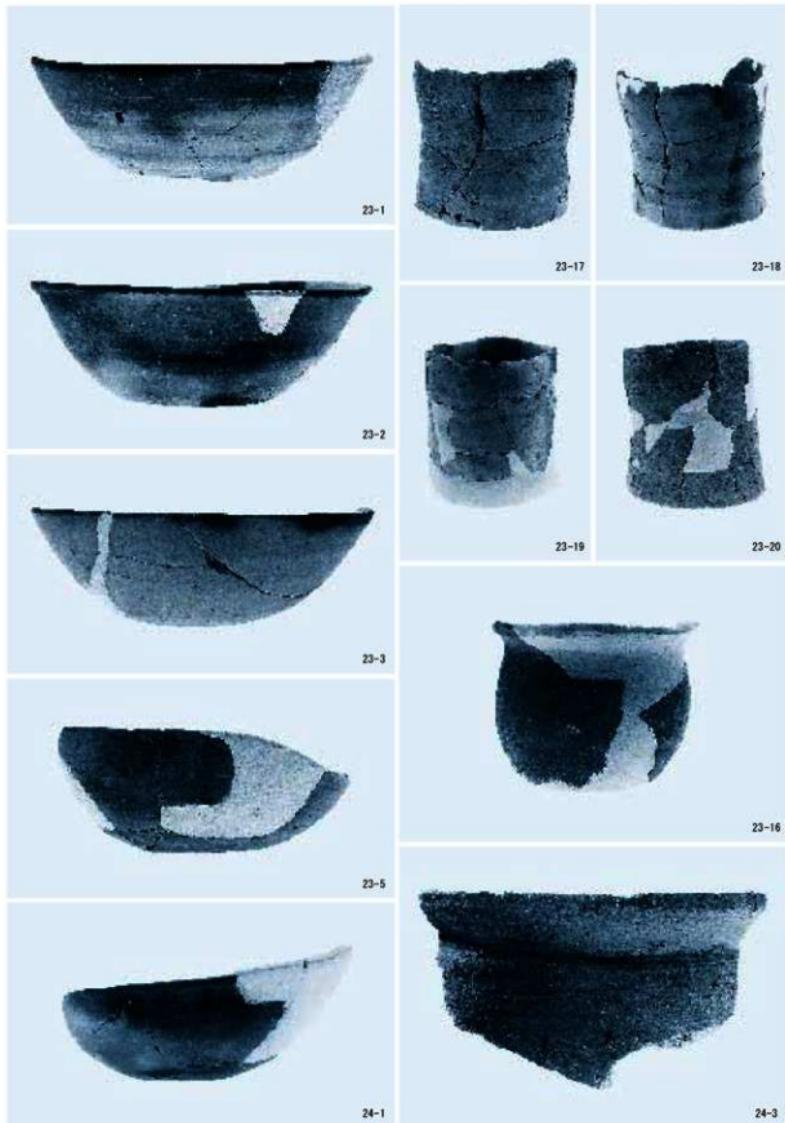
56 3号住居跡出土土器(1)



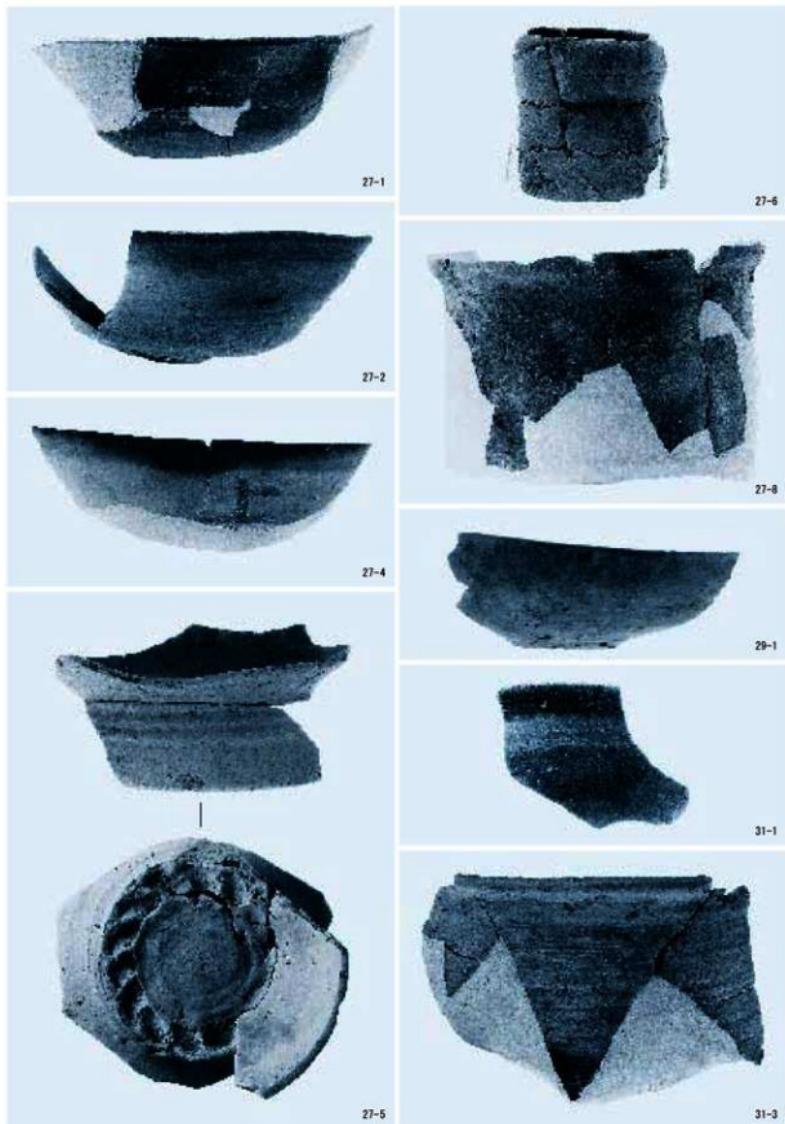
57 3号住居跡出土土器(2)



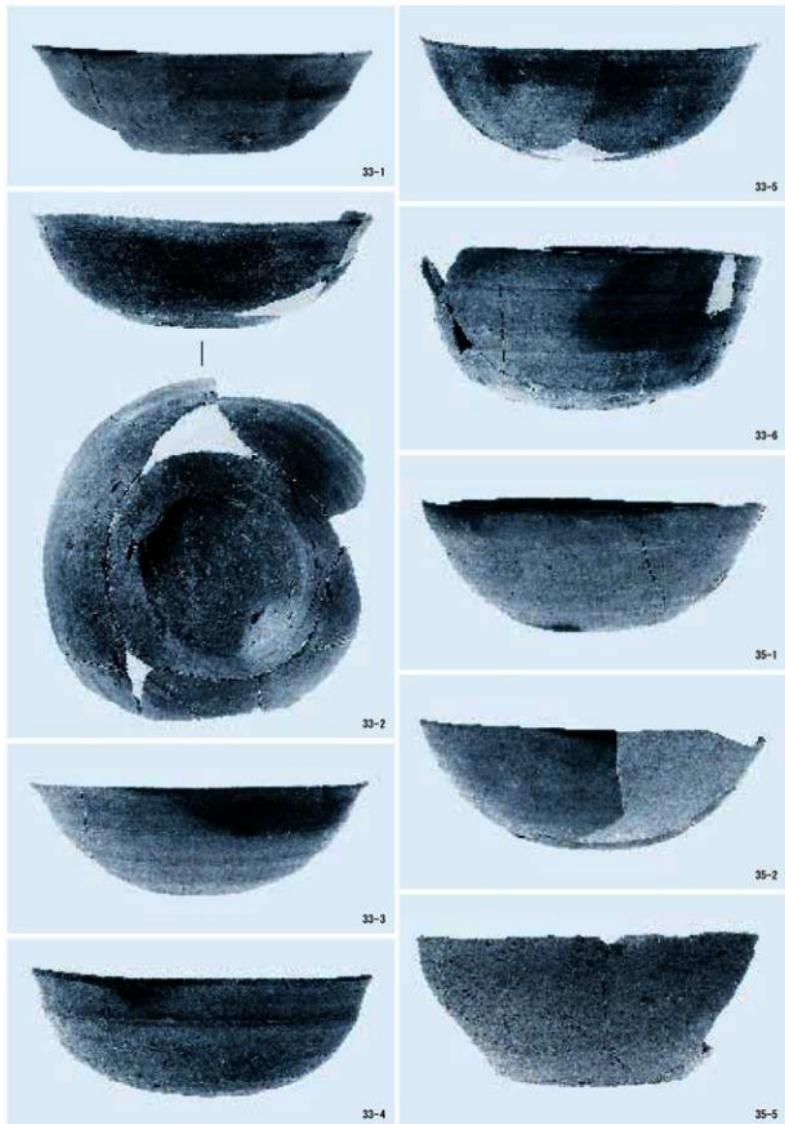
58 4·5号住居跡出土土器



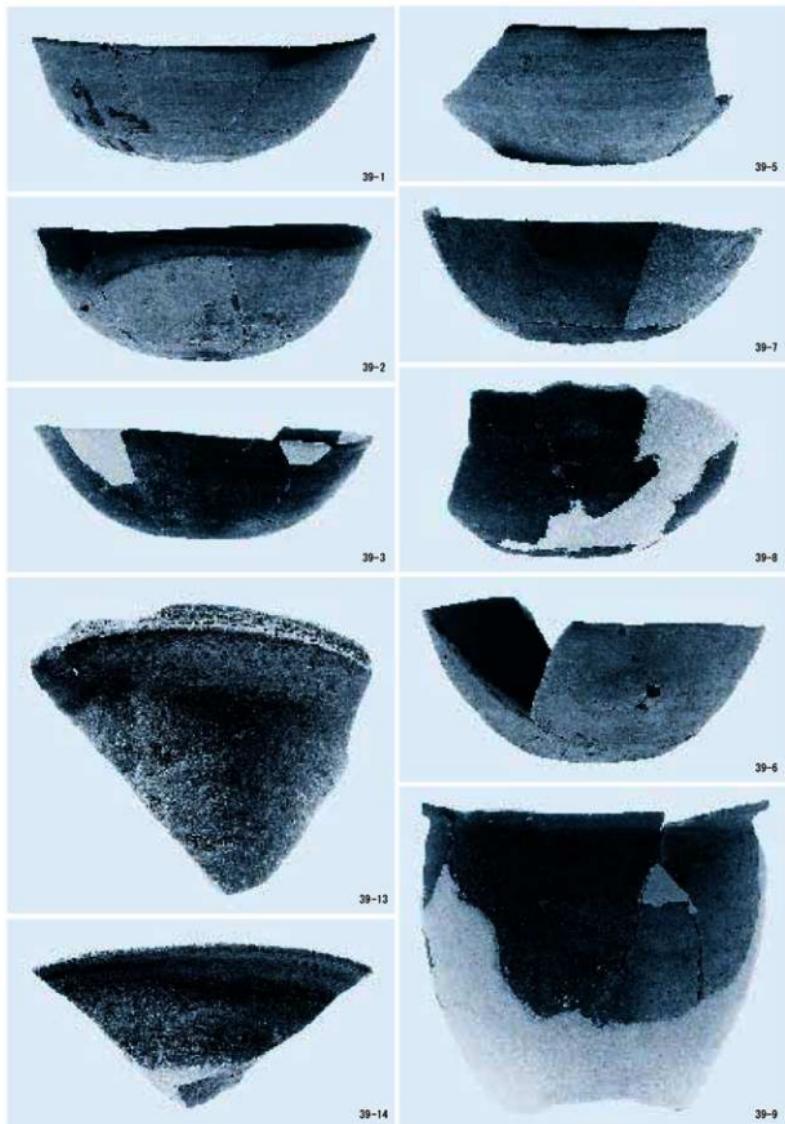
59 7·8号住居跡出土土器



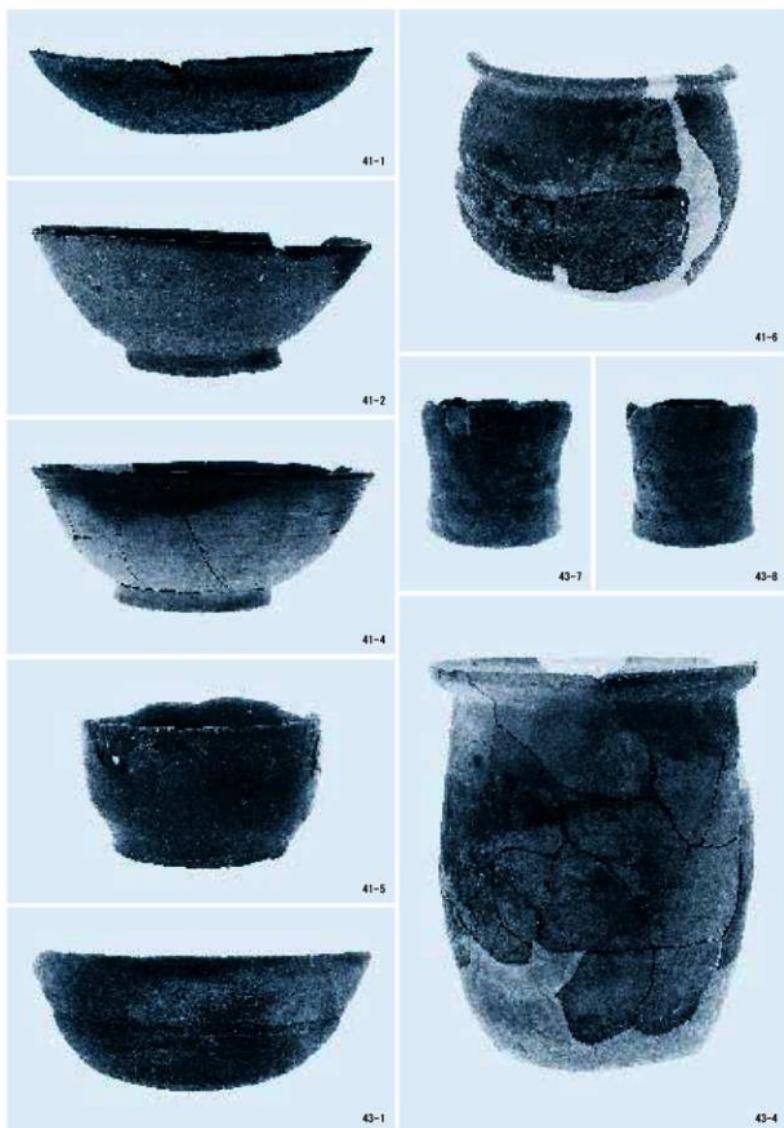
60 9·12·14号住居跡出土土器



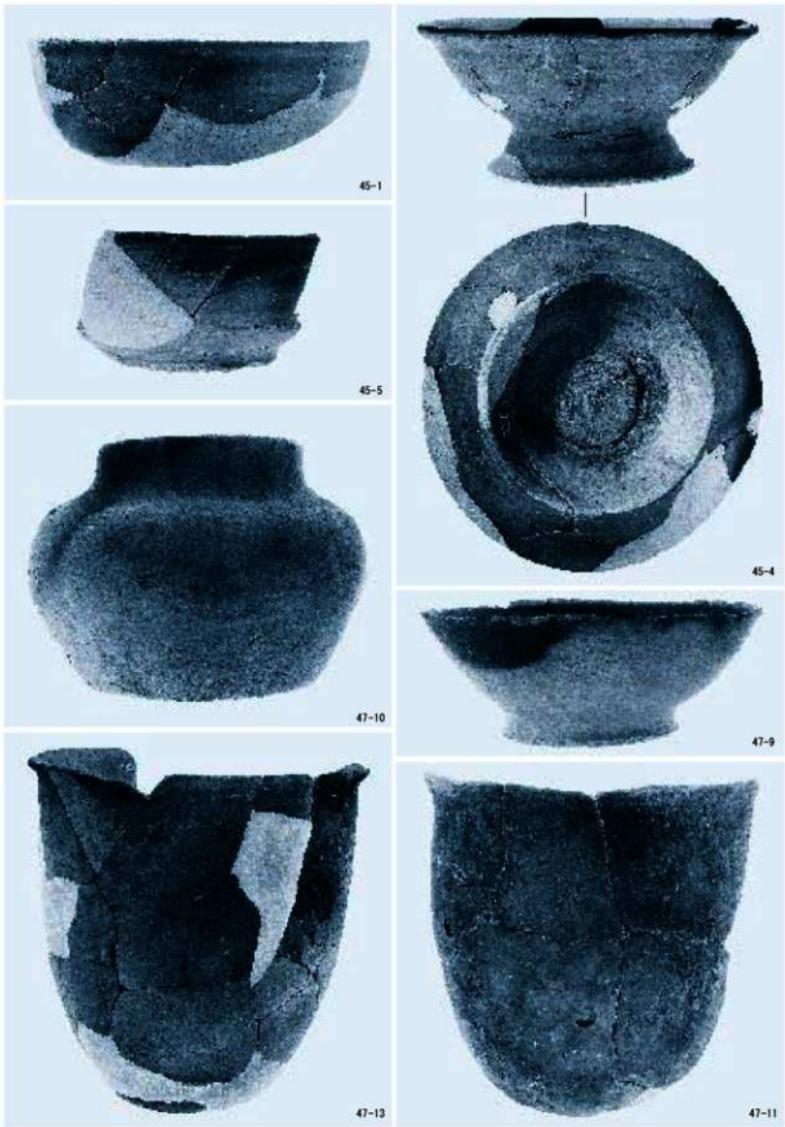
61 15·16号住居跡出土土器



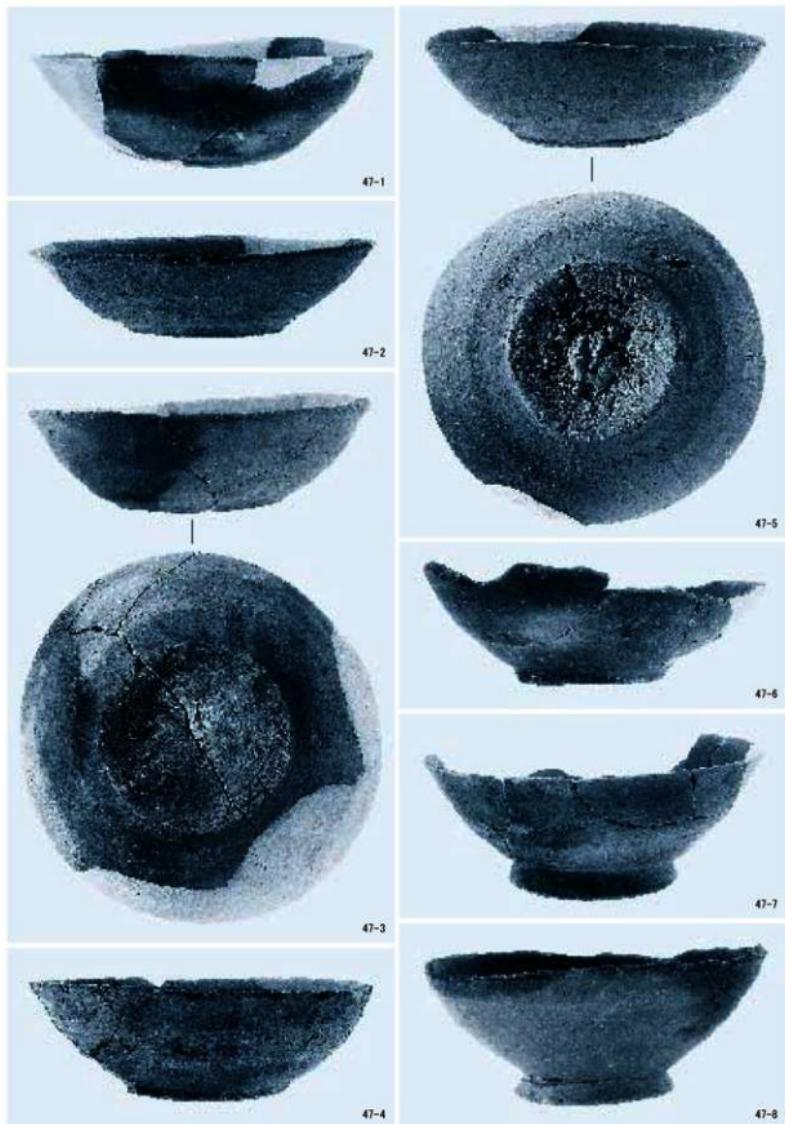
62 18号住居跡出土土器



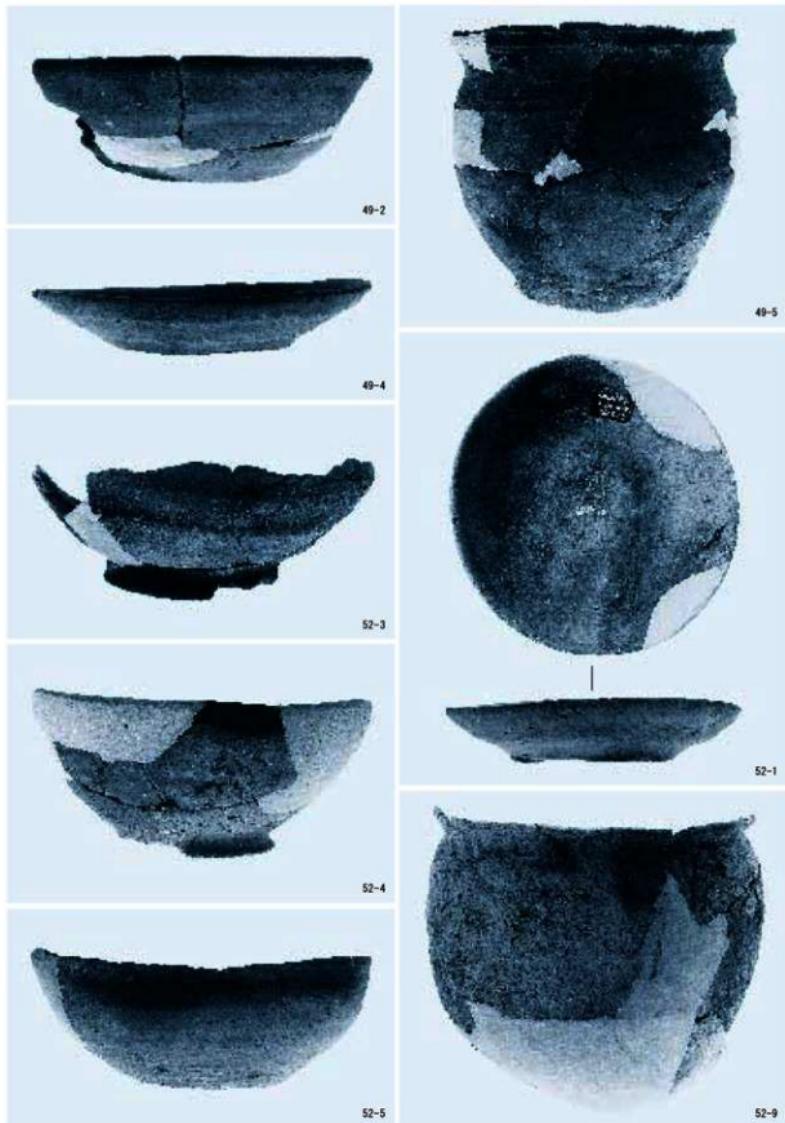
63 19·20号住居跡出土土器



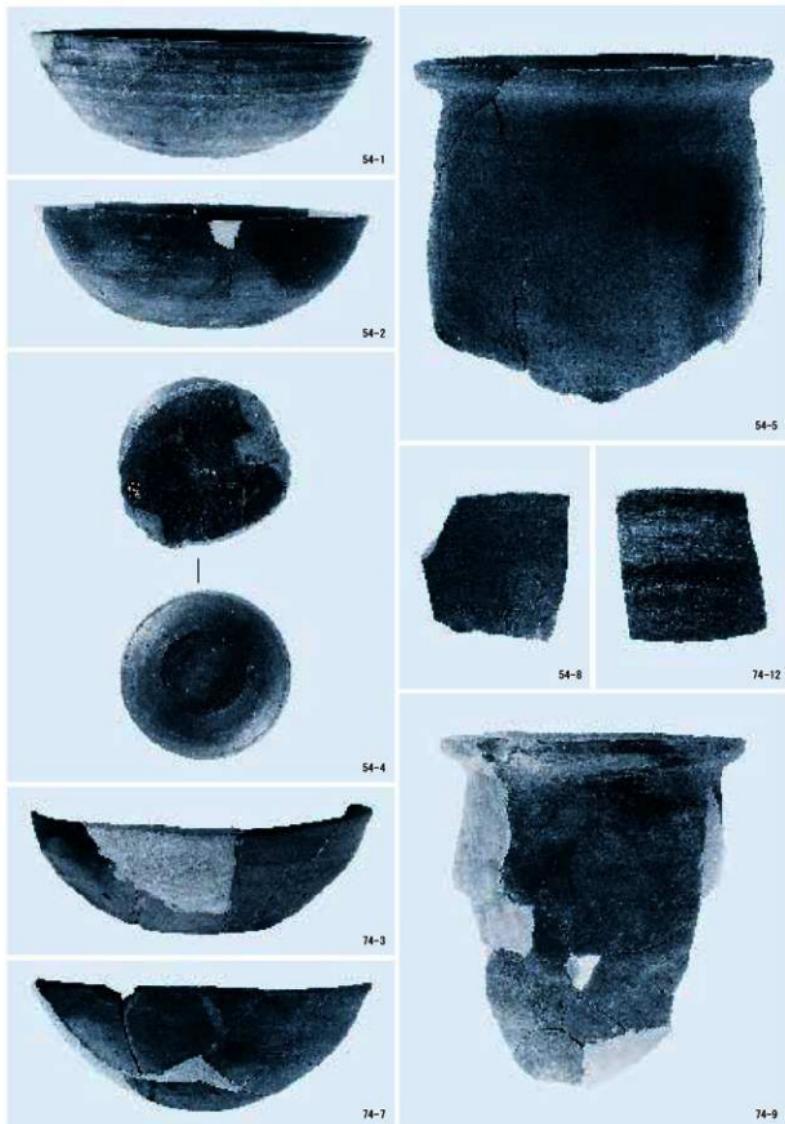
64 21·22号住居跡出土土器



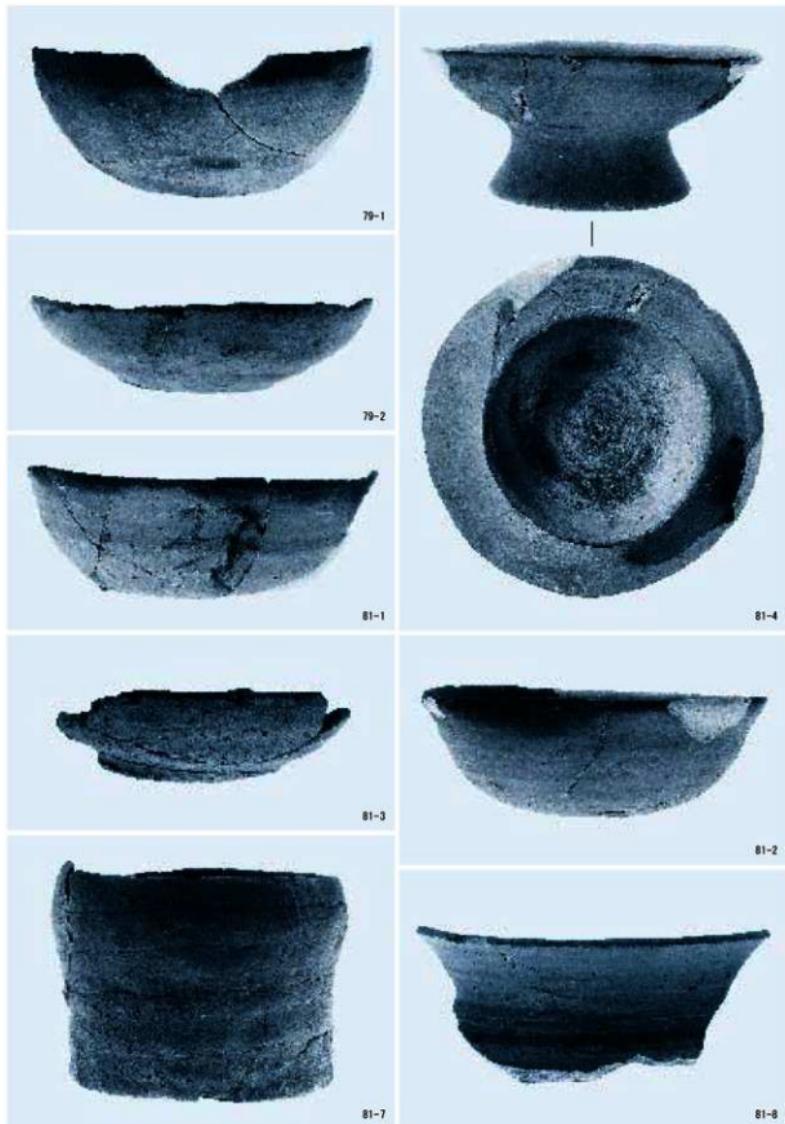
65 22号住居跡出土土器



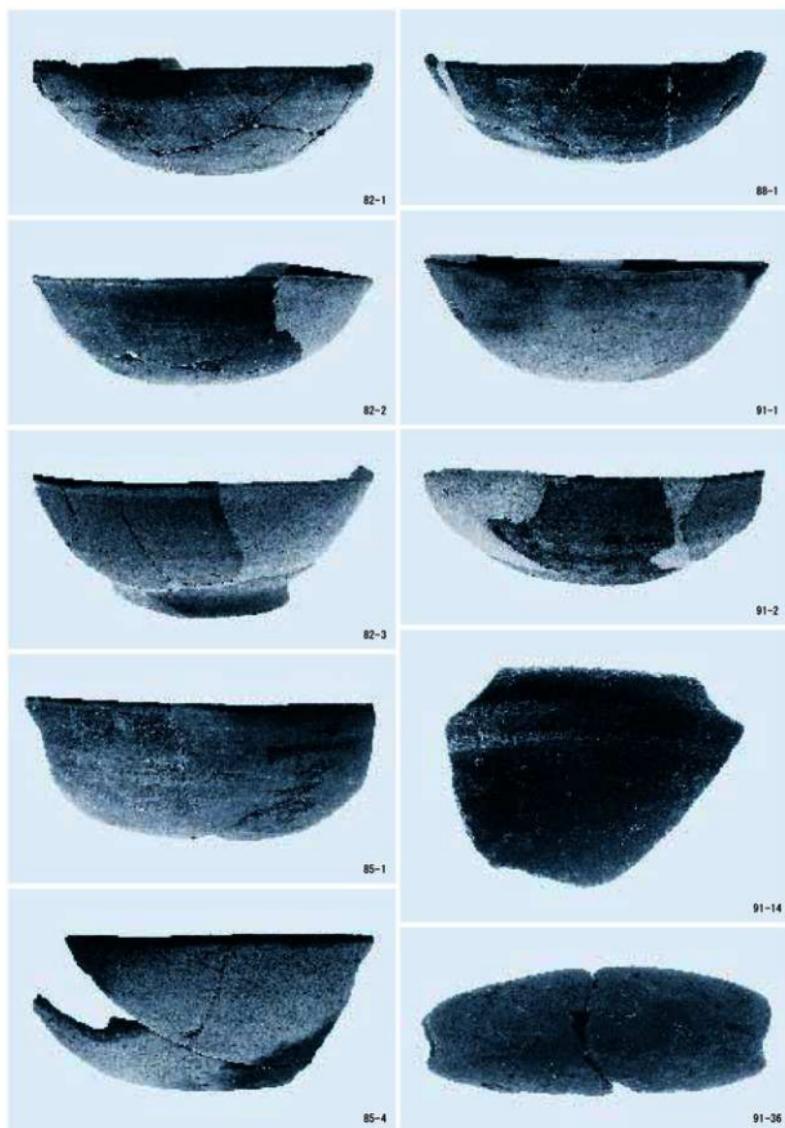
66 23·25号住居跡出土土器



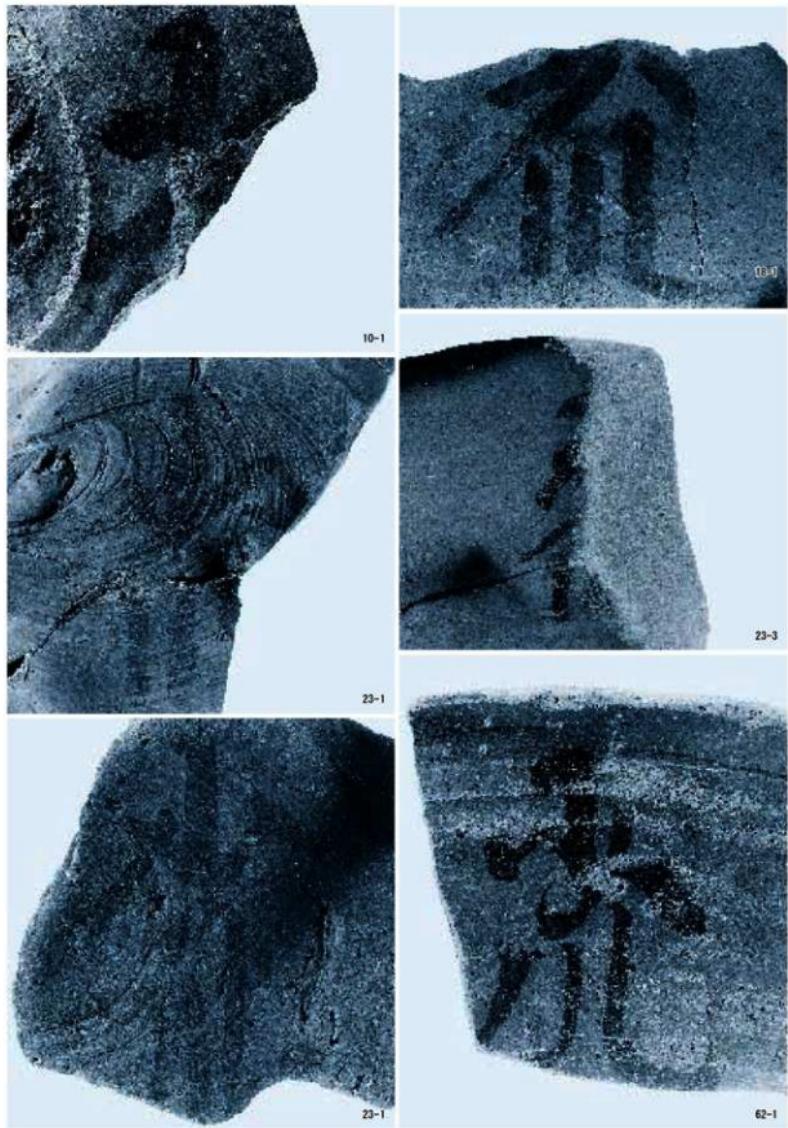
67 29号住居跡、12a・23・57号土坑出土土器



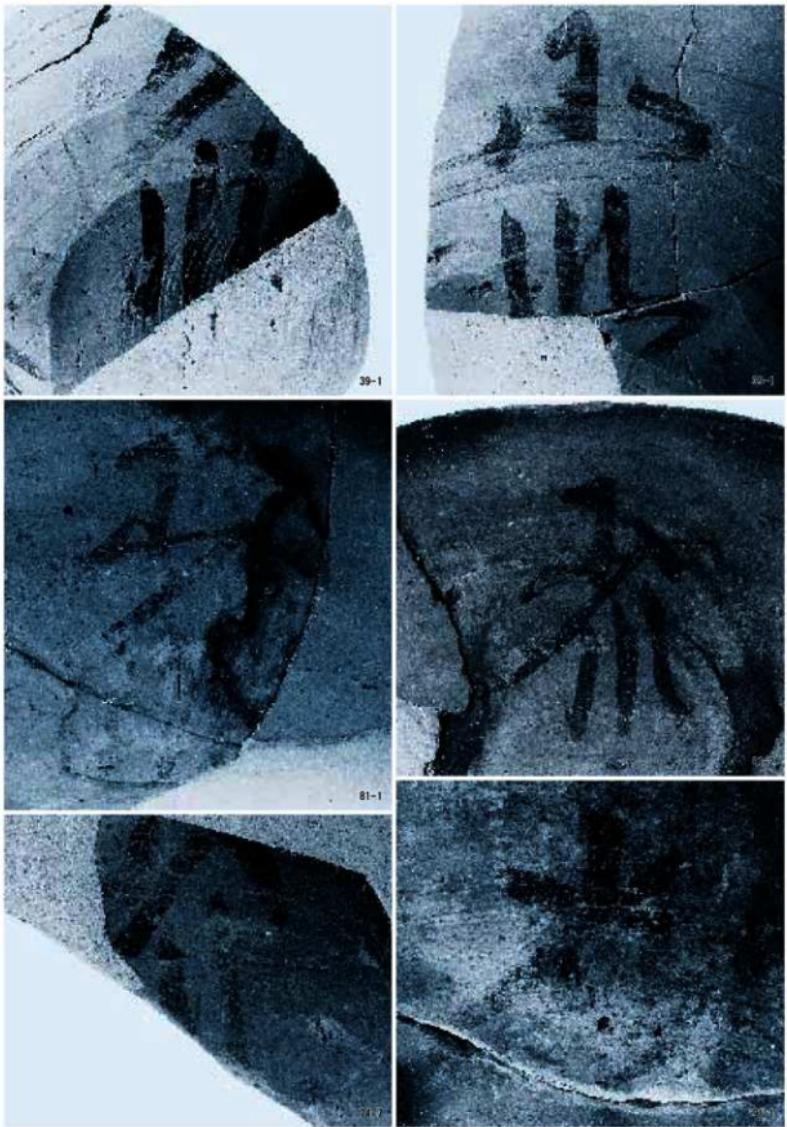
68 5号溝跡出土土器



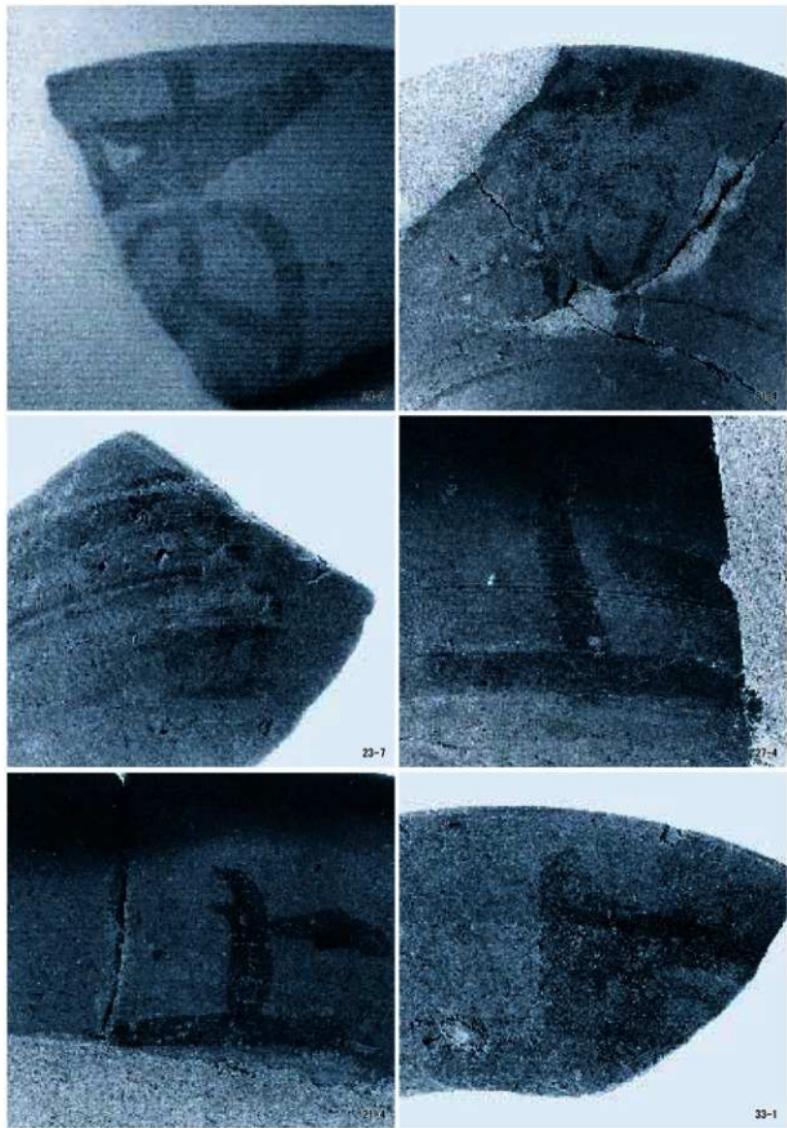
69 6号溝跡, 1号特殊遺構, 柱穴群, 遺構外出土遺物



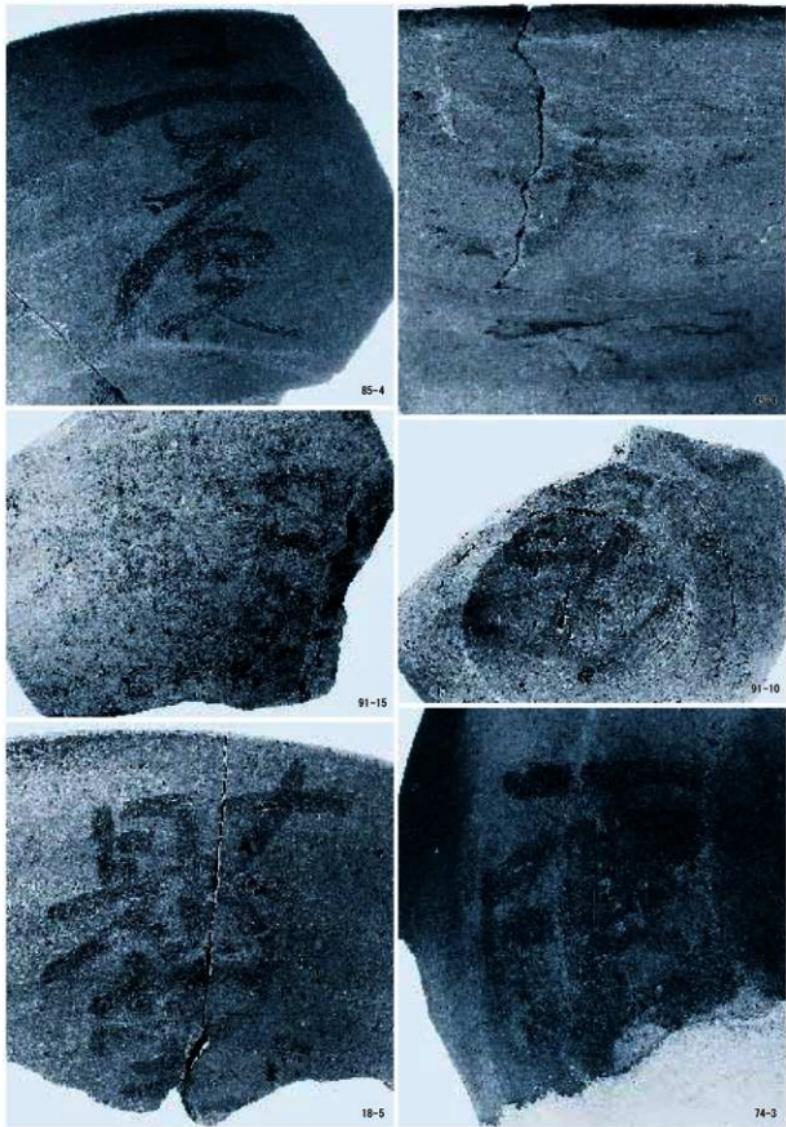
70 墨書土器(1)



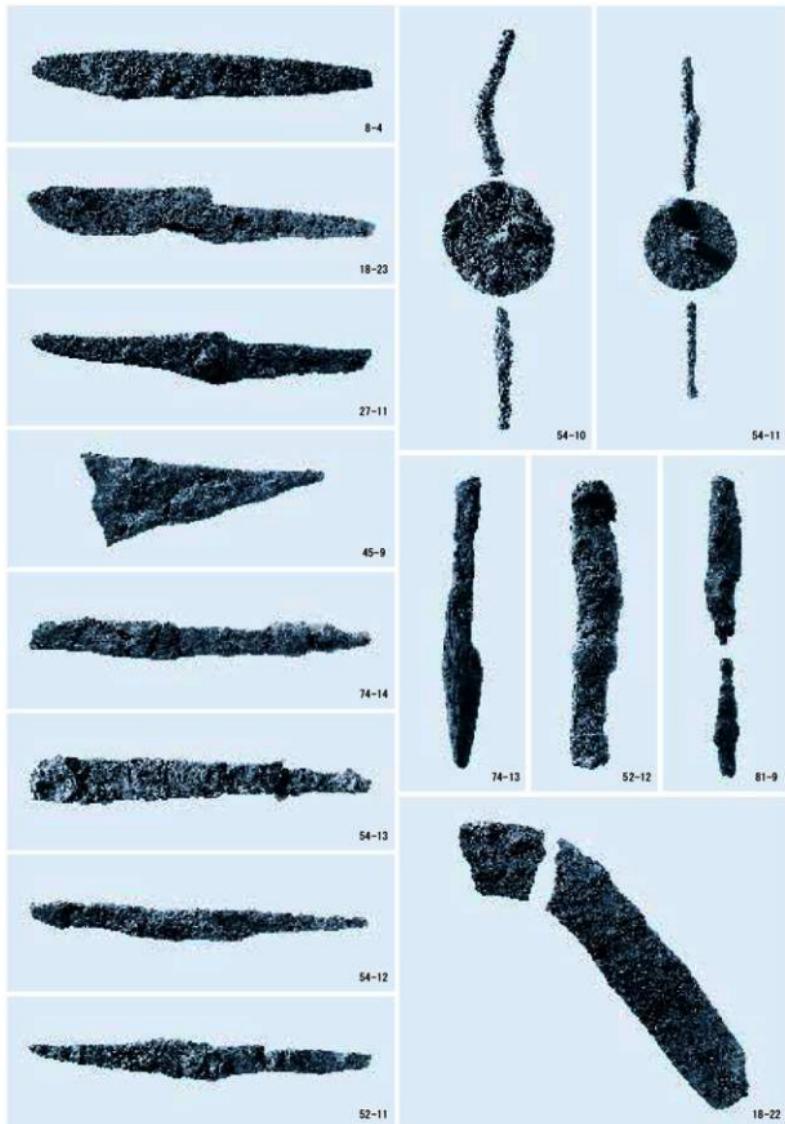
71 墨書土器(2)



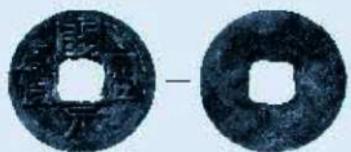
72 墨書土器(3)



73 墨書土器(4)



74 鉄製品



81-10



92-3



29-3

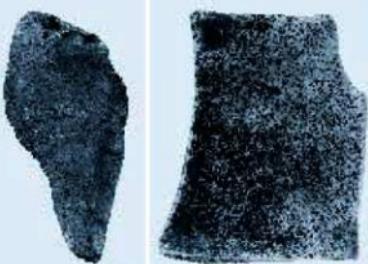


8-5



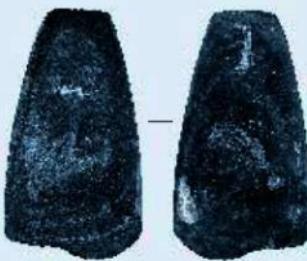
92-2

55-2

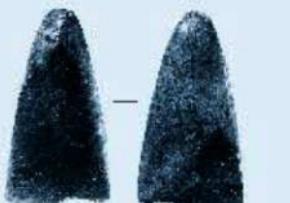


49-6

27-10



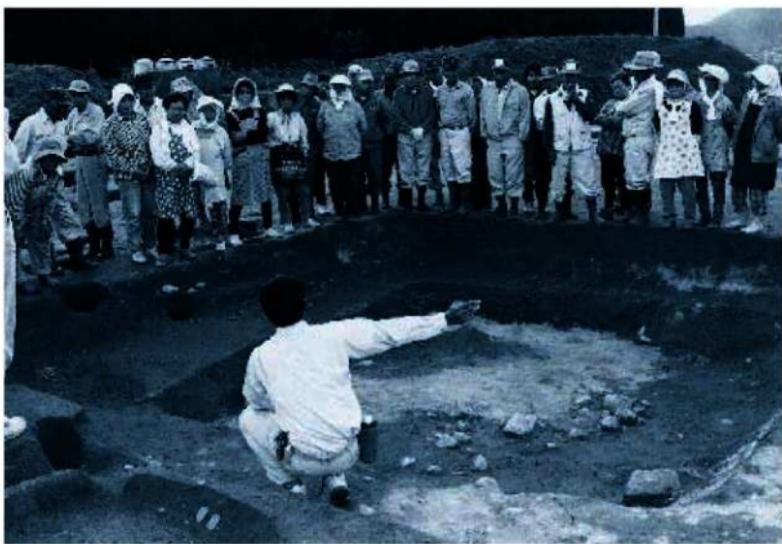
92-1



54-9



76 小山B遺跡遠景



77 説明会風景

報告書抄録

ふりがな	じょうばんじどうしゃどういせきちょうさはうこく							
書名	常磐自動車道遺跡調査報告30							
シリーズ名	福島県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第389集							
編著者名	佐藤美穂、関 博人、菊田順幸、鈴木広子、小野忠大、門脇秀典、曽田克史							
編集機関	財團法人福島県文化振興事業団 遺跡調査部 遺跡調査課							
所在地	〒960-8116 福島県福島市春日町5-54 TEL 024-534-2733 FAX 024-536-3781							
発行年月日	西暦2002年1月31日							
所収遺跡名	所在地	コ一ド	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
小山B	福島県、双葉郡 楢葉町 上小塙 字地蔵堂	市町村 07542	遺跡番号 00084	37°16'18"	140°59'09"	2000.05.29～ 2000.10.13	4,560m ²	道路（常磐自動車道）建設に伴う事前調査
所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
小山B	集落跡	平安・中世	竪穴住居跡(27) 竪穴遺構(2) 掘立柱建物跡(5) 柱列跡(2) 土坑(51) 溝跡(6) 焼土遺構(4) ピット(457) 特殊遺構(3)	縄文土器・土器・須恵器・陶器・石器・石製品・鉄滓・鉄製品・銅製品・銭貨・木製品など	平安時代の集落跡。遺物では縄文土器・土器・須恵器・陶器・石器・石製品・鉄滓・鉄製品・銅製品・銭貨・木製品などが注目される。 溝跡は中世まで機能しており、火葬場・掘立柱建物とあわせ、中世においても集落が営まれていた可能性が高い。			

福島県文化財調査報告書第389集

常磐自動車道遺跡調査報告30

小山B遺跡

平成14年1月31日発行

編集 財團法人福島県文化振興事業団（遺跡調査部 遺跡調査課）

発行 福島県教育委員会（〒960-8065 福島市杉妻町2-16）

財團法人福島県文化振興事業団（〒960-8116 福島市春日町5-54）

日本道路公團東北支社 いわき工事事務所

（〒970-0101）いわき市平下神谷字仲田100

印刷 株式会社 阿部紙工

（〒960-2195）福島市庄野字柿場1-11